

# チベット初期中観思想における二諦説 —トルンパとギャマルワの二諦を巡る論争—

西 沢 史 仁

## 序

チベットにおける中観思想の形成とその歴史的展開を考える上で、インド中観思想のチベットへの導入とその確立に直接的に関与した初期チベット人学者の業績と貢献は極めて大きな位置付けにある。しかるに、その重要性にも関わらず、彼らの教学の内実については、これまでごく限定的な情報しか得られるところがなかった。その主な理由は、資料的に大きな制約事情があったためである。即ち、教法後伝期におけるチベット仏教教学の復興に多大な貢献を果たしたゴク翻訳師ロデンシェーラプ (rNgog lo tsā ba blo ldan shes rab, 1059-1109) を始めとする一連のサンブ系学者達の著作や、さらには、後代、チベットにおいて広く流布した帰謬派系の中観説をチベットに導入したパツァブ翻訳師ニマタク (Pa tshab lo tsā ba nyi ma grags, 1055-1140-?) 及びその弟子筋の者達の著作は、大部分散逸したと考えられてきており、これまでは、後代の資料に引用ないし言及された断片的な二次的資料から僅かな情報を得ることが出来るだけであった。それ故、11-12世紀を中心とする後伝期初頭の初期チベット人学者の教学は、インドからチベットへ至る仏教思想史において、資料的な意味で或る種の空白期間に位置付けられており、インド後期の仏教思想と後代のサキャ派やゲルク派等のチベットの諸宗派の教学を繋ぐ《ミッシング・リンク》的な役割を担っている。

しかるに、幸いなことに、2006年に『カダム全集』の刊行が開始されたことを契機として、これまで使用できなかった初期チベット人学者達の著作が部分的にはあるが利用可能な状態となり、資料状況が一変した。これらの文献群については現代の研究者達による研究も既に開始されており、その成果も徐々に蓄積されてきている。しかしながら、『カダム全集』の収録作品は、大部分が

草書体 (dbu med、ウメ書体) で記された古写本であり、その中には難解な隠字体 (bskungs yig、クニイク) で記された著作も含まれているので、そのことが研究の進捗を妨げる要因となっている。そのため、残念ながら、依然として初期チベット人学者達の教学については殆ど未知の状態が続いているのが現状である。

筆者は、その状況を改善すべく、『カダム全集』出版当初から、特に論理学思想を主題として、ゴク翻訳師、チャパ・チューキセンゲ (Phya/Phywa/Cha pachos kyi seng ge, 1109-1169)、ツァンナクパ・ツウンドウセンゲ (gTsang nag pa brtson 'grus seng ge)、ツルトウン・シヨヌセンゲ (mTshur ston gzhon nu seng ge, ca. 1150-1210) 等の一連の初期サンプ系学者の著作の研究を続けてきた。その成果の一部は、筆者の博士学位論文 (西沢2011b) を始めとする一連の諸論文<sup>1</sup>において既に公表した通りである。本稿では、中観思想、その中でも特にその基軸となる二諦説を主題として、これまで知られていなかった初期チベット人学者、その中でも特に後代に甚大な影響を及ぼしたと推定されるサンプ系学者の解釈を紹介し、チベットにおける中観思想の形成とその歴史的展開に光を当てることを期するものである。

この主題に関しては、筆者は、2017年度の第65回日本チベット学会 (於: 仏教大学、2017/11/25) において、ゴク翻訳師、トルンパ、ギャマルワ、チャパの典籍を資料として、特に空性理解に焦点を絞り研究成果を公表した<sup>2</sup>。その際、トルンパの『教次第大論』 (*bsTan pa la 'jug pa'i rim pa rnam par bshad pa*, alias *bsTan rim chen mo*) に見られる二諦説に対して、ギャマルワとチャパの師弟が批判を行っており、それを契機として、サンプ寺において、二諦説、特に、勝義諦 (= 空性) の理解を巡り、根本的に異なる二つの学統が起こり、それが、後代、ゲルク派やサキヤ派の中観思想に大きな影響を及ぼした可能性があることを指摘した。本稿は、それに引き続き、そこでは部分的にしか扱うことが出来なかつ

1 西沢2010; 2011ab; 2012abc; 2013; 2014; 2015; 2016; 2017ab; 2018ab 参照。

2 その発表内容は、西沢2018aとして刊行された。それに引き続き、本年度の日本印度学仏教学会第69回学術大会 (於: 東洋大学、2018/9/1) では、二諦の分類の意味 (dbye bai don) を主題として、「初期チベット中観思想における二諦説—二諦の分類の意味をめぐる—」という題目で、筆者の同上の仮説を補強する発表を行った (西沢 2018b)。

たトルンパとギャマルワの二諦説の一連の主題について、彼らの原典資料に基づき、翻訳と解説を加えることを主題とする。なぜならば、彼らの原典資料については、これまで殆ど研究がない状態であるので、まずはそのテキストの正確な読解と内容紹介に務めるべきと考えるからである。そのための基礎資料として、本稿で扱ったトルンパの『教次第大論』とギャマルワの『二諦分別論』の註釈から特に二諦の総論が述べられた箇所の校訂テキストも付録として付した。特に後者は『カダム全集』所収のウメ書体の古写本が一本残されているだけであり、そのテキスト校訂は未だ為されていないからである。

これに関連して、筆者は、平成27-29年度にわたる科学研究（題目：「口承と文献学の融合に基づくチベット後期中観思想研究」）において、『チャンキャ教義書』（*ICang skya grub mtha'*）を中心とするチベット後期中観思想の研究に従事してきたが、その際に痛感したのは、ゲルク派教学の思想的背景が殆ど未解明の状態として残されてきたことである。即ち、ツォンカパ（Tsong kha pa blo bzang grags pa, 1357-1419）により創始されたゲルク派の教学はそれに先行する如何なる学統に基づいて形成されたものであるのか、ゲルク派の教学の独自性は何処にあるのかということは、ゲルク派教学研究における最重要の検討課題の一つであるが、それはゲルク派の文献の内部に留まっているだけでは決して解明されない。同科学研究では、その問題の解決の一助とすべく、初期サンブ系学者の中観典籍の研究にも着手したが、本稿は、その成果発表の一部となっていることを付言しておく。

## 1. トルンパの『教次第大論』

### (1) 『教次第大論』の書誌情報

『教次第大論』の二諦説の内容解説に入る前に、まず最初に同書の書誌情報等について概観しておこう。『教次第大論』のテキストについて、恐らく最初に検討した現代の研究者としては、David P. Jackson が挙げられる（Jackson 1996）。そこで彼は、『教次第大論』の木版本が、十九世紀初頭ないし中葉にシヨル印刷所から出版されたこと、その版木は1960年代の文化大革命の際に破壊されたことを述べ、チベットの外には、少なくとも二つの版本が残されていることを報告している（同 p. 230f.）。一つは、モンゴルの寺院にあるものであり、他方は、

パトナの Bihar Research Society に所蔵されているものである。前者の委細は不明だが、後者については、同氏により作成された目録に、no. 1289として記載されている (Jackson 1989, p. 164f.)。そこでは、疑問符付きでシヨル版と記しているが、フォリオ数から判断して、シヨル版の完本であることは疑いない。

続く Roach 2001では、インドのムンドウゴット (Mundgod) に再建されたガンデン寺に属するティチャン・ラブランにシヨル版の良い状態の完本が所蔵されていること、併せて、St. Petersburg 図書館の目録にシヨル版の不完全な版本が、青海地方の目録にも同版本が記載されていることを伝えている (同 p. xi)<sup>3</sup>。

このように、『教次第大論』は十九世紀になってからようやく唯一の版本が作成されたが、久しく稀観書扱いであった。このことは、この著作が『アク稀観書目録』に掲載されていることや、それ以外にも、直後に紹介する『教次第大論』のシヨル版やウチェン書体の写本の奥書きからも読み取れることである。仏教電子資料センター (Buddhist Digital Resource Center, abbr. BDRC, i.e., TBRC) のデータベースやアジア古典入力プロジェクト (Asian Classics Input Project, abbr. ACIP) の電子入力テキストコレクションによれば、現状、以下の一連の版本・写本・活字本・電子ファイルが利用可能である。

#### 1. シヨル版 (ラサ版) [1-548a3]

- TBRC no. W1KG12955 (スキャンファイル未収録。書誌情報のみ)
- TBRC no. W1PD45157 (ティチャン・ラブラン本)<sup>5</sup> [活字本、abbr. B]

3 ACIP no. R10003は St. Petersburg 図書館目録の電子データであるが、その R10003-11には、no. 10424にこのテキストが記載されている。それには、フォリオ数が、2a-549aと記されているので、第一フォリオが脱落したシヨル版であることが確認される。

4 MHTL no. 11108: *bsTan rim rgyas bsdus gnyis*. 「広略二つの教次第」これは、『教次第大論』及びその要義に相当する。

5 書誌情報は以下の通りである。*bsTan rim chen mo: The Great Book on the Steps of the Teaching*. The Library of His Eminence Trijang Rinpoche (ed.), Mundgod: Ganden Tibetan Monastery, 2001. ティチャン・ラブラン (Khri byang bla brang) とは、ダライラマ十四世の家庭教師 (yongs 'dzin) として高名なティチャン・リンポチェ (Khri byang blo bzang ye shes bstan 'dzin rgya mtsho, 1901-1982) の住居を指す。そのティチャン・リンポチェの所蔵本に基づきコンピュータ入力して活字本として出版したものが同書である。後述の ACIP 電子入力ファイルと比較すると読みが



- ACIP no. SE00070; SL00070<sup>6</sup> [ACIP 電子入力ファイル、abbr. A]
2. ウチェン書体の写本 (Dam chos yar 'phel 筆写本) [上下二巻 (1-351a3: 1-120b6)]
- TBRC no. W1PD89051 (『カダム全集』第四巻・第五巻所収) [上記筆写本の影印本、abbr. K]
  - TBRC no. W1PD104698 (百慈蔵文古籍研究室校訂本)<sup>7</sup> [活字本、abbr. P]
  - TBRC no. W1KG24221 (チベットハウス本)<sup>8</sup> [活字本、abbr. T]
3. ウメ書体の写本 [書誌情報不明。錯簡・脱簡あり]
- TBRC no. W1CZ1114 [上記写本の影印本、abbr. U]

ここに示したように、現代人による活字本を除き、『教次第大論』のテキスト

---

一致するので、シヨル版の忠実な複製と見なしてよいと思われる。シヨル版の実物ないし影印の披見を得ない現状、後述の ACIP 電子入力ファイルと併せて、シヨル版の読みを示す貴重な資料と評価できる。

- 6 この両ファイルは番号が違うが、フォリオ番号とテキストの読みから判断して、同じラサ版を入力したものである。ACIP のカタログによれば、SE00070は、bcug pa snga ma (前に入力されたもの)、SL00070は、bcug pa phyi ma (後に入力されたもの) とあるので、前後二つの異なる時期に別々に入力されたものであろう。ACIP Release IV: A Thousand Books of Wisdom [np. nd.] S-19参照。SL00070は、ff. 426-500と奥書きを含む525b7以降は未入力であるが、SE00070では最後まで入力されているので、そこから出版後記及びそのフォリオ数を確認することが出来る。このファイルは、南インドの Bylakuppe に再建されたセラ寺メ学堂内の ACIP 分室で入力されたものと思われるが、ティチャン・ラブラン本もまた南インドの Mundgod のガンデン寺に所蔵されていた点、シヨル版自身の稀少性を鑑みるに、恐らくは、このティチャン・ラブラン所蔵本に基づき入力されたファイルと推定される。
- 7 書誌情報は以下の通り。Gro lung pa blo gros 'byung gnas kyi gsung chos skor, smad cha. dPal brtsegs bod yig dpe rnying zhib 'jug khang (ed.), Krung go'i bod rig pa dpe skrun khang, 2009. 序文には特に底本や校訂方法について言及が見られないが、タムチューヤルペル筆写本の奥書きを有するので、それを底本としたものである。この筆写本は往々に語句の脱落等が見出され、それはシヨル版から訂正することが出来るが、同書では筆写本のままに記しているので、シヨル版は参照していない模様である。但し、筆写本の読みとは異なる読みを示す箇所が散見するので、校訂者の修正が入っているが、何も註記はされておらず、利便の用はあるが、批判的校訂テキストとは見なし得ない。

は、唯一の版本であるショル版と、ウチェン書体の写本が一つ、ウメ書体の写本が一つで、合計三点が利用可能である。以下、その書誌情報を簡単に解説しておこう。

(1) ショル版（ラサ版） [1-548a3]

TBRC no. W1KG12955は、スキャンデータを欠いており、実見することが出来ないが、その書誌情報には、これがラサ (lHa sa) のショル印刷所 (Zhol dpar khang) で出版された木版本であること、'Bum thang pa 'phrin las bstan 'dzin と Pho lha ba blo bzang chos 'byor の二人により出版されたことが示されている。この両者の名前は、ティチャン・ラブラン本 (TBRC no. W1PD45157) と ACIP 電子入力ファイル (ACIP no. SE00070) の出版後記にも見出されるので、この両者は共にショル版に依拠することが確認される。同ファイルによれば、一フォリオ当り、凡そ七行で記された版本である。

その出版後記 (dpar byang)<sup>9</sup>によれば、ガンデンポタン政府 (ダライラマ政権) の筆頭書記僧官 (rtse drung yig chen mo)<sup>10</sup>'Bum thang pa 'phrin las bstan 'dzin と Pho lha ba blo bzang chos 'byor の二人により、国庫から五百サン (srang lnga brgya) を出資して出版されたものであり、第七十三代ガンデン座主ガワン

8 書誌情報は以下の通り。 *bsTan rim chen mo*, Brag g-yab brtan bzhugs go sgrig tshogs chung (ed.), Delhi: Edition Tibethaus Deutschland, 2014. この序文によれば、校訂に依用したテキストは、(1)タムチューヤルペル筆写本、(2) ACIP 電子入力ファイル、(3) Dar thang rin po che kun dga' ye shes rdo rje によりウッディヤーナにおいて2008年に出版されたもの (TBRC 未収録。筆者未見)、(4)百慈蔵文古籍研究室校訂本の四つである (同 p. ix)。このうち、後二者はタムチューヤルペル筆写本の複製に過ぎないので、前二者を校合したと云う。本文には丸括弧で異読が示されているが、タムチューヤルペル筆写本の奥書きが付されているので、ショル版ではなく同筆写本を底本としている。

9 TR A 547b6-548a4; B p. 1010.6-18参照。

10 『蔵漢大辞典』の drung yig/ drung yig chen mo の項 (p. 1334) と rtse drung の項 (p. 2226) 参照。 drung yig とは、「書記；秘書」の意味であるが、ガンデンポタン政府においては、主に文書を扱う官僚 (文官) を意味する。同政府では、文官は、俗人と僧侶の両者から構成されており、そのうち特に僧侶の文官を rtse drung yig/ rtse drung (僧官／書記僧官) と称する。 rtse drung yig che mo は、その中でも最上位の地位にある人物を指す。それを含意して、「筆頭書記僧官」と訳しておく。

ジャムペルツルティムギャンツォ (Ngag dbang 'jam dpal tshul khriims rgya mtsho, 1792-1862) による出版後記誓願文 (dpar byang smon tshig) が付されている<sup>11</sup>。出版に関わった人物としては、出版実務の統括者 (do dam pa) として、rTse 'phral bde ba mkhan chung bDe gsal ngag dbang dar rgyas、校訂者 (zhus dag pa) として、mTshan zhabs bla ma dge shes (read: bzhes?) Blo gling Tshe dbang bsam 'grub<sup>12</sup> と Ser smad Grags pa bstan darらの名前が挙げられている。

この出版後記は、第七十三代ガンデン座主自身が記したものであり、最初に偈文の出版後記誓願文 (dpar byang smon tshig) が置かれ、その後この出版後

11 この奥書きに記された Ngag dbang 'jam dpal tshul khriims rgya mtsho という人物については、チベットハウス本 (T) の校訂者により、第七十三代ガンデン座主 Tshe smon gling sku phreng gnyis pa Ngag dbang 'jam dpal tshul khriims rgya mtsho (1792-1862) に同定する解釈が示されている (T p. ix)。但し、同時代人に同じ名前を有するダライラマ十世 Ngag dbang 'jam dpal tshul khriims rgya mtsho (1816-1837) がいるので、その両者の何れに同定すべきかが問題となる。チベットハウス本校訂者は何も同定の根拠を挙げていないので、ここでその点を検討しておく。その際手掛かりとなるのは、この人物に付された非常に長い以下の称号である。

Kun mkhyen Phyag na padma'i rgyal tshab ming 'dzin Gong ma'i lung kos Zhwa ser bstan pa 'dzin byed dPal ldan no min han dGa' ldan she re ge thu samti pakṣir mad ḍa pa dGa' rigs kyi dge sbyong Ngag dbang 'jam dpal tshul khriims rgya mtsho

この称号が gong ma 即ち [清朝] 皇帝により第七十三代ガンデン座主に授与されたことは、伝記資料から確認される。彼の略伝は、『トゥンカル大辞典』pp. 381-383に簡潔に紹介されているが、それによると、彼は、1819年に gong ma Ca ching (嘉慶)、即ち、第七代清朝皇帝仁宗 (在位1796-1820) からチベットの摂政 (bod kyi srid skyong) に任命され、その翌年 (1820) に dGa' ldan shri ral thu sa ma ti pakshi と云う官位 (cho lo) を授かったとある (同 p. 382)。これは上記称号中の dGa' ldan she re ge thu samti pakṣir に他ならないので、この出版後記の著者は第七十三代ガンデン座主に同定される。ちなみに、称号中の Phyag na padma'i rgyal tshab ming 'dzin (蓮華手 (= 観音菩薩) の代理人の名称を保持するもの) は、観音菩薩の化身であるダライラマ法王の代理人、即ち、ガンデン座主を指す表現である。rGyal tshab という称号は、元来は、rGyal ba Tsong kha pa blo bzang grags pa の代理人 (tshab) を意味し、その後を継いで第二代ガンデン座主に登位したタルマリンチェンを、rGyal tshab Dar ma rin chen と称するのは、それが理由であるが、後代、歴代ダライラマを観音菩薩の化身と見做す解釈の下で、rGyal ba (勝者) をツォンカパではなく、観音菩薩の化身とされるダライラマに同定する解釈が起こったものと推察される。

記が付されており、sarva maṅgalaṃ// // という廻向文の一文で終わっているが、その直後に、さらに別人の手による短い出版後記が付されている。即ち、

「上記の『教次第大論』は、テキストの伝承 (dpe rgyun) が稀少なので、出版する人が現れたならば、殊更に良いことになろうと、元ガンデン座主チャンチュプチューペルペルサンポ (dGa' ldan khri zur Byang chub chos 'phel dpal bzang po, 1756-1838) からお言葉を繰り返し頂いたことに依拠して、愚生、書記僧官双方 (gus phran rtse drung yig zung)<sup>13</sup> により出版された。」(『教次第大論』 A 548a3f.; B p. 1010.16-18)<sup>14</sup>

これだけ見たならば、第七十三代ガンデン座主の出版後記誓願文を備えた版本が出版された後、久しく時間が経ち、『教次第大論』のテキストが稀少になったので、再版されたように見えるが、実際には、同じ版本に付された出版後記であり、そのことは、ここに出版請願者として言及されているチャンチュプチューペルの年代を考証することから判明する。即ち、この人物は第六十九代ガンデン座主であり、1756-1838年という生没年と、1816年にガンデン座主に登位、1822年に退位したことが知られている<sup>15</sup>。それ故、このシヨル版の出版請願は、彼がガンデン座主を退任した1822年から逝去した1838年の十五年間の間になされたことになる。

他方、第七十三代ガンデン座主ガワンジヤムペルツルティムギャンツォ (1792-1862) がガンデン座主に登位したのは、1837年であり、以後、1845年ま

12 mtshan zhabs とは、mtshan nyid zhabs phyi の省略形であり、ダライラマ等の高位のラマのお付き (zhabs phyi) となり、特に、顕教教学 (mtshan nyid) を修学する際に、法苑と一緒に問答の相手を務めたりする人物を指す。blo gling とはデブン寺口セルリン学堂 ('Bras spungs blo gsal gling grwa tshang) の略称。

13 文脈から判断して、前出の 'Bum thang pa 'phrin las bstan 'dzin と Pho lha ba blo bzang chos 'byor の両者を指す。gus phran は『蔵漢大辞典』に記載されていないが、phran は、一人称の卑称なので、その意味で訳しておく。zung という語は、「双方」を示す語であり、この出版を指揮した上記二名を指す。

14 gong gsal *bsTan rim chen mo* dpe rgyun dkon par 'dug pas par du bsko mi zhib byung na shin tu nas legs par yod 'dug ces dGa' ldan khri zur Byang chub chos 'phel dpal bzang po nas bka' yang yang phebs par brten/ gus phran rtse drung yig zung nas par du bzhengs so// //

15 『トゥンカル大辞典』 p. 379f. 参照。

での七年間、ガンデン座主の任にあったとされる<sup>16</sup>。その場合、もし出版請願を行った第六十九代ガンデン座主が存命中にこのシヨル版の出版がなされたとすれば、それは、ガワンジャムペルツルティムギャンツォが第七十三代ガンデン座主に就任した1837年から第六十九代ガンデン座主が逝去した1838年の間となる。それ故、1837/8年というのがシヨル版の出版年の一つの可能性である。但し、第六十九代ガンデン座主が亡くなった後に、この出版がなされた可能性もあり、その場合には、同座主が逝去した1838年から、第七十三代ガンデン座主がガンデン座主を退任した1845年までの七年間の間に出版されたことになる。この点は検討課題であるが、いずれにせよ、十九世紀前半に出版されたことには疑いはない。

以上を踏まえてこの版本の出版状況を整理するならば、以下のようになろう。即ち、まず最初に、第六十九代ガンデン座主チャンチュブチューペルにより、筆頭書記僧官'Bum thang pa 'phrin las bstan 'dzinと Pho lha ba blo bzang chos 'byor に対して、彼が元座主 (khri zur) の地位にあった1822-1838年の間に、『教次第大論』を出版するよう請願がなされた。これを受けて、後二者は国庫から出資して、第七十三代ガンデン座主ガワンジャムペルツルティムギャンツォの出版後記誓願文と出版後記を付して、十九世紀前半 (1837-1845年の間) に出版したという経緯である。印刷所は明記されていないが、政府の刊行物であるので、ポタラ宮のお膝元にあるラサのシヨル印刷所から出版されたものである。

(2) ウチェン書体の写本 (Dam chos yar 'phel 筆写本) [上下二巻 (1-351a3; 1-120b6)]

『カダム全集』第四巻・第五巻には、『教次第大論』のウチェン書体の写本の影印版が収録されている。その書誌情報は以下の通りである。

- *dGe ba'i bshes gnyen chen po Gro lung pa blo gros 'byung gnas kyi[s] mdzad pa'i lam rim 'am bstan rim chen po bzhugs so.* [stod cha] KS 4, pp. 35-735 (1-351a3).
- [no title. smad cha] KS 5, pp. 3-242 (1-120b6).

但し、このテキストは、末尾に、『教次第大論』とは無関係なタルマリンチェ

16 『トゥンカル大辞典』 pp. 381-383参照。

ン (Dar ma rin chen, 1364-1432) の『入菩薩行論註』から中間偈を集めた小品が付されている。即ち、

*rGyal tshab dar ma rin chen gyi[s] mdzad pa'i sPyod 'jug dar tik gi*  
 〈s〉 *bar skabs kyi tshigs bcad bsdus don bzhugs pa.* KS 5, pp. 240-242  
 (119b4-120b5).

それ故、『教次第大論』のテキストは、その奥書きを含めて、KS 5, 1-119b4までになる。明瞭なウチェン書体で一フォリ当り凡そ九行で記された写本である。『カダム全集』の編者によれば、デブン寺の十六羅漢堂 (gNas bcu lha khang) ではなく、セラ寺図書館 (Se ra'i dpe mdzod khang) に所蔵されていたものである<sup>17</sup>。奥書きから判断して、百慈蔵文古籍研究室校訂本とチベットハウス本の二つは共にこのウチェン書体の写本に基づく。

その奥書きによれば、このウチェン書体の写本は、ロンドルラマ (Klong rdol bla ma)、即ち、ロンドル・ガワンロブサン (Klong rdol ngag dbang blo bzang, 1719-1795) の近侍書記 (nye gnas drung yig) を務めたタムチューヤルペル (Dam chos yar 'phel, 18c.)<sup>18</sup> という人物により筆写されたものである<sup>19</sup>ので、その年代から勘案して、十八世紀後半頃に作成されたものであり、1837-1845年の間に出版された前述のシヨル版よりも半世紀程遡るものと推定される。その原本と校訂方法についてはこう記されている。

「このジェ・トルンパの『教次第』の原本 (ma dpe) もまた、最近は非常に得難く、現在、政府 (gzhung, i.e., ガンデンポタン政府) にも貸し出せるものはないと云うので非常に披見しがたいものであるが、この度の原本は、プルプチョク [山庵] (Phur bu lcog) において、ラマ・チャムパリンポチュエ (Bla ma Byams pa rin po che) の御所蔵本で由緒正しいもの

17 『カダム全集第一集目録』p. 56参照。それによれば、セラ寺図書館の整理番号6が付されたものである。

18 この人物は、『雪域人名辞典』p. 81f. に、Klong rdol drung yig dam chos yar 'phel として記載されている。それによれば伝記資料が得られないので、委細は不明であるが、ロンドルラマの他にも、『道次第師資相承伝』(*Lam rim bla ma brgyud pa'i rnam thar*) を著した Yongs 'dzin ye shes rgyal mtshan (1713-1793) にも師事して、特に道次第を二十回余も聴聞したとされる。彼の著作も同書に記載されている。

19 タムチューヤルペルが記した奥書きには、ロンドルラマの逝去に対する言及がないので、ロンドルラマ (1719-1795) が存命中に筆写されたものと推定される。

(phyag dpe khungs dag zhid) があったので、その [テキストの] 通りに記して (bris nas, 筆写して)、そこにも、前接辞の正しくないもの ([ ]phul byed mi dag pa) や [語句の] 細かい付加や脱落 (lhag chad phra mo) などがあるものは、ジェ・ロンドルラマの近侍書記であるタムチューヤルペル (rJe Klong rdol bla ma'i nye gnas drung yig Dam chos yar 'phel) が自分の智慧の眼により、疑わしい箇所 (dog[s] gnas) は何であれ、全て新たに校訂して (gsar du bcos nas)、正しいものとしたもの (dag par bgyis pa) であり、……」(『教次第大論』 p.910.7-12; K 119a4-6)<sup>20</sup>

ここでこの筆写本の原本として、ラマ・チャムパリンポチュエが所蔵していたテキストが挙げられている。ここには明記されていないが、上述のシヨル版は恐らく最初にして唯一の『教次第大論』の木版本であるので、このチャムパリンポチュエ所蔵本は写本であったと推定される。ここに言及された「プルプチョク」とは、一般にはプルプチョク山庵 (Phur bu lcog ri khrod)<sup>21</sup> と称されるが、正式には、プルチョク三種菩提院 (Phur lcog rigs gsum byang chub gling) と云い、ドゥブカンパ・ゲレクギャンツォ (sGrub khang pa dGe legs rgya mtsho, 1641-1713) により、1706年にセラ寺の裏山に瞑想道場 (sgrub khang) として創立された山庵 (ri khrod) である。「ラマ・チャムパリンポチュエ」とは、このドゥブカンパ・ゲレクギャンツォに師事し、その後継者となったプルプチョク・ガワン

20 rJe Gro lung pa'i *bsTan rim gyi* (gyis P) ma dpe 'di yang ding sang shin tu rnyed dka' zhing da lta gzhung la yang g-yar rgyu mi 'dug zer bas ha cang gi mthong dka' ba yin pa bcas/ da lam 'di'i ma dpe Phur bu lcog tu Bla ma Byams pa rin po che'i phyag dpe khungs dag zhid 'dug pa de'i nang bzhin du bris nas de dag la'ang [ ] phul byed mi dag pa dang lhag chad phra mo byung ba rnam/ rJe Klong rdol bla ma'i nye gnas drung yig Dam chos yar 'phel gyi rang gi blo gros kyi mig gi[s] dog[s] gnas gang shes thams cad gsar du bcos nas dag par bgyis pa dang/..

21 プルプチョク山庵については、『トゥンカル大辞典』 p. 1329に簡便な解説が見出される。他には、bShes gnyen tshul khriims 2001, pp. 79-81; Chos 'phel 2004, p. 75f. を参照。bShes gnyen tshul khriims 2001, p. 81によれば、当時 (2001年頃)、この山庵は土台から破損しており修復の要請が既になされていたもので、百人程の僧侶が住んでいたと云うが、Chos 'phel 2004, p. 75f. によれば、既に新築 (gsar bzhangs) が完了しており、同書冒頭の口絵には、その当時のプルプチョク山庵を上空から撮影したカラー写真が掲載されている。



チャムパ (Phur bu lcog Ngag dbang byams pa, 1682-1762) に他ならない。この人物は、ドゥプカンパの下で道次第 (lam rim) の師資相承を伝受された者であり、ドゥプカンパは、ゲルク派に伝承された道次第の師資相承の系譜 (lam rim bla brgyud kyi bla rabs) では第五十二代、その弟子のプルプチョク・ガワンチャムパは、第五十三代に数えられる<sup>22</sup>。そのような背景の下に、稀観書に属するトルンパの『教次第大論』のテキストも道次第の師資相承保持者の間で代々伝受されてきたのであろう。それを念頭において、「由緒正しいもの (khungs dag zhig)」と表現しているのである。

これを原本として、ロンドルラマの命により、近侍書記のタムチューヤルベルが、誤字脱字等を修正して筆写したテキストが、このウチェン書体の写本である。それ故、原本の忠実な複写でなく修正が加えられていることには留意する必要がある。奥書きの冒頭部には、ロンドルラマは、ツォンカパの『道次第大論』を理解するためには、このトルンパの『教次第大論』等を修学する必要がある<sup>23</sup>ので、そのテキストを見つけたら出版せよと命じた<sup>24</sup>とある。ここで「出

22 『雪域人名辞典』pp. 427, 1058参照。この両者の略伝は、『トウンカル大辞典』pp. 735, 1328f. にも掲載されている他、より詳細な伝記は、『道次第相承伝』pp. 657-671; 674-710を参照。ツルティム/藤仲2005, pp. 44-51には、『道次第相承伝』の抄訳を挙げて、両者の事績が紹介されている。

23 TR p. 909.9-15; K 118b3-5: gzhan yang rJe Klong rdol bla mas bka' chos gnang dus 'di ltar gsungs// dge bshes yin na rJe bla ma Tsong kha pa chen pos mdzad pa'i *Byang chub lam rim chen po* la nges pa bde blag tu rnyed pa'i phyir du/ dge bshes Gro lung pa'i *bsTan rim dang/* Po to bas mdzad pa'i *Be bum sngon po'i 'grel pa/* dge bshes Dol pas mdzad pa dang/ rGyal sras Zhi ba lhas mdzad pa'i *bSlab btus dang sPyod 'jug* sogs la nges par mig blta dgos gsungs/ lhag par *sPyod 'jug tshang ma blo 'dzin byas nas/* de'i 'grel pa rGyal tshab Dar ma rin chen gyi mdzad pa'i *sPyod 'jug dar tik* la rgyun du blo sbyong dgos zhes yang yang gsungs pa dang/...「他にも、ジェ・ロンドルラマが講義をなさっていた時に、こう仰られた。「ゲシェ (博士、lit. 善知識) であるならば、ジェラマ・大ツォンカパにより著作された『菩提道次第大論』に対して確信 (理解) を容易に得るために、(1)ゲシェ・トルンパの『教次第』と、(2)ポトワ (Po to ba [rin chen gsal, 1027-1105]) 造『青冊子』に対するトルンパにより著作された註釈と、(3-4) 勝子シャーンティデーヴァにより著作された『集学論』と『入菩薩行論』等を必ず見る必要がある」と。特に、『入菩薩行論』は全て暗記して、(5)その註釈であるギェルツァブ・タルマリンチェンにより著作された『入菩薩行論タル註』に

版」と訳した *brko* という動詞は、「刻む」「彫る」という意味であり、木版本として出版することを含意するが、所引の文章に明記されているように、原本を「筆写したもの (*bris [pa]*)」が残されているだけであり、実際には木版は作成されなかった模様である。影印を見る限り、木版本には見えず、写本と推定されるが、そのことはこの奥書きからも裏付けられる。

この筆写本とシヨル版の関係については、はっきりしたことは分かっていない。シヨル版の出版後記には、依用した底本について全く言及されていないからである。所引の筆写本の奥書きの記述によれば、当時、ガンデンポタン政府にも貸し出せるテキストがなかったというので、歴代ダライラマのコレクションの中にも『教次第大論』の写本は所蔵されていなかった可能性が高い。それ故、シヨル版は、この筆写本か、あるいは、その元本であるチャムパリンポチエ所蔵本を底本としたと考えるのが自然であるが、それ以外の何らかの写本を依用した可能性も否定できない。実際、直後に紹介するように、デブン寺十六羅漢堂の整理番号を有するウメ書体の写本が実際に存在しているのであり、定かなところは分かっていないのが現状である。この点は、『教次第大論』の他の写本の調査を含め、今後の検討課題である。

ただ一点興味深い事実が判明しているので、紹介するならば、『教次第大論』には、大乘の二大学統である深甚行の中観派の学統と広大行の唯識派の学統の二つに対する言及が見られるが、そのうち、前者の学統<sup>25</sup>については、シヨル版

---

対して常に修心する必要があると何度も仰った。」

ここでは、シャーンティデーヴァの二作品を含め、五点の典籍が挙げられているが、そのうち、ポトワ造『青冊子』に対して註釈を著した「トルパ (*Dol pa*)」とは、トルパ・シェーラブギャンツォ (*Dol pa shes rab rgya mtsho*, alias, *Rog pa shes rab rgya mtsho*, 1059-1131) を指す。『カダム明灯史』によれば、彼はポトワの筆頭弟子の一人であり (同 p. 433.14f.)、同史にはその略伝が記載されている (同 pp. 437-444)。他には、『雪域人名辞典』p. 1625により簡潔な略伝がある。彼の『青冊子』の註釈は現存しており、活字本としても出版されている (TBRC no. W1KG25234)。

24 TR p. 908.15f.; K 118a5: rJe Klong rdol rin po che nas phran Klong rdol drung yig la rJe Gro lung pa'i *bsTan rim chen po* 'di'i par zhiḡ byung na brko rogs kyis gsungs kyang/...「ロンドルリンポチェから、愚生、ロンドル書記 (= タムチューヤルペル) に対して、「トルパの『教次第大論』の版本を見つけたならば、出版しなさい」と云われたが、……」

とタムチューヤルペル筆写本、及び、直後に紹介するウメ写本にはテキストの系統を考える上で興味深い異読が確認されるのである。即ち、シヨル版では、ナーガールジュナ (Nāgārjuna) の学統を受け継ぐ者として、アーリヤ・デーヴァ (Phags pa lha, Āryadeva)、ナーガボーディ (Klu'i byang chub, Nāgabodhi)、ブツダパーリタ (Sangs rgyas bskyangs, Buddhapālita)、バーヴィヴェーカ (Legs ldan 'byed, Bhāviveka) の四名の名前しか挙げられていないが (A 347b4f)、このタムチューヤルペル筆写本では、ナーガボーディの名前が欠落しており、代わりに、チャンドラキールティ (Zla ba grags pa, Candrakīrti) の名前が挙げられているのである (P 595.21f.; K 294b1f.)。ちなみに、ウメ写本では、ナーガボーディとチャンドラキールティの両者の名前がなく、アーリヤ・デーヴァとブツダパーリタとバーヴィヴェーカの三者の名前しか見出されない (U 66a4)。シヨル版の入力テキストを検索した限り、チャンドラキールティや『入中論』 (*Madhyamakāvātāra*) 等の語はヒットせず、また、後述するように、トルンパはチャンドラキールティを知らなかったと推定されるので、チャンドラキールティの名前は本来テキストにはなかったと解釈すべきかと思われる。それがタムチューヤルペル筆写本のみに見出されるのは、トルンパの学統をチャンドラキールティの中観帰謬派説を至上とするゲルク派の学統と同一視することから起こった後代の付加の可能性が高い。ただそれがタムチューヤルペルによる付加であるのか、それ以前にゲルク派における同書のテキスト伝承の過程で起こったのかは不明である。この事実を鑑みるならば、その付加を有しないシヨル版は、タムチューヤルペル筆写本ではなく、他の何らかの写本を底本としていたと考えるべきかと思われる。この点は、まだ憶測の域を出ず、作業仮説として提示しておくが、さらに関連情報を集めて多角的に検討する必要がある。

また、この想定が妥当であれば、タムチューヤルペル筆写本には、それ以外にも、ゲルク派の教義に沿うよう、テキストに意図的な改竄を加えている可能性もある。その点がこの筆写本を扱う上での注意事項となる。

---

25 『教次第大論』 pp. 595-597; A 347b1-348b2参照。この箇所は、シヨル版に基づき、ツルティム/藤仲2005, pp. 22-25に訳出・紹介されている。

## (3) ウメ書体の写本 [書誌情報不明]

TBRC no. W1CZ1114の番号が付された写本は、ドゥツァ ('bru tsa) と称されるウメ書体により一フォリオ当たり凡そ九行で記されており、第一フォリオの中央上部に、*phyi la 197*という整理番号が付されている。これはデプン寺十六羅漢堂所蔵本であることを示すものであるが、『デプン古籍目録』にはこの写本は記載されていない(同 p. 1618f.)。この写本は、錯簡と脱簡がある不完全なテキストであり、残念ながら完本ではない。フォリオの錯簡と脱簡の状態は以下の通りである。

	ウメ写本 (U)	[ウメ写本通し番号]	シヨル版 (A)
現テキスト	Ms. 1b-228b (前半部)	1b-228b	<b>271b5-543b6</b> <sup>26</sup>
	Ms. 200a-225b (後半部)	229a-254b	214a2- <b>271b5</b> <sup>27</sup>
修正テキスト	Ms. 200a-225b	229a-254b	214a2- <b>271b5</b>
	Ms. 1b-228b	1b-228b	<b>271b5-543b6</b>

ウメ写本 (U) の欄に Ms. の略号を付して示したのは、ウメ写本の左端に写本作成者によりチベット文字で付されたフォリオ番号であり、ウメ写本通し番号は、同写本の右側のファイル上に現代人により付されたフォリオ番号を指す。シヨル版は、それに対応する箇所を挙げている。修正テキストは、現テキストに見られる前後の錯簡を整理したテキストを指し、シヨル版では、214a2-543b6 に相当する。ウメ写本では、シヨル版の271b5の箇所を境に前後に入れ替わっており、前半部と後半部に重複するフォリオ番号 (ff. 200-225) が付されている。以下、少し具体的にテキスト状態を説明しておこう。

まず、この写本は、第一フォリオから番号付けされているが、実際には、『教次第大論』の途中から、具体的には、*tshad med pa bsgom pa'i dbang du byas nas ...* という文章から始まっている。これは、シヨル版では、271b5に見出される。その後、228b までは、シヨル版で、543b6までに対応するが、その後で錯

26 A 271b5: *tshad med pa bsgom pa'i dbang du byas nas/...* から、A 543b6: *las bdag gir bya ba mkhyen pas ni rang gi byas pa'i 'bras bu la spyod pa'i las rnam mkhyen pas* まで。

27 A 241a2: *byang chub sems dpa' 'gro ba kun la phan pa'i don du ...* から。A 271b4: *'di rnam ni sngar spros pa dang bcas te bshad zin to//* まで。

簡が見られ、写本の前半部分と後半部分では前後が入れ替わっている。即ち、228bの直後には、右側の通し番号では、229a以下と続くが<sup>28</sup>、左端のフォリオ番号では、200a以下、225bまで前出の番号が繰り返されており、明らかに混乱している。

ところが、この Ms. 200a-225b の部分（後半部）[通し番号229a-254b] は、実は、シヨル版では、214a2-271b5に対応しており、写本の最後のフォリオである Ms. 225b [通し番号254b] は、この写本の冒頭部の文章にぴたりと繋がっていることが判明した。具体的には、この写本は、'di rnam<sup>s</sup> ni sngar spros pa dang bcas te bshad zin to//という文章で終わっているが、この文章は、この写本の冒頭部の文章である tshad med pa bsgom pa'i dbang du byas nas ... に続いているのである。このことは、実際にシヨル版から確認されることである (A 271b5)。

それ故、この写本は、錯簡は見られるものの、単に写本の前半部と後半部を入れ替えただけで、通して読むことが出来る。端的には、この写本の全体は、シヨル版 (1-548a4) では、214a2-543b6までの部分に相当しており、脱落部分は、シヨル版で、1-214a2と543b7-548a4に相当する部分となる。但し、その脱落部分に、肝心な奥書きが含まれているため、この写本の由来を確認することは出来ず、シヨル版やタムチューヤルベル筆写本との関係やテキストの系統も不明である。それについては、具体的にテキスト内部の情報から検討する他なく、その点が検討課題となる。

以上、現在利用可能な『教次第大論』のテキストについて概観した。纏めるならば、以下の通りである。

1. プルプチヨク山庵に、プルプチヨク・ガワンチャムパ (1682-1762) 所蔵の由緒正しい写本があった。それは、恐らくは、プルプチヨク山庵の建立者でガワンチャムパの道次第の師でもあるドゥブカンパ・ゲレクギャンツォ (1641-1713) から受け継いだものであり、ゲルク派の

28 実は、229aの直後のフォリオには、左端に、肉筆の漢字で「缺第229頁」と端書きされているが、それにも関わらず、右側には229aの番号が付けられており、その点は不可解である。恐らくは、右端に番号付けた人物は、左端に記されたウメ書体のフォリオ番号を解読できなかったのであろう。

道次第師資相承保持者の間に代々受け継がれてきたものと推定される。

[ガワンチャムパ所蔵本。現存不明。]

2. そのガワンチャムパ所蔵の写本は、ロンドルラマ (1719-1795) の近侍書記タムチューヤルペルにより、十八世紀後半頃に、誤字脱字等の修正を加えた形でウチェン書体で筆写された。[タムチューヤルペル筆写本。現存。KS 4, 5所収]
3. 他方、十九世紀前半 (1837-1845年の間) に、第六十九代ガンデン座主チャンチュブチューペル (1756-1838) の請願の下、第七十三代ガンデン座主ガワンジャムペルツルティムギャンツォ (1792-1862) の出版後記誓願文を付けた版本がシヨル印刷所から出版された。[シヨル版。底本不明。現存。ティチャン・ラプラン等に所蔵。]
4. デプン寺十六羅漢堂の整理番号 (phyi la 197) を有するウメ書体の写本が現存しているが、錯簡と脱簡を含み、その由来も不明である。  
[由来不明のウメ書体。]

それ以外にも、ケードゥプジェのツォンカパ伝に記されているように、ツォンカパが、1395年頃にニェルのロロ (gNyal Lo ro) において閲覧した写本が存在していたことは疑いない。その現存は不明であるが、その実物ないしその写しが代々ゲルク派の師資相承保持者の間で受け継がれ、プルプチョク・ガワンチャムパに落手されるに至った可能性も否定できない。さらにチベットには、他の『教次第大論』の写本が現存している可能性もあり、今後の調査が必要とされるところである。

## (2) 『教次第大論』の書名

『教次第大論』の書名については、シヨル版とタムチューヤルペル筆写本の間には、些か異読が見られ、さらには、同一テキスト内にも無視できない異読が確認される。その点を最初に確認しておきたい。まずシヨル版の表題 (1a) は以下の通りである。

*bDe bar gshegs pa'i bstan pa rin po che la 'jug pa'i lam gyi rim pa rnam par bshad pa bzhugs so* 『善逝の教室に入る道の次第の解説で御座います』

その直後 (1b1) には、以下の題目が続いている。

*bDe bar gshegs pa'i bstan pa rin po che la 'jug pa'i rim pa rnam par bshad pa* 『善逝の教室に入る次第の解説』

ここには、lam gyi (道の) という語が脱落している点が注目に値する。これに対して奥書きに示された題目 (547a2) は以下の通りである。

*bDe bar gshegs pa'i bstan pa rin po che la 'jug pa'i rim pa rin chen phreng ba zhes bya ba'i rnam par bshad pa* 『善逝の教室に入る次第・宝環と云われる解説』

恐らくは、この奥書きに見られる題目が正式な書名であり、表題は、出版時に校訂者により付されたものと考えられる。1b1に見られる題目は略称と捉えるべきであろう。それ故、表題に見られる lam gyi (道の) という語は本来なかったものと見なすべきである。

これに対して、タムチューヤルペル筆写本の表題 (1a) は以下の通りである。

*dGe ba'i bshes gnyen chen po Gro lung pa blo gros 'byung gnas kyi[s] mdzad pa'i lam rim 'am bstan rim chen po bzhugs so* 『大善知識トルンパ・ロトツジュンネーにより著作された道次第ないし教次第大論で御座います』

これは、内容から判断して、筆写者自身が付したものと推定される。その後 (1b1) には、シヨル版に見られるものと同じ題目が続いているが、奥書きに見られる題目 (118a1f.) は、僅かだが無視できない異読が確認される。

*bDe bar gshegs pa'i bstan pa rin po che la 'jug pa'i rin chen phreng ba zhes bya ba'i rnam par bshad pa* 『善逝の教室に入る宝環と云われる解説』

ここでは、シヨル版に見られた rim pa (次第) という語が脱落している。この著作を、『教次第』 (bstan rim) と称する以上、rim pa という語が不可欠であるかと思われるが、この点を如何に解釈すべきなのであろうか。

この点については、『教次第大論』本文の中に手掛かりを得ることが出来る。即ち、『教次第大論』では、各章末にこのテキスト名と章名を列挙しているが、そこでは以下の題目が確認される。<sup>29</sup>

29 『教次第大論』A 37a3、55a1、152a7、183a2、213a5、345a2、447a5、507a3、547a2 参照。



*bsTan pa la 'jug pa'i rim pa rnam par bshad pa*『教法へ入る次第を解説するもの』

ここでは、*rim pa*の語が付されている。それ故、*rim pa*の読みを有するシヨル版奥書きに見出される題目が正しいものであると解釈すべきである。タムチュールペル筆写本は、年代的にシヨル版に遡り、しかも道次第師資相承継承者に伝えられた写本に基づくものと推定されるので、その読みを尊重すべきかと思われるが、実際には、この題目の読みを見ただけでも、問題を含むものであることが明らかであり、さらには、本稿で扱う二諦説の箇所<sup>30</sup>の読みも、シヨル版に比べて、より多くの誤字や脱字を含んでいる。ちなみに、1494年にレチエン・クンガギェルツェンにより著作された『カダム明灯史』には、「大小二つの『教次第』(*bsTan pa'i rim pa che chung gnyis*)」という表現が見出されるので(同 p.152.20f.)。 *bsTan pa la 'jug pa'i rim pa rnam par bshad pa*という題目が、後代、*bsTan pa'i rim pa*と略称されるようになり、さらには、*bsTan rim*と最も簡略に称されるようになったという経緯を想定することができる。それ故、「教次第」とは、〈教法の次第〉ではなく、〈教法に入る次第〉を述べた著作であることに留意する必要がある。天台智顛の五時八教の教相判釈に見られるように、教法そのものにレベルの差異を設けて解説した著作ではないのである。

また、この『教次第』の要義(*don bsdu*)の奥書きには、「次第」に相当する語が入っているが、その入り方に些か相異が見出される。即ち、

*Sangs rgyas kyi bstan pa la rim gyis 'jug pa'i tshul lam blo sbyong ngam lam rim zhes bya ba*『仏陀の教法に次第に入る仕方、あるいは、修心、あるいは、道次第と云われるもの』(KS 5, p.321.4f./ 40a4f.)

ここでは、*rim pa*という語が、*bstan pa la rim gyis 'jug pa*という副詞的な形で使用されているが、ここからも、この《教次第》という著作が、教法へ順

30 『雪域人名辞典』p.1662によれば、『カダム明灯史』の著作年次には二説がある。即ち、*bsTan rtsis kun btus*によれば第八ラプチュンの木寅(*shing pho stag*)の年(1494年)に、他方、*Po ta la'i gsung 'bum dkar chag*によれば、第八ラプチュンの木丑(*shing mo glang*)の年(1505年)に著述されたと云われる。羽田野伯猷は、『カダム明灯史』内の記述に基づき、1494年を立てている。羽田野 1954b, p.53, n.10参照。『カダム明灯史』の著作年は、同書のなかに「木寅年(1494)」と明記されているので(同 p.812.3-6)、羽田野が指摘する通り、1494年とするのが正しい。

次に入る階梯を主題とした著作であることが確認される。さらに、ここに明示されているように、「教次第 (bstan rim)」「修心 (blo sbyong)」「道次第 (lam rim)」という一連の用語は換言可能なもの、事実上、同義として用いられていることが判明する。このことは、《教次第》と《道次第》と称される文献群の関係を考える上で重要な情報である。

他方、由来不明のウメ写本には、以下の表題が記されている。

*mKhas pa'i dbang po chen po Gro lung pas mdzad pa'i bstan rim chen po'i zhabs dum bzhugs so*<sup>31</sup>『偉大なる賢者の主トルンパにより著作された『教次第大論』の残簡(?)で御座います』

これは、内容から判断して、明らかに後代の人物により付されたものである。残念ながら、奥書きは脱落しているので、そこから題目を確認することは出来ない。

### (3) 『教次第大論』の奥書き

他方、『教次第大論』の奥書きは以下の通りである。

『善逝の教法に入る次第・宝環と云われる解説』は、北方の家系、雪域国 (=チベット) に生まれた者、勝れた上師・大徳達の御足という蓮華の花芯を頭頂で拝受すること (=御足に頭頂礼すること) により、聖言と正理の勝れた諸典籍を完全に修学した労苦を真に少なからず行なった者、正理と解脱の善き智慧 (spobs pa, i.e., shes rab) を有する者、釈迦比丘ロトゥジュンネーと云う牟尼の禁戒 (brtul zhugs, \*vrata) に正しく住する者に

31 この箇所<sup>32</sup>の写本の読みと語義が判然としなかったため、井内真帆氏を介して、四川省蔵文古籍保護編務院 (Si khron zhing chen bod yig dpe rnying bsdu sgrig khang) のケンポ・ジャムロ氏 (mkhan po 'Jam blo) に照会したところ、写本の読みは、zhabs dum であること、dum は、dum pa で、po ti (帙) や glegs bam (書籍) の意味か、あるいは、dum bu で、上下巻の下巻 (smad cha) や二巻目 (pod gnyis pa) の意味もあるとご教示を頂いた。私見では、この zhabs dum という表現は完本に見たことはなく、また、この写本は脱落がある不完全なものであること、さらに、dum bu の基本的な語義は、「小片」「断片」であることを鑑みて (『藏漢大辞典』 p.1265)、「残簡」の意味で解しておく。但し、po ti の意味であれば、「御著作」と訳す必要があり、その点は検討課題である。ご教示くださったケンポ・ジャムロ氏及び照会の労を取ってくださった井内真帆氏には記して感謝の意を表する次第である。

より、[以前に上師達の下で修学したことに關する] 自身の記憶を定かにする<sup>33</sup> 備忘録に過ぎないものとして著されたものが完成した。』(『教次第大論』 p.908.5-10)<sup>34</sup>

ここから前述した通り本書の正式な書名と、それが備忘録 (brjed byang) として著作されたものであることが判明する。それ以外に、著作年や著作地、著作請願者等の情報は得られないが、この『教次第大論』の要義 (don bsdu) がサンブ寺で著作されたものであることから<sup>35</sup>、この『教次第大論』もまた彼の活動拠点であるサンブ寺で著作された可能性が高い。

この『教次第大論』の要義は、『教次第大論』と共に、『カダム全集』第五卷

32 原文は、mi dman zhing mi zhan la mi nyung bar で、直訳すれば、「小さからず、卑しからず、少なからず」となり、要するに、非常に多くの労苦を行ったという意味であるが、煩瑣であるので、意識しておく。

33 原文は、dran pa goms pa spel ba で、直訳すれば、「記憶に習熟することを増広させる」という意味であるが、日本語として不自然なので、意識しておく。

34 TR p.908.5-10; A 547a2-4; K 118a1-3: *bDe bar gshegs pa'i bstan pa rin po che la 'jug pa'i rim pa (KP om. rim pa) rin chen phreng ba zhes bya ba'i rnam par bshad pa/* byang phyogs kyi rgyud kha ba can gyi ljongs su byung ba/ bla ma rje btsun dam pa rnam kyi zhabs kyi padma'i ze'u (ze KP) 'bru spyi bos len pas/ lung dang rigs pa'i gtsug lag dam pa rnam la yongs su sbyangs pa'i ngal ba mi dman zhing mi zhan la mi nyung bar (om. KP) byas pa/ rigs (rig A) pa dang grol ba'i spobs pa dge ba can/ shākya'i dge slong Blo gros 'byung gnas zhes bya ba thub pa'i brtul zhugs la legs par gnas pas rang gi dran pa goms pa spel ba'i brjed byang tsam du nye bar sbyar ba rdzogs so// //

35 要義の奥書きは以下の通りである。Sangs rgyas kyi bstan pa la rim gyis 'jug pa'i tshul lam blo sbyong ngam lam rim zhes bya ba ni Gro lung pa blo gros 'byung gnas kyi[s] gSang phur sbyar ba'o//(KS 5, p.321.4f./ 40a4f.)「『仏陀の教法に次第に入る仕方、あるいは、修心、あるいは、道次第と云われるもの』は、トルンパ・ロトゥジュンネーによりサンブ [寺] において著作された。」

但し、この著作は、カギユ派では、パクモドゥパ・ドルジェギエルポ (Phag mo gru pa rdo rje rgyal po, 1110-1170) に帰されている。例えば、四巻からなるデルゲ版のパクモドゥパ全集 (TBRC no. W1KG10493) には、同じ作品が収録されており、その奥書には、こう明記されている。ka 帙181a2-3: *Sangs rgyas kyi bstan pa la rim gyis 'jug pa'i tshul dPal ldan Phag mo gru pas mdzad pa rdzogs so//* 同書については、Jackson 1996, pp.233-235に、The *bsTam rim* of Phag mo gru pa という項目で解説が為されている。その著者性については、稿を改めて検討することにした。

にウチェン書体の写本の影印版として収録されたものであり、『教次第大論』と共に百慈蔵文古籍研究室により活字本として出版された『トルンパ著作集』(全二巻)の下巻にも収録されている。<sup>36</sup>筆跡や書式から判断して、同全集所収の『教次第大論』のウチェン写本を筆写した人物と同じ者により作成されたものと推定される。

(4) 『教次第大論』の章立て

『教次第大論』は、全十章から構成されている。その全体の章立ては以下の通りである。<sup>37</sup>

- I. 序文 [A 1b1-6b4] [P 69-75]
- II. 本論 (lus rnam par bzhag pa) [6b4-8a6] [75-79]
- III. 各論 (yan lag rnam par dbye ba) [8a6-547a2] [79-908]
  1. 善知識に師事することに入る事 (dge ba'i bshes gnyen bsten pa la 'jug pa) [8a6-37a3] [79-121]
  2. 暇満を修習することに入る事 (dal 'byor bsgom pa la 'jug pa) [37a3-47a6] [121-136]
  3. 無常 [を修習すること] に入る事 (mi rtag pa [bsgom pa] la 'jug pa) [47a6-55a1] [136-147]
  4. 果報を修習することに入る事 ('bras bu bsgom pa la 'jug pa) [55a1-152a7] [148-297]
  5. 輪廻の罪過を修習することに入る事 ('khor ba'i nyes dmigs bsgom pa la 'jug pa) [142a7-183a2] [297-344]
  6. 菩提心を修習することに入る事 (byang chub kyi sems bsgom pa la 'jug pa) [183a2-213a5] [344-388]

36 書誌情報は順に以下の通りである。dGe bshes Gro lung pas mazzad pa'i bsTan rim chen mo'i don bsdu'am Lam rim. KS 5, pp. 243-321/ 1-40a6: Gro lung pa blo gros 'byung gnas kyi gsung chos skor, smad cha. dPal brtsegs bod yig dpe rnying zhib 'jug khang (ed.), Krung go'i bod rig pa dpe skrun khang, 2009, pp. 1-68.

37 この『教次第大論』の章立ては、Jackson 1989, p. 164f. に蔵文で示され、Jackson 1996, p. 251に英訳が挙げられている。

7. 菩薩行 [を修習すること] に入ること (byang chub sems dpa'i spyod pa [bsgom pa] la 'jug pa)<sup>38</sup> [213a5-345a2] [388-591]
  8. 実性を修習することに入ること (de kho na bsgom pa la 'jug pa) [345a2-447a6] [591-753]
  9. 菩薩地を修習することに入ること (byang chub sems dpa'i sa rnam bsgom pa la 'jug pa) [447a6-507a4] [753-846]
  10. 果報仏地に入ること ('bras bu sangs rgyas kyi sa la 'jug pa) [447a6-547a2] [846-908]
- IV. 著者後記 (\*mdzad byang) [547a2-5] [908]
- V. 出版後記 (\*dpar byang) [547a5-548a4] [908-911]

この章立てから一目されるように、『教次第大論』は、最終章の主題である仏地に入るまでの修習の次第を、善知識、即ち、上師 (bla ma) に師事する仕方から詳しく解説した著作である。その全体の内容分析は将来の検討課題であるが、本稿では、そのうち、第八章で議論される二諦説の設定を扱う。そこから、トルンパの思想的立場が如何なるものであるのか読み解くことが期待できるからである。実際、この『教次第大論』においてトルンパが如何なる思想的立場に立脚しているのかということは依然として未知であるので、『教次第大論』の研究において、まず最初に取り組むべき検討課題である。なぜならば、『教次第大論』の本格的研究のためには、まずは同書における彼の思想的立場を明らかにしておくことが肝要であるからであり、本稿は、その解明を目的の一つとしている。

(5) 本稿で依用するテキスト

先に考察したように、我々の手元には、1. 『カダム全集』所収のタムチューヤルペル筆写本 (K)、2. ショール版 (A) (厳密には、ショール版の ACIP 入力テキスト)、3. 由来不明のウメ書体の写本 (U) の三つと、前二者に基づく諸活字本があるが、そのうち、本稿では、ショール版を底本として、他の二つの写本と校合した

38 この第七章から最終章までの四章の章名には、末尾に「解説すること (bshad pa)」という語が付されているが、それ以前の章名の表記と合せる為に訳出しないでおく。

テキストを脚註及び付録に挙げることにする。校訂に際しては、より良い読みと思われるものをテキスト本文に示し、異読は、丸括弧内に示す。シヨル版を底本とした理由は、本稿で扱った二諦説総論の箇所を見る限り、この三つのテキストの中で最も良い読みを示すからである。タムチューヤルペル筆写本はシヨル版より古く、由緒正しきものと云われるが、実際には、誤字脱字が少なからず散見し、さらには、前述したように、ゲルク派の教義に合せて、テキストに改竄が加えられている可能性もある。ウメ書体の写本は、ある時にはシヨル版と、ある時にはタムチューヤルペル筆写本と同じ読みを示し、その両者に見られない異読を示す場合もあるが、そのテキストの系統分析は、本稿の主題ではないので、今後の検討課題として残しておく。なお、読者の利便の用に供するために、簡便で比較的入手しやすい百慈蔵文古籍研究室本(P)の頁数も提示し、併せて異読も採取しておいた。同活字本はタムチューヤルペル筆写本の複製であるが、校訂者によるテキスト修正が幾分入っているからである。本稿で『教次第大論』の頁数を示したものは、特に断らない限り、この百慈蔵文古籍研究室本による。また、ACIP入力テキストの読みは、シヨル版の忠実な複製と思われるティチャン・ラプラン本で確認し、明らかに誤入力と思われる箇所は、特に註記せずに、同本に基づき訂正した。

なお、ここで扱う二諦説は、後代のゲルク派やサキャ派の文献でも広く議論されるものであるが、本稿は、トルンパ及びギャマルワの原典資料の解説を主目的とするので、後代の文献に対する言及は必要最低限に留め、註記も本稿で扱う原典資料の解明に資するもの<sup>39</sup>に限定する。後代の文献との連関については、稿を改めて検討することにした。

## 2. トルンパの二諦説

トルンパ・ロトウジュンネー (Gro lung pa blo gros 'byung gnas, 11-12c.) は、シャンツェポン・チューキラマ (Zhang tshe spong chos kyi bla ma)、キュン・リンチェンタク (Khyung rin chen grags)、デ・シェーラプバル ('Bre shes rab 'bar)

39 後代のゲルク派の二諦説については、吉水 1990ab; Newland 1992; ツルティム/高田 1996, pp. 83-131; 松本 1997; ツルティム/藤仲 2003, pp. 205-225; 福田 2018, pp. 156-189等を参照。

と共にゴク翻訳師の四大弟子 (sras kyi thu bo bzhi) の一人として知られた人物である<sup>40</sup>。トルンパの主著である『教次第大論』は、ゲルク派のツォンカパが青年時代に修学した典籍の一つであり、ツォンカパの主著である『道次第大論』(Lam rim chen mo) にも大きな影響を与えたことで知られている<sup>41</sup>。

トルンパの二諦に関する纏まった設定は、『教次第大論』の第八章「実性の修習に入ることを解説するもの」において見出される。それは以下の一連の科段から成る。(最初の頁数は、百慈蔵文古籍研究室校訂本 (P) による。)

- A1. 二諦の総論 (spyi don, 総義) [609.8-616.18; A 357a7-361a5; K 302a2-306a4; U 73a9-77b2]
- B1. [二諦の] 語義 (sgrai don) [609.9; A 356b1; K 302a3; U 73b1]
- B2. 分類の自性 (dbye ba'i rang bzhin) [610.8; A 357a2; K 302b3; U 74a1]
- C1. 分類を主題とする基体 (dbye ba'i dbang du bya ba'i gzhi) [610.13; A 357a4; K 302b5; U 74a3]
- C2. 分類の意味 (dbye ba'i don) [610.15; A 357a6; K 302b6; U 74a4]
- C3. 数の確定の考察 (grangs nges par dpyad pa) [611.21; A 358a2; K

40 西沢2011b, Vol. 1, pp. 181f. 参照。トルンパの伝記や著作、その学統については、同 pp. 108-183に比較的詳しく解説したので、委細はそれに譲る。『カダム全集』所収のトルンパの著作リストについては、加納 2007, p. 21f. を参照。

41 このトルンパの『教次第大論』については、Jackson 1996, p. 230f. に簡単な紹介がなされているが、その内容については殆ど研究は進んでいない。ツルティム/藤仲 2003, pp. 350-352に、『教次第大論』の二諦説の箇所に対する言及が散見されることが注目に値するが、残念ながら断片的で不完全な情報の紹介に留まっている。同じく、ツルティム/藤仲2005, pp. 22-25には、トルンパが中観自立派説に立脚すると解釈されているが、その妥当性については、後でトルンパの思想的立場を解説する箇所を検討しよう。2017年度の第65回日本チベット学会 (2017/11/25) で、筆者は、『教次第大論』に見られるトルンパの二諦説について紹介し、その思想的背景とギャマルワ・チャバ師弟との論争を紹介したが (西沢 2018a)、恐らくはそれがトルンパの思想に関する最初の纏まった研究となる。さらに、同じく同学会において更蔵切主により、「ツォンカパの『菩提道次第大論』とトルンパの『教次第大論』の関連性」という題目で発表がなされた。このように徐々に『教次第大論』の内容研究も開始されてきている。なお、「教次第 (bstan rim)」と称される文献群については、Jackson 1996; 伏見 2003参照。



303b1; U 74b7]

B3. [二諦] 各々の定義 (so so'i mtshan nyid) [614.13; A 359b6; K 305a1; U 76a6]

B4. それ (=二諦各々の定義) を確定する認識手段 (de nges par byed pa'i tshad ma) [616.1; A 306b6; K 305b6; U 77a4]

A2. 二諦の各論 (yan lag gi don, 支分義) [616.18ff.; A 361a5ff.; K 306a4ff.; U 77b2ff.]

本稿で紹介するのは、そのうち、「二諦の総論」の部分である。研究の手順としては、まず当該箇所在校訂テキストと訳文を順に脚註と本文に示し、適宜に解説を加えていく仕方で進めていくことにする。一部訳出を控えた箇所もあるが、この二諦の総論の箇所は大部分が訳出されることになる。

## 二諦の総論の内容解説

二諦の総論の箇所は、大きく四つの科段に分けられている。即ち、

「これら (=世俗諦と勝義諦) の総義 (spyi don) は四つ [の科段] によって決まされる。即ち、(1)語義と、(2)分類の自性と、(3) [二諦] 各々の定義と、(4)それを確定する認識手段である。」(『教次第大論』 p. 609.8f.<sup>42</sup>)

以下、その具体的内容を検討しよう。

### (1) 二諦の語義について

まず最初に、二諦の語義 (sgra'i don)、即ち、名義 (ming gi don) ないし語釈 (sgra bshad) について解説する。トルンパは最初に世俗諦について以下のような語釈を提示している。

「第一に、「世俗 (kun rdzob, \*saṃvṛti)」と云うのは、迷乱した知 (khrul ba'i blo) である。なぜならば、実性を覆障する (de kho na bsgrub par byed pa) からである。即ち、直観 (myong ba, \*anubhava) と判断 (zhen pa,

42 TR p. 609.8f.: A 356a7-b1; K 302a2; U 73a9: 'di dag gi spyi don ni bzhis gtan la dbab ste/ sgra'i don dang dbye ba'i rang bzhin dang/ so so'i mtshan nyid dang/ de nges par byed pa'i tshad ma'o//

\**adhyavasāya*) の全ての知 (= 無分別・有分別全ての知) は、実性が如実なものより他に誤ったものとして顕現し、完全に覆障し惑わすものであるので、「正しいものを覆障するもの (*yang dag bsgrub*)」ないし「全てを覆障するもの (*kun rdzob*, 世俗)」である。即ち、

「それによって、あるいは、そこにおいて、正しいもの (= 実性) が覆障されるので、世俗と認められる」(SDV 15ab)

と説かれているが、

「無明は、生ずる時には必ず真実でない対象が顕現し、真実なものを覆障するものとして働く。[例えば、] 黄疸の害のようなものである」(*ĀM* 18, Cit. BCAP 188b6 ad. IX 2)<sup>43</sup>

とも説かれており、[世俗とは、] 無明 (*ma rig pa*, \**avidyā*) と顛倒 (*phyin ci log*, \**viparyāsa*) と愚痴 (*rmongs pa*, \**moha*) に結び付けられた顕現である<sup>44</sup>。

「諦 (*bden pa*, 真実)」とは、その迷乱 [知] の思考の力によって (*khrol ba de'i bsam pa'i dbang gis*) である。なぜならば、[その迷乱知に顕現する通りに] 存立すると信じられているので、迷乱 [知] の対象のみとして真実であり、実際には (*de kho nar*) 真実ではないからである。

「涅槃は唯一の真実であると勝者達により説かれたが、その時、それ以外のものは誤ったものでないと如何なる賢者は分別することがあるうか」(*Yṣ* 35)

と説かれており、[偈中の]「誤ったもの (*log pa*)」とは、迷乱 [知] の顕現 (*khrol ba'i snang ba*) である。それ故、一切の有為の対象は、虚偽にして欺く法を有するものであるので、迷乱 [知] の思考のみによって真実であるに過ぎない。

43 プラジュニャーカラマティ (*Prajñākaramati*) 造『入菩薩行論細註』(BCAP) からの孫引きと推定される。トルンバは同書から多くの経論を孫引きしているが、その件については当該箇所適宜に言及しよう。

44 恐らくは、以下の文章を踏まえている。BCAP 188b5: *kun rdzob dang ma rig pa dang rmongs pa dang phyin ci log ces bya ba ni rnam grangs yin no//; Skt. p. 352.6f.: samvṛtiḥ/ avidyā moho viparyāsa iti paryāyāḥ/*「世俗と無明と愚痴と顛倒と云うのは異名である。」

それ故、その知 (= 迷乱知) の自他の対象は全て迷乱 [知] の側において真実であるに過ぎないので、

「知は世俗 (= 覆障するもの) と云われる」(BCA IX. 2d)

と説かれているのである。即ち、世俗 [知] の思考によって存在するので、世俗のもの (kun rdzob pa, sāmṽṛta, 覆障されたもの) であるが、その思考の側のみにおいて諦でもあるので、「世俗諦<sup>45</sup>」と云う [が、] この意味もまた矛盾しないのである。」(『教次第大論』 p. 609.9-22<sup>46</sup>)

「世俗諦」という場合の「世俗」は、虚偽のものである世俗の対象を意味するのではなく、真実を覆障する迷乱知を含意しており、その知の側において真実であるので、「世俗諦」と云う。世俗諦とは、「世俗 (= 虚偽) の諦 (= 真実)」

45 タムチューヤルペル筆写本では、kun rdzob kyi brdzun pa'i bden pa とあるが、シヨル版には、brdzun pa'i が無い。シヨル版の読みを取る。

46 TR p. 609.9-22; A 356b1-6; K 302a3-7; U 73b1-6: dang po la kun rdzob ces bya ba ni 'khrul pa'i blo ste de kho na bsgrib (sgirb KPU) par byed pas so// 'di ltar myong ba dang zhen pa'i blo mtha' dag ni de kho na ji lta ba las gzhan (gzhin K; bzhin P) du log (leg K) par snang bas kun tu sgrib cing rnyog par byed pas (ba K; pa PU) na yang dag bsgrib (sgirb KPU) bam kun rdzob ste/

gang zhig gis sam gang zhig na// yang dag sgrib byed kun rdzob 'dod (bo KP)// (SDV 15ab)

[Cf. gang zhig gis sam gang zhig la// yang dag sgrib byed kun rdzob bzhed// (SDV 9a2)]

ces gsungs la/

ma rig skyes pa nyid kyi (kyi A) na// yang dag min pa'i don snang zhing// yang dag sgrib par byed pa (read: la) 'jug// mig ser gyis (gyi A) ni non (read: gnod) pa bzhin// (ĀM 18)

[Cf. ma rig skyes pa nyid kyi na// yang dag min pa'i don snang zhing//

yang dag sgrib par byed la 'jug// mig ser gyis ni gnod pa bzhin// (Cit. BCAP 188b6 ad. IX 2)

yang dag ma yin don snang bas// yang dag don ni bsgribs nas gnas//

ma rig pa yis bskyed pa nyid// mig ser nad kyi btab pa bzhin// (ĀM 52a1f.)

Skt. abhūtaṃ khyāpayaty arthaṃ bhūtaṃ āvṛtya vartate/ avidyā jāyanānaiva kāmālā-tāṅk-vṛttivat// (BCAP p. 352.11f.)]

zhes kyang ste/ ma rig pa dang phyin ci log dang rmongs pas sbyar ba'i snang ba'o//

を意味するのではないので、自語撞着の矛盾は存在しない。この語釈は、トルンパ独自の解釈ではなく、インド原典に基づくオーソドックスな世俗諦の語釈である。他方、勝義諦の語釈は以下の通りである。

〔(1)「勝義 (don dam pa, \*paramārtha)」とは、実性を認識する正理知 (de kho na'i 'jal byed rigs pa'i shes pa) である。即ち、解脱を求める者達により、特に目的 (don) として追求されるべきものであり、探し求められるべきものである。〔義 (don, 目的)〕であり、欺かない (mi slu ba) ので、「勝 (dam pa, 勝れたもの)」である。なぜならば、「勝 (dam pa)」という語は、完全なもの (gya nom pa) に対して適用されるが、実性を理解する知は、他 [の知] によって拒斥されない自性 [を有するものであり]、欺かない知 [であるので、] それもまた、完全なものであるからである。

(2)それ (=勝義の知) の対象 (yul) である空性もまた、「勝義 (don dam pa, 勝れた対象)」である。なぜならば、勝義 [の知] の認識対象 (don dam pa'i gzhal bya) であるから。直接知覚 (mngon sum, \*pratyakṣa) の如し。<sup>47</sup>

その知 (=正理知) の側において真実であるので、「勝義諦」である。即ち、〈正理 [知] により成立する真実 (rigs pas grub pa'i bden pa)〉である。〕〔『教次第大論』 pp. 609.22-610.3〕<sup>48</sup>

bden pa ni 'khrul pa de'i bsam pa'i dbang gis te (ni U) rnam par gnas par mos pas na (pa nas U) 'khrul pa'i yul tsam ('khrul ba tsam KPU) du bden gyi de kho nar mi bden pa'i phyir ro//

mya ngan 'das pa bden gcig pu (tu KPU; pur Yṣ)// rgyal ba rnams kyis (kyi A) gang gsungs pa// de tshe lhag ma log min (pa KPU) zhes// mkhas pa su zhis rtog par (mi KPU) byed// (Yṣ 35)

ces gsungs pa ste/ log pa ni 'khrul pa'i snang ba'o// des na 'dus byas kyis don thams cad ni brdzun (rdzun P) pa slu (bslu KP) ba'i chos can yin pas na 'khrul pa'i bsam pa kho nas bden par zad do//

de'i phyir blo de'i yul rang dang (yul dang rang A) gzhan mtha' dag ni 'khrul ngor bden par (pa U) zad pas na

blo ni kun rdzob yin par brjod (BCV IX. 2d)

ces gsungs pa ste/ kun rdzob kyis bsam pas yod pas kun rdzob pa yin la/ bsam ngo de tsam du bden pa'ang yin pas kun rdzob kyis (KP ad. brdzun pa'i) bden pa zhes bya ba'i don 'di'ang ('di yang KP) mi 'gal lo//

ここでトルンパは、勝義に関して二種類の異なる語釈を提示している。即ち、

1. 勝義を知に結び付けて、〈実性を認識する正理知〉と同一視する解釈
2. 勝義を対象に結び付けて、〈空性〉と同一視する解釈

そして、第一の語釈に基づき、勝義、即ち、実性を認識する正理知の側において真実であるので、勝義諦と云うと解釈する。第二の語釈に基づく勝義諦の語釈は明記されていないが、don dam と bden pa を同格限定複合語と捉えて、勝れた対象でもあり、真実であるので、勝義諦と解釈するのであろう。なお、文末に示された「直接知覚 (pratyakṣa)」の喩例は、ジュニャーナガルバ (Jñānagarbha) の『二諦分別論』(Satyadvayavibhāṅga) に見いだされるものであり<sup>49</sup>、それを前提としていることは疑いない。

このように、二諦の語釈を述べた後で、「諦 (bden pa, 真実)」の意味について、以下のような興味深い記述を追加している。

「そうであれば、前者 (= 世俗諦) は、迷乱 [知] の側において真実であるに過ぎないので、〈偽の真実 (bcos bu'i bden pa, 仮の真実)〉である。[他方、] これ (= 勝義諦) は、他 (= 世俗諦) を排除することから、真に真実

47 例えば、mngon sum は、pratyakṣa という梵語の訳語であるが、pratyakṣa は、直接知覚という知と、その直接知覚の対象である現前したものの両者を含意する。それと同様に、don dam pa も同様に、正理知とその正理知の対象の両者を含意すると解説している。ちなみに、チベットの論書では、知としての mngon sum と区別するために、対象としての pratyakṣa は、mngon sum ではなく、mngon 'gyur という語を使用するのが一般的である。

48 TR pp.609.22-610.3; A 356b6-357a1; K 302a7-b1; U 73b6-8: don dam pa ni de kho na'i 'jal byed rigs (rig KP) pa'i shes pa ste/ thar pa 'tshol (tshol AKU) ba rnams kyis (kyi A) ched du gtad nas don du gnyer bar bya zhing btsal bar bya ba yin pas don yang yin la/ mi slu bas na dam pa yang yin te (zhing U)/ dam pa'i sgra ni gya nom pa la 'jug la/ de kho na rtogs pa'i blo gzhan gyis mi gnod pa'i rang bzhin mi slu ba'i shes pa de'ang gya nom pa yin pas so//

de'i yul stong pa nyid kyang don dam pa ste don dam pa'i gzhal bya yin pas mngon sum bzhin no//

shes pa de'i ngor bden pas na don dam pa'i bden pa ste rigs pas grub pa'i bden pa'o//

49 SDVV 4a5 ad 4ab: des gtan la phab pa'i don kyang don dam pa ste/ mngon sum la sogs pa bzhin du brjod do//

なもの (yang dag par bden pa) であるので、〈自性の真実 (rang bzhin gyi bden pa, 真の真実)〉である。

定立の観点 (sgrub pa' cha) からは、前者 (= 世俗諦)こそが真の真実 (bden pa mtshan nyid pa) である。なぜならば、迷乱 [知] の享受対象がそのように確定されたものは、[認識手段による] 拒斥の対象 (gnod pa'i yul) ではないからである。[他方、] これ (= 勝義諦) は、真実の相 (bden pa'i mtshan ma) が何も成立していないものに対して、真実なものとは仮設されただけのものである。なぜならば、実性の正理 [知] の対象 (de kho na'i rigs pa'i yul, i.e., 実性を理解する正理知の対象) としては、有無等の法は些かも成立していないからである。<sup>50</sup> (『教次第大論』 p.610.3-7)

ここでトルンパは二種類の観点から「諦」を説明している。即ち、実性を覆障する迷乱知の側において真実であるもの (= 世俗諦) は、実際には真実なものではないので、仮の真実、あるいは、単に「真実」と名付けられただけのものに過ぎず、真の意味では真実ではない。それに対して、実性を理解する正理知の側において真実であるもの (= 勝義諦) は、真の意味での真実と見なされる。これは語積の上での「諦」の意味である。

それに対して、定立の観点から、即ち、単なる語積上ではなく、実際の意味での真実であるものは、勝義諦ではなく世俗諦であると云う。なぜならば、例えば壺等の世俗の事物は、目的達成に関して欺かないものであるもので、直接知覚等の認識手段により拒斥されることはない。それ故、真の意味での真実である。それに対して、勝義諦は、真実の相が何も成立していないものに対して、真実なものとは仮に名付けられただけのものに過ぎないので、真の意味での真実ではないと云う。この背景には、最後の一文に示されているように、トルンパにとって、空性とは一切の相を離れたものであり、真実としては、正理知を含

50 TR p.610.3-7; A 357a1-2; K 302b1-3; U 73b8-74a1: de ltar na snga ma ni 'khrul ngor bden par zad pas bcos bu'i bden pa'o// 'di ni gzhan sel ba las yang dag par bden pas na rang bzhin gyi bden pa'o//

sgrub pa'i cha las ni snga ma nyid bden pa mtshan nyid pa ste/ 'khrul pa'i spyod yul de ltar nges pa ni gnod pa'i yul ma yin pas so// 'di ni bden pa'i mtshan ma gang yang ma grub pa la bden par btags pa tsam ste/ de kho na'i rigs pa'i yul du ni yod med la sogs pa'i chos cung zad kyang ma grub pa'i phyir ro//

めた如何なる知の対象ともなり得ないものであるという解釈が潜在している。その委細は、勝義諦の定義の箇所では論じられているので、後で検討することにしてしよう。

以上が二諦の語義に関するトルンパの解釈である。二諦の語義に続く科段は、「分類の自性」であるが、それは、順に、分類基体、分類の意味、数の確定という三つの主題に分けられる。

「分類の自性 (dbye ba'i rang bzhin) については、(1)数の分類 (grangs kyi dbye ba) は、「二諦 (bden pa gnyis)」と云われるものであり、即ち、「諦」とは、[分類の] 基体 (gzhi) である。「二」とは、限定 (nges bzung, \*avadhāraṇa) を伴うので、数の確定の意味を有するものである。(2)下位個体の分類 (gsal ba'i dbye ba) とは、「勝義 [と] 世俗 (don dam kun rdzob)」であり、即ち、原因と結果ないし雑染と清浄の諦等、他の事物を否定して認められる下位個体 (gsal ba, \*vyakti) を限定するものである。

これら (=二諦) の意味もまた三つ [の科段] により見られる。即ち、(1)分類を主題とする基体 (dbye ba'i dbang du bya ba'i gzhi) と、(2)分類の意味 (dbye ba'i don) と、(3)数の確定の考察 (grangs nges par dbyad pa) である。」(『教次第大論』p.610.8-13<sup>51</sup>)

ここで、「二諦」の「諦 (bden pa)」は分類の基体であり、それは二つに数が確定されることが明記されている。その二つとは、世俗諦と勝義諦であるが、それは一方を否定することを通じて、他方が定立されるもの、即ち、相互排除の対立 (phan tshun spangs 'gal) と見なされる。以上の内容をより詳しく解説する為に、所引の文章に明記されているように、二諦の分類基体、分類の意味、

51 TR p.610.8-13; A 357a2-4; K 302b3-5; U 74a1-3: dbye ba'i rang bzhin la grangs kyi dbye ba ni bden pa gnyis zhes bya ste/ bden pa ni gzhi'o (bzhi'o KPU)// gnyis ni nges bzung (gzungs K; gzung PU) dang bcas pas (pa'i KP) grangs nges pa'i don can no// gsal ba'i dbye ba ni don dam kun rdzob ste/ rgyu dang 'bras bu'am kun nas nyon mongs pa dang (pa'am KPU) rnam par byang ba'i bden pa la sogs pa (pa'i U) dngos po gzhan bkag (bka' K) nas (pas U) 'dod pa'i gsal ba nges par 'dzin pa'o// 'di dag gi don yang gsum gyis blta ste/ dbye ba'i dbang du bya ba'i gzhi dang/ dbye ba'i don dang/ grangs nges par dpyad pa'o//



数の確定の科段が別個立てられている。以下、その内容を紹介しよう。

(2) 二諦の分類基体について<sup>52</sup>

二諦の分類基体 (dbye ba'i gzhi) とは、何を分けて二諦とするのかということ論じたものである。直前の記述では、二諦の「諦」を分類基体として立てたが、ここでは、その「諦」の内容を具体的に以下のように解説している。

「第一 (=分類基体) は、諦として立てられるべき知と所知という全ての対象 (bden par gzhag bya shes pa dang shes bya'i don mtha' dag) である。即ち、一切智者の智から微細な生類 ('gro ba phra mo) に至るまでのものの迷乱及び不迷乱の一切の知によって知覚される全ての対象である。」

(『教次第大論』 p. 610.13-15)<sup>53</sup>

トルンパにとって、二諦の分類基体とは、一切の知と所知である。知もまた他の知によって知られるべきもの (=所知) であることから、端的には、一切の所知が二諦の分類基体として立てられたことになる。ここではその典拠は何も示されていないが、後代の文献には、通常、以下の『父子合集経』(Pitāputrasamāgamasūtra) の経文が典拠として挙げられている。

「このように如来は、世俗と勝義の二つを理解なさる。即ち、所知もまたこの世俗と勝義に尽きている。」(『父子合集経』 60b4)<sup>54</sup>

委細は後述するが、トルンパは、勝義諦を所知と見なさないので、所知を二諦の分類基体として立てることには大きな問題がある。この点については、トルンパも自覚するところであり、後で解説を加えているので、当該箇所を再検討することにしよう。

52 二諦の分類基体については、ツルティム/藤仲 2003、pp. 350-352を参照。

53 TR. p. 610.13-15; A 357a4f.; K 302b5f.; U 74a3f.: dang po ni bden par gzhag bya shes pa dang shes bya'i don mtha' dag ste/ thams cad mkhyen pa'i ye shes nas 'gro ba phra mo yan chad kyi blo 'khrul pa dang ma 'khrul pa thams cad kyis dmigs pa'i don ma lus pa'o//

54 PPS 60b4: 'di ltar de bzhin gshegs pas kun rdzob dang don dam pa gnyis thugs su chud de/ shes par bya ba yang kun rdzob dang don dam pa 'dir zad do//

トルンパは、後続の箇所でも、同経から同様の文章を引いている(『教次第大論』 p. 614.8-10)。この箇所は後で訳出・紹介しよう。

## (3) 二諦の分類の意味について

分類基体の次に論じられる二諦の分類の意味 (dbye ba'i don) とは、端的には、世俗諦と勝義諦の関係を論じたものである。この議論は、『解深密経』(Samdhinirmocanasūtra) に、二諦は同一でもなく別異でもない<sup>55</sup>と述べられたことに由来し、トルンパもまた、『解深密経』を典拠として、二諦は同一でもなく、別異でもないことを四つずつの論証を挙げて解説している。まず、科段冒頭部で、トルンパは自説を以下のように提示している。

「第二. [質問:] この世俗と勝義の二つは、(1)所作と無常の如く、同一のもの (=同一の自体) に対して法 (=反体) の区別により別異のものとして立てられたもの (gcig la chos kyi dbye bas tha dad du bzhag pa, i.e., \*ngo bo gcig la ldog pa tha dad) であるのか、(2)あるいは、壺と布の如く、別異の自体 (ngo bo tha dad) であるのか、(3)あるいは、事物と非事物の如く、同一のものとして成立していないことのみから別異のものとして立てられたもの (gcig tu ma grub pa tsam las tha dad du gzhas [pa], i.e., \*gcig pa bkag pa'i tha dad) であるのか、と云うならば、

[回答:] 最初の二つではない。即ち、[二諦は] 同一のもの (de nyid, それ自体) とも他のものとも言表されることがないもの (de nyid dang gzhan du brjod du med pa) であるので、〈同一が否定されただけの別異 (gcig pa bkag pa tsam gyi tha dad)〉に過ぎないのである。 (『教次第大論』 p. 610.15-19)<sup>56</sup>

ここでトルンパは、二諦の関係として、三つの可能性を提示している。即ち、

- (1) 同一のもの (=同一の自体) に対して法 (=反体) の区別により別異のものとして立てられたもの (= \*同一自体にして別異反体)。例: 所作と無常
- (2) 別異の自体。例: 壺と布
- (3) 同一のものとも他のものとも言表されることがないもの。 (= \*同一が

55 SN 14b2: 'du byed khams dang don dam mtshan nyid ni// gcig dang tha dad bral ba'i mtshan nyid de// gcig dang tha dad du yang gang rtog pa// de dag tshul gzhan ma yin zhugs pa yin// 「行 (=世俗) である界と勝義である相は、同一と別異を離れた相 [を有するもの] であるが、それを同一と別異の何れと分別しても、それら [の分別] は、不如理に入ったのである。」

否定された別異)。例：事物と非事物

括弧内にアスタリスクを付けたものは、後代一般的に使用される用語である。既に指摘したように、後代のサキヤ派とゲルク派では、この件に関して解釈の相異が見られ、サキヤ派は第三の立場を取るのに対して、ゲルク派は第一の立場を取ることが知られているが、トルンパは、サキヤ派と同様に、最後の説、即ち、二諦は、事物と非事物のように、〈同一のものとして成立していないことのみから別異として立てられたもの〉、〈同一が否定されただけの別異〉とする説を自説としている。後代、〈同一が否定された別異 (gcig pa bkag pa'i tha dad)〉と称されるものであるが、二項のうち的一方が非事物 (dngos med) である場合に立てられる。後述するように、トルンパにとっては、同一と別異が成立するためには、二項が共に事物 (dngos po) であることが必要とされる。しかるに、勝義諦は、一切の所知の相を超えたものであるので、事物とは見なし得ない。それ故、そのような勝義諦と世俗諦の関係を表わす表現として、〈同一が否定された別異〉という概念が新たに案出されたものと推定される。これはインド原典に基づかず、純粋にチベット人学者により創出された概念である。

問題はこの概念は誰により案出されたのかという点であるが、その点は資料的な意味で不明の状態である。現状言えるのは、『教次第大論』は、現在利用可能な資料に依る限り、この概念が見いだされる最古の文献、少なくとも、その一つであることである。それ故、トルンパ自身がこの概念を案出した可能性もあるが、ただこの用語は、勝義諦を所知と見なさないゴク翻訳師及びトルンパを含むその直弟子達の間で一般的に用いられていたものと考えるのが穏当かと思われる。

以上のように自説を述べた後で、『解深密経』を典拠として、二諦が同一である場合の四つの過失と、別異である場合の四つの過失を挙げている。その内容

56 TR p.610.15-19; A 357a5f.; K 302b6f.; U 74a4f.: gnyis pa ni ci kun rdzob dang don dam pa 'di gnyis byas pa dang mi rtag pa ltar gcig la chos kyi dbye bas tha dad du bzhag (gzhag U) pa'am/ 'on te bum pa dang snam bu ltar ngo bo tha dad pa'am/ de ste dngos po dang dngos po med pa ltar gcig tu ma grub pa tsam las tha dad du bzhag ce na/ dang po gnyis ni ma yin te/ de nyid dang gzhan du brjod du med pa nyid kyi gcig pa bkag pa tsam gyi tha dad du (tu U) zad do//

57 西沢 2018b 参照。

は順に以下の通りである。

まず、二諦が同一である場合の四つの過失は以下の通り。

『解深密経』に説かれているように、これら（＝二諦）が同一であるならば、四つの過失がある。即ち、[第一.] 全ての凡夫が世俗を知覚するとき、勝義をも知覚する [ことになる] ので、涅槃を獲得することになる。即ち、軌範師（＝ナーガールジュナ）によっても、

「凡愚 (byis pa) が事物を知覚する通りに、その通りに [事物が] 真実となるならば、それら（＝二諦）は非事物 (dngos med) であるので、[凡愚が] 解脱することになると何故に認めない如何なる理由があるうか。[ないのである] (Y§ 3)

と説かれている。

第二. 世俗に依拠して漏 (zag pa, \*āsrava) が増広するように、勝義を所縁とすることに依拠しても [漏が増広する] ことになる。それ故、世俗の如く、勝義もまた雑染の所縁であることに陥ることになる。

第三. 勝義には相互に区別が存在しないように、世俗もまた [相互に区別が存在しない] ことになるので、一切の世俗は無別異であることになる。

第四. 如実に見たり聞いたりすることより他に世俗は追求されるべきものではないように、勝義もまた [見たり聞いたりすることより他に] 追求されるべきものではないことになる。

以上は、[二諦の同一性を否定するに際して、自体のみならず、] 反体 (ldog pa, \*vyāvṛtti) もまた同一であることを密意している。即ち、[同一であるものが] 同一自体のみ (ngo bo gcig pa tsam) であれば、刹那滅等によって逸脱することになるから。 (『教次第大論』 pp. 610.19-611.4)<sup>58</sup>

四つの過失の内容は訳文から理解可能であるので、解説は省略する。問題は最後の一文であり、その文意は難解で意味が取りがたいが、恐らく大意は以下のようなだろう。即ち、『解深密経』では、二諦が同一であることと別異であることが否定されているが、二諦が同一であることを否定する際、それに対しては、『解深密経』で否定されているのは、二諦が同一反体であることであって、同一自体であることについては否定されていないと解釈することも可能である。実際、後述のギャマルワはそのように解釈するのであるが、トルンパはその解

釈を取らず、『解深密経』では、二諦が同一反体のみならず、同一自体であることも否定されていると解釈し、二諦は同一自体でも別異自体でもない〈同一が否定されただけの別異〉であると主張する。実際、もし『解深密経』の論証において、二諦が同一反体であることが否定されたのであって、同一自体であることは否定されておらず、刹那滅と無常の二つのように、二諦は〈同一自体にして別異反体〉であるというならば、同一性を否定する論証が成立せず、逸脱が生ずることになると考える。なぜならば、二諦は、同一であるからであり、同一自体であるから。この逸脱を斥ける為には、二諦が同一反体であることのみならず同一自体であることをも否定しなければならず、それこそが經典の密意であると解釈するのである。このように、二諦の同一性と別異性の否定を論ずる際に、自体と反体を区別しない点にトルンパの解釈の特徴がある。端的には、二諦が〈同一自体にして別異反体〉であることを認めないわけであり、その点がギャマルワにより批判されることになるが、それについては後述しよう。

他方、二諦が別異である場合の四つの過失は以下の通りである。

- 
- 58 TR pp. 610.19-611.4; A 357a7-b3; K 302b7-303a3; U 74a5-9: *dGongs pa nges par 'grel ba las gsungs pa ltar 'di dag gcig na (nas KP) nyes pa bzhi ste/ so so'i skye bo mtha' dag kun rdzob mthong ba na don dam pa yang (dam'am K; P om. pa yang) mthong bas mya ngan las 'das pa thob par thal te/ slob dpon gyis kyang/*  
*ji ltar byis pas mthong ba yi (ba'i U)// dngos po de ltar bden gyur na//*  
*de dag dngos med rnam thar du// gang phyir mi 'dod rgyu de ci// (Yş 3)*  
 [Cf. *ji ltar byis pas rnam brtags bzhin// dngos po gal te bden 'gyur na//*  
*de dngos med pas rnam thar du// gang gis mi 'dod rgyu ci zhig// (Yş 20b3)*]  
*zhes gsungs so//*  
*gnyis pa ni kun rdzob la brten nas zag pa 'phel ba ltar don dam pa (par U)*  
*dmigs pa la brten nas kyang 'gyur ba'o// des na (de nas U) kun rdzob ltar don*  
*dam pa yang kun nas nyon mongs pa'i dmigs par lhung bar 'gyur ro//*  
*gsum pa ni don dam pa la phan tshun dbye ba med pa (A om. med pa) ltar*  
*kun rdzob kyang 'gyur bas kun rdzob thams cad tha mi dad par 'gyur ba'o//*  
*bzhi pa ni ji ltar mthong ba dang thos pa las logs su kun rdzob btsal bar bya*  
*ba ma yin pa bzhin du don dam pa yang btsal bya ma yin par 'gyur ro//*  
*de dag ni ldog pa nyid kyang gcig pa la dgongs pa ste/ ngo bo gcig pa tsam*  
*yin na skad cig ma (om. KP) la sogs pas (sogs pa yang A) 'khrul par 'gyur ro//*

〔二諦が〕別異であることにも四つの過失がある。即ち、〔第一.〕〔世俗より〕他の空性を知覚しても、世俗はそれ（=空性）に包摂されないので、〔空性より〕別に知覚されることになる。それ故、勝義を修習することにより、行の相（*du byed kyi mtshan ma*, i.e., *bden grub*）は制圧されず、龐重の繫縛（*gnas ngan len gyi 'ching ba*）より解放されないので、涅槃は存在しないことになる。

第二. 勝義は世俗の法性（*chos nyid*）とはならないことになる。〔二諦は〕別異であるから。壺が布の法性でないようなものである。

第三. 世俗が無我であり、〔有我（=真実成立）が〕成立していないことのみ（*rab tu ma grub pa tsam*）は勝義でないことになる。壺の非存在のみは布ではないようなものである。

第四. 雑染と清浄の二つは〔同一の心相続に〕同時にあることになる。所縁が別々に成立するから。壺〔の知〕と布の知の如し。そうであれば、貪欲が減尽すると同時に、貪欲を有するものであることになる。

以上もまた、〔二諦の〕自体（*ngo bo*）と相（*mtshan nyid*, i.e., *ldog pa*）の両者が別異であるからである。』（『教次第大論』p. 611.4-13）<sup>59</sup>

トルンバは、〈同一自体にして別異反体〉を認めないので、別異である場合には、反体のみならず、自体もまた別異である必要がある。その場合には、二諦

59 TR p. 611.4-13; A 357b3-6; K 303a3-6; U 74a9-b4: *tha dad pa la'ang nyes pa bzhi ste/ stong pa nyid gzhan dmigs kyang kun rdzob der ma 'dus pas logs su dmigs par 'gyur bas na/ don dam pa bsgoms pas 'du byed kyi mtshan ma zil gyis mi non cing gnas ngan len gyi 'ching ba las mi grol ('grol KPU) bas mya ngan 'das pa med par 'gyur ro//*

*gnyis pa ni don dam pa kun rdzob kyi chos nyid du mi 'gyur te tha dad pa'i phyir bum pa snam bu'i chos nyid ma yin pa bzhin yin no//*

*gsum pa ni kun rdzob bdag med cing rab tu ma grub pa tsam don dam pa ma yin par 'gyur te bum pa med pa tsam snam bum ma yin pa bzhin no//*

*bzhi pa ni kun nas nyon mongs pa dang rnam par byang ba gnyis dus gcig par thal te/ dmigs pa so sor grub pa'i phyir bum pa dang snam bu'i blo bzhin no// de lta na chags pa zad pa de nyid kyi tshe chags pa dang bcas par 'gyur ro//*

*de dag kyang ngo bo dang mtshan nyid gnyis ka (gnyi ga U) tha dad pa las so//*

は壺と布のように相互に無関係な別個のもの (\*brel med don gzhan) であることになるので、上述の四つの過失が生ずると解釈するわけである。その内容は訳文から十分理解可能であるので、解説は省略する。

以上のように、二諦が別異でもなく同一でもないことを論証した後で、二項が同一ないし別異であるためには、共に事物 (dngos po)<sup>60</sup> である必要があることを明言している。即ち、

「それ故、ティミラ眼病 [者の眼識] の対象である髪とその欠如 (des dben pa, 髪の非存在) は相互に同一でも別異でもないのと同様に、[二諦もまた、相互に同一でもなく別異でもない] と認められる。髪はその欠如より別異のものではない。なぜならば、欠如に包摂されない自立的な髪 (= 実在する髪) は成立していないからである。[その両者は] 同一でもない。その二つは共知覚の確定 (lhan cig dmigs pa nges pa, \*sahopalamba-niyama)<sup>62</sup> がないからである。それと同様に、有為 (= 世俗) と勝義である空もまた、同一でも他のものでもない。なぜならば、同一自体と別異自体の両者は、事物の法 (dngos poi chos) であるので、勝義である戲論の寂靜と世俗である虚偽の両者には、[同一自体と別異自体は] 妥当しないからである。相の区別 (mtshan nyid kyi dbye ba) のみから [二諦が] 立てられると認められる。それ故、[『解深密経』には、] 胡椒 (na le sham, \*marica) と熱 (tsha ba, \*tikta)、ないし、法螺貝とその白 [色] 等の喩例により [そのことが] 説かれたのであり、胡椒等は、個物の実体 (ril poi

60 dngos po は、「存在するもの」を意味する bhāva や vastu という梵語の訳語として使用されるが、後代のゲルク派等では、存在を意味する語として、yod pa (Skt. sat) という語が使用され、それは、この dngos po から区別され、rtag pa (常住なもの) をも含む。端的には、dngos po は無常なもの (mi rtag pa) に限定される。そのことを念頭に置くならば、dngos po に「存在するもの」という訳語を当てるのは些か支障があるので、「事物」という訳語を当てておく。

61 この直前に、gsum pa という語が入っているが、この語は、第三の科段である数の確定の冒頭部に置かれるべき語であるので、『教次第大論』 p. 611.21; A 358a2 の grangs nges pa という語の直前に移しておく。

62 この「共知覚の確定」は、『量決択』において唯識性を論証する二つの証因の一つとして提示されたものである。例えば、「壺と壺を把握する眼識は同一自体である。共知覚の確定の故に」と論証因が立てられる。ここではその論理が適用されている。



rdzas, \*piṇḍa-dravya?<sup>64</sup>) を密意しているのである。」(『教次第大論』 p.611. 13-21)<sup>65</sup>)

ここで、〈同一が否定された別異〉の例として、ティミラ眼病者の眼識に顕現する髪とその髪の欠如が挙げられていることは注目に値する。ティミラ眼病者の迷乱した眼識に顕現する髪は、実在しないが顕現するものの典型的な例として挙げられるが、それは世俗諦に相当し、その髪の欠如、即ち、顕現する髪は実際には存在していないことは、勝義諦、即ち、空性に当たる。つまり、トルンパにとっては、世俗の事物は、ティミラ眼病者の眼識に顕現する髪の如く、実在せず虚偽なものと解された。そして、この髪の欠如は、髪から離れて存在するわけではなく、また、髪も髪の欠如から離れて存在するわけではない。壺

63 『解深密経』の以下の文章を念頭に置いたものである。SN 13b2f.: blo gros shin tu rnam dag 'di lta ste/ dper na/ dung gi dkar po nyid ni/ dung dang mtshan nyid tha dad pa ma yin pa'am/ mtshan nyid tha dad du gdags par sla ba ma yin no// dung gi dkar po nyid ji lta ba bzhin du gser gyi ser po nyid kyang de bzhin no//; Ibid. 13b5f.: na le sham gyi tsha ba nyid kyang na le sham dang mtshan nyid tha dad pa ma yin pa'am/ mtshan nyid tha dad du gdags par sla ba ma yin no// na le sham gyi tsha ba nyid ji lta ba bzhin a ru ra'i bska ba nyid kyang de bzhin no//

64 この ril po'i rdzas という語の意味が些か判然としないが、ここで、「胡椒等」の「等」という語は、法螺貝を含意するので、ril po という語は、単に「丸いもの」を意味するわけではなからう。ここで挙げられた喩例において、胡椒と熱、法螺貝と白色は、基体である実体とそれに内属する属性の関係にある。その意味で、ril po とは、基体に属性が内属した総体ないし個物 (piṇḍa) を意味し、rdzas は、その属性が内属する実体 (dravya) を指すものと解釈しておく。

65 TR p.611.13-21: A 357b6-358a2; K 303a6-b1; U 74b4-7: <gsum pa ni> des (nges KP) na mig (om. KPU) rab rib kyi yul skra shad dang des dben pa dag phan tshung cig dang tha dad pa ma yin pa bzhin du blta'o// skra shad ni des dben pa las tha dad pa ma yin te/ dben par ma 'dus pa rang dbang can gyi skra shad ma grub pas so// gcig pa yang ma yin te/ de gnyis lhan cig dmigs pa nges pa med pas so// de bzhin du 'dus byas dang don dam pa stong pa'ang (pa'am AP) gcig dang gzhan ma yin te/ ngo bo gcig dang tha dad pa gnyis ka (gnyi ga U) dngos po'i chos yin pas/ don dam pa spros pa zhi ba dang kun rdzob rdzun (brdzun PU) pa gnyis ka (gnyi ga KU) la mi 'thad pa'i phyir/ mtshan nyid kyi dbye ba tsam las bzhag par blta'o// des na na le sham dang tsha ba'am dung dang de'i dkar po la sogs pa'i dpegs gsungs te/ na le sham la sogs pa ril po'i rdzas la dgongs pa'o//

等の世俗の事物もまた、空性から離れて存在するわけではなく、空性もまた壺等の世俗の事物から離れて自立的に存在するわけではない。その意味で、二諦は相 (mtshan nyid, \*lakṣaṇa) の区別のみにより立てられると云う。

#### (4) 二諦の数の確定について

前述したように、トルンパは二諦の分類基体として所知を立てる。所知とは存在するもの全てを含意する表現であるが、この所知を二諦の分類基体として立てる時、存在するものは全て二諦の何れかに必ず包摂され、二諦の何れでもない第三項は存在しないことを論ずるのが、この数の確定の議論である。これは、トルンパの二諦説の設定において最も難解な箇所であり、かなり複雑で入り組んだ議論が展開されている。本稿では、そのすべてを論ずる余裕がないので、ここでは、入り組んだ議論には立ち入らずに、トルンパの自説を確認し、その委細については別稿において検討することにした。まず最初に、トルンパは科段冒頭部において以下のような議論を展開している。

「[第三.] 数の確定。この二つ (= 世俗諦と勝義諦) は、顛倒と不顛倒の知の対象であるが、しかしながら、知が [顛倒と不顛倒] 二つに確定されることにより、それ (= その知) と対応するその対象が二つに成立するわけではない。なぜならば、まさに [その] 二つの知もまた、対象が二つとして成立することに依拠することになるからであり、というのも、迷乱知と不迷乱知は、真実の対象と虚偽の対象を有するものに過ぎないので、[知が迷乱と不迷乱の二つに確定されることと対象が真偽の二つに確定されることの二つは] 相互に単一の理解の対象 (phan tshun rtogs pa gcig gi yul) であるからである。それ故、知の区分によって対象の区分を定立したり、あるいは、対象の区分によって知の区分を定立するわけではなく、知の区分の成立それ自体が、対象の区分の成立であり、対象の区分の成立もまた、知の区分の成立である。

そのうち、(1) 不迷乱 [知] の対象 (ma 'khrul ba'i yul, i.e., 勝義諦) は、実際に成立しているものであり、知によって虚構されたものではない (dngos po la grub pa blos ma bcos pa)。それは、常住の自性 (rtag pa'i rang bzhin) である。他の知が生ずることにより、他の形相 (rnam pa) になることはないからである。(2) 迷乱 [知] の対象 ('khrul ba'i yul, i.e., 世俗諦)

は、実際に存在していないが、知によって立てられただけのもの (blos bzhag pa tsam) である。それは、無常である。なぜならば、他の知によって考察したならば、前の知の対象から退失するので、他の形相になるからである。

常住と無常もまた、相互に断除することにより、第三項 (phung po gsum pa) を排除するが、そうであれば、先に迷乱知と不迷乱知に依拠することなく、[二項が] 矛盾していることそれ自体によって ('gal ba de nyid kyis)、所知は真実と非真実、あるいは、知は迷乱知・不迷乱知に確定されるので、[二諦の] 数の確定は成立するのである。」(『教次第大論』<sup>66</sup> pp. 611.21-612.8)

ここでトルンパは、前主張として、所知が世俗諦と勝義諦の二つに数が確定されるのは、それらを認識する知が顛倒知と不顛倒知の二つに確定されることに依拠するという見解を提示し、それを否定するのに、循環論法の過失を提示している。これは、「理解の相互依存の過失 (rtogs pa phan tshun brten pa'i skyon, \*pratipatter itaretaraśraya-doṣah)」と云われるものであるが、対象が二諦に確定

66 TR pp. 611.21-612.8; A 358a2-7; K 303b1-5; U 74b7-75a3: grangs nges ni 'di gnyis phyin ci log dang phyin ci ma log pa'i shes pa'i yul yin mod kyi/ 'on kyang shes pa gnyis su grub pas de'i yul de dang mthun pa gnyis su grub pa ni ma yin te/ shes pa gnyis nyid kyang don gnyis su grub pa la btos (ltos KPU) par thal bas te/ blo 'khrul ba dang ma 'khrul ba ni don bden pa dang brdzun (rdzun KP) pa dang ldan pa tsam yin pas phan tshun rtogs (rtog A) pa gcig gi yul yin pa'i phyir ro// des na shes pa'i dbye bas yul gyi dbye ba sgrub pa'am yul gyi dbye bas shes pa'i dbye ba sgrub pa ni ma yin te/ shes pa'i dbye ba grub pa nyid yul gyi dbye ba grub pa yin la/ yul gyi dbye ba grub pa'ang shes pa'i dbye ba grub pa'o//

de la ma 'khrul ba'i yul ni dngos po la grub pa blos ma bcos pa'o// de ni rtag pa'i rang bzhin te blo gzhan skyes pas rnam pa gzhan du mi 'gyur ba'i phyir ro// 'khrul pa'i yul ni dngos po [la] med kyang blos bzhag pa tsam mo// de ni mi rtag pa ste blo gzhan gyis dpyad na blo snga ma'i yul las nyams pas rnam pa gzhan du 'gyur ba'i phyir ro//

rtag pa dang mi rtag pa'ang phan tshun rnam par gcod pas phung po gsum pa sel te/ de ltar na sngon du blo 'khrul ba dang ma 'khrul ba (U ad. grub pa) la ma ltos par 'gal ba de nyid kyis shes bya bden pa dang mi bden pa'am blo 'khrul ba dang ma 'khrul bar nges pas grangs nges pa grub bo//

されることが、知が顛倒知と不顛倒知の二つに確定されることに依拠するのと同様に、知が顛倒知と不顛倒知の二つに数が確定されることもまた、その対象が世俗諦と勝義諦の二つに確定することに依拠するので、循環論法になるという訳である。

そして、トルンパ自身の自説は、所引の文章中の下線部の箇所<sup>1</sup>に明確に示されている。即ち、トルンパによれば、知が迷乱と不迷乱の二つに確定されることと対象が真偽の二つに確定されることの二つは、〈相互に単一の理解の対象 (phan tshun rtogs pa gcig gi yul)〉である。これは、その二つが別々の知によって理解されるのではなく、単一の知の直接的・間接的理解対象 (dngos rtogs/shugs rtogs) であることを示している。即ち、知が迷乱と不迷乱の二つに確定されることを理解する時、その同じ知により間接的にその対象が真偽の二つに確定されることが理解され、また、同様に、対象が真偽の二つに確定されることを理解する時、それを把握する知もまた迷乱と不迷乱の二つに確定されることが間接的に理解される。その意味で、知の数の確定と対象の数の確定の二つは、単一の知の直接的・間接的理解対象として立てられるのである。

それ故、知の区分によって対象の区分を定立したり、あるいは、対象の区分によって知の区分を定立するわけではなく、知の区分の成立それ自体が対象の区分の成立であり、対象の区分の成立それ自体もまた知の区分の成立である。即ち、迷乱知と不迷乱知、真実と虚偽と云うように、知と対象の両者において、二項が直接的に対立していることそれ自体により、知と対象が、それぞれ、迷乱知と不迷乱知の二つ、真実 (= 勝義諦) と虚偽 (= 世俗諦) の二つに数が確定されると云う。これがトルンパの解釈である。

その場合には、ここでトルンパ自身が明記しているように、勝義諦は、不迷乱知の対象であることになり、実際に存在するものであることになる。さらには、それは常住な自性を有するものであるとも述べられている。しかるにトルンパにとっては、勝義諦は一切の知の対象を超えたものであり、存在するとも存在しないとも規定し得ないものであった。このことを我々は如何に解釈すべきであろうか。

これこそがトルンパの二諦説の最も難解な問題であり、以下、それに関する長い議論が展開されている。問題の所在は、端的には、一方において、直後に紹介するように、『父子合集経』や『入中論』等に基づき、二諦の分類基体とし

て所知を立てつつ、他方において、『二諦分別論』や『入菩薩行論』等に基づき、勝義諦は知に顕現せず、知の対象、即ち、所知ではないことを認める必要があるので、その両者を如何に矛盾なく両立させるのかという点にある。トルンパの議論の委細は別稿において検討することとして、その結論の部分だけを紹介しておこう。それは以下の文章に如実に示されている。

「それ故、〈勝義の辺 (don dam pa'i mtha')〉とは、分別して立てられたもの (brtags nas bzhag pa) に過ぎないが、それを立てることによっても、勝義の辺として分別することが否定されるのである。〈世俗の辺 (kun rdzob kyi mtha')〉は、存在し得るので、断滅されないが、それもまた、迷乱 [知] の対象に過ぎないので、判断 (mngon zhen, \*adhyavasāya) の処 (gnas, i.e., zhen gzhi) ではないと理解する為に、二諦を立てたに過ぎないのであり、真実としては (de kho nar ni, i.e., 勝義としては)、真実 (= 勝義) と虚偽 (= 世俗) の全ては成立しないのである。」(『教次第大論』<sup>67</sup> p.613.17-20)

ここで注目すべきは、最後の一文である。先にトルンパは、二諦の数の確定として、対象の側においては、真実と非真実、知の側においては迷乱知と不迷乱知の二つが矛盾するものとして成立しているので、二諦に数が確定されると解説していた。しかるに、それは言説の立場としてであり、真実としては、真実と非真実、迷乱知と不迷乱知の全ては成立しないと云う。それ故、先に、勝義諦は、不迷乱知の対象として実際に存在すると述べられていたが、それもまたあくまで言説としてであり、勝義としては、勝義諦は不迷乱知の対象として存在するわけではない。また、所知を二諦の分類基体として立てたのも、あくまで言説としてであり、勝義としては、所知は二諦の分類基体でなく、分類基体自体存在しない。なぜならば、勝義諦は一切の所知を超えたものであるからである。これがトルンパの基本的な見解である。そのことを含意して、トルン

67 TR p.613.17-20; A 359a5f.; K 304b1f.; U 75b7-9: des na don dam pa'i mtha' ni brtags nas bzhag par zad la/ de bzhag pas kyang don dam pa'i mthar rtog pa 'gog go// kun rdzob kyi mtha' ni srid pas mi spong la/ de'ang 'khrul pa'i yul tsam yin pas mngon zhen gyi gnas ma yin par go bar bya ba'i don du bden pa gnyis bzhag pa tsam ste/ de kho nar (na U) ni bden pa dang brdzun (rdzun KP) pa thams cad rab tu ma grub bo//

パは、この数の確定の科段末においてこう明言している。

「[要するに、] 以下のことが説示されたのである。即ち、事物の有無、あるいは、真実と虚偽の成立に依拠せずに、分別されることにより承認されるべきものである所知の二辺のみとして、辺を分別する知 (mtha' rtog gi shes pa) の二つの相 (= 世俗と勝義の二相) のみが、[その] 分別知自身の自己認識 (rang rig) により [その分別知が直接的に] 成立することにより間接的に成立するが、それに依拠して、一方の辺を断滅して、第二 [の辺] が承認されるので、その二つの力により諦は二つのみとして成立するのである。<sup>68</sup>

このあり方を捨てて、迷乱と不迷乱の知、あるいは、真実と虚偽の対象が矛盾することのみからは、あらゆる点で [二諦の数の確定を] 設定することは出来ない。なぜならば、勝義諦の相は、真実の認識手段 (bden pa'i tshad ma, i.e., bden pa rtogs pa'i tshad ma) により対象とされなければ成立しないが、対象とされたもの (= 勝義諦の相) もまた、(1) [その知と] 無関係なもの (ma 'brel ba) としては妥当ではない。なぜならば、[もし、無関係なものとして成立するならば、] 一切 [の知] により一切が対象とされることになるからである。(2) [勝義諦の相がその知と] 関係すること ('brel ba) もまた妥当ではない。なぜならば、勝義は知によって包摂されず<sup>69</sup>、因果によっても包摂されないから、二つの関係 (= 同体性と因果性の関係) は妥当ではないが、[それより]<sup>70</sup> 他の関係もまた存在しないからである。

世俗 (= 覆障する知) もまた、迷乱 [知] に過ぎないので、それにより知覚されたものは何処にも否定されないとき、真実は無数のものとなる

68 つまり、(1)二諦の相は、勝義の辺と言説の辺という所知の二辺を分別する知の自己認識により間接的に成立するが、その二辺を分別する知の自己認識と、(2)その自己認識により成立した二諦の相は、一方を断除することにより他方が断定されるという断除 (rnam bca'd, \*vyavaccheda) と断定 (yongs gcod, \*pariccheda) の関係に基づく直接的対立 (dngos 'gal) であることを理解する知の二つの知により、諦は二つに確定されると云う。勝義と世俗の二つは、共に分別知によって仮設されただけのものに過ぎず、実際には存在しないというのがトルンパの基本的理解である。

69 勝義と知の間には、同体関係 (bdag gcig 'brel ba, \*tādātmya) は成立しないということ。

が、虚偽は直接的に認識手段の対象でもないので、如何にしても〔二諦の〕数の確定は成立しないのである。

もし仮に〔数の確定が〕成立するとしても、勝義は知の対象でないこと等と一切の知は世俗であること等<sup>71</sup>と矛盾することは全く断滅されないと必ず認められるのである。それ故、

「世間の賢者の真実はこの二つである。汝は他から聞くことなく、自分でご覧になられよ。それは世俗諦と勝義諦であり、第三の諦は何も存在しない」（『父子合集経』 61b4-5. Cit. BCAP 192a3-4）

とあり、

「真実と虚偽の事物を知覚することを得ることから、全ての事物には二つの自体が把握されるが、真実を知覚する〔知〕の対象は、実性 (de nyid, 空性) であり、虚偽を知覚する〔知の対象〕は、世俗諦であると云われる」（MAv VI. 23. Cit. BCAP 191b6f.）

と説かれている。」（『教次第大論』 pp. 613.21-614.12<sup>72</sup>）

ここで、先に自説として提示された「迷乱と不迷乱の知、あるいは、真実と

70 勝義と知の間には、因果関係 (de byung 'brel ba, \*tadutpatti) は成立しないということ。

71 この文章は、明らかに、『入菩薩行論』の以下の偈を念頭に置いたものである。

kun rdzob dang ni don dam ste// 'di ni bden pa gnyis su 'dod//  
don dam blo yi spyod yul min// blo ni kun rdzob yin par brjod//  
saṃvṛtiḥ paramārthaś ca satyadvayam idam matam/  
buddher agocaras tattvaṃ, buddhiḥ saṃvṛitr ucyate// (BCA IX. 2)

「勝義と世俗とで、これは二諦であると認められる。勝義は知の享受対象ではない。知は世俗であると云われる。」

なお、BCA IX. 2cd は、後続の定義の科段の箇所<sup>72</sup>に引かれている。

72 TR pp. 613.21-614.12; A 359a6-359b6; K 304b2-305a1; U 75b9-76a6: 'di skad bstan pa ni (om. KPU) yin te dngos po yod med dam bden brdzun (rdzun KP) grub pa la ma ltos par rnam par brtag pas (brtag pa las A) khas blang bar bya ba shes bya'i mtha' gnyis kho nar mtha' rtog gi shes pa'i mtshan nyid gnyis kho na rtog (rtogs A) pa nyid kyi rang rig gis grub pa'i shugs la (om. A) grub pa la ltos nas/ mtha' gcig spangs shing gnyis pa khas blangs pas (pa U) de gnyis kyi (kyis KP) dbang gis bden pa gnyis kho nar grub pa'o//(pa'i A)

tshul 'di dor nas blo 'khrul ma 'khrul lam don (om. A) bden brdzun (rdzun KP)



'gal ba nyid las ni rnam pa thams cad du bzhag (gzthag U) par mi nus te/ don dam par bden pa'i mtshan nyid bden pa'i tshad mas yul du ma byas par ni mi 'grub la yul du byed pa'ang ma 'brel bar ni mi rung ste/ thams cad kyis thams cad yul du byed par thal bas so// 'brel ba'ang mi 'thad de/ don dam pa shes pas ma bsdus pa dang/ rgyu 'bras kyis ma bsdus pa'i phyir 'brel pa gnyis ni mi rung la/ 'brel pa gzhan yang med pa'i phyir ro//

kun rdzob kyang 'khrul par zad pas des dmigs pa ni gang du'ang ma bkag pa na bden pa mtha' yas par 'gyur la/ rdzun (brdzun U) pa ni dngos su tshad ma'i yul ma yin pa'i yang phyir ji ltar yang (om. KP) grangs nges par (pa KPU) mi 'grub bo//

gal te grub tu chug na ni don dam pa blo'i yul ma yin pa la sogs pa dang/ blo thams cad kun rdzob yin pa la sogs pa dang 'gal ba gtan mi spong ngo (spongs so AKU) zhes nges par blta'o// des na/

'jig rten mkhas pa'i bden pa 'di gnyis te// khyod kyis gzhan las ma gsan rang gis gzigs// de ni kun rdzob bden dang don dam ste (bden KPU)// bden pa gsum pa gang yang ma (om. P) mchis so (PPS 61b4-5. Cit. BCAP 192a3f.; MAVbh 243a4, 274b5f.)

[Cf. 'jig rten mkhas pa'i bden pa gnyis yin te// khyod kyis gzhan las ma gsan rang gis gzigs//de ni kun rdzob bden dang don dam ste// bden pa gsum pa gang yang ma mchis so// (PPS 61b4f.)

Skt. satya ime duvi lokavidūnām diṣṭa svayaṃ āsrūṇitva pareṣāṃ/ saṃvṛti yā ca tathā paramārtho satyu na sidhyati kiṃ ca tṛṭiyu// (BCAP pp. 361.16-362.2)

Ch. 世間智者於實法。不由他悟自然解。所謂世俗及勝義。離此更無第三法。(『父子合集經』 T320、942a29-b1); 世間智者於實法。不從他聞自然解。所謂世諦及真諦。離此更無第三法。(『大寶積經第十六會』 T310、378c23-24)]

zhes bya ba dang/

yang dag dang ni brdzun pa'i dngos mthong ba// thob las dngos kun ngo bo gnyis 'dzin la// yang dag gzigs yul gang de de nyid des// brdzun pa mthong ba kun rdzob bden par brjod// (MAV VI. 23. Cit. BCAP 191b6f.)

[Cf. yang dag dang ni brdzun pa'i dngos mthong ba// 'thob pas dngos kun ngo bo gnyis 'dzin la// yang dag gzigs yul gang de de nyid de// brdzun pa mthong ba kun rdzob bden par brjod// (BCAP 191b6f.)

dngos kun yang dag brdzun pa mthong ba yis// dngos rnyed ngo bo gnyis ni 'dzin par 'gyur// yang dag mthong yul gang yin de nyid de// mthong ba brdzunpa kun rdzob bden par gsungs// (MAV 253a5)

虚偽の対象が矛盾することのみから二諦は数が確定される」という見解がトルンパ自身により否定されていることに留意されたい。二諦の設定は、世俗と勝義を所知の二辺として仮設する分別知により言説の立場に基づき為されるのであり、真実の立場ではそれは捨てられる。ここに引用された『父子合集経』やチャンドラキールティの『入中論』の偈文に説かれたこともまたそのように解釈する必要があると云うのが、トルンパの基本的見解である。

ちなみに、所引の『父子合集経』と『入中論』の偈文は、共に、プラジュニャーカラマティ (Prajñākaramati) の『入菩薩行論細註』 (*Bodhisattvāvataṛapañjikā*) の同じ箇所<sup>73</sup>に引かれており、トルンパはそこから孫引きしたことは疑いない。そのことは、トルンパの引く『入中論』の偈文がパツァプ訳ではなく、『入菩薩行論細註』所収の訳文であることから確認される。トルンパより一世代後のチャパは、同偈のパツァプ訳を『中観提要』に引用している<sup>73</sup>ので、このことから、トルンパの時代にはパツァプによる『入中論』の翻訳はまだサンプ寺には広まっていなかったが、チャパの時代に至って、サンプ寺にも流布するようになったことが推察される。『入中論』等のパツァプ訳が何時頃からサンプ寺へ流布したのかということは、パツァプ系統の帰謬派説のサンプ寺への伝播を考える上でも重要な情報であるので、今後、同様の情報収集が必要とされる。前述したように、『教次第大論』には、トルンパが前提とする中観派の一連のインドの論師達に対して言及している箇所があるが、そこには、ブツダパーリタヤバーヴィヴェーカ等の名前は見出されるが、チャンドラキールティの名前は見出されない (同 A 347b4f)。このことは、トルンパがチャンドラキールティの中観説に対して批判的な立場にあったことを意味するのではなく、むしろ、チャンドラキールティの存在自身を認知していなかった可能性を示唆している。それ故、その記述を以て、トルンパの中観説が自立派系統であると速断することは出来ない。ここでトルンパは『入中論』の偈を引用しているが、恐らくは、それがチャンドラキールティの著作であることは理解していなかったと推定さ

Skt. samyag-mṛṣā-darśana-labdha-bhāvaṃ rūpadvayaṃ bibhṛati sarva-bhāvāḥ/  
samyag-dṛśāṃ yo viṣayaḥ sa tattvaṃ, mṛṣādṛśāṃ saṃvṛti-satyam uktam//  
(BCAP p. 361. 4-7; Li 2012, p. 5)]

ces gsungs (srung K) so//

73 『中観提要』 p. 59, n. 42参照。

れる。

ちなみに、トルンパが『入中論』を引用していることはこれまで知られておらず、恐らくは本稿において初めて明らかとなったことであるが、このことは、トルンパの中観説がチャンドラキールティの帰謬派説と決して相反するものではなかったことを示唆している。

また『父子合集経』の引用も、同じく『入菩薩行論細註』からの孫引きと推定されるので、『入菩薩行論細註』、特に、二諦説を論じた第九章がトルンパの二諦説の思想的背景にあったことが判明する。これはトルンパの二諦説の系統を考える上で重要な情報である。

#### (5) 二諦の定義について

以上、トルンパの二諦の数の確定に関する見解を紹介した。そこから、二諦の数の確定の議論、さらには、分類基体や分類の意味の議論もまた、二諦、その中でも特に、勝義諦を如何に設定するのかということに不可離に関わっていることが判明した。そこで、次に、それを直接的に議論する二諦の定義について検討しよう。この二諦の定義は、二諦の在り方を考える上で最も重要な主題である。

#### (a) 勝義諦の定義

まず最初に、勝義諦の定義については、以下のように解説されている。

「[二諦] 各々の定義のうち、勝義 [諦] の定義は、〈一切の顕現を超えたもの (snang ba thams cad las 'das pa)〉であり、即ち、一切の相から離れているので、〈所知の相から離れたもの (shes bya'i mtshan ma dang bral ba)〉である。それ故、[勝義は] 有分別と無分別の一切の知の享受対象でないもの (rnam par rtog pa dang rtog pa med pa'i blo thams cad kyi spyod yul ma yin pa) と云われる。なぜならば、一切の知は、有無等の何らかのものを対象として働くが、勝義は、そのような [有無等の] 一切の相から離れているからである。

或る相があるならば、結局は一切智者の知の対象であることにより遍充されているので、

「有無の一切のものをご存知である一切智者によっても知覚されない

もの、そのようなものは如何なるものであるのか、殊に詳細な見解により考察せよ」(SDV 7)

と説かれており、また、

「有でもなく、無でもなく、有無 [の二] でもなく、二でないものを本体とするものとしても存在しない。[そのように] 四辺から離れている実性 (de nyid, \*tattva) を「中 (dbu ma, \*mādhyaṃikā)」と賢者達はお認めになる」(cf. JSS 28)<sup>74</sup>

と説かれている。

そうであれば、勝義 [諦] の定義は、〈一切の自性から離れたもの (rang bzhin thams cad dang bral ba)〉であり、即ち、相がないもの (mtshan nyid med pa) を相 (mtshan nyid, \*lakṣaṇa, 定義) として述べたのである。例えば、「一切法から離れたものこそが、この法ではないのか」と説かれているようなものである。<sup>75</sup>

それ (= 勝義諦) は、(1) 〈無戲論 (spros pa med pa)〉でもある。なぜならば、一切の語と分別知の判断対象ではないから。(2) 〈無二 (gnyis med pa)〉でもある。なぜならば、有と無、所取と能取等ではないから。(3) 〈無相 (mtshan nyid med pa)〉でもある。なぜならば、如何なる法によっても表示されることはないから。(4) 〈非事物 (dngos po med pa)〉でもある。なぜならば、有為の対象が排除されただけのものであるから。(5) 〈空 (stong pa)〉でもある。なぜならば、不空は成立していないから。

それ (= 勝義諦) は、要するに、〈何も成立していないもの (ci'ang ma

74 この偈は、『入菩薩行論細註』に引用されており、そこから孫引きされたものと推定される (BCAP 191a6f.)。これは、アーリヤデーヴァ (Āryadeva) に帰される『智心髓集』(Jñānasārasamuccaya) 28に極めて類似している。同じ原文の異訳の可能性もあるが、委細不明。

75 これとはほぼ同文は、ジネンドラブッディ (Jinendrabuddhi) の *Pramāṇasamuccaya-tīkā* (D 4268) に見出される。同 171b2: med pa ni chos 'ga' yang ma yin pa kho na' o zhe na/ chos thams cad dang bral ba zhes bya ba 'di kho na de'i chos ma yin nam/ blos sprul pa ni med pa la yang mi 'gal ba'i phyir ro// しかし、この蔵訳は、後伝期のサキヤ派のパン翻訳師ロトゥテンパ (dPang lo tsā ba Blo gros brtan pa, 1276-1342) により翻訳されたものであるので、これが直接の典拠となっているとは考え難い。何らかの経文が典拠となっていると推察されるが、委細不明である。

grub pa)〉である。なぜならば、空華の実性 (nam mkha'i me tog gi de kho na) と区別はないという意味であるからである。それ故、戯論を否定する語句により、言説化 (tha snyad du byed pa, 言語表現) しただけに過ぎないのであり、自性として成立している意味 (rang bzhin du grub pa'i don) は何も存在していないのである。】(『教次第大論』 pp.614.13-615.4)<sup>76</sup>

ここでトルンパは、勝義諦を、〈一切の顕現を超えたもの (snang ba thams cad

76 TR pp. 614.13-615.4; A 359b6-360a5; K 305a1-7; U 76a6-b4: so so'i mtshan nyid la don dam pa'i mtshan nyid ni snang ba thams cad las 'das pa (om. U) ste/ mtshan nyid thams cad dang bral bas shes (om. KP) bya'i mtshan ma dang bral ba'o// des na rnam par rtog pa dang rtog pa med pa'i blo thams cad kyi spyod yul ma yin par brjod de/(do// KP) blo thams cad ni yod pa dang med pa la sogs pa ci zhid yul du byas nas 'jug la/ don dam pa (pa'i A) ni de lta bu'i mtshan nyid thams cad dang bral bas so//

mtshan nyid 'ga' zhid yod na ni tha na thams cad mkhyen pa'i blo'i yul yin pas khyab pas na/

yod med dngos kun mkhyen pa po// kun mkhyen pas kyang gang ma gzigs// de yi dngos po ci 'dra zhid// shin tu zhib pa'i lta bas dpyod// (SDV 7)

ces gsungs la/

yod min med min yod med min// gnyis min (med U) bdag nyid du yang (du'ang KP) med//mtha' bzhi las ni nges grol ba// de nyid dbu mar mkhas rnams bzhed// (Cit. BCAP 191a6f.)

[Skt. na san nāsan na sad-āsan na cāpy anubhayātmakam/

catuḥkoṭi-vinirmuktaṃ tattvaṃ mādhyamikā viduḥ// (BCAP p. 359.10f.)

Cf. JSS 28: yod min med min yod med min// gnyis ka'i bdag nyid kyang min pas//mtha' bzhi las grol dbu ma pa// mkhas pa rnams kyi de kho na'o// (Mimaki 1976, p. 204.)]

ces 'byung ngo//

de lta na don dam pa'i mtshan nyid ni rang bzhin thams cad dang bral ba ste mtshan nyid med pa nyid (om. KP) mtshan nyid du brjod pa'o// dper na chos thams cad dang bral ba nyid 'di'i chos ma yin nam zhes bshad pa lta bu'o//

de ni spros pa med pa yang yin te sgra dang rtog pa thams cad kyi zhen yul ma yin pa'i phyir ro// gnyis med pa'ang yin te yod pa dang med pa dang gzung ba dang 'dzin pa la sogs pa ma yin pa'i phyir ro// mtshan nyid med pa'ang yin te chos gang gis kyang mtshon par bya ba ma yin pa'i phyir ro// dngos po med pa yang (pa'ang KP) yin te 'dus byas kyi don ldog pa tsam yin pa'i phyir ro// stong pa'ang

las 'das pa) と定義し、それを直後に、〈所知の相から離れたもの (shes bya'i mtshan ma dang bral ba)〉と換言している。この勝義諦の定義は、既に指摘したように、<sup>77</sup>恐らくは『二諦分別論』の以下の偈を念頭に置いたものである。

「顕現する通りのもののみが世俗であり、それ以外のもの (= 顕現しないもの) は他方 (= 勝義) である。」(SDV 3cd)<sup>78</sup>

この定義によれば、勝義諦は、有分別知のみならず、聖者の入定智や仏智等の無分別知をも含む一切の知の対象ではない。そのことは、所引の『二諦分別論』第七偈に明記されているところである。

さらに、後続の文章では、五相からなる勝義諦の定義を別立てして述べている。しかしながら、それは、勝義諦を取って言語化して表現したものであり、真の意味での勝義諦の定義とは見なし得ないものである。例えば、勝義諦を、〈言語表現できないもの〉と規定した場合、その規定自体、既に言語表現されたものであるので、自己撞着に陥る。「相がないものを相として述べたのである」と云う文章や、「戲論を否定する語句により、言説化 (言語表現) しただけで過ぎず、自性として成立している意味は何も存在しないのである」という文章は、以上のことを含意している。端的には、勝義としては、勝義諦には如何なる定義 (= 相) も存在しないが、言説の立場において、敢えて言語化して、以上のような一連の定義を提示したわけである。これが、勝義諦の定義に関するトルンパの基本的見解である。

以上のように、勝義諦が知の対象を超えたものであり、所知でないとするならば、前述したように、所知を二諦の分類基体として立てるのは妥当でないのではないか、という疑問が当然のことながら生じてくる。これについて、トルンパは、勝義諦の定義を述べた直後に以下のように解説している。

「[質問:] そうであれば、先に、[二諦の] 分類基体として知と所知と  
いう知の対象を立てたことと矛盾する、と云うならば、<sup>79</sup>

---

yin te mi stong pa ma grub pa'i phyir ro//

de ni mdor na ci 'ang (yang KP) ma grub pa ste nam mkha'i me tog gi de kho na las khyad par med pa'i don gyis so// des na spros pa 'gog pa'i tshig gis tha snyad du byed par zad kyī rang bzhin du grub pa'i don ni ci 'ang (yang KP) med do//

77 西沢2018a, p. 39f. 参照。

78 ji ltar snang ba 'di kho na// kun rdzob gzhan ni cig shos yin//

[回答:] [矛盾] しない。なぜならば、有無等を把握する知 (= 言説の知) により所知として仮設されたもの (shes byar btags pa) を、実性の正理 (de kho na'i rigs pa, i.e., 実性を理解する正理知) により考察するならば、所知の相から離れているので、[勝義諦は] 知の対象を超えたもの (blo'i yul las 'das pa) に他ならないからである。[例えば、] 分別知である推論は、[自身の] 対象を自相と思い込むが、他の知により考察するならば、[推論の対象は] 普遍を超えることはないので、その対象 (= 推論の対象) を普遍 (spyi, \*sāmānya) と云うようなものである。それ故、知の対象は全て世俗であると云われる。なぜならば、迷乱した知は勝義を対象としないからである。即ち、『世俗勝義説示経』(Kun rdzob dang don dam pa bstan pa'i mdo, Samvrtiṣāramānirdeśasūtra, D 179) に、

「もし勝義として勝義が身口意の対象である事物となったならば、勝義に数えられず、世俗に他ならないことになる。しかしながら、勝義として、勝義諦は一切の言説を真実として超えたもの、区別がないもの、不生・不滅なもの、言表対象と言表及び所知と知から離れたものである。勝義は、あらゆる形の最勝を有する一切智者の智の対象をも超えており、それ (= 勝義) に対しては、一切の分別知が働くこともなく、働かないこともない。それには、彼方と此方と中央もまた存在しない。「これは勝義諦である」と増益して言表されるが、[その勝義諦の] 意味は、勝義として生ずることはなく、それに対して一切の言説は適用されないのである。それに対して言説が適用されないもの、それこそが勝義であり、「勝義である」と言表された通りのものではないのである。教主もまた、「勝義として一切の法と一切の語は虚偽であり、欺く法を有するものである」とお説きになった」(『世俗勝義所説経』 247a3-247b1. Cit. BCAP p. 366.10-16/193b5-6; MAv 255b7-256a4 ad VI. 29)<sup>80</sup>と説かれている。」(『教次第大論』 p. 615.4-20)<sup>81</sup>

79 『教次第大論』 p. 610.13f. 参照。

80 『世俗勝義所説経』 (D 179) からの引用。テンギェル所収の原文は以下の通り。

lha'i bu gal te don dam par na don dam pa'i bden pa lus dang/ ngag dang/ yid  
kyi yul gyi rang bzhin du 'gyur na ni de don dam pa'i bden pa zhes bya ba'i  
grangs su mi 'gro ste/ kun rdzob kyi bden pa nyid du 'gyur ro//



'on kyang lha'i bu don dam par na don dam pa'i bden pa ni tha snyad thams cad las 'das pa/ bye brag med pa/ ma skyes pa/ ma 'gags pa/ smra bar bya ba dang/ smra ba dang/ shes par bya ba dang/ shes pa dang bral ba'o// lha'i bu don dam pa'i bden pa ni rnam pa thams cad kyi mchog dang ldan pa dang/ thams cad mkhyen pa'i ye shes kyi yul gyi bar las 'das pa yin te/ lha'i bu de la rtog pa dang rnam par rtog pa thams cad 'jug pa'ang med/ ldog pa'ang med/ don dam par na de la pha rol yang med/ tshu rol yang med/ dbus kyang med de/ lha'i bu 'di ni don dam pa'i bden pa zhes sgro btags te brjod myod kyi/ ji ltar don dam pa'i bden pa'o zhes bya ba ltar ni ma yin no// lha'i bu don ni don dam par mi skye ba ste/ de la tha snyad thams cad mi 'jug go// don dam par gang la tha snyad thams cad mi 'jug pa de ni lha'i bu don dam pa'i bden pa ste/ ji ltar don dam pa'i bden pa'o// zhes brjod pa ltar na ma yin no// lha'i bu de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas kyi kyang don dam par na chos thams cad dang/ sgra thams cad ni brdzun te slu ba'i chos so zhes bka' stsal to// (SPN 247a3-247b1)

『入菩薩行論細註』にも同じ経文が引かれるが、そこでは、'*Phags pa bden pa gnyis la 'jug pa (Āryasatyadvayāvātāra, 『聖入二諦 [経]』)* という書名が記されている。原典の題目は、'*Phags pa kun rdzob dang don dam pa'i bden pa bstan pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo* (D 179) なので、『教次第大論』所引の題目がより正確である。参考までに、『入菩薩行論細註』所収のテキストと梵語原文及びその直訳を挙げておこう。

lha'i bu gal te don dam pa'i bden pa lus dang ngag dang yid kyi spyod yul du gyur na de don dam pa'i grangs su mi 'gro zhing kun rdzob kyi bden pa nyid du 'gyur ro// lha'i bu 'on kyang don dam pa'i bden pa ni tha snyad thams cad las 'das pa dang/ yang dag par ma skyes pa dang/ ma 'gags pa dang/ brjod par bya ba dang/ rjod par byed pa dang/ shes bya dang/ shes pa dang bral ba yin te/ ji srid du rnam pa thams cad kyi mchog dang ldan pa'i thams cad mkhyen pa'i ye shes kyi yul las 'das pa ni don dam pa'i bden pa yin no zhes rgyas par gsungs so// (BCAP 193b5-6)

Skt. yadi hi devaputra paramārthataḥ paramārthasatyam kāya-vān-manasām viśayatām upagacchet/ na tat paramārthasatyam iti saṃkhyāṃ gacchet/ saṃvṛtisatyam eva tad bhavet/ api tu devaputra paramārthasatyam sarva-vyavahāram atikrāntaṃ nirviśeṣaṃ/ asamutpannam aniruddhaṃ/ abhidheyābhidhāna-jñeya-jñāna-vigataṃ/ yāvat sarvākāraropeta-sarvajña-jñāna-viśaya-bhāva-samatikrāntaṃ paramārthasatyam/ (BCAP p.366.10-16)

「もし、天子よ。勝義として、勝義諦が身口意の対象となるならば、それは「勝義諦」という名称 (samkhyā) を得ないであろう。それは世俗諦に他ならないことになろう。しかるに、天子よ。勝義諦は、一切の言説を超えたものであり、無差別であり (nirviśeṣaṃ, Tib. yang dag par!)、生ぜず、滅しないものである。言表対象と言表、所知と知を離れたものである。あらゆる形の最勝を具足する\*一切智者の智の対象である事物 (-bhāva, Tib. om., \*dngos po) を超えたものが、勝義諦である。」

\*sarvākāravāropeta は、直後の sarvajña-jñāna に掛けて、「あらゆる形の最勝を具足する一切智者の智」と訳す以外に、sarvajña-jñāna-viśaya-bhāva-samati-krānta と並置されていると解釈し、「あらゆる形の最勝を具足するものと、一切智者の智の対象である事物を超えたもの」と訳すことも可能である。今は蔵訳に基づき前者の解釈を採用しておくが、検討課題である。

なお、この経文は『入中論』にも『聖入二諦経』( *'Phags pa bden pa gnyis la 'jug pa* ) からの引用として引かれている。所引の文章は以下の通り。

lha'i bu gal te don dam par na don dam pa'i bden pa lus dang ngag dang yid  
kyi yul gyi rang bzhin du 'gyur na ni/ de don dam pa'i bden pa zhes bya ba'i  
grangs su mi 'gro ste kun rdzob kyi bden pa nyid du 'gyur ro// 'on kyang lha'i  
bu don dam par na don dam pa'i bden pa ni tha snyad thams cad las 'das pa/  
bye brag med pa/ ma skyes pa/ ma 'gags pa/ smra bar bya ba dang/ smra ba  
dang/ shes par bya ba dang/ shes pa dang bral ba'o// lha'i bu don dam pa'i  
bden pa ni rnam pa thams cad kyi mchog dang ldan pa thams cad mkhyen pa'i  
ye shes kyi yul gyi bar las 'das pa yin te/ ji ltar don dam pa'i bden pa'o zhes  
brjod pa ltar ni ma yin no// chos thams cad ni brdzun te slu ba'i chos so// lha'i  
bu don dam pa'i bden pa ni bstan par mi nus so// de ci'i phyir zhe na/ gang  
gis ston pa dang/ ci ston pa dang/ gang la ston pa'i chos de dag thams cad ni  
don dam par rab tu ma skyes pa'o// rab tu ma skyes pa'i chos rnams kyi ni  
rab tu ma skyes pa'i chos rnams bshad par mi nus so (MAv 255b7-256a4 ad  
VI. 29)

『入菩薩行論細註』所引の経文は簡略化されているが、『教次第大論』所引の経文は、より原典に近い。さらに、『入菩薩行論細註』では、これは *'Phags pa bden pa gnyis la 'jug pa* からの引用とされるのに対して、『教次第大論』では、原典の題目通り、*Kun rdzob dang don dam bstan pa'i mdo* からの引用としており、その点にも違いが見出される。それ故、『教次第大論』所引の経文は、『入菩薩行論細註』からの孫引きではなく、原典か、あるいは、別の第三の典籍からの引用と推定される。

ここでトルンパは、正理知と勝義諦の関係を、推論と自相の関係に結び付けて解説している。その具体的な解説がないので、内容を憶測するほかないが、恐らくはこういう意味であろう。即ち、推論は、自身に顕現する火の対象普遍 (don spyi, i.e., spyi mtshan, sāmānya-lakṣaṇa) 等の分別知により仮設されただけのものを対象とするが、それを実際に目的達成可能な事物として存在する火そのもの、即ち、自相としての火と判断し (= 思い込み)、その判断に基づき、人は行動を起こして自相としての火に到達することが出来る。それと同様に、証因に依拠して空性を理解する有分別の正理知である推論は、自身に顕現する空

81 TR p.615.4-20; A 360a5-360b2; K 305a7-b4; U 76b4-77a1: 'o na sngar dbye ba'i gzhir shes pa dang shes bya blo'i yul nyid bzhag pa dang 'gal lo snyam na/ ma yin te yod med la sogs pa 'dzin pa'i blos shes byar btags (brtags KU) pa nyid de kho na'i rigs pas dpyad na shes bya'i mtshan nyid dang bral bas blo'i yul las (sa KP) 'das pa nyid yin pa'i phyir te/(ro// KP) rnam rtog rjes dpag yul rang gi mtshan nyid du rlom yang blo gzhān gyis dpyad na spyi las ma 'das pas de'i yul spyir brjod pa bzhin no// des na blo'i yul thams cad kun rdzob tu (du K) brjod de 'khrul pa'i blos don dam pa yul du mi byed pa'i phyir ro// de skad du *Kun rdzob dad don dam pa bstan pa'i mdo* (*pa mdo KP; pa U*) las/

gal te don dam par na don dam pa (A om. na don dam pa) lus dang ngag dang yid kyi yul gyi dngos por gyur na ni don dam pa'i grangs su mi 'gro ste kun rdzob nyid du 'gyur ro// 'on kyang ('o na A) don dam par na don dam pa'i bden pa ni tha snyad thams cad las yang dag par 'das pa/ bye brag med pa/ ma skyes pa ma 'gags pa/ brjod bya dang brjod (rjod KU) pa dang shes bya dang shes pa dang bral ba'o// don dam pa ni rnam pa thams cad kyi mchog dang ldan pa thams cad mkhyen pa'i ye shes kyi yul las kyang 'das pa ste/ de la ni rnam rtog thams cad 'jug pa'ang med/ ldog pa'ang med do// de la (KP om. de la) pha rol dang tshu rol dang dbus kyang med do// 'di ni don dam pa'i bden pa zhes sgro btags te brjod mod kyi/ don ni don dam par mi skye ba ste de la tha snyad thams cad mi 'jug go// gang la tha snyad mi 'jug pa de ni don dam pa ste ji ltar don dam pa'o zhes brjod pa ltar ni ma yin no// ston pas kyang don dam par na chos thams cad dang sgra thams cad ni brdzun pa ste bslu (slu KPU) ba'i chos can no zhes bka' stsal to (SPN 247a3-247b1. Cit. BCAP p. 366.10-16/193b5-6; MAv 255b7-256a4 ad VI. 29)

zhes so//

この箇所は、『世俗勝義所説経』の引用の前まで、ツルティム/藤仲 2003、p. 352f. に訳出されている。

性の対象普遍を対象とするが、それを真の意味での空性と判断し、その判断に基づき、空性に到達することが出来る。その意味で、空性もまた正理知の対象（=判断対象）として立てられるので、それに依拠して、所知を二諦の分類基体として設定できるという解釈である。

上述の一連の勝義諦の定義は、言語表現できないものを取って言語表現し、分別知により仮設されただけのものに過ぎないが、所知を二諦の定義基体として立てたこともまた、それと同様に、単に言説の立場で分別知により仮設されただけであり、真実として所知が二諦の定義基体であるわけではない。このようにして、トルンパは、自説に潜在する難問の解決を図ったが、このトルンパの解釈は、続く、ギャマルとチャパの師弟により激しく批判されることになる。

#### (b) 世俗諦の定義

以上が勝義諦の定義に関するトルンパの見解であるが、その直後に、世俗諦の定義について以下のように解説している。

「世俗〔諦〕の定義は、〈顛倒〔知〕の所縁 (phyin ci log gi dmigs pa)〉であるので、全ての知に顕現する通りのものである。〈顛倒〉とは、全ての迷乱知である。それ (=迷乱知) によって知覚されるべきものが、迷乱〔知〕の対象であるので、世俗諦である。なぜならば、[正理を考察する] 認識手段により拒斥されるにもかかわらず [実際に] 顕現しているものは、虚偽であることにより、認識手段の対象が真実としてその通りに存立していることが否定されるので、[世俗諦は]「認識手段により拒斥される」という言説として妥当であるからである。顕現している迷乱〔知〕の対象のみに対しては、認識手段は働かないので、顕現を否定することにもならない。知の対象は全て世俗であるので、

「勝義は知の享受対象ではない。知は世俗であると認められる」(BCA IX. 2cd)

と説かれている。」(『教次第大論』 pp. 615.25-616.1)<sup>82</sup>

ここに示されているように、世俗諦とは、顛倒知、即ち、迷乱知の対象であるが、勝義としては、全ての知は、対象を知覚している以上、所取と能取の二の関係にあるので、迷乱知と見なされる。それ故、端的には、世俗諦とは一切の知の対象に他ならず、世俗諦と所知は同義と見なされる。空性すらも、知の

対象とされた時点で、既に所取と能取の二の関係の中に取り込まれており、言語化され分別知の判断対象とされ、基本的に世俗諦に属するものとなる。それは真の意味では空性ではなく、空性として分別知により仮設されただけのものに過ぎない。

(6) 二諦の定義を確定する認識手段について

以上、二諦の定義に関するトルンパの見解を考察した。この定義の議論の直後には、その定義を確定する認識手段に関する科段が立てられているが、これが二諦の設定の最後の科段となる。まず科段冒頭部において、『入菩薩行論』の偈文 (BCA IX. 3-4ab) を引用して、凡夫の知は、瑜伽行者により斥けられ、瑜伽行者の知もまた、より上位の瑜伽行者の知により斥けられることを示してから (『教次第大論』 p.616.1-8)、勝義諦の定義を確定する認識手段についてこう説明している。

「それら (=二諦) の定義を確定する認識手段のうち、〈勝義を理解するもの〉は、(1)彼岸をご覧になる者達 (=聖者) の無顕現の智である瑜伽行者の直接知覚 (pha rol gzigs pa rnams kyi snang ba med pa'i ye shes rnal 'byor gyi mngon sum) と、(2)此岸を見る者達 (=凡夫) の増益を否定する離一多等の証因に基づき働く推論の認識手段 (tshu rol mthong ba rnams kyi sgro 'dogs 'gog par byed pa gcig dang du ma dang bral ba la sogs pa'i rtags las 'jug pa'i rjes dpag gi tshad ma) である。」 (『教次第大論』 p.616.8-11)<sup>83</sup>

82 TR pp.615.25-616.1; A 360b3-6; K 305b4-6; U 77a1-4: kun rdzob kyi mtshan nyid ni phyin ci log gi dmigs pa yin pas blo ma lus pa la snang ba ji lta ba ste/ phyin ci log ni 'khrul pa'i blo mtha' dag go// des dmigs par bya ba ni 'khrul pa'i yul yin pas na kun rdzob kyi bden pa ste/ tshad mas gnod bzhin du snang ba ni brdzun (rdzun KP) pa yin pas/ tshad ma'i yul de kho nar de ltar gnas pa bkag pas na tshad mas gnod pa'i tha snyad du 'thad pas so// snang bzhin pa (pas KPU) 'khrul pa'i yul tsam la ni tshad ma mi 'jug pas snang ba 'gog par (pa KP) yang mi thal lo// blo'i yul ma lus pa kun rdzob yin pas na (ni A)/

don dam blo yi spyod yul min// blo ni kun rdzob yin par 'dod (brjod BCA)// (BCA IX. 2cd)

[Skt. buddher agocaras tattvam, buddhiḥ saṃvṛtir ucyate// (BCAP p.352.4)] ces gsungs so//

ここで勝義諦の定義を確定する認識手段の議論は、基本的に、言説の立場に依拠したものであることを念頭に置く必要がある。真実としては、勝義諦には如何なる定義(=相)も存在しないので、それを確定する認識手段もまた当然存在しないからである。しかるに、言説の立場において、上述のように勝義諦の定義を立てた場合、それを確定する知もまた言説の立場において立てることが可能となる。それは、端的には、有分別知と無分別知に大別され、順に、証因に依拠して空性を理解する推論と、空性を直接知覚において理解する瑜伽行者の直接知覚(=聖者の入定智)がそれに当たる。

これに対して、世俗諦の定義を確定する認識手段は、以下の通りである。

「〈世俗を理解するもの〉は、実性として存在するもの (de kho nar yod pa, i.e., bden grub) に対して拒斥する者達により、真実として存在するという増益 (bden par yod pa'i sgro 'dogs, i.e., bden 'dzin) を否定することにより、間接的に、顕現しているものとして直接知覚により成立しているものは、虚偽として存在するものに過ぎないと確定されるので、〈推論により行が堅固にされた直接知覚 (rjes dpag gis 'du byed brtan par byas pa'i mngon sum)〉である。即ち、

「そのうち、[凡夫にとっては、] [否定対象 (= 真実成立) に対する] 増益を断じ、[所証 (= 空性) を] 知らしめる [離一多性等の]<sup>85</sup> 証因によって、諸々の推論されるべきもの (= 空性) を知らしめる。[他方、] 瑜伽行者の主達 (= 聖者) は、直接知覚により [空性を] 明らかにする」(MA <sup>86</sup>75)

と説かれており、

83 TR p.616.8-11; A 361a2f.; K 306a1f.; U 77a7f.; mtshan nyid de dag nges par byed pa'i tshad ma la don dam pa rtogs (rtog A) par byed pa ni pha rol gzig pa rnam kyi (kyis A) snang ba med pa'i ye shes rnal 'byor gyi mngon sum dang/ tshu (tshul KP) rol mthong ba rnam kyis sgro 'dogs 'gog par byed pa gcig dang du ma dang bral ba la sogs pa'i rtags las 'jug pa'i rjes dpag gi tshad ma dag go//

84 全てのテキストで、gis の読みを示すが、gi の読みの可能性も捨てられない。その場合、推論の行を繰り返し修習することを通じて、その行が堅固にされ、最終的に獲得された瑜伽行者の直接知覚を含意する。

85 MAP p.249.20f.: de shes par byed pa'i gtan tshigs ni gcig pa nyid dang du ma nyid la sogs pa'i mtshan nyid do//

「それ故、これらの事物は世俗のみの相 (= 考察しない限り喜ばしい相) を保持するものである<sup>87</sup>。もし、それらが [実在する] 対象 (don, \*artha) と認められるならば、それに対して我々は何を為しえようか」(MA 63) と説かれている。」(『教次第大論』 p. 616.12-18)<sup>88</sup>

世俗諦の定義とは、顛倒知の所縁、迷乱知の対象であるが、それを確定する認識手段とは、例えば、壺等の世俗の事物が迷乱知の対象であることを理解する知に他ならない。トルンパは、そのような知を、〈推論により行が堅固にされた直接知覚 (rjes dpag gis 'du byed brtan par byas pa'i mngon sum)〉と表現している。その具体的な内容については、詳しい記述がないので、憶測の域を出ないが、壺等の事物が迷乱知の対象であるということは、壺等の事物が虚偽であることであり、それを理解する為には、壺等の空性を理解する必要がある。それ故、ここで「推論」と云うのは、離一多等の証因に依拠して空性を理解する推論を意味することは疑いなかろう。そのような推論により行が堅固にされた

86 この偈は難解で、ここに挙げたのはあくまで一つの解釈に過ぎない。一郷訳 (一郷 1985、p. 172) とは解釈が異なっていることを付言しておく。

87 MA p. 169.8-10: ji skad bshad pa'i rigs pa dag gis/ dngos po thams cad ni brtag mi bzod pa'i phyir ma brtags na nyams dga' ba kho na'i bdag nyid kyi ngo bo 'dzin te/ sgyu ma'i glang po che dang rta dang mi la sogs pa bzhin no// 「前述の諸々の正理により、一切の事物は、考察するに耐えないので、考察しない限り喜ばしいもの (\*avicāraika-ramaṇiya) のみを本性とする相を保持する。例えば、幻の象や馬や人の如し。」

88 TR p. 616.12-18; A 361a3-5; K 306a2-4; U 77a8-b2: kun rdzob rtogs par byed pa ni de kho nar yod pa la gnod par byed pa dag gis bden par yod pa'i sgro 'dogs bkag pa'i shugs kyi snang bzhin par mngon sum nyid kyi grub ('grub U) pa 'di brdzun par yod pa tsum du nges pas na rjes dpag gis 'du byed brtan par byas pa'i mngon sum nyid de/

de la sgro 'dogs gcod byed pa// shes par byed pa'i gtan tshigs kyi// rjes su dpog rnam shes par byed// rnal 'byor dbang rnam mngon sum gsal// (MA 75)

zhes bya ba dang/

de (de'i A) phyir dngos po 'di dag ni// kun rdzob pa nyid (kho na'i MA) mtshan nyid 'dzin// gal te 'di dag (bdag U) don 'dod na// de la bdag gis ci byar yod (kho bos ci zhi bya MA) (MA 63)

ces gang gsungs pa'o//



直接知覚とは、そのような推論を繰り返し修習することを通じて、壺等の事物を見ただけで、即座にそれが虚偽であること理解する〈習慣性を有する直接知覚 (goms pa can gyi mngon sum, \*abhyāsavat-pratyakṣa)〉を含意しているかと推定される。それは思所成の知である推論から生じた修所成の知である。以上の解釈についてはまだ文献的な裏付けが取れないので、憶測の域を出ないが、暫定的に、そのように解釈しておきたい。

(7) トルンパの思想的立場—中観説と如来蔵思想について—

以上、二諦説に関するトルンパの見解を考察したが、トルンパは、『教次第大論』において明らかに中観説に立脚していることが確認された。即ち、教証としては、経典からは、『父子合集経』や『世俗勝義説示経』、論書からは、ナーガールジュナの『六十頌如理論』(Yṣ 3, 35)を初め、ジュニャーナガルバの『二諦分別論』(SDV 7, 15ab)、シャーンティデーヴァ (Śāntideva) の『入菩薩行論』(BCA IX, 2cd, [3-4ab])、シャーンタラクシタ (Śāntarakṣita) の『中観莊嚴論』(MA 63, 75)カムバラ (Kambala) の『光明鬘論』(ĀM 18)、さらには、チャンドラキールティの『入中論』(MAv VI, 23)からの引用が見出されるが、典拠として引かれたこれら一連の文献は、トルンパの思想的傾向を如実に反映したものである。その中でも、特に勝義諦を知に顕現せず所知と見做さないジュニャーナガルバやシャーンティデーヴァの解釈がトルンパの二諦説の枢要を形成していることが確認された。また、チャンドラキールティの『入中論』からの引用が見られる点が注目になるが、これは、パツァブ訳から直接に引かれたものではなく、『光明鬘論』や『父子合集経』等と共にプラジュニャーナカラマティの『入菩薩行論細註』から孫引きされたものであり、『入菩薩行論』の一連の註釈の中でも、特に、プラジュニャーナカラマティの註釈が重要視されていたことが判明した。それ故、以上の一連の引用文献の中でも、特に『二諦分別論』と『入菩薩行論』及びそれに対するプラジュニャーナカラマティの註釈がトルンパの中観思想の文献的背景となっていると言えよう。

また、『入中論』からの引用があるとは言え、それはパツァブ訳から直接に引かれたものではなく、先に紹介した中観派の学統を述べた箇所では、ブツダパーリタとバーヴィヴェーカには言及するが、チャンドラキールティに対する言及が見られないことから、トルンパはチャンドラキールティを認知しておらず、

所引の『入中論』の偈文もチャンドラキールティの作であることを知らずに引用したものであると推定される。この点で、トルンパは、チャンドラキールティの名前を明示した上で、所引の偈文 (MAv VI. 23) を含む多数の偈文を『入中論』のパツァブ訳から引用しそれを批判したチャパ<sup>89</sup>とは立場を異にすることが分かる。このようなトルンパの中観思想は、中観派を自立派と帰謬派に二分する後代のステレオタイプな分類基準からは規定し得ないものである。実際、既に指摘したように、中観派を自立派と帰謬派に二分する解釈は、パツァブ翻訳師に起源するとは言え、初期のサンブ系学者達の間には知られておらず、後代のゲルク派やサキヤ派等において一般的に受け入れられたものに過ぎない。それ故、その分類基準としての妥当性それ自体もまた、批判的に検討する必要がある。チベット初期中観思想を分類する際に無批判的に適用することは控える必要がある。初期サンブ系学者による中観派の分類は、後述のギャマルワが提示しているもので、それについては、後で改めて検討することにした。

以上が、二諦説総論の箇所から解明されたトルンパの思想的立場であるが、最後に、トルンパの中観説の背景に潜在していると思しき如来蔵思想について簡単に触れておこう。この思想は、本稿で扱った二諦説総論の部分には明確に言及されているわけではないが、先ほど訳出を控えた二諦の定義を確定する認識手段の科段冒頭部の記述に垣間みることが出来る。そこでトルンパは、『入菩薩行論』の偈文を引用しつつ、以下のように述べている。

「それら (=二諦) の定義はそのようなもの (=前述した通りのもの) であると論証するものは何が有るのか。言葉だけで誰が信用しようかと云うならば、聞け。(1) 顕現を有する知 (snang ba dang ldan pa'i blo, i.e., 世俗の知) は全て各々自身の対象を如実に真実なものと思ひ込むが、他の勝れた知 (khyad zhugs pa'i blo, i.e., 正理知) により、それら (=自身の対象) は拒斥されることを有するので、変異 (rnam 'gyur) を有する偽りのもの (bcos bu) に過ぎないが、(2) 正理を確認し一切の相を空と理解する智慧 (rigs pa nges par sems pa mtshan nyid thams cad stong par rtogs pa'i shes rab, i.e. 正理知) は、その享受対象である〈断除 (rnam bcad, \*vyavaccheda) の部分 (=空分)〉に対して他の知により拒斥されることがないので、変

89 例えば、『中観提要』 p. 58ff. 参照。

異せず (rnam par mi 'gyur ba)、自性により光り輝いているもの (rang bzhin gyis 'od gsal ba) であり、実性により規定されたもの (de kho nas rab tu phye ba) であるから。<sup>90</sup> 即ち、

「それ (= 二諦) に対して、二種類の人が認められる。即ち、瑜伽行者 (rnal 'byor pa, yogin) と普通の人 (phal pa, prākr̥taka) である。<sup>91</sup> そのうち、普通の方は、瑜伽行者の方により斥けられる。瑜伽行者達もまた、知の区別により、より上位の者達により斥けられる」(BCA IX. 3-4ab) と説かれている通りである。」(『教次第大論』 p. 616.1-8)<sup>92</sup>

知に顕現する世俗の事物は、正理により考察しない限り喜ばしいものである

90 ここで理由しか述べられておらず、肝心の所証の部分が明記されていないが、文脈から、[二諦の定義がそのようなものであることを論証するものがある。なぜならば、] ……であるから」という文意かと思われる。

91 プラジュニャーカラマティの註釈によれば、tatra は、二諦を指し、二諦に対して、二種類の人、即ち、普通の人と瑜伽行者の人が認められる。即ち、前者が認識するのが世俗諦で、後者が認識するのが勝義諦であると註釈されている。BCAP p. 368.3: **tatra** tayoḥ samvṛti-paramārthasatyayor .../ Tib. 194a7: **de la ni de dag la ste/ kun rdzob dang don dam pa'i bden pa la ...**; Ibid. p. 368.11f.: tatra yogī pradhāna-tattvam aviparītaṃ paśyati, prākr̥takaś ca viparyastaṃ vastu-tattvaṃ paśyati bhrāntatvāt// Tib. 194b3f.: de la rnal 'byor pa nyid ni gtso bo yin te phyin ci ma log par mthong ba yin no// phal pas dngos po phyin ci log tu mthong ba yin te 'khrul pa'i phyir ro// 「ここで、瑜伽行者は、不顛倒の主たる真実 (pradhāna-tattva, i.e., 勝義諦) を知覚し、そして、普通の方は、顛倒した事物の真実 (vastu-tattva, i.e., 世俗諦) を知覚する。なぜならば、迷乱しているから。」 注意。蔵訳では、pradhāna-tattvam/ vastu-tattva の -tattva に当たる語が欠落している。

92 TR p. 616.1-8; A 360b6-361a2; K 305b6-306a1; U 77a4-7: mtshan nyid de dag de ltar yin pa'i sgrub byed ci yod/ tshig tsam la (las P) su yid rton snyam na nyon cig// snang ba dang ldan pa'i blo thams cad ni so so nas rang gi yul ji lta bar bden par rlom yang/ khyad zhugs pa'i blo gzhan gyis de dag la gnod pa dang ldan pas na rnam 'gyur dang ldan pa bcos bur zad la/ rigs pa nges par sems pa mtshan nyid thams cad stong par rtogs pa'i shes rab ni spyod yul de rnam gcod gyi cha la blo gzhan gyis gnod pa med pas rnam par mi 'gyur ba rang bzhin gyis 'od gsal ba de kho nas rab tu phye ba'i phyir te/

de la 'jig rten rnam gnyis mthong// rnal 'byor pa dang phal pa'o//

de la 'jig rten phal pa ni// rnal 'byor 'jig rten gyis gnod cing//

が、考察されるならば拒斥されるものなので、その在り方は正理による考察の有無により変化する。その意味で、変異するものであり虚偽なものと云われる。そのような世俗の事物の顕現を有する知とは、世俗諦を把握する知に他ならない。他方、勝義諦とは、知に顕現せず、否定対象を断除しただけもの (rnam bcad tsam, \*vyavacchedamātra)、端的には、無否定 (med dgag, \*prasajyapratishedha) に他ならないので、そのようなものを理解する知、即ち、空性を理解する正理知は、(1)変異しないもの、(2)自性により光り輝いているもの、(3)空性により規定されたものであると説かれている。ここに言及された三つの特性は、そのまま空性それ自体を表現するものと言えるが、空性とそれを把握する知の二つは、或る意味、不二にして同体のものと捉えられている。そのような解釈は、トルンパの師であるゴク翻訳師により既に提示されているものである。

「全ての見解の垢を、智の河によって浄化した時、その時、知と所知は、所縁なきものとして寂靜する。例えば、水に水を置き、バターにバターが混入しているように、所知である戲論を離れた実性 (= 空性) と区別がない智 (shes bya spros bral de nyid dang// dbyer med ye shes) は [空性と] 混ざり合っている。それは一切諸仏の自性である「法身 (chos sku, \*dharmakāya)」と云われる。」(『甘露一滴』23-24)

ここで空性の認識を「水に水を置く (chu la chu bzhag pa)」仕方で説明することは、後代のゲルク派等の文献にも頻出するが、既にゴク翻訳師の著作に確認

---

rnal 'byor pa'ang blo khyad kyis// gong ma gong ma rnam kyis gnod// (BCA IX. 3-4ab)

[Skt. tatra loko dvidhā dr̥ṣṭo, yogi prākṛtakas tathā/ tatra prākṛtako loko yogilokena bādhyate//bādhyante dhīviśeṣeṇa yogino 'py uttarottaraiḥ/ (BCAP, pp. 368, 370)]

ces gsungs pa ltar ro//

93 テキストは以下の通りである。

gang tshe lta ba'i dri ma kun// ye shes chu bos rnam sbyangs pa//  
de tshe shes dang shes bya dag// dmigs pa med par rab tu zhi// (23)  
dper na chu la chu bzhag dang// mar la mar ni rjes zhugs ltar//  
shes bya spros bral de nyid dang// dbyer med ye shes rnam 'dres pa//  
de ni sangs rgyas thams cad kyi// rang bzhin chos sku zhes byar brjod// (24)

テキストと和訳については、加納 2007、p. 12; 2009、p. 130参照。

される。ゴク翻訳師によれば、空性と空性を認識する知は、水に水を置き、バターにバターが混入したように、不可分に混ざり合っており、それこそが諸仏の「法身」と云う。トルンパの所引の文章に見られる三つの特性は、そのままこの法身の特徴であると云っても誤りではなからう。特に、それが「自性により光り輝いているもの (rang bzhin gyis 'od gsal ba)」と表現されているのは、明らかに、《自性清浄心》を含意するものであり、その背景には、如来蔵思想が潜在していることが推察される。後代の文献では、ゴク翻訳師は、空性を如来蔵と見なす解釈を取るとされ、<sup>94</sup> 実際、彼の『甘露一滴』には、明確に如来蔵思想が説かれている。

「善知識という雲から正しく生じた、多聞という清涼な雨によって、煩惱の懊熱を鎮めることにより、善逝蔵 (=如来蔵) という種子を良く潤して、仏陀の円満なる功德という作物を増やせ。」(『甘露一滴』<sup>95</sup> 9)

既に指摘したように、ゴク翻訳師は、『甘露一滴』12において実在論 (dngos 'dzin, i.e., dngos por smra ba, 有自性論) を否定し、一切法無自性を説く中観説に立脚しているが、<sup>96</sup> そのことは、彼が如来蔵思想を認めることを妨げるものではなかった。つまり、ゴク翻訳師にとって、中観説と如来蔵思想は、決して相反

94 『青冊』 p. 424.1-4: de la Lo tsā ba chen po dang slob dpon gTsang nag pa ni de bzhin gshegs pa'i snying po zhes bya ba don dam pa'i bden pa la zer mod kyi/ don dam bden pa ni sgra dang rtog(s) pa'i dngos kyi yul ma yin pa lta zhog/ zhen pa'i yul tsam yang ma yin zhes gsung/ 「そのうち、大翻訳師 (=ゴク翻訳師) と軌範師 ツァンナクパは、「如来蔵 (\*tathāgata-garbha) と云われるものは、勝義諦のことを云うが、勝義諦は、語と分別知の直接的対象ではないことは云うまでもなく、判断対象ですらない」と仰っている。」

95 テキストは以下の通りである。

bshes gnyen sprin las legs byung mang du thos pa yi//  
char rgyun bsil bas nyon mongs gdung ba zhi byed kyi//  
bde gshegs snying po'i sa bon rab tu brlan byas nas//  
sangs rgyas yon tan phun tshogs lo tog rab rgyas bya// (9) (cf. 加納 2007, p. 10; 2009, p. 127)

ゴク翻訳師の如来蔵思想については、Kano 2010, esp. p. 255ff. を参照。そこではゴク翻訳師の『宝性論』の註釈 (『宝性論要義』) を資料として彼の仏性思想が論じられている。

96 ゴク翻訳師の中観説については、西沢 2018a, pp. 35-37参照。

するものではなく、両立可能なものであったのである。菩薩行を通じて如来蔵から法身が生じ、その法身を、空性と空性を理解する智が無差別に混ざり合ったものと解釈するのが『甘露一滴』から読み取れるゴク翻訳師の思想的立場である。そして、トルンパもまたこの点で師と共通の思想的立場に立脚していることが、彼の法身に関する記述から判明する。《仏身》に関する一般的設定は、実はこの二諦の一般的設定の直前に見出されるが、<sup>97</sup>そこでトルンパは、法身について、以下のように解説している。

「法身 (chos kyi sku) を解説するものは、

「一切の相を離れた法界 (chos dbyings, \*dharmadhātu) は、如実に現前し、無顕現な智慧により知覚されることにより、知と所知の戲論から離れ、[不二として知が] 平等に働くもの [であるが、そのような法界を] 一切諸仏の自性である法身と云う。」

これ (=法身) は、(1)一切法の自性、(2)一時的な障碍 (glo bur gyi sgrub pa, 客塵<sup>98</sup>) から離れたもの、(2)それに対して出世間の智慧により知覚しない仕方では知覚されるものであり、即ち、知と所知が一味 (ro gcig, \*ekarasa, i.e., 同体<sup>99</sup>) となったものである。例えば、水に水を置き、バターにバターが染み込むように、一切の相から離れた法界に対しては、如実に把握する智慧により知覚されるもの (=法界) は所知として成立しないので、智が働かない。それ故、所知と同様に (=法界が所知として成立しないように) 智が完全に寂靜したこと (=智が働かないこと) が、「法界の一切の在り方を如実に明瞭に見る」と云われる。その状態において、世俗の知、即ち、自身を認識し、<sup>100</sup>幻の如きものもまた、完全に寂靜するので、大いなる戲論の闇は全て滅するのである。そのように、一刹那を有する

97 『教次第大論』 pp. 605-608; A 354a5-356a2参照。

98 煩惱障と所知障の二障のこと。

99 この「一味 (ro gcig, \*ekarasa)」という語は、同体 (bdag nyid gcig pa) や同一自体 (ngo bo gcig pa) の意味で用いられる用語である。

100 ショル版では、sgyu ma lta bu de'angとあり、世俗の知それ自身が幻の如きものという読みを示すが、タムチューヤルペル筆写本では、sgyu ma lta bur 'dzin pa de'angとあり、幻の如きものと把握する世俗の知と云う意味となり、幻の比喩は対象に結び付けられ、意味が異なってくる。今は底本としたショル版の読みを取っておくが、後者の解釈も有意味であるので、その点は検討課題である。

智慧により、一切法を完全に悟ったこと、出世間の智慧が現前したことが、法身を獲得したことなのである。

その時、何らかの所知があるならば、必ず顕現することになるが、[実際には何も] 知覚されないので、「その智慧により法界が現前に見られた」と言説されるのであり、知覚が働くことにより、何らかの対象が断定された (yongs su bcad pa, \*pariccheda) とは見なされない。それ故、「虚空を見た」と衆生が言葉で述べたとき、「虚空を如何に見たのか」というこの意味を考察せよ。そのように (=何も見ないことを「虚空を見る」と云うように) 法を見ることもまた、如来により説示された。[空性を] 見ることは他の喩例によっては表現することは出来ない。或る者がそのように見たとき、その者は一切法を見たのである」(『宝徳蔵般若経』 XII. 9-10a) と説かれている。」(『教次第大論』 pp. 605.25-606.16)<sup>101</sup>

101 TR pp.605.25-606.16; A 354a5-b4; K 300a4-b2; U 71b5-72a2; chos kyi sku bshad pa ni/

mtshan ma kun bral chos dbyings ji lta bar// mngon gyur snang med shes rab kyis dmigs (dmigs med KPU) pas// shes dang shes bya spros bral mnyam 'jug pa// sangs rgyas kun gyi rang bzhin chos skur brjod//

'di ni chos thams cad kyi de bzhin nyid glo (blo K) bur gyi sgrub pa dang bral ba de la 'jig rten las 'das pa'i shes rab kyis mi dmigs pa'i tshul gyis dmigs pa ste/ shes pa dang shes bya ro gcig tu gyur pa'o// ji ltar chu la chu bzhag pa dang mar la mar thim pa ltar/ mtshan ma thams cad dang bral ba'i chos kyi dbyings de la/ ji lta ba bzhin 'dzin pa'i shes rab kyis dmigs pa ni shes bya[r] ma grub pas ye shes mi 'jug pas na/ shes bya ji lta ba bzhin du ye shes rab tu zhi ba ni chos kyi dbyings kyi tshul thams cad ji lta ba bzhin du gsal bar mthong zhes bya'o// gnas skabs der ni kun rdzob pa'i shes pa rang rig pa sgyu ma lta bu (lta bur 'dzin pa KP) de'ang) de'ang rab tu zhi ba'i phyr spros pa'i mun pa chen po kun tu nub pa yin no// de ltar skad cig gcig dang ldan pa'i shes rab kyis chos thams cad mngon par rdzogs par byang chub pa 'jig rten las 'das pa'i shes rab mngon du gyur pa (pa'i P) 'di ni chos kyi sku thob pa'o//

de'i tshe shes bya 'ga' zhid yod na gdon mi za bar snang bar 'gyur ba las ma dmigs pa'i phyr shes rab des chos kyi dbyings mngon sum du mthong bar bsnyad pa yin gyi/ dmigs pa 'jug pas don 'ga' zhid yongs su bcad par ni mi blta'o// des na/



この記述に見られる「水に水を置き、バターにバターが染み込むように」という比喩は、まさに、先に紹介した『甘露一滴』24に見出されるものであり、また、空性とそれを認識する智の二つが不可離に混じり合っているということは、ここでは、「知と所知が一味 (ro gcig, \*ekarasa, i.e., 同体) となったもの」と表現されている。そして、そのような空性は、「知覚しない仕方では知覚されるもの」と表現されており、それは、所引の『宝徳蔵般若経』(*Prajñāpāramitā-ratnaguna-saṅcayagāthā*)の一文に示された何も見ないことを「虚空を見る」という表現と一致するものである。それは、例えば、『法集経』(*Dharmasaṃgīti*)にも明確に説かれている。

「空性を見ることは、[何も] 見ないことである。世尊よ。一切法を見ないことが、<sup>102</sup>真実を見ることである。」(『法集経』<sup>103</sup> 68b5f.)

この経文は、シャーンタラクシタの『中観莊嚴論』(*Madhyamakālamkāra*)等の自立派系の中観論書や、シャーンティデーヴァの『集学論』(*Śikṣāsamuccaya*)、

nam mkha' (ka U) mthong zhes sems can tshig tu rab brjod pa//  
 nam mkha' (ka U) ji ltar mthong zhes (ste U) don 'di brtag par gyis//  
 de ltar chos mthong ba yang de bzhin gshegs pas bstan//  
 mthong ba dpe gzhan gyis ni bsn'yad par nus ma yin//  
 gang gis de ltar mthong ba de yis chos kun mthong (PSG XII. 9-10a)  
 [Cf. nam mkha' mthong zhes sems can tshig tu rab brjod pa//  
 nam mkha' ci ltar mthong ba don 'di rtogs shig ltar//  
 de ltar chos mthong ba yang de bzhin gshegs pas bstan//  
 mthong ba dpes ni brjod par nus pa ma yin no// (Yuyama 1967, p. 171)

Skt. ākāṣa-dṛṣṭu iti sattva pravāharanti, kha-nidarśanaṃ kutu vimṛṣyata etam arthaṃ/ tatha dharma-darśanu nidiṣṭu tathāgatena, na hi darśanaṃ bhaṇitu śakya nidarśanena// (XII. 10) yo eva paśyati sa paśyati sarva-dharmān (XIII. 1) (Ibid. p. 52f.)]

zhes gsungs so//

102 この原語は、samyag-darśanaであり、yang dag par mthong ba (正しく見ること)と蔵訳されているが、直後に紹介する『甘露一滴』22では、この語を念頭に置いて、yang dag mthong (真実を見た)と記されているので、その読みを採用しておく。

103 stong pa nyid mthong ba ni mthong ba ma mchis pa'o// bcom ldan 'das chos thams cad ma mthong ba ni yang dag par mthong ba'o//; Skt. ŚS p. 264.1f.; śūnyatā-darśanam adarśanam/ adarśanaṃ bhagavan sarvadharmāṇāṃ samyag-darśanam iti. Cf. Ichigo 1985, p. 286, n. 2.

アティシャの『入二諦論』(Satyadvayāvatāra)等の帰謬派系の中観論書等に引用されたものであり<sup>104</sup>、自立派と帰謬派の別を問わず、広く受け入れられているものであるが、ゴク翻訳師もまた、恐らくはこの経文を念頭においてこう説いている。

「そのように、[真実成立の]事物が存在することはなく、それが否定されたもの(=真実無)もまた成立しないならば、その[有無の]両者を超えたものは何も把握の対象(=知の把握対象)となることはあり得ない。

それ故、所知の相(shes bya'i mtshan ma)から、知の動き(blo yi g-yo ba)が斥けられて、戲論の集まりが寂靜した(spros tshogs nyer zhi)、無我という対象(bdag med pa'i don, i.e., stong nyid)に対して知が正しく立てられるべきである。

そのように、空性に習熟することから、[真実成立の]事物を把握すること(dngos 'dzin, i.e., bden 'dzin)が完全に寂靜し、無我(=空性)もまた把握されることがないが、その時、「真実(yang dag, i.e., stong nyid)を見た」と云われる。」(『甘露一滴』<sup>105</sup> 20-22)

以上のように、トルンパの空性に関する解釈は、師のゴク翻訳師のそれとほぼ完全に一致すると言ってよかろう。如来蔵思想についても、所引の『教次第大論』の文章には「如来蔵」という語は見出されないが、他の箇所にも明確に説かれている。例えば、

「この三つの密意により<sup>107</sup>、一切衆生は仏陀の真髓を有するもの、あるいは、[仏陀の]自性を有するものと説かれたのである。即ち、(1)果報であ

104 MA p.286.15f./ 78a7; ŚS p.140.16/ 146b1-2; SDA 7 (D 72a4f./ 望月 2016, pp.136, 932) 等参照。

105 テキストは以下の通りである。

de ltar dngos po yod min la// de dgag pa yang ma grub na//  
de gnyis las 'das don 'ga' yang// 'dzin pa'i yul du 'gro mi srid// (20)  
des na shes bya'i mtshan ma las// blo yi g-yo ba rnam bzlog te//  
spros tshogs nyer zhi bdag med pa'i// don la blo ni legs bzhag bya// (21)  
de ltar stong nyid goms pa las// dngos 'dzin rab tu zhi ba dang//  
bdag med nyid kyang 'dzin med pa// de tshe yang dag mthong zhes bya// (22)

テキストと和訳については、加納 2007, p.12; 2009, p.129f. 参照。

106 トルンパの如来蔵思想の纏まった設定は、『教次第大論』p.631.15ff.に見出される。

る法身 (chos sku, \*dharmakāya) の真髓を有するもの、(2)自性である真如 (de bzhin nyid, \*tathatā) の真髓を有するもの、(3)原因である種姓 (rigs, \*gotra) の真髓を有するものである。そのうち、法身は、仏陀そのものであるが、衆生に存在するものは、獲得可能なものに過ぎない [ので、それ] に対して [法身と] 仮設されたからである。真如は、[仏陀と衆生の] 両者に直接的に [存するの] である。なぜならば、仏陀の自性でもあり、一切衆生においても必ず存するからである。種姓は、仏陀の原因であるので、[仏陀にとっては] 仮設されたものであるが、衆生に存在するものは直接的に [存するもの] である。それもまた、

「正等覚者の身体 (=法身) は遍満しているから、真如は無区別であるから、種姓は存在するから、一切の身体を有するもの (=衆生) は、常に仏陀の真髓を有する」(『宝性論』27、cf. 中村1967、p.49f.)

と説かれている。『入楞伽經』(Lankāvatārasūtra) にも、世尊により如来蔵 (de bzhin gshegs pa'i snying po, \*tathāgata-garbha)<sup>108</sup> が説かれているが、それは、自性により光り輝いているので (rang bzhin gyis 'od gsal bas)、最初から清浄なものであり、三十二相を具足しており、一切衆生の身体の中に存在するものである。」(『教次第大論』pp.631.21-632.6)<sup>109</sup>

107 如来蔵は、直後に明示されているように、法身、真如、種姓の三つの点から特徴付けられる。これは、『宝性論』に明記されるところである。

'di yi rang bzhin chos sku dang// de bzhin nyid dang rigs kyang ste//  
de ni dpe gsum gcig dang ni// lnga rnam kyis ni shes par bya// (RGV 144)  
「この (=如来蔵の) 自性は、法身と真如と種姓であり、それは三つの喩例、一つの喩例、五つの喩例により知られるべきである。」(cf. 中村 1967、p.135f.)

108 『入楞伽經』(ACIP no. KL0107)、92b2、100a7、129a2、135b4、136a1、136a3、136a5、136a6、136b3、136b4、136b6、137a1、137a2、239b2、239b6、240a3、243b4、298b5、299a2参照。

109 TR pp.631.21-632.6; A 371a3-6; K 314a5-b1; U 85b5-9: dgongs pa 'di gsum gyis sems can thams cad sangs rgyas kyis snying po can nam rang bzhin can du gsungs pa ste/ 'bras bu chos sku'i snying po can dang/ rang bzhin de bzhin nyid kyis snying po can dang/ rgyu rigs kyis snying po can no// de la chos sku ni sangs rgyas dngos yin la/ sems can la yod pa ni 'thob (thob KPU) tu rung ba tsam la btags pas so// de bzhin nyid ni gnyi ga (gnyis ka P) dngos su yin te sangs rgyas nyid kyis rang bzhin yang yin la sems can thams cad la'ang (la yang KP) nges par gnas pas so//

ここで如来蔵が、「自性により光り輝いている (rang bzhin gyis 'od gsal ba)」と表現されていることに留意されたい。この表現は、まさに先に引いた『教次第大論』の記述では、空性及びそれを理解する智に対して付された形容詞に他ならない。<sup>110</sup> 実際、トルンパは、この概念を、〈心の法性 (sems kyi chos nyid, \*citta-dharmatā)〉と規定している。

「《光り輝くもの ('od gsal ba)》とは、心の法性にして、最初から一切の妄分別と交わらない自性である。」(『教次第大論』 p. 630.12-15)<sup>111</sup>

ここで法性とは、空性に他ならないので、ここから、トルンパが心の中にある如来蔵と空性を同様の意味で捉えていたことが確認されたことなる。

このように、ゴク翻訳師師弟にとっては、如来蔵とは何か実体的な存在 (= 真実成立) としてではなく、一切の所知の相を離れた心の法性ないし空性に他ならないものとして捉えられていた。この「自性により光り輝いている」という表現は、既に『宝性論』(Ratnagotravibhāga)に見出されるが、そこでは自性清浄心ないし如来蔵を表わす語として使用されており、その表現がトルンパに

---

rigs ni sangs rgyas kyi rgyu yin pas btags pa ste sems can la yod pa ni dngos su'o//  
de'ang/

rdzogs sangs sku ni 'phro phyir dang// de bzhin nyid dbyer med phyir dang//  
rigs yod phyir na lus can kun// rtag tu sangs rgyas snying po can (RGV 27)  
zhes gsungs pa'o//

*Lang kar gshegs pa* las kyang/ bcom ldan 'das kyis de bzhin gshegs pa'i snying  
po gsungs pa de rang bzhin gyis 'od gsal bas thog ma nas rnam par dag pa nyid  
mtshan sum cu rtsa gnyis dang ldan pa sems can thams cad kyi lus kyi nang na  
yod pa ste/...

110 『教次第大論』 p. 616.5参照。

111 TR p. 630.12-15; A 370a5-6; K 313b3; U 85a2-3: 'od gsal ba ni sems kyi chos  
nyid gdod ma nas (mas na P) kun tu rtog pa thams cad dang ma 'dres pa'i rang  
bzhin no//

112 例えば、sems de rang bzhin 'od gsal bas na nyon mongs ngo bo med gzigs pas//  
(13a)「心は自性により光り輝いているので、煩惱は無自性であるとお覧になることにより」(cf. 中村 1967, p. 25f.); sems kyi rang bzhin 'od gsal gang yin pa// de ni nam  
mkha' bzhin du 'gyur med de// (63ab)「心の自性は光り輝いているが、それは、虚空の如く変異しない」(同 p. 85f.); rang bzhin 'od gsal dri ma rnam kyang ni// glo  
bur bar ni rnam par gzigs gyur nas// (125ab)「[法界ないし如来蔵は] 自性により

より流用されたのである。

このように空性と同一視された如来蔵であるが、それに対しては、常住にして不変な如来蔵は外教徒が説くアートマン (ātman) に他ならないのではないかという疑念が生ずることは当然考えられることであり、また実際、『教次第大論』では、所引の記述の直後にその問題が論じられている<sup>113</sup>。これは非常に興味深い主題であるが、本稿の主題を外れるので、稿を改めて紹介することとして、ここでは、トルンパの中観説の背景には如来蔵思想が潜在していること、及び、空性が如来蔵と同一視されていることが実際に彼の原典資料に基づき確認されたことで良しとしておきたい。

以上のようなゴク翻訳師師弟の中観説は、前述したように、中観派を自立派と帰謬派の二つに分ける後代のステレオタイプな分類基準からは、規定し得ない立場であると言わざるを得ない。現状言えることは、空性を一切の所知の相から離れたもの、知の対象を超えたものと見做す中観説であり、その背景には、如来蔵思想が潜在していることだけである。尤もトルンパの思想的立場については、単に二諦説のみならず、種々の観点から検討する必要があるが、その点については、稿を改めて論ずることにしよう。

#### (8) トルンパの二諦説に関する纏め

以上、『教次第大論』を資料として、トルンパの二諦説について検討した。ここで彼の二諦説の特徴について纏めておかなければ、以下の通りである。

1. 二諦の語釈、分類基体、数の確定、定義を確定する認識手段という一連の科段において、勝義諦は正理知の対象として立てられているが、それはあくまで言説の立場に立脚したものであり、勝義としては捨てられるべきものであること。
2. 他方、二諦の分類の意味と定義の主題においては、勝義諦を一切の所知の相を超えたもの、知の対象でないものと設定しているが、それは勝義の立場によるものであり、主題に応じて二諦のレベルの使い分

光り輝いており、垢もまた一時的なものであるとご覧になって」(同 p. 129f.)

113 『教次第大論』p. 632参照。

けをしていること。

3. トルンパの思想的背景としては、ジュニャーナガルバの『二諦分別論』とシャーンティデーヴァの『入菩薩行論』及びその細註が特に大きな役割を果たしたこと。
4. トルンパは、『教次第大論』において、中観説に立脚しており、その背景には如来蔵思想が潜在していること。
5. そのトルンパの解釈は、師のゴク翻訳師の立場を踏襲したものであり、中観派を自立派と帰謬派に分ける従来の分類基準には収まらない独自の中観説であること。

中観説を自立派説と帰謬派説の二つに二分する解釈は、パツァプ翻訳師の『根本中論註』に見いだされるもの<sup>114</sup>、それが中観派の分類として確立したのは比較的后代に入ってからであり、トルンパの時代にはまだ確立していなかった。それ故、その分類基準を持ち出して、トルンパの中観説が自立派説か帰謬派説かと論ずることに大きな意味があるとは思えない。むしろ、筆者が以前に提案したように<sup>115</sup>、勝義諦の設定の立場から、空性を知の対象として認めるか否かということを新たな中観派の分類基準として設定し、トルンパはそれを認めない立場として位置付けておくことが穏当であろう。このトルンパの解釈は、前述したように、ギャマルワとチャパの師弟により明示的に否定されることになる。そこで、次に、ギャマルワの二諦説に考察を移すことにしたい。

### 3. ギャマルワの二諦説

ギャマルワ・チャンチュプタク (rGya dmar ba byang chub grags, 11-12c.) は、ゴク翻訳師の四大弟子の一人であるキュン・リンチェンタクの弟子とされる人物であり、チャパ・チューキセンゲの師としても知られている。特に論理学と中観に秀でたことで知られており、チャパはギャマルワからこの両者を学んだ

114 *dBu ma rtsa ba shes rab kyi 'grel ba*. In: KS 11, pp. 29-203 (88 fols.). 同書には rang rgyud pa/ thal 'gyur ba の用語が頻出する。それについては、西沢 2017b, p. 100, n. 1 参照。

115 西沢2018a, p. 47 参照。

と伝えられている<sup>116</sup>。

彼の著作に関しては、菩薩行論と中観の著作が三点、『カダム全集』に収録されている。

1. *Byang chub sems dpa'i spyod pa la 'jug pa'i tshig don gsal bar bshad pa*. In: KS 6, pp. 11-174 (1-83b4). (『入菩薩行論句義解明』)
2. \**bDen gnyis kyi rnam bshad*. In: KS 19, pp. 247-316 (4a1-45b3). [ff. 1-3, 13-16, 26-28 (合計10 fols.) 脱落] (『二諦分別論解説』)<sup>117</sup>
3. *dBu ma'i de kho na nyid gtan la dbab pa*. In: KS 31, pp. 7-67 (1-31a4). (『中観真実決択』)

このうち、第一の著作は、シャーンティデーヴァの『入菩薩行論』(*Bodhisattvacaryāvātāra*)の註釈(以下、『入行ギャ註』)、第二の著作は、ジュニャーナガルバの

116 ギャマルワについては、Kuijp 1983, p. 60f.; Yoshimizu 1993, p. 213, n. 36; 西沢 2011b, Vol. 1, pp. 162-173参照。特に拙稿では、キュン・ギャマルワ師弟の事績、著作、学統について包括的に情報を集めている。赤羽 2010では、『カダム全集』所収の著者不明の『二諦分別論』の註釈がギャマルワの著作であることが同定された。ギャマルワの二諦説については、西沢 2018a, pp. 41-44を参照。他には、Pascale HugonとKevin Voseによりギャマルワの中観綱要書である『中観真実決択』(*dBu ma'i de kho na nyid gtan la dbab pa*)の校訂及び英訳作業が進行中であり、その成果はインターネット上で公開されている。Hugon/Vose 2018参照。

117 このテキストの書名については、赤羽 2010, p. 79f.で検討されているが、そこに指摘されるように、『カダム全集』編者は、この著作の偈体の奥書き (Ms. 45b4) に、*bden gnyis rnam bshad ti ka dag dang bcas*とあることを受けて、*bDen gnyis rnam bshad tikka dang bcas pa*を本書の書名とした。これに対して、加納和雄が一部修正を加え、*bDen gnyis rnam bshad tikka*という書名を提案(加納 2007, p. 21)、赤羽律はこれに更に修正を加え、*ṭikka*を省略した*bDen gnyis rnam bshad*という書名を提案した。同氏が指摘するように(赤羽 2010, p. 80)、*ti ka*は、同書において特にSDVPを指すので、同書の書名からこの語を省略するのは合理的に見える。しかるに、『アク稀観書目録』に同書の書名が*dBu ma bden gnyis kyi tikka* (MHTL no. 11347)と記載されている点は留意されるべきところである。このことは、ギャマルワの『二諦分別論』の註釈は、後代、*ṭikka*として伝承されてきたことを示唆するからである。このように同書の書名については色々問題があるが、その委細は今後の検討課題として残しておき、今は暫定的に赤羽の提案に従っておくことにする。但し、*bDen gnyis rnam bshad*はチベット語として少し通りが悪いので、微修正を加え、*bDen gnyis kyi rnam bshad*と表記しておく。



『二諦分別論』の註釈（以下、『二諦ギャ註』）であるが、後者には、残念ながら、写本に十フォリオの脱落があり、さらに、幾つかの紙葉の右端に破損が見られ、文字が欠落している箇所がある。そのため文脈や他のテキストの平行文に基づき補足しつつ読む必要がある。

第三の著作は、彼の中観綱要書であり、ギャマルワの二諦説の概要がもっとも包括的に纏められたものである。『入行ギャ註』の第九章にも二諦説の纏まった設定が見いだされ、何れもギャマルワの二諦説を検討する際には欠かすことの出来ない重要な基礎資料であるが、本稿では、そのうち、特に、『二諦ギャ註』<sup>119</sup>を主資料とし、残りの二つの著作に対しても適宜に参照することにする。<sup>120</sup>

『二諦ギャ註』を主資料とした理由は、既に指摘したように、同書は、『教次第大論』の記述を前提とし、さらには、それを批判したものとなっているからである。ギャマルワの批判の対象が、他の一連のゴク翻訳師の弟子達の中でも、特にトルンパの『教次第大論』を念頭に置いたものであることは、同書に『教次第大論』の記述の引き写しやパラフレーズが多数見いだされることから疑いない。<sup>121</sup>その点に留意しつつ、以下、ギャマルワの二諦説を検討しよう。

まず『二諦ギャ註』のうち、本稿で扱う二諦の一般的設定（二諦総論）が見出されるのは以下の部分である。

118 この『入菩薩行論』第九章のギャマルワの註釈については、Pascale Hugon氏からテキスト入力ファイルを提供して頂いた。貴重なデータを提供して下さった同氏には記して感謝の意を表する次第である。

119 この『二諦ギャ註』はウメ書体の写本の形で残されているが、その読解に際しては、故・赤羽律氏が入力されたテキストを参照させて頂いた。貴重なデータを提供して頂いた同氏にはここに心から謝意を表すると共に、ご冥福を心よりお祈り申しあげる次第である。

120 『中観真実決択』の写本には、欄外に膨大な傍註が付されているが、本稿では傍註には言及せず、本文のみを扱う。脚註で引用する際にも、一部の例外を除き、傍註は原則的に削除してあるので、その点予め留意されたい。

121 西沢2018a, pp. 41-43参照。ギャマルワがトルンパの『教次第大論』を批判していることは、同論文において初めて指摘された。なお、同論文では紙幅の関係上、二諦の定義の箇所のみ言及に留まったが、ギャマルワの『教次第大論』に対する言及は、二諦説の全般に渡っており、それは本稿で以下具体的に検討する。『二諦ギャ註』と『教次第大論』の対応箇所は、本稿付録の校訂テキストの後註において収集してあるので、参照されたい。

[以上、省略<sup>122</sup>]

A1. [正理による] 略示 ([rigs pas] mdor bstan pa, \*二諦総論<sup>123</sup>) [7a2-10b6]

- B1. 二諦の分類 (bden gnyis kyi dbye ba) [7a2]
  - C1. 分類基体 (dbye ba'i gzhi) [7a3]
  - C2. 分類の意味 (dbye ba'i don) [7a3]
  - C3. 名義 (ming gi don) [8b3]
  - C4. 数の確定 (grangs nges pa) [8b5]
- B3. 二諦の定義 (bden gnyis kyi mtshan nyid) [9b5]
  - C1. 定義の自性 (mtshan nyid kyi rang bzhin) [9b5]
  - C2. それらの定義を確定する認識手段 (mtshan nyid de dag nges byed kyi tshad ma) [10b4]

A2. \*典籍による略示 (\*gzhung gis mdor bstan pa, i.e., 原典の註釈)<sup>124</sup> [10b6-12a1]  
ad SDV 3-5

- B1. 世俗の定義の註釈 [10b6] ad SDV 3abc
- B2. 勝義の定義の註釈 [11b2] ad SDV 3d-5

[以下、省略。]

ここに提示した科段から一目されるように、多少の配列の違いは見られるものの、ここで扱われる二諦の分類基体等の一連の主題は、何れも『教次第大論』

122 この『二諦ギャ註』の写本は、最初の三フォリオ (ff. 1-3) 等が脱落しており、そのためテキスト全体を網羅する完全な科段を作成することが出来ない。また同書の科段設定はかなりルーズであり、後代のテキストに典型的に見られるように、最初に科段構成を明記することなしに、論述を進めることが多々見られる。また同じ科段が前後に重複することも見られるので、科段の作成はかなり困難を伴う。筆者は同書全体のテキスト校訂を継続中であり、より十全な科段の提示は今後の課題として残しておく。併せて上記科段の番号付けもあくまで便宜的なものであることに留意されたい。

123 この箇所には、二諦説の概論が見いだされるので、「二諦総論 (\*bden gnyis kyi spyi don)」と便宜上呼称しておく。

124 これは先行科段の立て方から筆者が想定した科段名である。テキストでは、科段名は明記されておらず、「世俗の定義の註釈 (kun rdzob kyi mtshan nyid rnam par 'grel pa)」という出だしで始まる。それはこの科段の最初の下位科段に相当する科段名である。

における二諦総論の箇所に見出されるものと共通するものであることに留意されたい。つまり、ギャマルワは、二諦説を論ずるに際して、『教次第大論』に見出される科段設定を基本的に踏襲しているのである。この一連の科段は、後代のゲルク派やサキャ派の中観論書においても定型のように採用されているものであるが、実は、パツァブ翻訳師の『根本中論註』には確認されず、サンプ系の中観論書に広く使用されているものである。パツァブ翻訳師の二諦説については、別稿において論ずる予定であるので、ここでは委細には触れないが、二諦の分類基体、分類の意味、数の確定、定義等の上述の一連の科段に基づき二諦説を設定することは、トルンバを始めとするゴク翻訳師の周辺のサンプ系学者達により初めて案出され、そして、後代、広く受容されるに至ったものである。その意味で、チベットにおける二諦説の形成に関して、サンプ系学者が果たした貢献と後代に対する影響力は非常に大きなものがあつたと評価する必要がある。二諦説の議論の枠組み自体をサンプ系学者が打ち立てたからである。このことは、チベットにおける中観思想の形成とその歴史的展開を考える上で、極めて重要な事実である。

#### (1) 二諦の分類基体について

ギャマルワは、二諦の分類基体については、『教次第大論』同様に、極めて簡略な記述しか残していない。当該科段の訳文は以下の通りである。

「第一 (=分類基体) は、所知のみ (shes bya <sup>125</sup>tsam) である。即ち、一切智者から茅孔の虫 (‘jag mig gi srin bu <sup>126</sup>) までの知の対象である。」(『二諦ギヤ註』 <sup>127</sup>7a3)

ギャマルワもまた、トルンバ同様に、一切の知の対象、即ち、所知一般を二

125 tsam を、梵語の -mātra の訳語と捉えるならば、「所知一般」とも訳せるが、今は、チベット語の原義に従って訳しておく。

126 この‘jag mig gi srin bu という表現は、ギャマルワの『中観真実決択』(2a8: ‘jag mig) や『入行ギヤ註』(59a3: ‘jag dmig) にも見られるが、『藏漢大辞典』に記載されておらず、委細不明である。‘jag は「茅」の意味で、mig には、「眼」の他に「孔／穴」の意味もあるので、茅の虫食い孔を指そうか。‘jag mig gi srin bu とは茅に出来た程の小さい虫食い孔にいる微細な虫の意味と暫定的に解釈しておく。一切智者との対比で卑小な生類の一例として挙げられているであろう。なお、『二諦分別論』の細註には、自註中の「世間 (‘jig rten)」(SDVV 4a1) という語を、「輪廻の虫 (‘khor ba’i srin

諦の分類基体として立てる。この背景には、前述したように、『父子合集経』等の教証が念頭にあったと推定される。

(2) 二諦の分類の意味について

次に、二諦の分類の意味については、科段冒頭部においてこう述べている。

「[分類の] 意味は、[質問:] (1)所作と無常の如くに、同一の事物を法の区別により二つとするのか、あるいは、(2)壺と布の如くに、二つの事物が別異なものとして存するのか、と云うならば、

[回答:] その二つの何れでもない。同一のものとも別異のものとも言表されることがないもの、同一が否定されただけのもの (de nyid dang gzhan du rjod du med pa gcig bkag pa tsam) に対して、「二」と云われるのである。」(『二諦ギャ註』7a3-4、cf.『教次第大論』p.610.15-19)

この文章は、先ほど紹介した『教次第大論』に見られるトルンパの自説を示す文章の引き写しである。ところが、ギャマルワは、一見、これを自説のように提示しつつ、後続の文章では、それに対して批判を加えているのである。以下、その点を具体的に検証しよう。

『教次第大論』では、この直後に、『解深密経』に基づき、二諦が同一である場合の四つの過失と、別異である場合の四つの過失が提示された。このうち、二諦が別異である場合の四つの過失は、ギャマルワもトルンパ同様に認めるが、

---

bu)」と註釈しており (SDVP 17a6)、これをギャマルワは、天と人の二者 (= 二善趣) に「虫」と名付けたものと註釈している。『二諦ギャ註』4b5-6: 'jig rten zhes bya ba ni 'khor ba'i srin bu yang zhes Ṭi kas bshad pa ni lha mi gnyis la srin bu zhes btags nas... もしギャマルワがこのことを念頭において、'jag mig gi srin bu という語を用いているならば、この語は、虫を指すのではなく、世間の凡夫を指す表現を含意していると解釈出来る。但し、'jag mig の語義は依然として不明。'jig rten gyi srin bu (世間の虫) の誤記か。

127 dang po ni/ shes bya tsam ste/ thams cad mkhyen pa nas 'jag mig gi srin bu'i bar gi blo'i yul lo//

128 don ni byas pa dang mi rtag pa bzhin dngos po gcig la chos kyi dbye bas gnyis sam/ bum pa dang snam bu bzhin du dngos po gnyis tha dad par gnas zhe na/ gnyi' ga ltar yang ma yin te/ de nyid dang gzhan du rjod du med pa gcig bkag pa tsam la gnyis zhes bya'o//

同一である場合の四つの過失については、トルンパの論法を否定している。即ち、

「それについて、「(I) [二諦が] [同] 一であるならば、四つの過失がある。即ち、[第一.] 全ての人が世俗を知覚するとき、勝義もまた既に知覚されたことになるので、涅槃が既に獲得されたことになる。

第二. 世俗に依拠して漏が増広するように、勝義を所縁とすることによっても [漏が] 増広することになるので、世俗の如く勝義もまた雑染の所縁となる。

第三. 勝義には相互に区別がないように、壺等の世俗は全て無別異となる。

第四. 如実に見たり聞いたりすることより他に世俗は追求されることはないように、見たり聞いたりすることより他に勝義は聞思により追求されることはないことになる」(cf.『教次第大論』 pp.610.20-611.3) と『解深密経』に「説かれた」ことにより、〔世俗と勝義の二つが同一であることを〕 否定することは正しくない (ma legs)。なぜならば、所作と無常の如く、同一事物 (dngos po gcig pa, i.e., ngo bo gcig pa) <sup>129</sup>にはそれらの過失は存在しないからである。」(『二諦ギャ註』 7a4-6) <sup>130</sup>

ここに『解深密経』からの引用とされるものは、実際には、先ほど紹介した『教次第大論』の文章の引き写しである。トルンパは、この四つの過失に基づき、二諦が同一であることを否定したが、ギャマルワはそれに対して、所作と無常の如く、同一自体であるものにはそれらの過失は存在しないと明言し、その直後には、以下のようにその理由を具体的に解説している。

「即ち、(1)相 (mtshan nyid, i.e., ldog pa) が別異であるならば、同一事物 (=同一自体) であっても、それ (=世俗) を知覚する知において、それ (=勝義) が顕現するが、顛倒は断滅されないので、涅槃は獲得されないことになる。[例えば、] 青を知覚しても常住と顛倒する [知] が断滅されないようなものである。

(2)それ (=世俗) は雑染の所縁であるが、それ (=世俗) と同一自体で

129 写本に破損があり一文字不明だが、『教次第大論』の当該箇所に基づき gsungs を補足する。TR p. 610.19f.: *dGongs pa nges par 'grel pa las gsungs pa ltar ...*

ある他の法（＝勝義）は雑染の所縁であることにはならない。[例えば、] 青は貪欲の対象であるが、刹那滅は悲しみが生ずる対象であるようなものである。

(3)法性（＝勝義）は無区別であるが、それと同一自体である有法（＝世俗）が別異であることは矛盾ではない。[例えば、] 所証法の無常一般には区別がないが、喩例と議論基体は別異であるようなものである。<sup>131</sup>

(4)見たり聞いたりすることより他に実体の自体 (rdzas kyi ngo bo) が追求されることがないことになることは認められることになるが、相の反体 (mtshan nyid kyi ldog pa) は、青を知覚しても、刹那滅は [理解されないの、] 推論により追求されるべきもの（＝所証）であるように、[世俗を知覚しても、勝義を] 追求することは矛盾ではない。

それ故、[『解深密経』に示された] 四つの帰謬は何れも [同一自体である] 青と刹那滅によって不確定であるので（＝逸脱するので）、『解深密経』の密意は、世俗と勝義は、相 (mtshan nyid, i.e., ldog pa) が全く同一であると認めるならば、四つの過失 [が生ずること] は疑いない [ということである]。<sup>132</sup>（『二諦ギャ註』7a6-7b1）

130 de la gcig yin na nyes pa bzhi ste/ skye bo mtha' dag gis kun rdzob mthong ba na/ don dam pa yang mthong zin pas mya ngan las 'das pa thob zin par 'gyur ro//

gnyis pa kun rdzob [la b]rten nas zag pa 'phel ba ltar don dam dmigs pas kyang 'phel bar 'gyur bas/ kun rdzob bzhin du don dam yang kun nas nyon mong pa'i dmigs par 'gyur ro//

gsum pa ni don dam la phan tshun dbye ba med pa ltar bum pa la sogs pa kun rdzob thams cad tha mi dad par 'gyur ro//

bzhi pa ni ci ltar mthong pa dang thos pa las kun rdzob logs su btsal du med pa ltar/ mthong pa dang thos pa las don dam logs su thos bsam gis btsal du med par 'gyur ro// (cf. TR pp.610.20-611.3) zhes *dGongs pa nges par 'grel pa'i mdo'* nas [gsungs] pas 'gog pa ma legs te/ byas pa dang mi rtag pa bzhin dngos po gcig pa la nyes pa de dag med pa'i phyir ro//

131 例えば、「壺が有法。無常である。所作であるから。柱の如し」という論証式において、所証法である無常は、議論基体である壺と喩例である柱の両方に区別なく存在するが、そのことにより壺と柱が同一となることはないようなものである。ここで無常は勝義に、議論基体や喩例は世俗に結び付けられている。

それ故、ギャマルワに依れば、『解深密経』に説かれた二諦が同一である場合に生ずる四つの過失は、二諦が同一の自体である場合ではなく、同一の「相 (mtshan nyid)」、即ち、同一の反体 (ldog pa) である場合に生ずると解釈される。それ以外、二諦が同一自体である場合には、上述の四つの過失は生じない。その点で、ギャマルワはトルンパと根本的に見解を異にしている。

- トルンパの解釈：『解深密経』の同一性否定論証により、二諦が同一反体であることのみならず、同一自体であることも否定された。
- ギャマルワの解釈：同論証により、二諦は同一反体であることが否定されたのであり、同一自体であることは否定されていない。

他方、二諦が別異の場合の四つの過失については、ギャマルワは、トルンパの記述を踏襲しつつ、それに簡単な解説を加える形で論述を進めている。即ち、

「[二諦は] 事物 (dngos po, i.e., ngo bo) が別異であるならば、四つの過失がある。即ち、[第一.] 勝義を現前に知覚しても、世俗はそれに含まれないので、別個に知覚されることになる。それ故、[勝義を現証しても、] 行の相 ('du byed kyi mtshan ma, i.e., bden grub) は制圧されず、[輪廻の] 繫縛から解放されないで、涅槃しないことになる。これは、例えば、壺無常を知覚しても、語はそれ (=壺) より別個に存在するので、

132 'di' ltar mtshan nyid tha dad na dngos po gcig kyang/ de mthong pa'i blo la de snang yang phyin ci log mi spong pas mya ngan las 'das pa mi thob par 'gyur te/ sngon po mthong yang rtag par phyin ci log mi spong pa bzhin no//

de kun nas nyon mongs pa'i dmigs [pa] yin yang de dang ngo bo gcig pa'i chos gzhan nyon mongs pa'i dmigs par mi 'gyur te/ sngon po chags pa'i yul yin yang skad cig ma skyo ba skye ba'i yul yin pa bzhin no//

chos nyid dbye ba med kyang de dang ngo go gcig pa'i chos can tha dad par mi 'gal te/ bsgrub par bya ba'i chos kyi spyi mi rtag pa la dbye ba med kyang dpe' dang rtsod gzhi' tha dad pa bzhin no//

m[thong pa dang] thos pa las rdzas kyi ngo bo logs su btsal du med par thal pa ni 'dod par 'gyur la/ mtshan nyid kyi ldog pa ni sngon po mthong yang skad cig ma rjes dpag gis btsal bar bya ba bzhin du btsal bar mi 'gal lo//

des na thal ba bzhi' car yang sngon po dang skad cig mas ma nges pas/ dGongs 'grel gyi dgongs pa ni kun rdzob dang don dam mtshan nyid (pa) shin tu gcig par 'dod na nyes pa bzhi po gdon mi za'o//



[その語を] 常住と把握することは斥けられないように、勝義を別個に知覚しても、世俗に対して顛倒を断滅する対治とはならないので、勝義を知覚しても、[それは] 解脱道ではないという [意味] である。

第二. 一般に迷乱 [知] の所縁であるこの世俗に対して正理により考察したならば、如実に存する法性が存在しないことは妥当ではないので、[法性は] 存在するが、それ (= 法性) こそが「勝義」と云われるものであるので、その二つ (= 世俗と勝義) は有法と法性であると全ての教義論者は認めるが、[両者の] 事物 (= 自体) が別異であるならば、それ (= 勝義) はそれ (= 世俗) の法性とはならない。[例えば、] 壺と布の如しである (= 壺が布の法性とならないのと同様である)。

第三. 一般に迷乱 [知] の所縁である世俗は「分別されたもの (brtags pa, i.e., kun btags, \*parikalpita, 遍計所執)」と云われるが、分別されたことを欠いたもの (brtags pas dben pa) は、「完全に成就したもの (yongs su grub pa, \*pariniṣpanna, 円成実)」と云われるもの、即ち、勝義であると全ての教義論者は認めている。[しかるに、二諦の] 事物 (= 自体) が別異であるならば、世俗が無我であり、[我 (= 眞実成立) が] 成立していないことのみ (rab tu ma grub pa tsam, i.e., rnam bcad tsam) は勝義でないことになる。[例えば、] 壺の欠如のみは布ではないようなものである。それ故、分別されたことを欠いたもののみが「完全に成就したもの」「勝義」と云われるものにはならないことになる。

第四. 一人の人に雑染と清浄が同時にあることになる。[両者の] 所縁は別々に成立しているから。壺 [の知] と布の知の如し。これは、浄 (sdug pa, \*śubha) 等の顛倒 [知] の対象である世俗と勝義<sup>133</sup>が別異の事物 (= 自体) であるならば、別々に知覚されることは矛盾でないので、貪欲と離貪は同時に存在し得、矛盾しないことになるという密意であると思われる。』(『二諦ギヤ註』7b1-5、cf. 『教次第大論』p.611.4-12)<sup>134</sup>

そして、以上の同一と別異を否定する四つずつの論証について、こう結論している。

「以上のように、相 (mtshan nyid, i.e., ldog pa) もまた全く同一であるこ

133 写本では、don とあるが、文脈から、don dam で読む。

とと、事物 (dngos po, i.e., ngo bo) が別異であることに対して、過失が『解深密経』において四つずつ説かれたのである。』(『二諦ギヤ註』7b5-6)<sup>135</sup>

トルンバは、同一と別異を否定する論証を論ずる際に、自体と相 (= 反体) を区別することなく、全て自体に結び付けて解釈したが、ギヤマルワは、同一を否定する論証については、それを自体ではなく、反体に結び付けて解釈した。このギヤマルワの解釈は、二諦を、同一反体ではなく別異自体ではないと見做すものだが、それは、端的には、二諦を〈同一自体にして別異反体 (ngo bo gcig la ldog pa tha dad)〉と見做す解釈に他ならない。この概念は、ギヤマルワによりここで実質的に提示されているが、それが用語法として確立するのは、チャ

134 dngos po nyid tha dad na nyes pa bzhi ste/ don dam mngon du mthong yang kun rdzob der ma 'dus pas logs su dmigs par 'gyur ro// des na 'du byed kyi mtshan ma zil gi (read: gyis) mi non cing/ bcing pa las mi grol bas mya ngan las 'das bar mi 'gyur ro// 'di' ni dper na bum pa mi rtag pa mthong yang sgra de las logs na yod pas rtag par 'dzin pa mi ldog pa bzhin du/ don dam logs su mthong yang kun rdzob la phyin ci log spong pa'i gnyen po mi 'gyur bas/ don dam mthong yang thar pa'i lam ma yin no zhes bya ba yin no//

gnyis pa ni spyir 'khrul pa'i dmigs pa kun rdzob pa 'di' la rigs pas dpyad na ji ltar gnas pa'i chos nyid 'ga' zhig med du mi rung pas yod la/ de nyid ni don dam pa zhes bya ba yin pas de gnyis ni chos can dang chos nyid yin par grub mtha' smra ba thams cad 'dod pa yin la/ dngos po tha dad na de de'i chos nyid du mi 'gyur te bum pa dang snam bu bzhin no//

gsum pa ni spyir 'khrul pa'i dmigs pa kun rdzob ni brtags pa zhes bya la/ brtags pas dben pa ni yongs su grub pa zhes bya ba don dam pa yin par grub mtha' smra ba thams cad 'dod pa yin no// dngos po nyid tha dad na kun rdzob bdag med cing rab tu ma grub pa tsam don [dam] ma yin par 'gyur te/ bum pas dben pa tsam snam bu ma yin pa bzhin no// des na brtags pas dben pa tsam yongs su grub pa don dam pa zhes bya ba der mi 'gyur ro//

bzhi pa ni gang zag gcig la kun nas nyon mongs pa dang rnam par byang pa dus gcig par thal te/ dmigs pa so sor grub pa'i phyir/ bum pa dang snam bu'i blo bzhin no// 'di' ni sdug pa la sogs pa phyin ci log gi yul kun rdzob dang don [dam] dngos po tha dad na so sor dmigs pa mi 'gal ba'i phyir/ chags pa dang chags bral dus gcig pa srid cing mi 'gal bar thal lo zhes dgongs par sems so//

135 de ltar mtshan nyid kyang shin du gcig pa dang/ dngos po tha dad la nyes pa dGongs pa nges 'grel par bzhi bzhi gsungs so//

パにおいてであり、以後、二諦説以外の場合にも広く使用されることになる。<sup>136</sup>

その後、同一事物を法の区別により二諦に分ける別の解釈を前主張に立てて詳しく否定しているが、これは『教次第大論』には見られない議論である。

〔論者：〕それならば、同一の事物において法（＝属性）の区別により諦は二つである。即ち、眼等の知の側において、この色等は、顛倒〔知〕の判断基体（zhen gzhi）、貪欲や瞋恚が働く所依（rten）等である点から世俗であるが、その同じ〔色等〕は、正理により考察したならば、虚偽の法にして幻の如きものとして存する点から、〔二〕障が尽きる所依、勝れた智（ye shes dam pa, i.e., 正理知）の対象である勝義でもある、と云うならば、

〔論主：〕〔その見解は〕聖言と正理によって拒斥される。』（『二諦ギャ註』<sup>137</sup> 7b6-7）

この見解は、一見、〈同一自体にして別異反体〉の説と類似しているように見えるが、その内実は全く異なっている。即ち、この説では、例に挙げられているように、色等が、顛倒知の判断基体や貪欲等が働く所依である点から世俗諦であり、正理により考察したならば、二障が尽きる所依であり、「勝れた智」、即ち、正理知の対象である点から勝義諦でもあると見做す解釈である。この説では、色という同一の事物が、或る観点からは世俗諦であり、或る観点からは勝義諦と見做すのであるが、〈同一自体にして別異反体〉の説では、色はあくまで世俗諦であり、如何なる観点からも勝義諦とはされることはない。色の空性が勝義諦であるのであり、色そのものが勝義諦であるわけではないのである。二障が尽きるのは、色を所縁としているからではなく、色の空性を所縁としているからであり、両説は全く似て非なる説である。

136 『中観提要』p. 10.12: ... bden pa gnyis ngo bo gcig la ldog pa tha dad pa kho na'o// 「二諦は〈同一自体にして別異反体〉に他ならない。」

137 'o na dngos po gcig la chos kyī dbye bas bden pa gnyis yin te/ mig la sogs pa'i shes ngo[r] gzugs la sogs pa 'di' nyid phyin ci log gi zhen gzhi chags sdang 'jug pa'i rten la sogs pa'i cha nas kun rdzob kyang yin la/ de nyid rigs pas dpyad na brdzun pa'i chos sgyu ma lta bur gnas pa'i cha nas sgrib pa zad pa'i rten ye shes dam pa'i yul don dam pa'ang yin no zhe na/ lung dang rigs pas gnod de/..

この説に対しては、以下、聖言と正理による論駁が詳しく示されているが、かなり長い議論なので、ここでは省略し、科段末に示された分類の意味に関するギャマルワの自説の箇所だけを引いておこう。

「それ故、同じものとも他のものとも言表されることがないこと (de nyid dang gzhan du brjod du med pa)、同一なものとして成立しないことのみ (gcig [tu] rab tu ma grub pa tsam) により、[諦は] 二つである。例えば、[ティミラ眼病者の眼知に顕現する] 髪とその欠如 (de dben pa, その非存在) は、同一のものでも他のものでもないようなものである。髪は、欠如 (dben pa) より別異のものではない。なぜならば、欠如に包摂されない髪は事物として (=実際に) 存在していないから。それ (=髪) は [その欠如と] 同一でもない。共に知覚されることはないから。それと同様に、顕現 (=世俗) と空 (=勝義) もまた、同じものとしても他のものとしても存在しない有法と法性 (de nyid dang gzhan du med pa'i chos can dang chos nyid) である。」(『二諦ギャ註』<sup>138</sup> 8b2-3、cf.『教次第大論』 p.611.13-19)

冒頭に引かれた〈同じものとも他のものとも言表されることがないもの〉や〈同一なものとして成立しないだけのもの〉と云う表現は、『教次第大論』でも使用されていたが(同 p.610.17-19)、そこでは、〈同一が否定された別異〉の意味で使用されていた。さらに、ここに喩例として引かれたティミラ眼病者の眼知に顕現する髪とその欠如の例もまた、『教次第大論』では、二諦が〈同一が否定された別異〉であることを示す喩例として挙げられたものである。ギャマルワもまた、それを自説として引いているので、これだけ見るならば、トルンパの説を踏襲しているように見える。しかるに、結論として、世俗諦と勝義諦を、〈同じものとしても他のものとしても存在しない有法と法性〉と規定する時、ギャマルワは、トルンパの表現を換骨奪胎して、全く異なる意味に読み替えていることに注意する必要がある。ここで、同じものとして存在しないと云う場

138 de'i phyir de nyid dang gzhan du brjod du med pa gcig [tu] rab tu ma grub pa tsam gis gnyis te/ dper na skra shad dang des dben pa] de nyid dang gzhan ma yin pa bzhin no// skra shad ni dben pa las tha dad pa ma yin te/ dben par ma 'dus pa'i skra shad dngos por med pa'i phyir ro// de nyid gcig pa yang ma yin te/ lhan cig dmigs pa med pa'i phyir ro// de bzhin du snang pa dang stong pa yang de nyid dang gzhan du med pa'i chos can dang chos nyid yin no//

合の「同じもの」というのは、同一自体ではなく、同一反体を含意している。つまり、有法と法性は同一自体であるが、同一反体ではないので、同じものとして存在しないと言われる。この同じ表現を、トルンパは、共に自体に結び付けているので、同じ表現を使用していても意味が全く異なるのである。それ故、ここで、〈同じものとしても他のものとしても存在しない有法と法性〉と云うのは、ギャマルワにとっては、同一反体としても存在せず、別異自体としても存在しない有法と法性という意味であり、端的には、〈同一自体にして別異反体〉を含意しているのである。

- トルンパ：〈同じものとも他のものとも言表されることがないもの〉＝  
同一自体 (ngo bo gcig, i.e., dngos po gcig)とも別異自体とも言表されることがないもの
- ギャマルワ：〈同じものとも他のものとも言表されることがないもの〉  
 ＝同一反体 (ldog pa gcig, i.e., mtshan nyid gcig)とも別異自体とも言表されることがないもの

前述したように、この〈同一自体にして別異反体 (ngo bo gcig la ldog pa tha dad)〉という表現それ自体は、ギャマルワには見いだされず、それを明確に使用するのチャパであるが、問題は何故に、ギャマルワはトルンパの説を批判するのに、より明確な〈同一自体にして別異反体〉という表現を使用せずに、トルンパの用語を踏襲しつつ、それを換骨奪胎して非常に回りくどい婉曲的な仕方ですれを提示しているのかということである。可能性の一つとして考えられるのは、ギャマルワがこの『二諦分別論』の註釈を著作した時に、トルンパはまだ存命していたことである。トルンパと同格のキュン・リンチェンタクはギャマルワの師匠であるので、トルンパとギャマルワは恐らくは一世代程の年齢差しかなく、また両者は面識があった可能性もある。トルンパはゴク翻訳師の四大高弟の一人であり、非常に権威があった人物と思われるが、そのトルンパの説をあからさまに批判することは、現実的に困難であったことは十分にあり得ることである。これが、さらに一世代下ったチャパの場合では、このような婉曲的な表現や論法を用いずに、より直裁的にトルンパの説を批判している。このことは、チャパの時代には、トルンパは既に亡くなっていたことを示唆しているように見える。以上は、現状、資料不足のため憶測の域を出ないが、ギャマルワやチャパの著作を読み解く際には一つの可能性として念頭に置くべき

かと思われる。

以上、二諦の分類の意味に関するギャマルワの見解を検討した。その結果、ギャマルワは、『教次第大論』の記述を前提としつつ、二諦が同一自体であることを否定するトルンパの見解を批判し、実質的に、二諦を、〈同一自体にして別異反体〉と見なす解釈を取っていたことが明らかとなった。この見解は、後に直弟子のチャパに受け継がれることになる。

### (3) 二諦の語義について

次に、二諦の語義に関するギャマルワの見解を見ておこう。当該科段の全訳は以下の通りである。

「[二諦の] 名義 (ming gi don) は、「世俗 (kun rdzob)」と云うのは、迷乱知 (khrul pa'i blo) である。覆障するもの (sgrib par byed pa) であるからである。その迷乱 [知] の思考 (bsam pa) により真実であるものが、「諦 (bden pa)」である。迷乱 [知] の側において真実であるもの (khrul ngor bden pa) が「世俗諦 (kun rdzob tu bden pa, lit. 世俗として真実であるもの)」と云われる。

「勝義」と云うのは、正理知 (rigs pa'i shes pa) である。目的として追求されるべきもの (don du gnyer bya) であるので、「義 (don, 目的)」であるが、[その目的達成に対して] 欺かないものであるので、完全なもの (gya nom pa)、「勝れたもの (dam pa)」である。その勝義の側において真実であるので、「勝義諦 (don dam pa'i bden pa)」であり、即ち、正理により存立する対象 (rigs pas gnas pa'i don)<sup>139</sup> である。

以上のように、前者 (= 世俗諦) は、迷乱 [知] の思考の側において真実なもの (khrul pa'i bsam ngor bden pa) であるが、これ (= 勝義諦) は、真に真実であるもの (yang dag par bden pa) である。<sup>140</sup> (『二諦ギャ註』 8b3-5、cf. 『教次第大論』 pp. 609.9-610.7)

139 もう一つの解釈として、「正理によって存立するものという意味」と訳すことも可能である。『教次第大論』の平行箇所では、rigs pa'i grub pa'i bden pa (正理により成立している真実) と表現されている (同 p. 610.3)。

二諦の語義解釈については、『教次第大論』と大きな解釈上の違いは見られず、基本的に『教次第大論』の解説を踏襲している。但し、最後の一文に示された解説、即ち、真の意味で真実であるものは勝義諦であり、世俗諦は迷乱知の側において真実であるに過ぎないという解釈は、『教次第大論』において、二諦の語義解説の後に示された二つの観点からの解釈のうちの前者に当たり、定立 (sgrub pa) の観点から、勝義諦は、知の対象として存在していないので、真実の相が何も成立していないものに対して真実と仮設されただけであり、その意味で真実であるのは、むしろ世俗諦であるという解釈は見出されない。これは、ギャマルワが、勝義諦を知の対象として認めるからに他ならず、その点に解釈の相異が見出される。

#### (4) 二諦の数の確定について

他方、二諦の数の確定の議論は、二諦の分類の意味や定義の議論と共に、トルンパの解釈に対するギャマルワの批判が明確に見いだされる箇所として注目に値する。この箇所は、前述したように、長く込み入った議論を含むので、委細は稿を改めて検討することとし、ここでは、その概略だけを簡単に紹介するに留めておく。まずギャマルワは、冒頭部において、『教次第大論』からトルンパの記述を引き写している。

「数の確定を考察すること。勝義〔諦〕とは、不顛倒の知の対象 (phyin ci ma log pa'i blo'i yul) であるが、世俗〔諦〕は、顛倒知の対象 (phyin ci log gi blo'i yul) であるので、全ての知の対象は、〔勝義諦と世俗諦の〕二つのみに確定される。それもまた、知が二つに確定されることにより、対象が二つに立てられるわけではない。なぜならば、知の迷乱不迷乱は、対象の真偽に基づくものであるので、相互依存 (phan tshun rten pa.

140 ming gi don ni/ ku[n rdzob] ces bya ba ni 'khrul pa'i blo ste/ sgrib par byed pa'i phyir ro// 'khrul pa de'i bsam pas bden pa ni bden pa ste/ 'khrul ngor bden pa ni kun rdzob tu bden pa zhes bya'o//

don dam pa zhes bya ba rigs pa'i shes pa ste/ don du gnyer bya yin pas don yin la/ mi slu bas na gya nom pa dam pa yin no// don dam pa de'i ngor bden pas don dam pa'i bden pa ste rigs pas gnas pa'i don to// de ltar snga ma ni 'khrul pa'i bsam ngor bden pa yin la/ 'di' ni yang dag par bden pa yin no//



\*parasparāśraya) [の過失] となるからである。

それならば、如何に [数が確定されるのか] というならば、単一の理解の対象 (rtogs pa gcig gi yul) [であることによって] である。即ち、知の区別が成立することそれ自体が対象の区別が成立することであり、対象の区別が成立することそれ自体が知の区別が成立することなのである。

そのうち、(1)不迷乱 [知] の対象 (ma 'khrul pa'i yul, i.e., 勝義諦) は、実際に成立しているもの (dngos po la grub pa, lit. 事物において成立しているもの<sup>141</sup>) であり、知によって虚構されたもの (blos bcos pa) ではない。それは「常住」と言説される。なぜならば、他の知が生ずることにより、他の形相 (rnam pa) となることはないからである。(2)迷乱 [知] の対象 ('khrul pa'i yul, i.e., 世俗諦) は、実際には存在していないにもかかわらず、知によって立てられたもの (blos bzhag pa) である。それは「無常」と云われる。なぜならば、認識手段により考察したならば、前の知の対象から退失することになるからである。

常住と無常もまた、相互断除 (phan tshun rnam par gcod pa, \*parasparaparihāra) の意味で、他の項 (= 第三項) を排除する。』(『二諦ギヤ註』<sup>142</sup> 8b5-8, cf. 『教次第大論』 pp. 611.21-612.8)

ここに見られる見解は、前述した通り、トルンパにとっては言説としてのみ認められる見解であり、勝義の立場からはトルンパ自身否定するものである。

141 この dngos po la grub pa という表現は、de kho nar grub pa (真実として成立しているもの) に換言可能である。例えば、『二諦ギヤ註』 9a2: mtha' zhes bya ba ni dngos po la grub pa'am ma grub kyang bla ste/= 『教次第大論』 p. 612.16: mtha' zhes bya ba ni de kho nar grub pa'am ma grub kyang bla ste ...

142 grangs nges pa dpyad pa ni/ don dam pa ni phyin ci ma log pa'i blo'i yul yin la/ kun rdzob ni phyin ci log gi blo'i yul yin pas/ blo'i yul mtha' dag gnyis kho nar nges so// de'ang blo gnyis su nges pas yul gnyis su 'jog pa ni ma yin te/ blo 'khrul ma 'khrul nyid yul bden brdzun las yin pas phan tshun rten par 'gyur ba'i phyir ro//

'o na ci ltar zhe na/ rtogs pa gcig gi yul te/ blo'i dbye ba grub pa nyid yul gyi dbye ba grub pa yin/ yul gyi dbye ba grub pa nyid na (read: ni) blo'i dbye ba grub pa yin no//

de la ma 'khrul pa'i yul ni dngos po la grub pa blos bcos pa ma yin pa'o// de

この直後から、『教次第大論』には長く複雑な議論が展開されており、本稿では割愛したが、ギャマルワもまた、『教次第大論』の当該箇所<sup>143</sup>の文章を引き写している。

その後、トルンパの見解に対するギャマルワの批判が見いだされる。両者の見解の相異が如実に確認される箇所であるので、引いておこう。

「ここで (= 以上のトルンパの見解において)、不迷乱知 (blo ma 'khrul pa) とは、戯論を断ずる正理 [知] (spros pa gcod pa'i rigs pa) であるので、(1) [トルンパが主張するように、真実としては一切の知は迷乱知であり、] それ (= 不迷乱知) は存在しない [と云う] ならば、戯論は誤知 (log shes) により断ぜられる [と云う] のか、あるいは、(2) それ (= 不迷乱知) が存在するならば、[一方において不迷乱知を承認しつつ、] 「不迷乱の知と真実の対象 (= 勝義諦) は認められない」と承認して狂乱するのか。断定 (\*pariccheda) を為す不迷乱の知 (yongs gcod byed pa'i blo ma 'khrul pa) が存在しないことによっては、不迷乱の知と真実の対象は斥けられないのである<sup>144</sup>。それ故、今、戯論を断ずる推論ないし無分別の直接知覚という不迷乱の知と、一切の戯論を欠いた空性 (spros pa thams cad kyis dben pa'i stong pa nyid) という対象が存立するので、同じものとも他のものとも言表されることがないものとして、先に (= 数の確定の科段冒頭部で)

---

ni rtag pa zhes tha snyad du bya ste/ blo gzhan skyes pas rnam pa gzhan du mi 'gyur ba'i phyir ro//

'khrul pa'i yul ni dngos po la med bzhin du blos bzhag pa'o// de ni mi rtag pa zhes bya ste/ tshad mas dpyad na blo snga ma'i yul las nyams par 'gyur ba'i phyir ro// rtag pa dang mi rtag pa dag kyang phan tshun rnam par gcod pa'i don gyis phung po gzhan sel to//

143 『教次第大論』 pp. 612.8-613.20 ≡ 『二諦ギヤ註』 8b8-9a7。具体的な対応関係については、付録として付けた校訂テキストの後註を参照されたい。

144 戯論の断除 (nam bcad, \*vyavaccheda) を為す不迷乱知とその対象である空性は存在するから。空性を断定する不迷乱知が存在するならば、空性が真実成立 (bden grub) となる過失があるが、空性の反対項である戯論 (= 真実成立) を断除しただけのもの (rnam bcad tsam, \*vyavacchedamātra) が空性であり、それは断除を為す不迷乱知によって理解されるというのがギャマルワの基本的見解である。この見解は、基本的に後代のゲルク派の解釈と一致したものである。

〔トルンパ自身により〕説示されたばかりのものを数の確定として立てるならば、如何なる過失があろうか。

否定されるべき勝義の辺 (dgag par bya bai don dam pa'i mtha') とは、他説の勝義 (gzhan lugs kyi don dam) であるので、それ (= 他説の勝義) と自身 (= 自説) の世俗の数の確定を〔トルンパが〕為さったことには〔必要性〕<sup>146</sup>がなく、この中観派の二諦の箇所では時宜に適わないのである。さもなくば、同一ないし別異の考察 (= 分類の意味) や〔二諦の〕各々の定義等もまた、自説の勝義 (rang lugs kyi don dam) を捨てて、他説の勝義と自身 (= 自説) の世俗に対してどうして立てないのか。】(『二諦ギャ註』9b1-3)<sup>147</sup>

このギャマルワの批判の趣旨を理解する為には、批判の対象であるトルンパの解釈の概略を理解しておく必要がある。即ち、トルンパによれば、勝義諦やそれを理解する不迷乱の知というものは、あくまで言説の立場で、上記の表現を使用するならば、「他説」として設定されたものに過ぎず、勝義の立場ないし自説の立場からは否定された。トルンパにとって勝義諦は一切の知や言説を超えたものであるからである。これに対して、ギャマルワは、もしそうであれば、戲論は如何にして断滅されるのかと切り返す。即ち、もし不迷乱知が存在しないのであれば、戲論は、不迷乱知によって断ぜられることはないので、誤知、即ち、迷乱知によって断ぜられることになる。他方、戲論を断滅する不迷乱知が存在すると云うのであれば、それは存在しないというトルンパ自身の承認と矛盾することになると論難する。以上の議論を念頭において、ギャマルワは、戲論を断滅する不迷乱知とそれにより理解される一切の戲論を欠いた空性は存在すると明確に主張する。もし不迷乱知が存在しないならば、戲論は断絶されず、解脱と仏智を獲得することは不可能となり、また誤知により戲論が断滅さ

145 ここで「否定されるべき勝義の辺」とは、正理知の対象としての勝義諦を指す。

トルンパはそれを言説として認めた上で二諦の数の設定を立てたが、勝義としては他説を否定するように否定するので、「他説の勝義」と表現しているのである。トルンパにとっての自説の勝義とは、一切の所知の相を超えたものである。他方、トルンパは一切の所知は世俗諦であると自説として認めるので「自身 (= 自説) の世俗」と云う。

146 写本では紙葉末に当たり、da の文字まで見えるが、残りは不明。『中観真実決択』の平行文 (7b3) から、dgos pa (必要性) という語を想定しておく。

れるのであれば、非認識手段の知により対象が認識されることなるので、一切の認識手段の知の設定は崩壊するからである。この点で、ギャマルワはトルンパとは明確に袂を分かっている。

- トルンパ：不迷乱な知 (= 正理知) やその対象である勝義諦は言説として認められるが、真実としては否定される。
- ギャマルワ：不迷乱な知 (= 正理知) やその対象である勝義諦は存在しており、自説として認められる。さもなくば、戯論を断ずることも、勝義諦を理解することも出来ないことになるから。

トルンパは、『教次第大論』の数の確定の科段の冒頭部では、勝義諦を不顛倒知の対象、世俗諦を顛倒知の対象として設定し、知が顛倒と不顛倒の二つに確定されることそれ自体が、即、対象が世俗諦と勝義諦の二つに確定されることであるという解釈を提示しつつも、それを後続の文章で真実の立場から否定したが、ギャマルワは、ここで、そのトルンパ自身が最初に提示した数の確定の解釈は妥当なものであり、否定する必要はないと述べている。要するに、所引の最後の文章に示唆されているように、トルンパは、二諦の一連の主題において、二諦の分類の意味や定義を立てる際には、勝義諦は知の対象ではないことを前提として自説を立てているのに対して、それ以外の二諦の分類基体や数の確定等の主題においては、言説の立場に立脚して勝義諦を正理知の対象とした

---

147 'dir blo ma 'khrul pa ni spros pa gcod pa'i rigs pa yin pas/ de med na spros pa log shes kyis gcod dam/ de yod na blo ma 'khrul pa dang yul bden pa mi 'dod ces pa/ khas blangs nas bsmyon (read: smyos?) nam/ yongs gcod byed pa'i blo ma 'khrul pa med pas ni/ blo ma 'khrul pa dang yul bden pa mi ldog go// des na da lta spros pa gcod pa'i rjes dpag gam/ [rnam] par mi rtog pa'i mngon sum blo ma 'khrul pa dang/ yul spros pa thams cad kyis dben pa'i stong pa nyid gnas pas/ de nyid dang gzhan du brjod du med par sngar bstan ma thag pa de dag grangs nges bzhag na nyes pa ci yod/

dgag par bya ba'i don dam pa'i mtha' ni gzhan lugs kyi don dam yin pas/ de dang rang gi kun rdzob grangs nges pa mdzad pa la ni d+++ (dogs pa?) med la/ 'dir dBu' ma pa'i bden pa gnyis kyi skabs su ma bab po'o// de lta ma yin na/ gcig gam tha dad brtag pa dang/ so so'i mtshan nyid la sogs pa yang/ rang lugs kyi don dam bor de/ gzhan lugs kyi don dam dang/ rang gi kun rdzob la ci'i phyir mi gzhang/

上で自説を立てている。それ故、二諦説の一連の主題において一貫性が取れておらず自己矛盾しているのではないかということがギャマルワの論難の主旨である。

以上のようにトルンパの説を批判してから、最後に、ギャマルワは数の確定に関する自説を以下のように明記している。

「それ故、[二諦の] 数の確定は、[知は] (1)不迷乱の知である [空性を] 考察する正理知 (rnam par dpyod pa'i rigs shes) と(2)それより他のもの (= 迷乱知) の二つとして言説の認識手段により確定されるが、まさにそれは、対象が二つ (= 二諦) に確定されることと存否を共にするのである (grub bde gcig go)。

議論の断滅 (rtsod pa spang pa) は不要である。即ち、不迷乱の知 (= 正理知) と真実の対象 (= 勝義諦) は承認されるので、勝義を承認することはまさに認められるが、それだけで戯論に陥ることにはならない。なぜならば、離戯論 (spros bral) もまた勝義であることは妥当であるからと思われる。委細は他の箇所<sup>148</sup>で理解されるべきである。」(『二諦ギャ註』 9b3-5)

この解釈は、端的には、「知の区分の成立それ自体が、対象の区分の成立であり、対象の区分の成立もまた、知の区分の成立である」(『教次第大論』p. 612.1f.) というトルンパが言説の立場として認めた説に他ならない。即ち、知が迷乱知と不迷乱知の二つに確定されることと、その対象が世俗諦と勝義諦の二つに確定されることは、〈存否を共にするもの (grub bde gcig pa, \*ekayogakṣema)〉であるというのが、ギャマルワの自説である。それ故、数の確定に関するトルンパとギャマルワの解釈は以下のように纏められる。

- トルンパ：知が迷乱知と不迷乱知の二つに分けられることが、即、対

148 des na grangs nges pa ni/ blo ma 'khrul ba rnam par dpyod pa'i rigs shes d[ang]  
de las gzhan pa gnyis su tha snyad pa'i tshad mas nges la/ de nyid yul gnyis su  
nges pa dang grub bde gcig go//

rtsad pa spang pa ni mi dgos te blo ma 'khrul pa dang yul bden pa khas blangs  
pas don dam khas blangs pa ni 'dod pa kho na yin la/ de tsam gyis spros par mi  
'gyur te/ spros bral yang don dam yin par 'thad pa'i phyir ro zhes se[ms] te zhib  
tu ni gzhan du rig par bya'o//

象が世俗と勝義の二つに分けられることであることは言説としては認められるが、真実としては不迷乱の知もその対象である勝義も存在しないので、二諦の数の確定は存在しない。

- ギャマルワ：トルンパが言説の立場として提示した説は勝義の立場から否定する必要はなく、自説として認められる。

#### (5) 二諦の定義について

以上、二諦の分類基体、分類の意味、数の確定等の一連の主題に関するギャマルワの解釈をトルンパの解釈と比較対照しつつ検討したが、結局のところ、両者の解釈の相異は、二諦の定義、その中でも、特に勝義諦の定義を如何に立てるのかという点に帰着することが判明した。ギャマルワの二諦の定義に関する議論の概略は以前に紹介したが、<sup>149</sup>前稿では紙幅の関係上言及出来なかった箇所を含め、ギャマルワの二諦の定義に関する設定の全体をここで紹介しておこう。

#### (a) 世俗諦の定義

『教次第大論』では、最初に勝義諦の定義が議論されたが、ギャマルワは最初に世俗諦の定義を論じている。それ以外に、議論の進め方は、他の科段同様に、最初にトルンパの解釈を提示し、次にそれを批判し、最後に自説を提示するという仕方に則っている。まず最初にトルンパの解釈を提示する箇所を見ておこう。

「定義の自性 (mtshan nyid kyi rang bzhin) については、「世俗 [諦] の定義は、〈顛倒 [知] の所縁 (phyin ci log gi dmigs pa)〉である。「顛倒 [知]」とは、迷乱 [知] (khrul pa) であり、即ち、全ての知 (blo mtha' dag) である。その対象が世俗諦であるが、それは、真実なもの (bden pa) として、認識手段 (= 正理知) により拒斥されるにもかかわらず、顕現するので、「虚偽なもの (rdzun pa)」と云われる。[しかるに、] 顕現するだけのものとしては [認識手段により] 否定されないので、顕現が排除されるわけでもない。それ故、全ての知の対象は世俗諦である」と [トルンパ

149 西沢2018a, pp. 41-44参照。

が] 説いたことは、正しく為さったことなのである (... zhes 'chad pa ni legs par mdzad do)。] (『二諦ギヤ註』9b5-6、<sup>150</sup>cf.『教次第大論』pp.615.20-616.1)

この文章は、トルンパの『教次第大論』に見られる世俗諦の定義の箇所を引き写しであるが、それをギャマルワは、「正しく為さったことなのである」と云って肯定していることに留意されたい。この文章だけ見るならば、ギャマルワはトルンパの解釈を受け入れているように見える。しかしながら、その直後の文章を見るならば、肯定しているのは単なる口先だけであって、実際には、厳しくその解釈を批判していることが分かる。即ち、

「[しかるに、] [論難 1] ここで、[トルンパが説くように、] 全ての知が迷乱であるならば、戯論を断ずる推論 (= 空性を理解する推論) 等もまた欺くもの (slu ba) であることになるので、先に、「[勝義の] 名義は、欺かないものであるので、正理 [知] は、義でもあり勝れたものでもある」と説かれたことは<sup>151</sup>あり得ないことになる。

[論難 2] 「[戯論が] 断除されただけのもの (rnam gcad tsam, \*vyavacchedamātra, i.e., 空性) に対してそれらの知 (blo de dag)<sup>152</sup>は欺かないものである」と [トルンパは] お認めになってもいるので、[トルンパが提示した] 「知の対象 (blo'i yul)」という世俗諦の定義は勝義 [諦] に対して過遍充 (khyab ches [pa], \*ativyāpti)<sup>154</sup>である。

[論難 3] 断除されただけのものは知の対象ではない [と云う] ならば、

150 mtshan nyid kyi rang bzhin ni/ kun rdzob kyi mtshan nyid phyin ci log gi dmigs pa'o// phyin ci log ni 'khrul pa ste blo mtha' dag go// de'i yul ni kun rdzob kyi bden pa yin la/ de nyid bden par tshad mas gnod bzhin du snang pas na rdzun pa zhes bya'o// snang pa tsam du ni mi 'gog pas snang pa sel ba yang ma yin no// des na blo'i yul mtha' dag kun rdzob kyi bden pa'o zhes (cf. TR pp.615.20-616.1; A 360b3-6) 'chad pa ni legs par mdzad do//

151 『二諦ギヤ註』8b4;『教次第大論』pp.609.22-610.1参照。

152 この両数形を示唆する dag という語が何を含意するかが問題であるが、有分別と無分別の正理知を意味すると解釈すべきであろう。具体的には、空性を理解する推論と聖者の入定智を指す。

153 逐語的に一致する文章は『教次第大論』に確認できないが、内容的に「二諦の定義を確定する認識手段」の科段に見出される文章を指すものと思われる。『教次第大論』p.616.4-6参照。この箇所は先に訳出してある。



[その場合には、] 断除のみを為す認識手段 (= 正理知) は、認識対象を有しないので、認識手段として妥当しない [ことになる]。

[論難 4] 断除は知の対象であるが、勝義 [諦] ではないと云うならば、「断除のみが勝義 [諦] として存在しないならば、[勝義諦は] 事物 (dngos po, i.e., bden par grub pa'i dngos po) であることになる。なぜならば、[その場合には、勝義諦は] 否定 (dgag pa, i.e., 断除) [であること] が否定されたから」等 [の論証]<sup>155</sup> により否定されるべきである。】(『二諦ギヤ註』 9b6-10a1)<sup>156</sup>

ここでギヤマルワは四つの論難を提示している。順にその内容を検討している。まず最初に、トルンパが説くように、全ての知が迷乱知であるならば、勝義諦の語釈の箇所、勝義を正理知に結び付け、それは欺かないものである、義でもあり勝れたものであると解説したと矛盾すると論難する。これは、自語撞着の論難である。

第二の論難は、トルンパの世俗諦の定義に過大適用の過失があることを指摘したものである。即ち、勝義諦は正理知の対象であるので、知の対象を世俗諦と定義するならば、勝義諦もまた世俗諦となる過失、即ち、勝義諦に対して定義が過大に適用されてしまう過失があると云う。トルンパ自身、勝義諦が知の対象であることは、「[戯論が] 断除されただけのものに対してそれらの知は欺

154 『教次第大論』 p. 615.24f.: blo'i yul ma lus pa kun rdzob yin pas na/...; 『二諦ギヤ註』 9b6: de na blo'i yul mtha' dag kun rdzob kyi bden pa'o zhes 'chad pa ni ...

155 同様のことはトルンパも認めている。『教次第大論』 p. 666.3f.: rnam bcad tsam zhes bya ba ngo bo 'ga' zhig tu grub na dngos por 'gyur bas na ...

156 'dir blo mtha' dag 'khrul pa yin na/ spros pa gcod pa'i rjes dpag la sogs pa yang slu bar 'gyur bas/ snga[r] ming gi don slu ba med pas rigs pa don yang yin la dam pa yin par bshad pa de mi srid par 'gyur ro//

rnam gcad tsam la blo de dag mi slu bar ni bzhed pa yan (read: yang) yin pas/ blo'i yul kun rdzob kyi mtshan nyid don dam la khyab ches so//

rnam gcad tsam blo'i yul ma yin na/ rnam gcad tsam byed pa'i tshad ma gzhal bya dang mi ldan pas tshad mar mi rung ngo//

rnam gcad blo'i yul yin yang don dam ma yin no zhe na/ rnam gcad tsam don dam par med na dngos por 'gyur te/ dgag pa bkag pa'i phyir ro zhes pa la sogs pas dgag par bya'o//

かないものである」という記述において自ら認めていることを指摘する。ここで「[戯論が] 断除されただけのもの」とは、空性を意味するが、それに対して欺かない知、即ち、認識手段が存在することを意味するからである。

第三の論難は、戯論が断除されただけのものは知の対象ではないと云うならば、その場合には、戯論の断除を為す認識手段は認識対象を有しないことになるので、認識手段として妥当しないと論難する。全ての知は自身の対象を有することはトルンパ自身も認めるところである。

第四の論難は、二重否定は定立 (sgrub pa, 肯定) であることを前提とした議論である。即ち、勝義諦を設定するのに、戯論の断除のみを勝義諦として設定しないのであれば、勝義諦は否定対象である戯論を否定しただけのものではなく、真実成立のような何か実体的に存在するもの (= 事物) となると云って批判する。

以上のようにトルンパの解釈を論難してから、自説をこう提示している。

「それならば、どうであるのかと云うならば、「顕現する通りのもののみが世俗である (ji ltar snang ba 'di kho na/ kun rdzob)」(SDV 3cd) と云うのは、[世俗諦は、] 〈[正理により] 考察しない知の対象として顕現しただけのもの (ma dpyad pa'i blo'i yul du snang pa tsam)〉であり、即ち、〈考察するに耐えない所知 (dpyad bzod ma yin pa'i shes bya)〉である。それ故、「[SDV 3c に] 「[顕現する通りのもの] のみ (kho na)」と [限定辞を] 付加したのは、正理の通りのものとしてではないのである (= 正理知に顕現する通りのものは世俗諦ではないのである)」(SDVP 17b3-4) と複註 (ti ka) に説かれている通りである。

註釈 (grel pa, 自註) にも、「世俗において [壺等は] 真実として存するのであり、真には (yang dag par ni, i.e., 勝義としては) [真実] ではない」(SDVV 4a3) といって、真実として空であるという限定を有する顕現 (bden pas stong pa'i khyad par can gyi snang ba) を [世俗諦と] 説いているのである。それ故、所知のみ (shes bya tsam) は [世俗諦の定義として] 過遍充 (khyab ches pa, \*ativyāpti) なので、〈そのように (= 正理によって)<sup>157</sup> 考察するならば存立しない所知 (de ltar dpyad na mi gnas pa'i shes bya)〉が世俗諦の定義である。それに対して、「迷乱 [知] の所縁 (khrul pa'i dmigs pa)」(cf. 『教次第大論』 p. 615.20) とも云われる。」(『二諦ギャ註』

158  
9b8-10a2)

『二諦分別論』3cdの記述による限り、勝義諦は知に顕現せず、知の対象とはならない。しかし、ギャマルワは、勝義諦が知の対象であることを認めるので、この偈文に対して会通を加える必要があった。それが、「顕現する通りのもの」を、「[正理により] 考察しない知の対象として顕現しただけもの」と解釈することである。この限定を加えることにより、同偈に提示された世俗諦の定義が正理知に顕現する勝義諦に対して過大適用される過失を排除するのである。同様に、所知のみを世俗諦の定義として立てる場合にも、勝義諦を所知の一つとして認めるギャマルワにとっては、勝義諦に対して過大適用される過失があるので、その過失を排除するために、「[正理によって] 考察するならば存立しない」という限定を所知に対して付加することにより、世俗諦を定義した。即ち、勝義諦は所知ではあるが、正理により考察するならば、世俗の事物のように虚偽のものとして存在しなくなるのではなく、逆に、存在することが確定されるので、世俗諦の定義が勝義諦に過大適用されることは排除される。以上がギャマルワの世俗諦の定義に関する解釈である。

最後の一文は、科段冒頭部に示された「顛倒 [知] の所縁」のことであるが、これはトルンパの世俗諦の定義であった。トルンパは勝義の立場から一切の知を顛倒知と見なすので、この定義は、端的には「知の所縁 (=対象)」を含意するが、ギャマルワは、文字通り、勝義を理解する不顛倒知に対する顛倒知の意味に捉え、この定義を自説として受容している。このように、両者は、等しく「顛倒知 (= 迷乱知) の所縁」を世俗諦の定義として認めているが、その内実は

157 この de ltar という語は全文の内容を受けて、「以上のように」と解釈することも可能であるが、ここでは、rigs pas を含意していると解釈して訳出しておく。

158 'o na ci ltar zhe na/ ji ltar snang pa 'di' kho na kun rdzob (SDV 3cd) ces bya ba ma dpyad pa'i blo'i yul du snang pa tsam ste/ dpyad bzod ma yin pa'i shes bya'o// des na kho na zhes bya brnan pa ni rigs pa ji lta ba bzhin du ni ma yin no (SDVP 17b3-4) zhes Ti kas bshad pa ltar ro//

'Grel pa nyid kyis kyang/ kun rdzob tu bden par rnam par gnas kyi/ yang dag par ni ma yin te (SDVV 4a3) zhes bden pas stong pa'i khyad par can kyi (read: gyi) snang pa la bshad do// de'i phyir shes bya tsam khyab ches pas/ de ltar dpyad na mi gnas pa'i shes bya ni kun rdzob kyi bden pa'i mtshan nyid do// de nyid la 'khrul pa'i dmigs pa zhes kyang bya'o//

全く異なるのである。これもまた、トルンパの説を直接的に論駁することを控え、換骨奪胎した上で可能な限り受容しようとするギャマルワの態度を如実に示す一例である。

(b) 勝義諦の定義

他方、勝義諦の定義についても同様に、最初にトルンパの見解を提示し、言葉の上では自説として受け入れた呈を示しつつ、それに対して直後に論難を提示し、最後に自説を設定するという議論を展開している。まず、トルンパの勝義諦の定義を提示する箇所は以下の通りである。

「勝義〔諦〕の定義は、如実に顕現するもの（=世俗）より「他のもの（gzhan ni）」(SDV 3d)、即ち、〈顕現の相を超えたもの（snang pa'i mtshan ma las 'das pa）〉であり、即ち、〈所知の相が存在しないもの（shes bya'i mtshan ma med pa）〉である。

〔それは、〕(1)分別知と無分別知の対象を超えたものであるので、〈知の対象でないもの（blo'i yul ma yin pa）〉、(2)語と分別知の判断基体を超えたものであるので、〈無戲論（spros pa med pa）〉、(3)有無等として成立していないので、〈無二（gnyis su med pa）〉、(4)如何なる法によっても表示されることがないので、〈無相（mtshan nyid med pa）〉、(5)有為の事物として存在しないので、〈非事物（dngos po med pa）〉、(6)不空として成立していないので、〈空性（stong pa nyid）〉である。即ち、如何なる相も存在していないものに対して、相（=定義）として設定して自性を否定する語句（rang bzhin 'gog pa'i tshig）<sup>160</sup>により言説されるに過ぎないのである」と

〔トルンパにより〕説かれた通りに、正しいのである（... zhes 'chad pa ltar legs so）。<sup>161</sup>（『二諦ギヤ註』10a2-4、cf.『教次第大論』pp.614.13-615.4）

トルンパは『教次第大論』において引用を間に介して二カ所に分けて勝義諦の定義を提示したが、ギャマルワは、第二の定義に示された五相に最初の定義

159 写本では、'du byed kyi chosとあるが、'dus byas kyi chosで読む。『教次第大論』p.615.1: 'dus byas kyi don; 『中観提要』p.18.12: 'dus byas kyi dngos po.

160 上述の「知の対象でないもの」「無戲論」等の六相を示す語句を指す。ここで「自性」とは、「知の対象」「戲論」等の一連の否定対象を含意する。勝義諦とは、「知の対象でないもの」「戲論がないもの」等の否定の形でしか言語表現できないという意味。

の一相を加えて合計六相としたものをここで挙げている。そして、それも世俗諦の定義の箇所と同様に、「正しいのである」と云って自説として受容しているように記している。

さらに後続の文章では、勝義諦が所知でないならば、どうして所知が二諦の分類基体として立てられるのかという懸案に対するトルンパの回答が引かれている。

〔質問：〕 そうであれば、〔二諦の〕 分類基体として所知のみ (shes bya tsam) を設定して、その特殊 (khyad par, i.e., bye brag) である勝義〔諦〕が所知を超えたもの (shes bya las 'das pa, i.e., 所知でないもの) であるのはどうして妥当であるのか、と云うならば、

〔回答：〕 矛盾しない。なぜならば、例えば、推論は、自身の思考の側から自相を理解すると思ひ込むことにより (rlom pas, i.e., zhen pas)、自相は推論の対象 (= 判断対象) であると認められるが、自性を認識する他の知 (rang bzhin sems pa'i blo gzhan, 直接知覚) により思考されるならば、自相は推論の対象 (= 顕現対象) として存立しないと立てられるように (= 以上、喩例)、(1) 戯論を断ずる推論により勝義〔諦〕を所知と思ひ込む思考の側に依拠するならば、勝義〔諦〕は所知の〔下位〕区分 (dbye ba, i.e., bye brag) であるので、所知の〔下位〕区分とされるのであり、そして、(2) 正理〔知〕の対象として真実であるものを〔勝義諦の〕名義として立てた<sup>162</sup>が、自性 ([rang] bzhin) を考察するならば、勝義〔諦〕は所知を超えたものに他ならないので、〔二諦の分類基体として所知のみを立てることと勝義諦を所知を超えたものと立てることの二つは〕矛盾しないの

161 don dam kyi mtshan nyid ni ji ltar snang pa las **gzhan ni** (SDV 3d) snang pa'i mtshan nyid las 'das pa ste/ shes bya'i mtshan ma med pa'o// rtog pa dang mi rtog pa'i yul las 'das pas blo'i yul ma yin pa/ sgra rtog gi zhen pa'i gzhi las 'das pas spros pa med pa/ yod med la sogs par ma grub pas gnyis su med pa/ chos gang gis kyang mtshon du med pas mtshan nyid med pa/ 'du byed kyi dngos por ma grub pas dngos po med pa/ mi stong par ma grub pas stong pa nyid de/ mtshan nyid 'ga' yang med pa nyid la mtshan nyid du rnam par bzhag nas rang bzhin 'gog pa'i tshig gis tha snyad du byed par zad do zhes (cf. TR pp. 614.13-615.4; A 359b6-360a5) 'chad pa ltar legs so//

162 『二諦ギヤ註』 8b4; 『教次第大論』 p. 610.2f. 参照。

である (=以上、実義)。] (『二諦ギヤ註』 10a4-6、cf. 『教次第大論』 p. 615.4-9)<sup>163</sup>

このギヤマルワの記述は、『教次第大論』の文章を受けつつ、それをより詳しく解説したものとなっている。このギヤマルワのパラフレーズの御陰で、簡略で難解な『教次第大論』の記述の意味がより容易に理解できるようになっている。トルンパの記述については既に解説を加えたが、このギヤマルワの解説に則って、再度解説を加えておくことにする。ギヤマルワによれば、トルンパの想定する喩例 (dpe) と実義 (don) の対応関係は以下の通りである。

喩例：火は、推論に顕現しないので、推論の対象 (= 顕現対象) ではないが、推論に顕現する火の対象普遍を火 (= 自相) と思い込むことを通じて、火もまた推論の対象 (= 判断対象) として立てられる。

実義：(1) 勝義諦は、戯論を断滅する推論に顕現しないので、推論の対象 (= 顕現対象) ではないが、推論に顕現する空性 (= 勝義諦) の対象普遍を空性と思い込むことを通じて、勝義諦もまた所知 (= 推論の判断対象) として立てられる。また、(2) 〈正理知の対象として真実であるもの〉が勝義諦の名義として立てられるので、その名義に依拠して、勝義諦は所知 (= 正理知の対象) として立てられる。

以上がトルンパの解釈を紹介した部分であるが、これに対して、ギヤマルワは以下のように批判している。

〔論主：〕 これについては、(1) 喩例 (dpe) も成立せず、(2) 実義 (don) も妥当ではないと思われる。なぜならば、(1) 推論により自相が理解されろと思込まれていることが、自性 (= 自相) を認識する知 (= 直接知覚) により否定されるならば、推論は認識手段として妥当しない。なぜならば、[他の認識手段による] 拒斥を有するものであるからである。

163 'o na dbye ba'i gzhi'i shes bya tsam la rnam par bzhag nas de'i khyad par don dam shes bya las 'das pa ci ltar 'thad ce na/ mi 'gal te/ dper na rjes dpag rang gi bsam ngo las rang gi mtshan nyid rtogs par rlom pas rang gi mtshan nyid rjes dpag gi yul yin zhes 'dod la/ rang bzhin sems pa'i blo gzhan gis (read: gyis) bsams na rang gi mtshan nyid rjes dpag gi yul du mi gnas so zhes 'jog pa ltar/ spros pa gcod pa'i rjes dpag gis don dam shes byar rlom pa'i bsam ngo la ltos na don dam shes bya'i dbye ba yin pas/ shes bya'i dbye bar byas pa dang/ rigs pa'i yul du bden pa ming gi don du bzhag pa yin la/ [rang] bzhin dpyad na don dam shes bya las 'das pa nyid yin pas mi 'gal lo//

〔他方、もし〕自性を認識する知が認識手段でないならば、推論の対象は自相のみとして存するので、勝義〔諦〕の定義である〈所知でないもの〉の喩例として甚だ妥当ではないのである。

それ故、推論は、〔その〕把握対象 (bzung yul) については、対象がないもの (don med pa, 実在しないもの、i.e., 普遍相) に対して対象 (= 自相) と判断するので、〔推論の対象は〕自相ではないと認められるが、〔その〕判断対象 (zhen yul) については、〔推論は、対象に対する〕関係 ('brel pa, \*pratibandha) に関して欺かないので、〔推論の対象は〕自相に他ならないと<sup>164</sup>認められるから、自相は推論の判断対象のみとして存する。それ故、勝義〔諦〕は、認識手段の判断対象としても存しないと認める喩例としてどうして妥当であろうか。

(2) 実義もまた妥当ではない。なぜならば、自性を考察する知 (= 勝義諦を認識する正理知) により、推論が勝義〔諦〕を対象と思い込むこと (= 判断すること) が否定されるならば、推論は〔判断対象ではなく〕把握対象に対して認識手段と立てられるか、あるいは、判断の思い込みの対象 (zhen pa'i lrom yul, i.e., zhen yul) はそれ (= 自性を考察する知) により否定されるからである。

〔勝義諦は、〕自性を考察する知 (= 正理知) の対象として、推論の対象を超えたものとして成立する〔と云う〕ならば、〔その場合には、〕勝義〔諦〕は所知として成立するが、その対象 (= 自性を考察する正理知の対象) としてすら成立しないならば、それ (= 自性を考察する正理知) は認識手段として妥当しない。なぜならば、認識対象を有しないからである。〕<sup>165</sup>  
 (『二諦ギヤ註』10a6-10b1)

ギヤマルワは、先にトルンパの見解を喩例と実義に分けて解説したが、そのいずれも成立しないと批判している。喩例に関する批判の趣旨は、端的には、トルンパは、自相を推論の対象として認めないのに対して、ギヤマルワは、それを推論の判断対象として認める点に帰着する。それ故、自相は推論の対象として存在するので、存在しないものを存在すると思い込む喩例として妥当では

164 紙葉端で文字が欠落している模様。文脈から、zhes [dod pas] と補足して訳しておく。



ないと批判するのである。もし自相が推論の対象として存在しないのであれば、推論は、存在しないものを存在すると思ひ込む誤知と変わらないことになるというのがギャマルワの批判の趣旨である。

他方、実義に関しても同様の批判が為されている。即ち、トルンパは勝義諦を正理知の対象でないにもかかわらず、正理知の対象と思ひ込まれていると考えているが、しかるに、ギャマルワにとっては、正理知が勝義諦に対して欺かない知 (= 認識手段) である以上、勝義諦は正理知の対象であるので、正理知の対象として存在しないものを存在すると思ひ込むこと自体があり得ないと云って批判する。両者の見解の相違は、ひとえに、勝義諦を正理知の対象として存在すると認めるか否かに帰着するのである。

このようにトルンパの見解を否定してから、勝義諦の定義に関する自説をこう提示している。

「それ故、勝義諦の定義は、「他のもの (= 顕現しないもの) は他方 (= 勝義) である」(SDV 3d) と云われるもの、即ち、〈[正理により] 考察せずに顕現のみとして働く知 (= 世俗の知) の対象より他のものとして存立す

---

165 'dir dpe'ang ma grub cing don yang mi 'thad par sems te/ rjes dpag gis rang gi mtshan nyid rtogs par rloms pa/ rang bzhin sems pa'i blo' gog na/ rjes dpag tshad mar mi rung ste/ gnod pa dang bcas pa'i phyir ro//

rang bzhin sems pa'i [blo] tshad ma ma yin na ni rjes dpag gi yul rang gi mtshan nyid pa kho nar gnas pas/ don dam gyi mtshan nyid shes bya ma yin pa'i dper shin du mi rung ngo//

des na rjes dpag ni bzung yul don med pa la don du zhen pas rang gi mtshan nyid ma yin zhes 'dod la/ zhen yul ni 'brel pa la mi slu bas/ rang gi mtshan nyid kho na'o zhes +++++ ('dod pas?) rang gi mtshan nyid rjes dpag gi zhen yul kho nar gnas pas/ don dam tshad ma'i zhen yul du'ang mi gnas par 'dod pa'i dper ji ltar rung/

don yang mi 'thad de/ rang bzhin dpyod pa'i blo' gog na/ rjes dpag gis don dam yul [du] rloms pa 'gog na/ rjes dpag tshad mar gzung don la 'jog gam/ zhen pa'i rlom yul ni des bkag pa'i phyir ro//

[rang] bzhin dpyod pa'i blo'i yul du rjes dpag gi yul las 'das par grub na ni don dam shes byar grub la/ de'i yul du'ang ma grub na ni de tshad mar mi rung ste/ gzhal bya dang mi ldan pa'i phyir ro//

る対象 (ma dpyad par snang pa tsam du 'jug pa'i blo'i yul las g[zhan par?]<sup>166</sup> gnas pa'i don) である。「正理の通りのものだけが勝義諦である」(SDVV 4a4 ad 3cd) という軌範師 (=ジュニャーナガルバ) 自身の註釈と一致するように解説したが、[以上のように語句を補足して解釈したことにより、軌範師に対して] 誹謗 (phyar ka) したことにはならないのである。』(『二諦ギヤ註』<sup>167</sup> 10b1-2)

『二諦分別論』3d では、勝義諦は知に顕現しないものと定義されるが、この定義を言葉通りに受け取るならば、勝義諦は正理知にも顕現しないことなる。しかるに、勝義諦を正理知の対象として認めるギヤマルワにとってはそれは受け入れられなかった。それ故、この定義に対して、考察せずに顕現のみとして働く知、即ち、世俗の知に顕現しないものという限定を付けることを通じて、勝義諦の定義を設定した。これは、ここに明記されているように、「正理の通りのものだけが勝義諦である」という『二諦分別論』3d に対する自註と一致するように会通を加えたものである。<sup>168</sup> この自註の内容は、ここでは言及されていないが、直後の第四偈及びその自註においてより明確に提示されている。即ち、

「欺くことがないので、正理は勝義である。 [勝義は] 世俗ではない。

[世俗は] そのように (=勝義諦のように) 欺かないものではないから。

顕現する通りのもの、それこそが [世俗] 諦である。」(SDV<sup>169</sup> 4)

「正理の力により対象を確定するもの (=正理知) は、欺くものとはならない。それ故、(1)三相の証因により生じた理解 (=知) は何であれ、勝れたもの (dam pa) でもあるが、義 (don) でもあるので、勝義である。(2) それによって決択された対象 (don, i.e., 正理知の対象) もまた勝義である。」

166 紙葉端で文字が欠落している。かろうじて ga と思しき文字が見えるので、内容から gzhan du/ gzhan par という語を想定しておく。『中観真実決択』では、勝義諦を dpyad na de ltar mi gnas pa'i shes bya las bzlog pa (考察したならばそのような存立しない所知 (=世俗諦) とは反対のもの) と定義しているが (同8b1)、その定義中の bzlog pa に相当する語が来るはずである。

167 des na don dam pa'i mtshan nyid ni/ **gzhan ni gcig shos yin** (SDV 3d) zhes bya ba ma dpyad par snang pa tsam du 'jug pa'i blo'i yul las g[zhan par?] gnas pa'i don te/ **rigs pa ji lta ba bzhin nyid ni don dam pa'i bden pa'o** (SDVV 4a4 ad 3cd) zhes slob dpon nyid kyi 'Grel pa dang mthun par bshad kyang/ phyar ka gtong pa mi 'byung ngo//

直接知覚 (mngon gsum, \*pratyakṣa) 等の如くに説かれるのである。』  
(SDVV 4a4-5 ad 4ab)<sup>170</sup>

ここには、正理知及びその対象は無欺であるので、勝義であると明記されている。ギャマルワは、実質的にこの第四偈及びその自註に随順して、第三偈に会通を加えて二諦の定義を設定した。しかるに問題は、ジュニャーナガルバ自身が、『二諦分別論』の第三偈後半と第四偈において、異なる二種類の二諦の定義を提示していることであり、その何れに随順するかにより、トルンパとギャマルワは解釈を異にしたことが分かる。その点については既に論じたので、<sup>171</sup>委細は省略し、結論だけ引いておこう。それは以下の通りである。

168 同様の会通は、『中観真実決択』にも見られる。同8b4: 'di la snang ba ji lta ba dang rigs pa ji lta ba zhes bya ste/ ba lang rdzi nas thams cad mkhyen pa'i bar du mig la sogs pa ma dpyad par 'jug pa'i yul dang/ da (read: de) ltar spros pa gcod pa'i rjes dpag gam/ lan cig rnam par mi rtog pa'i ye shes <nas> kyi yul lo// 「ここで、「顕現する通りのもの (snang ba ji lta ba)」(SDV 3c) と「正理の通りのもの (rigs pa ji lta ba)」(SDVV 4a4 ad 3cd) と云うのは、[順に、] (1)牛飼いから一切智者までの眼等の考察せずに働く [知の] 対象と、(2)そのように戯論を断ずる推論、ないし、\* 無分別智の対象である。」(cf. Hugon/Vose 2018, p. 43) \*語頭に付された lan cig という語は、チベット語としては「一度」の意味で、TSD では、yugapat; sakrt (同時) 等の用例を出す(同 p. 2296)、この文脈では意味が取れないので、暫定的に訳出を控える。

ここで SDV 3c に「顕現する通りのもの」と云うのは、牛飼いから一切智者に至る全ての者の「考察せずに働く [知の] 対象 (ma dpyad par 'jug pa'i [blo'i] yul)」と解説されていることに留意されたい。つまり、正理により考察することなく働く、世俗の事物を認識する知に顕現するものが世俗諦であって、全ての知に顕現するものが世俗諦と見なされるわけではない。他方、勝義諦とは、「正理の通りのもの」、即ち、戯論を断ずる有分別の推論や聖者の無分別智の対象として立てられる。端的には、正理により考察する知の対象である。同様の記述は、後で紹介する小結の部分(『二諦ギャ註』10b3-4)にも見出される。

169 slu ba med pas rigs pa ni// don dam yin te kun rdzob min// de ltar mi slu min phyir te// ji ltar snang ba de nyid bden//

170 rigs pa'i stobs kyis don la nges pa ni slu bar mi 'gyur te/ de'i phyir tshul gsum pa'i rtags kyis bskyed pa'i rtogs pa gang yin pa de ni dam pa yang yin la/ don yang yin pas don dam pa'o// des gtan la phab pa'i don kyang don dam pa ste/ mngon sum la sogs pa bzhin du brjod do//

- トルンパの解釈：SDV 3cd をジュニャーナガルバの密意と見なして、知に顕現せず、無二にして、無戯論なものを勝義諦の定義として立てる。
- ギヤマルワの解釈：SDV 4 をジュニャーナガルバの密意と見なして、正理知の対象を勝義諦の定義として立てる。その際、SDV 3cd に対しては、顕現するもの一般ではなく、正理により考察せずに顕現するものが世俗であると会通して、正理により考察して顕現するものは、世俗ではなく勝義であると解釈する。

問題は、何れの規定がジュニャーナガルバの密意であるかであるが、それについても、既に考察したように、正理を勝義と規定したのは、《相応する勝義 (mthun pa'i don dam)》であり、真の意味での勝義ではない。真の意味での勝義の規定を述べたのは、勝義を知に顕現しないものとする第三偈である。このことは、『二諦分別論』においてジュニャーナガルバ自身が明言しているところである。

「正理 (rigs pa) もまた、顕現する通りの自性 [を有するもの] であるので、世俗に他ならない。正理は、[世俗より] 他のも (=勝義) には働かないのである。」(SDVV 9b5 ad <sup>172</sup>17)

ここでジュニャーナガルバは、正理 [知] が世俗であること、及び、それは、真の意味での勝義には働かないことを明言している。それ故、ジュニャーナガルバの密意は、真の意味での勝義は、顕現せず、如何なる知の対象ともならないものであり、有無の何れとも規定されない無二であり、戯論が寂靜したものであると解釈するべきである。即ち、前者の解釈こそがジュニャーナガルバの密意に他ならない。<sup>173</sup>それ故、第四偈に示された勝義を真の意味での勝義と捉え、勝義を正理知の対象と見なすギヤマルワの解釈は、端的には、ジュニャーナガルバの密意からは逸脱したものであったと言えよう。

この点で興味深いのは、この第三偈に示された勝義こそが真の意味での勝義であり、「正理の通りのものだけが勝義諦である」(SDV 4a4 ad 3cd) という第三偈に対する自註及び第四偈に示されたのは、相応する勝義であり、真の意味で

171 西沢2018a, p. 43f. 参照。

172 rigs pa yang ji ltar snang ba'i ngo bo yin pa'i phyir kun rdzob kho na yin te/ rigs pa ni gzhan du mi 'jug go//

173 松本 1978, pp. 117-119.; 赤羽 2012, 128f. 参照。

の勝義諦ではないことは、実はギャマルワ自身が明言していることである。

「[正理の通りのものは] (SDVV 4a4 ad 3d) 等により、〈異名の勝義 (rnam grangs kyi don dam, i.e., mthun pa'i don dam)〉が、「顕現する通りの事物として」(SDV 5a) 等により、〈異名でない勝義 (rnam grangs ma yin pa'i don dam, i.e., don dam mtshan nyid pa)〉が簡略に説示されたと註釈 ('Grel pa, 自註) に説かれている。」(『二諦ギヤ註』<sup>174</sup> 6b8)

このことを念頭に置くならば、所引の文章において、ギャマルワが「正理の通りのものだけが勝義諦である」という自註の記述に随順して、勝義諦を設定したことについて、「[軌範師に対して] 誹謗 (phyar ka) したことにはならないのである」とわざわざ弁明を入れざるを得なかった理由がよく分かるのである。即ち、他ならぬギャマルワ自身、自らの解釈がジュニャーナガルバの密意に反するものであったことをよく理解していたのである。問題は、何故に、この自註の記述及び第四偈が、相応する勝義の規定に過ぎないと理解していたにもかかわらず、敢えてその規定に立脚して二諦説を設定したのかということである。その点を実際ギャマルワの中観思想の枢要にかかわる重要な問題であるので、稿を改めて検討することにしたい。何れにせよ、このギャマルワの見解が、直弟子のチャパ・チューキセンゲに受け継がれ、さらには、ゴク翻訳師師弟の見解と共に、チベットにおける空性理解の一つの大きな流れとなっていった。

以上、世俗諦と勝義諦の定義に関するギャマルワの見解を検討した。そこでギャマルワは、トルンパにより『教次第大論』に立てられた定義を最初に引ひいて「正しいもの (legs pa)」と評しつつも、後続の文章でそれを批判し、それとは全く異なる定義を立てたことが確認された。そこで、最後に、この二諦の定義の科段末に見られる小結の部分を紹介しておこう。

「それ故、全ての教義論者 (grub mtha' smra ba) は、(1) [正理により] 考察されない顕現の側のみ [の所知] (ma dpyad pa'i snang ngo tsam [gyi shes bya], i.e., 世俗諦) と、(2) 考察する正理 [知] の側の所知 (rnam par

174 rigs pa ji lta ba bzhin nyid ni (SDVV 4a4 ad 3d) zhes pa la sogs pas rnam grangs kyi don dam dang/ ji ltar snang pa'i dngos po ni (SDV 5a) zhes pa la sogs pa[s] rnam grangs ma yin pa'i don dam mdor bstan pa'o zhes 'Grel par 'chad do//

dpyad pa'i rigs ngo'i shes bya, i.e., 勝義諦) の二つを二諦として立てるので、全て [の教義論者] は、[二] 諦を承認する理由は一般に一致するが、〈正理により存立する対象 (rigs pas gnas pa'i don)〉というその同じ勝義諦の定義を、或る者 (= 実在論者) は、事物の法 (dngos po'i chos, i.e., bden grub) として認め、他の者達 (= 中観派) は、戯論から離れたもの (spros bral) に存すると認めるので、[その点に関して] 一致しないだけなのである。

それ故、[世俗諦と勝義諦は、順に、] (1) 「顕現する通りのもの (snang ba ji lta ba, cf. SDV 3c)」と(2)「正理の通りのもの (rigs pa ji lta ba, cf. SDVV 4a4 ad 3cd)」と云われる。即ち、「考察されない顕現対象だけのもの (ma dpyad pa'i snang yul tsam) と、考察 [する知 (= 正理知)] の対象 (rnam [par] dpyod pa'i yul) と他の軌範師 (slob dpon gzhan) の [説いている] 通りに、正しいのである。

しかしながら、「[考察する [知] の対象」と云うのは、否定対象 (= 戯論) を拒斥するに尽きるもの (dgag bya la gnod du zad pa, i.e., 否定対象を断除しただけのもの) に対して「対象 (yul)」と言説しているものであり、[実際には] 対象として存立するもの (yul du gnas pa) は存在しない」と[他の軌範師が] 説いていることは、[否定対象の] 断除のみ (rnam gcad tsam, \*vyavacchedamātra) が [勝義諦を理解する] 認識手段の認識対象 (tshad ma'i gzhal bya) であり、さもなくば、[勝義諦を理解する] 知は認識手段として妥当しないので、正しいものとは認められないのである。」(『二諦ギャ註』<sup>175</sup> 10b2-4)

この記述を見る限り、ギャマルワは、仏教の四学派は全て勝義諦の定義を〈正理により存立する対象〉と立てる点では一致するが、毘婆娑師、経量部、唯識派という三つの実在論者は、それを事物の法、即ち、真実成立と見做すのに対して、中観派は離戯論と認める点で相異すると解釈していたことが分かる。

さらに、世俗諦と勝義諦の定義の典拠として、順に、SDV 3c と SDV 4a4 が挙げられており、SDV 3d に示された勝義諦の定義、即ち、〈顕現しないもの〉は自説として採用されていないことが確認される。世俗諦の定義の典拠として挙げられた SDV 3c についても、全ての知に顕現するものではなく、あくまで、正理知以外の知に顕現するものと会通することは前述した通りである。

またここで注目すべきは、このギャマルワの解釈は、考察されない顕現対象

を世俗諦、考察する正理知の対象を勝義諦として立てる「他の軌範師」の説に通底すると述べられていることである。この「他の軌範師」という表現は、『二諦ギヤ註』には四カ所（10b4, 11b1, 11b8, 23a8）見いだされるが、シャーンタラクシタの『二諦分別論細註』の解釈と異なる解釈をこの人物が提示している箇所（同11b1）や、細註に見いだされない註釈をしている箇所（11b8<sup>176</sup>）があることから、シャーンタラクシタ以外の或るインドの論師であることは疑いない。また一箇所では複数形で示されている（同23a8）。しかるに、現大蔵経には『二諦分別論』に対する註釈はシャーンタラクシタの細註しか見いだされず、この人物が一体誰であるのかということは定かではない。この人物と典拠の同定は今後の検討課題である。

但し、この「他の軌範師」の見解は完全に受け入れられているわけではなく、それに対する批判もまた提示されており、興味深いのは、その批判の中に、ギャマルワが空性を如何なるものとして理解していたのかということを示す極めて注目すべき記述が見出されることである。即ち、この軌範師によれば、正理によって考察する知の対象、即ち、空性は、否定対象である戯論を拒斥、即ち、断除しただけのものであり、それに対して、「対象」と言語表現されるが、実際には対象として存立していないと云う。この軌範師の解釈は、空性を実際には

175 des na grub mtha' smra ba thams cad kyi/ ma dpyad pa'i snang ngo tsam dang/ rnam par dpyad pa'i rigs ngo'i shes bya gnyis la bden pa gnyis 'jog pas/ thams cad bden [pa gnyis] khas len pa'i rgyu mtshan nyid spyir mthun pas (read: pa) yin la/ rigs pas gnas pa'i don don dam pa'i mtshan nyid de nyid/ kha cig dngos po'i chos su 'dod/ gzhan dag spros bral la gnas par 'dod pas mi mthun par zad do//

des na **snang pa ji ta ba** (cf. SDV 3c) dang/ **rigs pa ji lta ba** (SDVV 4a4 ad 3cd) zhes bya ste/ ma dpyad pa'i snang yul tsam dang/ rnam [par] dpyod pa'i yul lo zhes slob dpon gzhan gyi ltar legs so//

'on kyang rnam par dpyad pa'i yul zhes bya ba dgag bya gnod du zad pa la yul zhes bsnayad kyi yul du gnas pa ni med do zhes 'chad pa ni/ rnam gcad tsam ni tshad ma'i gzhal bya yin te/ de lta ma yin na blo tshad mar mi rung pas legs par mi brtsi'o//

176 ... **ji ltar snang pa'i dngos po ni** (SDV 5a) zhes pa yin la/ 'thad pa gsum don gyis blta'o zhes slob dpon gzhan gsung pa ni/... この下線部で示した文章は、第五偈に対する『二諦分別論細註』の箇所に自説としても他説としても見いだされない（同18b4-7）、別の典籍から引いたものである。



知の対象として存在しないと見做す点でゴク師弟の解釈と通底するものであるが、ギャマルワは、それに対して、否定対象の断除のみ (rnam bcad tsam, \*vyavacchedamātra) を空性として立てる点については解釈を共にするが、しかるにその断除のみは、単に「対象」と言語表現されるだけではなく、勝義諦を理解する認識手段 (= 正理知) の認識対象として実際に存在していると認める必要があると強調する<sup>177</sup>。さもなくば、もし断除のみが対象として存在しないのであれば、その知は認識対象を有しないことになるので、認識手段として妥当ではないことになるからである。以上が他の軌範師の見解に対するギャマルワの批判である。このように、空性理解を巡っては、(1)トルンパの解釈、(2)他の軌範師の解釈、(3)ギャマルワの解釈の三つが挙げられたが、この三者の見解の相異を纏めるならば、以下の通りである。

- トルンパ：空性を正理知の対象とするのは、言説としてであり、勝義

177 同様の見解は、『中観真実決択』にも見いだされる。同8b4-5: rigs pa'i yul zhes bya ba yang yod pa la gnod du zad pa tsam la bsnyad kyi/ yul nyid du gnas pa ni med do zhes bya bas mtshan nyid 'chad pa ni/ rnam gcad tsam ji ltar rigs pa'i yul du gnas pa dang mi gnas pa dgag pa bshad pa'i lan yod na/ don dam gyi mtshan nyid de ltar khas blang ngo// 「[正理の対象 (rigs pa'i yul)] と云うものもまた、[真実として] 存在するもの ([bden par] yod pa\*, i.e., spros pa) に対して拒斥するに過ぎないもの (yod pa la gnod du zad pa tsam) を云っているのであり、「対象として存することはなく」と云うことにより定義を説いたのは、[否定対象が] 断除されただけのもの (rnam gcad tsam) が如実に正理の対象として存することと、[それが正理の対象として] 存しないことを否定したことを説いた回答があるならば、勝義の定義はそのように承認されるのである。」(cf. Hugon/Vose 2018, p. 43) \*写本には、yod pa の文字の直前に、dgag bya と傍註が入っているが、これは、dgag bya yod pa (否定対象が存在するもの) ではなく、yod pa を dgag bya と註記しているものと解する。端的には、この yod pa は、単なる「存在するもの」ではなく、「否定対象 (dgag bya)」として「存在するもの」、端的には、「真実として存在するもの (bden par yod pa)」 「勝義として存在するもの (don dam par yod pa)」を含意している。換言するならば、戲論の意味である。

ここでギャマルワは、勝義諦を、「[真実として] 存在するもの ([bden par] yod pa, i.e., spros pa) に対して拒斥するに過ぎないもの (yod pa la gnod du zad pa tsam)」や「[否定対象が] 断除されただけのもの (rnam gcad tsam)」と表現している。勝義諦 (= 空性) を真実有 (bden yod) や真実成立 (bden grub) と見なしているわけでは決してない。

- としては、空性は一切の知に顕現せず、有無の相を超えたものである。
- 他の軌範師：空性は、正理知の対象であるが、否定対象の断除のみに対して空性と言語表現しただけであり、実際には知の対象として存在していない。
  - ギヤマルワ：空性は否定対象の断除のみであり、それは知の対象として存在する。

ここに示したギヤマルワの見解は、実は、後代のゲルク派の空性理解と基本的に一致することを指摘しておく必要がある。後代のゲルク派の文献では、ギヤマルワやその弟子のチャパの中観説に言及する際には、否定されるべき前主張として引かれるのが常であった。例えば、タルマリンチェン (Dar ma rin chen, 1364-1432) は、『入菩薩行論』に対する彼の註釈の中でギヤマルワの説に対してこう言及している。

「古のトゥールン・ギヤマル [ワ] (sTod lung rGya dmar [ba]) 等の或る者は、「勝義は知の享受対象 (spyod yul, gocara) ではない」(BCA IX. 2c) という最初の脚を主張 (dam bca')、後 [の脚] (BCA IX. 2d) を証因 [を示すもの] として、「勝義諦は分別と無分別の何れの知の対象としても妥当ではない。即ち、知と知の対象であるならば、世俗諦であることによって遍充されていることは、後脚 (BCA IX. 2d) によって説示されていることにより成立している」と認めるが、それはあらゆる点で妥当ではない。」(『入行タル註』 p. 382.6-14<sup>178</sup>、cf. 『入行ギヤ註』 60a2-5)

この解釈は、後述するように、『入行ギヤ註』に基づく限りは正しくギヤマルワの解釈を捉えたものであるが、『二諦ギヤ註』ではその解釈は否定されたことは既に見た通りである。また、ツォンカパは、『了義未了義弁別・善説真髓』(Drang nges rnam 'byed legs bshad snying po) において、初期チベット人学者の解釈として三つの説を提示している。

「この派 (= 自立派) の真実執の意味を正しく確認していないことにより、

178 sngon gyi sTod lung rGya dmar la sogs pa kha cig don dam blo'i spyod yul min (BCA IX. 2c) zhes pa'i rkang pa dang po dam bca' dang/ phyi ma rtags su byas nas don dam bden pa rtog pa dang rtog med kyi shes pa gang gi yang yul du mi rung ste blo dang blo'i yul yin na kun rdzob bden pa yin pas khyab pa rkang pa 'og mas bstan pas grub bo zhes 'dod pa ni/ rnam pa thams cad du mi rigs te ...

正理知に認識対象が存在するならば、[それは] 真実成立 (bden grub) となる [と考えて]、古の学者達 (sngon gyi mkhas pa dag) もまた、(1)或る者は、まさにそのことを認めるが、(2)或る者は、正理知には対象がないことを [認め]、(2)他の者達は、正理 [知] と推論の反体 (ldog pa) を区別して [正理知と推論に] 対象の有無を立てる。』(『善説真髓』 p.129.12-15、cf. ツルティム/片野1998、p.74f.)

この三つの説について、チャンキャ・ロールペードルジェ (lCang skya rol pa'i rdo rje, 1717-1786) は、恐らくはこの『善説真髓』の記述を念頭において、空性を真実成立と認める説をチャバ、正理知に対象がないことを認める説をゴク翻訳師師弟に比定している<sup>179</sup>。その点で、空性を否定対象を断除しただけの真実無 (bden med) と見做すゲルク派の解釈とは根本的に区別されているが、しかるに、その比定の妥当性については原典資料に基づく慎重な検討が必要となっている。第二説をゴク翻訳師師弟に帰することは妥当であるが、第一説をチャバに帰することについては再検討が必要である。少なくとも『二諦ギヤ註』に見られるギヤマルワの解釈は、ゲルク派の解釈を完全に先取りしたものとなっており、チャバの解釈もまた基本的にギヤマルワのそれに随順したものである<sup>180</sup>ので、同様の立場であったことが推定されるからである。その委細については、

179 『チャンキャ教義書』 p.237.14-22: 「……このことは、この説 (= 自立派説) の難解な箇所であり、この相違を正しく区別しないことに依拠して、古の大学者ゴク翻訳師師弟 (rNog lotstsha ba yab sras) もまた、勝義諦は所知 (shes bya) でないとお認めになり、正理の主チャバ・チューキセンゲ (rig[s] pa'i dbang phygs Cha pa chos kyi sengge) もまた、真実無は真実成立 (bden grub) であるとお認めになること等多数の迷乱が生じたとジェ・ダンニーチェンポ (rJe bdag nyid chen po, i.e., ツォンカバ) は御説きになっている。」

同様の同定は、ジクメタムチューギャンツォ ('Jigs med dam chos rgya mtsho, 1989-1946) の『善説真髓大註』 p.458.4-9にも見いだされる。但し、『善説真髓』に見られる第三説をトルンパの説に比定しているが、それは妥当ではない。

180 実際、ゲー翻訳師シヨンスベル ('Gos lo tsā ba gZhon nu dpal, 1392-1481) はチャバの解釈をこう表現している。『青冊』 p.424.4-6: 「軌範師チャバは、諸事物が真実として空であるという無否定 (dngos po rnam bden pas stong pa'i med par dgag pa) が勝義諦であり、それは語と分別知の判断対象 (sgra rtog gi zhen pa'i yul) としてもお認めになっている。」 これによれば、チャバは空性を真実成立ではなく、真実無と解釈していたことになり、ゲルク派の解釈と一致する。

稿を改めて検討することにしたい。

付論. 『入菩薩行論註』と『中観真実決択』における二諦の定義について

(a) 『入菩薩行論註』における二諦の定義

以上、ギャマルワの『二諦分別論』の註釈を資料として、彼の二諦の定義に関する見解を、特に、トルンパの解釈と比較対照しつつ検討した。そこで参考までに、ギャマルワの『入菩薩行論』の註釈(『入行ギャ註』)と『中観真実決択』に見出される二諦の定義に関する自説の箇所だけ紹介しておこう。この二つの著作については、稿を改めて検討する予定であるが、上述したように、二諦説の設定において、二諦を如何に定義するのかということは最も重要な問題であり、二諦説の解釈に異同がある場合には、まず、その定義の設定に如実に反映するので、その点だけ本稿で確認しておきたい。まず『入行ギャ註』では二諦は以下のように定義されている。

「以上のように、[二諦の] 分類を説示してから、定義を説示するものは、「勝義は知の享受対象ではない」(BCA IX. 2c) と云うものである。即ち、[勝義諦は] (1)分別と無分別の知の全ての対象を超えたものである。(2) 戲論が存在しないものでもある。語と分別知の判断対象でないから。(3) 二として存在するものでもない。有と無の二つ、ないし、常住と無常の二つ等が成立していないから。要するに、一切の相を超えたもの (mtshan nyid thams cad las 'das pa) に対して勝義諦の定義と言説したのであり、即ち、如何なる法によっても表示されるべきものとして存在しないもの、相 (= 定義) が存在しないものこそが、勝義諦であるので、「知の享受対象ではない」と云われるのである。

[質問:] 何故か、と云うならば、

[回答:] 「知は世俗であると云われる」(BCA IX. 2d) と云う。一切の知は迷乱した世俗のものであるから、知の対象は全て世俗諦であるので、世俗諦より反対のものである勝義諦は知の対象ではないと成立するのである。これにより、勝義は知の対象でないという正理 (thad pa) として言表されたので、全ての知の対象 (blo'i yul mtha' dag) は世俗諦の定義であると単一の [知の] 働きにより (jug pa cig gis) 成立する。」(『入行ギャ註』 60a2-5)<sup>181</sup>

ここでギャマルワは、BCA IX. 2c に基づき勝義諦に三つの相を提示している。即ち、(1)全ての知の対象を超えたものであること、(2)無戲論、(3)無二の三つである。これらは何れも『教次第大論』に提示されていたものであるが、その全ての相が言及されているわけではない。さらに、勝義諦は一切の相を超えたものであるので、相 (= 定義) は存在しないと解釈する。これもまた『教次第大論』に示されたトルンパの解釈と完全に一致している。先に、二諦の分類の意味の箇所、ギャマルワは、『入行ギャ註』では、トルンパに随順しており、『二諦ギャ註』とは異なる解釈を取っていることを指摘したが、そのことはこの定義の箇所からも確認されるのである。その場合、一切の所知は世俗諦となるが、そのこともトルンパと同様に、ギャマルワもここで認めている。

(b) 『中観真実決択』における二諦の定義

他方、『中観真実決択』では、二諦はそれとは別様に解説されている。即ち、まず世俗諦については、以下のように定義されている。

「〈考察するに耐えない所知 (brtag bzod ma yin pa'i shes bya)〉が世俗  
[諦] である。即ち、

「顕現する通りのもののみが世俗であり」(SDV 3c)

と云うことにより、〈考察せずに顕現する限りのものとして働く [知] の

---

181 de ltar dbye' ba bstan nas/ mtshan nyid ston pa ni/ **don dam blo'i spyod yul min** (BCA IX. 2c) zhes bya' ba ste/ rtog pa dang mi rtog pa'i blo'i yul thams cad las 'das pa'o// spros pa med pa yang yin te/ sgra dang rnam par rtog pa'i zhen pa'i yul ma yin pa'i phyir ro// gnyis su med pa'ang yin te/ yod pa dang med pa gnyis sam/ rtag pa dang mi rtag pa gnyis la sogs pa ma grub pas so// mdor na mtshan nyid thams cad las 'das pa la don dam pa'i mtshan nyid du tha snyad byas pa ste/ chos gang gis kyang mtshon par byar myed pa mtshan nyid med pa nyid don dam pa yin pas/ **blo'i spyod yul min** (BCA IX. 2c) zhes bya'o//

ci'i phyir zhe na/ **blo ni kun rdzob yin par brjod** (BCA IX. 2d) ces smos ste/ blo thams cad 'khrul pa kun rdzob pa yin pa'i phyir blo'i yul mtha' dag kun rdzob kyi bden pa yin pas/ kun rdzob kyi bden pa las bzlog pa don dam pa'i bden pa blo'i yul ma yin par grub po// 'dis ni don dam blo'i yul ma yin pa'i 'thad par brjod pas blo'i yul mtha' dag kun rdzob kyi bden pa'i mtshan nyid yin par 'jug pa cig gis grub po//

所縁 (ma dpyad par snang tshod du 'jug pa'i dmigs pa) が言表されているので、[〈考察するに耐えない所知〉という] この意味こそが [世俗諦の定義として] 捉えられる。即ち、

「世俗において [壺等は] 真実として存するのであり、真には (yang dag par ni, i.e., 勝義としては) [真実] ではない」(SDVV 4a3 ad 3c) と説かれているからである。知の対象 (blo'i yul)、<sup>182</sup>即ち、所知のみもまた、世俗より別異の法であるから、そして、勝義に対して過遍充であるので、<sup>183</sup>[世俗諦の] 定義として認められない。 (『中観真実決訳』8a6-7, cf. Hugon/Vose 2018, p. 41)

ここでは、『入行ギャ註』の解説とは一転して、先に紹介した『二諦ギャ註』と同様の解説が見られる。即ち、勝義諦が知に顕現しないというのは、考察せずに顕現する限りのものとして働く世俗知に顕現しないと云う意味であり、正理知を含む全ての知に顕現しないことを意味しない。勝義諦は知の対象と認められるので、知の対象を世俗諦の定義として立てるならば、勝義諦に対して過大適用される過失があると云う。以上のことは、全て『二諦ギャ註』に見いだされることであるので、解説は無用であろう。このように世俗諦を規定してから、勝義諦を以下のように定義する。

「[勝義諦とは、] 〈考察したならばそのように存立しない所知 (= 世俗諦) とは反対のもの (dpyad na de ltar mi gnas pa'i shes bya las bzlog pa)〉、〈真実として正理により<sup>184</sup>考察したならば存立するもの (de kho na nyid du sems (read: rigs?) pas dpyad na gnas pa)〉である。即ち、

「勝義として真実であるものが、勝義諦である。それは、正理に随行することを有する真実 (rigs pa'i rjes su 'gro ba can gyi bden pa) という

182 傍註には、この chos という語に対して、don ldog (意味反体) と註記されている。

183 brtag bzod ma yin pa'i shes bya ni kun rdzob ste/ **ji ltar snang ba 'di kho na kun rdzob** (SDV 3cd) ces bya bas/ ma dpyad par snang tshod du 'jug pa'i dmigs pa brjod pas don 'di nyid bzung ba yin te/ **kun rdzob du bden pa rnam par gnas kyi yang dag par ma yin te** (SDVV 4a3 ad 3cd) zhes 'byung ba'i phyir ro// blo'i yul te shes bya tsam yang kun rdzob las chos tha dad pa'i phyir dang/ don dam pa la khyab ches pas mtshan nyid du mi 'dod do//

184 写本では、sams pas とあるが、文脈から、rigs pas と修正して読む。

意味である」(SDVV 4a4 ad 4)

と説かれている。

それもまた、一切の教義論者の勝義諦の定義であるが、[中観派より]他の者達は、[勝義諦を]事物の法 (dngos po'i chos) と認めるが、中観派は、離戲論に存するもの (spros bral la gnas pa) と認めるので、一致しないに尽きるのである。」(『中観真実決択』 8a6-b2、cf. Hugon/Vose 2018, p. 42)

勝義諦は、『二諦分別論』では、第三偈後半において顕現しないものと定義されているが、それには触れることなく、正理知及びその対象を勝義諦と規定する後続の第四偈及びその自註に随順して、二諦を定義していることが確認される。筆者は先に、ギャマルワは、『二諦分別論』に立てられた二種の二諦説のうち、第四偈に随順して、正理知の対象を勝義として立てる立場を自説として採用したと解説したが(西沢2018a, p. 43)、そのことはこの『中観真実決択』からも確認されたことになる。

また、勝義諦の定義は四学派に共通しているが、实在論者の前三派はそれを事物の法と認めるのに対して、中観派は離戲論と認めることもまた、先に紹介したように、『二諦ギャ註』(10b2-3)にも説かれているところである。

ところで、このように正理知の対象を勝義諦として立てる場合には、当然のことながら、「勝義は知の享受対象ではない」と明言する『入菩薩行論』(BCA IX. 2c)や、知に顕現しないものを勝義諦と定義する『二諦分別論』(SDV 3d)に対して如何に密意を立てるかという点が問題となる。この点については、後続の文章においてギャマルワは会通を提示しており、その後で、「軌範師ゲシェ達 (slob dpon dge bshes dag)」<sup>186</sup>の見解を挙げて詳しく論駁しているが、その見解は、まさに『教次第大論』に見られるトルンパの見解に他ならない。即ち、

185 dpyad na de ltar mi gnas pa'i shes bya las bzlog pa/ de kho na nyid du sems (read: rigs?) pas dpyad na gnas pa ste/ **don dam par bden pa ni don dam pa'i bden pa ste/ de ni rigs pa'i rjes su 'gro ba can gyi bden pa nyid ces bya ba'i tha tshing go** (SDVV 4a4 ad 4) zhes gsungs pa yin no//

\*de yang grub mtha' smra ba thams cad kyi don dam pa'i mtshan nyid yin la/ gzhan dag dngos po'i chos su 'dod la/ dBu ma ba spros bral la gnas par 'dod pas mi mthun par zad do// \* Cf. SDV rGya tik, 10b2-3.

186 『中観真実決択』 8b3-7参照 (cf. Hugon/Vose 2018, p. 43)。



「軌範師ゲシェ達 (slob dpon dge bshes dag) は、以下のようにお認めになる。即ち、勝義諦の定義は、所知のみ (shes bya tsam) をも超えたもの [である] ので、空や不空等は如何にしても知の対象ではない。それ故、[シャーティデーヴァは] 「勝義は知の享受対象ではない」 (BCA IX. 2c) とお説きになったのである。」 (『中観真実決択』 8b7-8、cf. Hugon/Vose 2018, p. 44)

『中観真実決択』の写本には、この「軌範師ゲシェ達」に対して、Khyung Lo tsa と傍註が付されているが (同8a7)、これは、キュン・リンチェンタク (Khyung rin chen grags) とゴク翻訳師を示している。但し、「ゲシェ (dge bshes, \*karyāṇamitra, 善知識)」という尊称は、この時代の文脈では、概してトルンパに対して適用されるものである。ここでは、むしろ、「軌範師ゲシェ」はトルンパを指し、「達 (dag)」という複数形によりキュンやゴク翻訳師が含意されていると解釈しておきたい。<sup>187</sup> 実際、それに後続する文章 (同8b8ff) には、分類基体として所知を立てる問題が議論されており、ギャマルワはそれを喩例と実義の点から批判しているが、この議論は、既に指摘したように、『二諦ギャ註』にも見られるのであり、トルンパの『教次第大論』に遡ることは既に論じた通りである。

以上、『入行ギャ註』と『中観真実決択』に見られるギャマルワの二諦の定義

187 slob dpon dge bshes dag 'di ltar bzhed de/ don dam pa'i bden pa'i mtshan nyid ni/ shes bya tsam las kyang 'das pas stong pa dang mi stong ba la sogs pa ci ltar yang blo'i yul ma yin pas na/ **dom dam blo yi spyod yul min** (BCA IX. 2c) zhes gsungs pa yin no//

188 Hugon/Vose 2018, p. 44には、この説を Jo btsun pa の説に帰しており、『教次第大論』との関係は指摘されていない。この Jo btsun pa という尊称は、Jo btsun Khyung という形で、『青冊』や『カダム明灯史』に見出されるが、後者では、ギャマルワと並置されているところから、その師である Khyung rin chen grags を指すことが分かる。『青冊』 p. 495.12f.; 『カダム明灯史』 p. 627.15 参照。このことは、プトウンの聴聞録所収の『入菩薩行論』の師資相承の系譜にも、同名の人物がゴク翻訳師とギャマルワの間に見出されることから確認される。これについては、西沢2011b, Vol. 1, p. 176を参照。

189 『中観真実決択』 8b6-9a5 参照 (cf. Hugon/Vose 2018, p. 44f.)。

を確認した。そこから、ギャマルワは、『入行ギャ註』では、トルンパと同様に、勝義諦を知の対象と見なさない立場を取っていること、及び、『二諦ギャ註』と『中観真実決択』では、それとは異なり、勝義諦を正理知の対象と認める立場を採用していることが明らかとなった。このことから、この三つの著作のうち、ギャマルワの独自の解釈がまだ見いだされない『入行ギャ註』が最も古い著作であると推定される。恐らくはその後に『二諦ギャ註』が、そして最後に彼の中観思想の真髄を纏めた『中観真実決択』が著作されたものと推定される。その委細については稿を改めて検討しよう。

#### (6) 二諦の定義を確定する認識手段について

以上、二諦の定義に関するギャマルワの見解を検討したが、その二諦の定義を確定する認識手段が、二諦の一般的設定の最後の科段として論じられている。まず勝義諦の定義を確定する認識手段についてはこう解説している。

「[二諦の] 定義の自性を解説してから、[その定義を] 確定する認識手段とは、勝義 [諦] の一般的定義は離戲論 (spros bral) に存すると [理解する]<sup>190</sup> (1)無顕現の智 (snang pa med pa'i ye shes) である直接知覚の認識手段か、あるいは、(2)離一多等の証因により確定する推論である。

それ故、勝義 [諦] の定義が [トルンパが立てるように] <所知を超えたもの (shes bya las 'das pa)> であるならば、それを確定する知はあり得ない。所知でないものを知らしめるならば、大凶兆の罪悪 (ltas ngan che [ba'i] sdig pa) である。」(『二諦ギャ註』<sup>191</sup> 10b4-6、cf.『教次第大論』 p. 616.9-11)

この記述の前半部分は、トルンパの『教次第大論』に見られる解釈に他ならない。この解釈は、トルンパ自身は勝義の立場から否定するが、ギャマルワは

190 この記述を見る限り、ギャマルワは、離戲論を勝義の定義 (mtshan nyid) ではなく定義基体 (mtshan gzhi) と見なしていたことが分かる。

191 mtshan nyid kyi rang bzhin [bshad] nas/ nges par byed pa'i tshad ma ni/ don dam kyi (read: gyi) spyi'i mtshan nyid srpos bral la gnas par/ snang pa med pa'i ye shes mngon sum gyi tshad ma'am/ gcig dang du bral la sogs pa'i rtags kyis nges pa'i rjes dpag go//

des na don dam gyi mtshan nyid shes bya las 'das pa yin na/ de nges par byed pa'i blo mi srid de/ shes bya ma yin pa shes par byed na ni ltas ngan che [ba'i] sdig pa yin no//

自説として受け入れている。他方、後半部分は、トルンパの解釈に対する批判となっている。つまり、トルンパのように勝義諦を所知を超えたものと定義するならば、その定義を確定する知は存在しないことになる。なぜならば、それは知によって知られるべきもの(=所知)ではないから。それにもかかわらず、トルンパは勝義諦の定義を確定する認識手段を立てているので、その点を批判した論難である。ここでギャマルワは、トルンパの見解を「大凶兆の罪悪」と表現し厳しく批判していることが注目に値する。

尤もトルンパの立場では、勝義諦は真実としては確かに存在しないが、言説としては正理知の対象として存在すると分別され、その言説の立場に立脚して勝義諦の定義を確定する認識手段を立てたわけである。しかるに、ギャマルワはそのような二諦のレベルの差を使い分けをしないので、その点に議論の食い違いが見られることも確かである。

他方、世俗諦の定義を確定する認識手段については、ギャマルワはトルンパとは異なる解釈を提示している。即ち、

「世俗諦を確定するものは、(1)真実の正理 (bden pa'i rigs pa, i.e., 真実 (= 空性) を理解する正理知) により、[壺等が] 考察するに耐えるもの (dpyad bzod) [であること] を否定し、(2) [正理により] 考察しない知により、[壺等を] 顕現分 (snang ngo, lit. 顕現の側面) [として] 設定した時、[壺等は] そのように考察するに耐えるものではない対象 (dpyad bzod ma yin pa'i don) として確定されるので、[世俗諦は、以上の] 二つの認識手段の作用から確定されるのである。」(『二諦ギャ註』<sup>192</sup>10b6)

トルンパは、世俗諦の定義を確定する認識手段として、〈推論により行が堅固にされた直接知覚 (rjes dpag gis 'du byed brtan par byas pa'i mngon sum)〉を立てた。それは恐らくは空性を理解する推論を繰り返して修習することを通じて得られた習慣性を有する直接知覚を指すものと推定したが、ギャマルワはそれとは全く異なる解釈を提示している。即ち、ギャマルワによれば、例えば、壺等が世俗諦であることを確定するのは、(1)壺等が正理により考察するに耐えるものであることを否定する認識手段 (= 正理知) と、(2)壺等を顕現分として設定す

192 kun rdzob kyi bden pa nges par byed pa ni/ bden pa'i rigs pas dpyad bzod bkag cing/ ma dpyad pa'i blos snang ngo rnam par bzhag pa'i tshe/ de ltar dpyad bzod ma yin pa'i don du nges par byed pas/ tshad ma gnyis kyi byed pa las nges so//

る考察しない認識手段 (= 言説の知) の二つの作用により、世俗諦として確定されると理解するのである。壺等の世俗の事物が考察するに耐えないこととそれが顕現分に過ぎないことは、単一の知の直接的・間接的対象ではなく、それぞれを別個に理解する二つの認識手段を立てる点にギャマルワの解釈の特徴があると言えよう。

このようなギャマルワの解釈は、世俗諦の定義を確定する為には、それが正理により考察に耐えない虚偽なものであることを理解する必要があり、その為には、正理により考察に耐える真実なものである勝義諦を理解する正理知が既に獲得されていることを前提とするものである。それ故、ここには明記されていないが、ギャマルワの解釈では、勝義諦の理解が世俗諦の理解に先行する必要があることになる。このような解釈は、後代のゲルク派の解釈と一致するものであり、ここからも、ギャマルワの二諦説がゲルク派の二諦説の源流にあったことが推察される。この両者の連関については、稿を改めて検討しよう。

(7) ギャマルワの思想的立場—幻喩派と不住派に関連して—

以上、ギャマルワの二諦説の基本的設定を概観した。最後に、この二諦説の議論から読み取れるギャマルワの思想的立場について簡単に考察しておきたい。ギャマルワの『二諦分別論』の註釈には見いだされないが、彼の『入菩薩行論』の註釈には、分類の意味の科段の箇所<sup>193</sup>に、ギャマルワの中観説の系統に関して極めて興味深い記述がある。即ち、

「この分類の意味は、不住派の説 (Rab tu mi gnas pa'i lugs) に依拠して設定されたのである。幻喩派 (sGyu' ma lta bu) は、所作と無常の如くに、二諦を同一自体に二つの法の区別 [があるもの (= 同一自体にして別異反体)] と認めるが、この軌範師 (= シャーンティデーヴァ) の説ではないので、前者 (= 不住派の説) の通りである。」(『入行ギヤ註』59b4-5)

ここに言及された「幻喩派 (sGyu ma lta bu, \*Māyopamādvayavādin, 幻喩不二論者)」と「不住派 (Rab tu mi gnas pa, \*Sarvadharmāpratiṣṭhānavādin, 一切法不住論

193 dbye ba'i don 'di ni Rab tu mi gnas pa'i lugs la ltos te rnam par bzhag pa'o//  
sGyu' ma lta bu' ni byas pa dang mi rtag pa bzhin du bden pa gnyis dngos po cig  
la chos kyi dbye' ba gnyis su 'dod mod kyi/ slob dpon 'di'i lugs ma yin pas snga ma  
ltar yin no//

者)は、インドに起源する中観派の分類として、アドゥヴァヤヴァジュラ (Advayavajra) の『真実宝環』(Tattvaratnāvalī, D 2240) やシューラ (Śūra, Tib. dPa' bo, alias, Aśvaghōṣa, Tib. rTa dbyangs) に帰される『勝義菩提心修習次第書』(Paramārthabodhicittabhāvanākrama-varṇasamgraha, D 3912) 等のインド後期の学説綱要書に見いだされることは夙に知られるところである<sup>194</sup>。また、この両学派はゴク翻訳師の『甘露一滴』第十四偈にも言及されているが、そこでゴク翻訳師は中観派をその二つに分けることには批判的な評価を下している<sup>195</sup>。この両学派は順に自立派と帰謬派に比定されることもあるが、その妥当性は後で検討することとして、ここでギャマルワは、この分類を受け入れ、かつ、二諦の分類の意味に関する設定は不住派の説に依拠するものであることを明記している。これに対して、二諦を、所作と無常の如く、同一自体において二つの法の区別が認められるもの、即ち、〈同一自体にして別異反体〉と見なす説は、幻喩派の説であり、それはシャーンティデーヴァの説ではないので、同書ではそれを否定し、不住派説に随順するとある。ここで、不住派説とされた同書におけるギャマルワの自説は以下の通りである。

194 この幻喩派と不住派については、小林守の一連の研究がある(小林 1991ab、1993、2008)。幻喩派と不住派に言及するインド原典は上記二書以外にも見いだされるが、それについては、小林 2008、pp. 194-197に纏められている。『勝義菩提心修習次第書』の著者と著作年代については、小林 1991、pp. 183-187に考証がなされているが、それによれば、同書は九世紀頃の成立とされる(同 p. 186)。

この両派については、ツォンカパはこう解説している。『道次第小論』p. 292.8-14: 「勝義を主張する仕方の点から名付けられたものもまた二つである。即ち、(1)芽等の有法と真実無の顕現の集合体を勝義諦と認める幻理成就派(sGyu ma rigs grub pa)と、(2)顕現において戯論を断除した断定を勝義諦と認める不住論者(Rab tu mi gnas par smra ba)である。その二つのうちの前者は、軌範師シャーンタラクシタとカマラシーラ等であると認めるが、幻喩と不住の言説は或るインド人もまた認めるのである。勝義を主張する仕方の点から [中観派を] 二つに立てることは愚者を賛嘆させる設定であると大翻訳師 (=ゴク翻訳師) はお説きになっている。」(ツルティム/高田 1996、p. 5参照。)

195 同偈のテキストと和訳については、順に、加納 2007、p. 152; 加納 2009、p. 128 参照。なお同書では、この両学派は、rGyu ma gnyis med [pa] と Chos kun mi gnas [pa] と表記されているが、梵語原語により忠実な訳である。ゴク翻訳師による批判については、小林 1993、p. 474f., 2008、pp. 197-199参照。

「それならば、「二種類の諦 (bden pa rnam pa gnyis)」と云われる意味は何であるのか、と云うならば、同一のものとも他のものとも言表されることのないこと (de dnyid dang gzhan du brjod du med pa)、即ち、同一なものとして成立しないことのみ (cig tu ma grub pa tsam) により、[諦は] 二つである。」(『入行ギャ註』 59b1-2)<sup>196</sup>

この見解は、『教次第大論』に説かれた「それ自体とも他のものとも言表されないことにより同一が否定されただけの別異」(同 p. 610.18f.)、即ち、〈同一が否定された別異〉の説に他ならない。前述したように、同じ表現をギャマルワは『二諦分別論』の註釈においても使用しているが(『二諦ギャ註』 8b2)、それはトルンパの解釈を換骨奪胎したものであった。しかるに、ギャマルワは、この『入菩薩行論』の註釈においては、『解深密経』に示された同一を否定する論証を解説するとき、トルンパの『教次第大論』の記述を踏襲しており、それを『二諦分別論』の註釈に見られるように否定することを行っていない<sup>197</sup>。それ故、『入菩薩行論』と『二諦分別論』に対するギャマルワの二つの註釈の間には、明らかな思想的変遷が見られるのである。恐らくは、『入行ギャ註』は『二諦ギャ註』に先行し、その段階ではギャマルワはトルンパの説に随順して、二諦を〈同一が否定された別異〉と見做す説を取っていたが、後にそれを否定して、『二諦ギャ註』にみられるように〈同一自体にして別異反体〉と見なす説を取るに至ったのであろう。

同様の議論は、『中観真実決択』にも見出される。即ち、二諦の分類の意味の科段冒頭部で、ギャマルワは以下のように述べている。

「[分類の] 意味は、同一を否定したことのみ (gcig pa bkag pa tsam) により、[諦は] 二つである。同じものとも他のものとも言表されることがないので、顕現 (snang ba, i.e., 世俗諦) と空 (stong pa, i.e., 勝義諦) は、無区別の有法と法性 (dbyer myed pa'i chos can dang chos nyid) であり、相

196 'o na bden pa rnam pa gnyis zhes bya ba'i don gang zhe na/ de nyid dang gzhan du brjod du med pa ste/ cig du ma grub pa tsam kyis (read: gyis) gnyis so//. Cf. Ibid. 59a3: dbye' ba'i don ni shin du cig pa yang ma yin la/ shin du tha dad pa yang ma yin gyi de nyid dang gzhan du brjod du med pa cig bkag pa tsam kyi (read: gyi [s?]) rnam pa gnyis so//

197 『入行ギャ註』 59a5-6参照。

が全く同一のもの (mtshan nyid shin tu gcig pa, i.e., ldog pa gcig) でも、別異の自体 (ngo bo tha dad) でもない。

ここで、[二諦は] (1)区別が全く存在しないもの (dbye ba gtan myed pa, i.e., ldog pa gcig) か、あるいは、[区別が] 存在するとしても、(2)別異の自体 (ngo bo tha dad) であるか、あるいは、(3)同一の自体にして法により区別されたもの (ngo bo gcig la chos kyi[s] dbye ba, i.e., ngo bo gcig la ldog pa tha dad) か、(4)同一が否定されただけにより区別されたもの (gcig pa bkag pa tsam gyi[s] dbye ba, i.e., gcig pa bkag pa'i tha dad) であるかである。そのうち、第一と第二は、『解深密経』において説かれた四つの過失により否定されるべきであるが、第三と第四は、幻喩 [派] (rGyu ma [ba]) と不住派 (Rab tu mi gnas pa) の区分に基づき考察されるべきである。<sup>198</sup> (『中観真実決択』 2b1-2)

ここでギャマルワは、二諦の分類の意味として、言葉の上では〈同一を否定しただけの別異〉を認めているが、ただその直後に、相 (=反体) が同一であることと、自体が別異であることを否定しているので、『二諦ギヤ註』と同様に<sup>199</sup>、実質的に〈同一自体にして別異反体〉を認めていると解釈する必要がある。この〈同一を否定しただけの別異〉という表現もまた、トルンパは自体に結び付けたが、ギャマルワは反体に結び付けているので、トルンパの表現を換骨奪胎して使用していることに留意しなければならない。つまり、ここで〈同一を否定しただけの別異〉と云うのは、同一反体を否定しただけの別異という意味であり、トルンパのように二諦が同一自体であることを否定しているわけではない。そして、所引の文章の最後の記述に示唆されているように、第三の説、即ち、〈同一自体にして別異反体〉の説を幻喩派に、第四の説、即ち、〈同一が否

198 don ni gcig pa bkag pa tsam gyis gnyis ste/ de nyid dang gzhan du brjod du myed pas snang ba dang stong pa dbyer myed pa'i chos can dang chos nyid yin gyi/ mtshan nyid shin du gcig pa'am/ ngo bo tha dad pa ni ma yin no//

'dir dbye ba gtan myed pa'am/ yod na yang ngo bo tha dad pa'am/ ngo bo gcig la chos kyi dbye ba'am/ gcig pa bkag pa tsam gyi dbye ba las dang po dang gnyis pa ni dGongs 'grel nas gsungs pa'i skyon bzhi bzhis dgag par bya la/ gsum pa dang bzhi pa ni sGyu ma dang Rab tu gnas pa'i bye brag las dpyad par bya'o//

199 『二諦ギヤ註』 7a5f.: de ltar mtshan nyid kyang shin tu gcig pa dang/ dngos po tha dad la nyes pa dGongs pa nges 'grel par bzhi bzhi gsungs/



定された別異)の説を不住派に結び付けていることが確認される。

さらに、この同科段末には、以下のような注目すべき記述を残している。

「以上のように、[二諦の]分類の意味を考察することにより、勝義諦に基づき分派した中観の在り方 (phyogs 'dzin pa'i dbu ma'i tshul) は、軌範師 シャーンティデーヴァやジュニャーナガルバ等と一致するものとして捉えられる。[以上、]分類の意味を解説し終えた。」(『中観真実決択』<sup>200</sup> 5a8)

ここには「分派した中観 (phyogs 'dzin pa'i dbu ma)」という表現が見られるが、これは、「元祖の中観 (gzhung phyi mo'i dbu ma)」と対になる表現である。<sup>201</sup> 後者はナーガルジュナとアーリヤ・デーヴァ師弟の中観説を指すのに対して、前者は、後に中観派が複数に分裂した後の中観説を示す表現として後代の論書にも散見するが<sup>202</sup>、ギャマルワ自身、『中観真実決択』の冒頭部で中観派の分類を提示する際に使用している表現である。<sup>203</sup> ここでギャマルワは、特にシャーンティデーヴァとジュニャーナガルバの両者の名前を挙げているが、これはギャマル

200 de ltar dbye ba'i don dpyad pas don dam pa'i bden pa las phyogs 'dzin pa'i dbu ma'i tshul/ slob dpon Shan ta (read: ti) de ba dang Ye shes snying po la sogs pa dang mthun bar bzung ba yin no// dbye ba'i don bshad zin to//

201 後述するように、ギャマルワは、中観派を、gzhung phyi mo'i dbu ma pa と phyogs 'dzin pa'i dbu ma pa の二つに分類するが、ここで gzhung という語は、phyogs という語と対比的に用いられているので、「典籍」の意味ではなく、「中央 (dbus)」や「真ん中 (dkyil)」の意味で捉える必要がある。例えば、gzhung lam は、「本道/中央道」を意味する語である。『藏漢大辞典』pp. 2426、2429参照。phyi mo は、語義的には、「祖母」の意味だが、ここでは、「祖」ないし「元祖」を意味しており、具体的には、中観派の祖であるナーガルジュナ師弟を含意する表現である。その意味で、「元祖の中観派」と訳した。他方、phyogs 'dzin pa'i dbu ma pa という場合の phyogs は、「主張」や「立場」の意味ではなく、北方と南方のように、中央に対して、「方 (= 辺)」を意味しており、phyogs 'dzin pa'i dbu ma pa は、[二]方を捉える中観派、具体的には、後代、二派に分裂した後の中観派を指す表現である。その分派が何を指すのかが問題であるが、後代のゲルク派等の文献では、自立派と帰謬派の分類と解釈されたが、ギャマルワ自身は、勝義の設定に基づく幻喩派と不住派の分類や、世俗の設定に基づく瑜伽行中観派と外界実在論者の中観派の分類等を念頭に置いていたものと推定される。ギャマルワの中観派の分類は直後に図式化して挙げるので、それを参照されたい。

202 例えば、『道次第小論』p. 293; 『チャンキヤ教義書』p. 195. 参照。

203 『中観真実決択』2a4参照。

ワの中観説がその両者の系統に連なるものであることを示しており、彼の二諦説の思想的背景を考える上で重要な情報である。前述したように、トルンパもまたこの両者の中観説を前提としているので、その意味で、トルンパとギャマルワの思想的背景は共通していると言っても誤りではない。問題は、これらインドの論師達の中観説を如何に解釈するのかということであり、その点で両者は解釈が分かれたのである。

さらに、ここで留意すべきは、シャーンティデーヴァの位置付けについてである。ギャマルワは、『入行ギャ註』では、トルンパの解釈に随順して、二諦を〈同一が否定されただけの別異〉とする解釈を取ったが、それは、不住派の説であるとして、シャーンティデーヴァの見解を不住派説と見なしていた。しかるに、『中観真実決択』では、二諦を〈同一自体にして別異反体〉とする解釈を取りつつ、かつ、それはシャーンティデーヴァやジュニャーナガルバの説であるとしている。〈同一自体にして別異反体〉の解釈を幻喩派の説とすることは、前述した通り、『中観真実決択』でも認められているので、『中観真実決択』の立場からは、シャーンティデーヴァの説は、幻喩派の説であることになり、シャーンティデーヴァの位置付けについて『入行ギャ註』と『中観真実決択』の間には齟齬が見られることになる。その点を如何に解釈すべきであろうか。

この点については、恐らくは、シャーンティデーヴァの位置付けに関して、ギャマルワの中で解釈の変遷があったと考えるべきである。即ち、『入行ギャ註』の段階では、ギャマルワはシャーンティデーヴァを不住派の論師と解釈し、自身、不住派説に随順していたが、『中観真実決択』の段階では、不住派説を捨て、幻喩派説に立脚した。その際、シャーンティデーヴァを、ジュニャーナガルバ同様に幻喩派の論師と解釈するようになったということである。それ以外、ギャマルワは不住派説を批判することはあっても、シャーンティデーヴァを批判することは全くなかった。

そこで問題となるのは、幻喩派と不住派の分類基準である。この両者が勝義諦の解釈に基づく区別であることはギャマルワ自身が明記しているところであるが<sup>204</sup>、その内実については解説しておらず定かではない。しかるに、この二諦の分類の意味の議論からその手掛かりを得ることが出来るのである。即ち、そ

204 『中観真実決択』2a5参照。

ここで不住派は、二諦を〈同一が否定された別異〉と解釈する説、幻喩派は、二諦を〈同一自体にして別異反体〉と見做す説と捉えられていた。そして、そのように二諦の関係を解釈する背景には、勝義諦、即ち、空性を知の対象として認めるか否かということが潜在している。即ち、二諦を〈同一が否定された別異〉と見なす説では、勝義諦は知の対象ではなく、所知の相を超えたものと解釈されるが、それに対して、二諦を〈同一自体にして別異反体〉と見做す説では、勝義諦は正理知により認識される知の対象とされる。このような空性（＝勝義諦）に関する解釈の相異に基づき、中観派が不住派と幻喩派の二つに分けられたと推定されるのである。纏めるならば、以下の通りである。

- ・不住派 = 二諦を〈同一が否定された別異〉と見做す説 = 空性を知の対象と見做さない説 [トルンパ; 『入行ギャ註』著作時のギャマルワの立場 ⇒ サキヤ派へ(?)]
- ・幻喩派 = 二諦を〈同一自体にして別異反体〉と見做す説 = 空性を知の対象と見做す立場 [『二諦ギャ註』及び『中観眞実決択』著作時のギャマルワの立場 ⇒ ゲルク派へ(?)]

筆者は、以前、空性を知の対象と認めるか否かに応じて、チベットにおいて二つの異なる中観説の学統が生じ、それが、後代のサキヤ派やゲルク派等の中観説の起源となったという仮説を立てた<sup>205</sup>。もし上述の不住派と幻喩派に関する筆者の解釈が妥当であるならば、その二つの学統の起源として、さらにこの不住派と幻喩派の二者を立てることが許されるかもしれない。少なくとも、ギャマルワが勝義の立場から中観派をこの二派に分ける時、彼の念頭にあったのは、空性を知の対象として認めるか否かという基準であったことは疑いないかと思われる。無論、このギャマルワの解釈自体がこの両派の分類基準として妥当であるか否かという根本的な問題はあり、その点については、今後、引き続き関連情報を収集しつつ慎重に検討することが必要であるが、現時点では、ギャマルワの解釈に基づいて両派の分類基準を考えておきたい。

最後に、参考までに、ギャマルワが『中観眞実決択』において提示した中観派の分類を紹介しておこう。ギャマルワは同書の冒頭部において、「前代の者達 (snga rabs pa dag)」即ち、ギャマルワに先立つ初期チベット人学者による中

205 西沢2018a, pp. 45-48参照。

観派の分類を紹介しているが、それは以下のように図式化される。

図1. ギャマルワ以前のチベット人学者による中観派の分類 (『中観真実決択』  
206  
2a4-7)

206 de la gzhung dbu ma'i bka'i rtogs par bya ba'i don gtan la 'bebs pa ni gZhung phyi mo dang Phyogs 'dzin pa'i dbu ma gnyis su sNga rabs pa dag tha snyad 'dogs so// phyogs 'dzin pa yang don dam pa la sGyu ma ltar smra ba dang/ Rab du mi gnas par 'dod pa dang/ 'gal 'dus don dam par 'dod pa'o// kun rdzob la rNal 'byor spyod pa dang/ mDo sde spyod pa dang/ gnyi ga'i lugs dang mi 'gal pa zhes sam/ spyi bzung zhal che pa zhes 'chad pa ni mi bzang ste/... (cf. Hugon/Kevin 2018, p. 16) 「典籍としての中 (gzhung dbu ma) の御言葉の理解されるべき意味を決択するものとしては、〈元祖 [の中観派] (gZhung phyi mo)〉と〈分派した中観 [派] (Phyogs 'dzin pa'i dbu ma)〉の二つと前代の者達は命名しているのである。[彼らはさらに、]「〈分派した [中観派]〉もまた、(I.) 勝義について、[それを] (1)幻の如く説く者 (sGyu ma ltar smra ba) と、(2)不住と認める者 (Rab tu mi gnas par 'dod pa) と、(3)矛盾の集まりを勝義と認める者 ('gal 'dus don dam par 'dod pa) [の三派]である。(II.) [他方、] 世俗については、(1)瑜伽行 [中観派] (rNal 'byor spyod pa) と、(1)経量行 [中観派] (mDo sde spyod pa) と、(1)その両者の説と矛盾しない者 (gnyi ga'i lugs dang mi 'gal ba) と云われるもの、あるいは、[世間] 一般に受け入れられていることに賛同するもの (spyi bzung zhal che ba, i.e., 'Jig rten grags sde spyod pa'i dbu ma pa?)」と説くが、それは正しくない。……」

ここで、spyi bzung zhal che baという見慣れない用語が見出され、後続の文章では、zhal che byas paと換言されているが(同2a6)、その語義から判断して、世間一般に受け入れられていること ([jig rten] spyi[r] bzung ba) に対して口を揃えること (zhal che ba)、即ち、世間一般の常識に随順する者を含意するかと思われる。これは、後代の『ロセル教義書』等に言及されている「世間随行中観派 (Jig rten grags sde spyod pa'i dbu ma pa)」(Mimaki 1982, p. 172) に相当する概念かと推察される。もしこの比定が妥当であれば、世間随行中観派の設定の起源は、ギャマルワ以前のチベット人学者の説にまで遡ることになる。

ちなみに、冒頭部に言及された「典籍としての中 (gzhung dbu ma)」とは、この中観派の分類の直前に解説された「中 (dbu ma, \*madhyamaka)」の三義、即ち、(1) 義としての中 (don dbu ma)、(2) 道としての中 (lam dbu ma)、(3) 典籍としての中 (gzhung dbu ma) の一つである。ここで「義としての中」とは、道の所縁である二諦を、「道としての中」とは、二諦を理解する智慧を、「典籍としての中」は、その二諦を理解する智慧を解説した典籍 (『根本中論』等) を指す (同1b8-2a4)。

1. 元祖の中観派 (gZhung phyi mo'i dbu ma [pa])
2. 分派した中観 (Phyogs 'dzin pa'i dbu ma [pa])
  - 勝義の設定に基づく分類
    1. 幻喩派 (sGyu ma ltar smra ba, [勝義を] 幻の如く説く者)
    2. 無住派 (Rab tu mi gnas par 'dod pa, [勝義を] 不住と認める者)
    3. 矛盾の集まりを勝義と認める者 ('gal 'dus don dam par 'dod pa)
  - 世俗の設定に基づく分類
    1. 瑜伽行 [中観派] (rNal 'byor spyod pa[i dbu ma pa])
    2. 経量行 [中観派] (mDo sde spyod pa[i dbu ma pa])
    3. その両者の説と矛盾しない者 (gnyi gai lugs dang mi 'gal ba, alias, spyi bzung zhal che ba)

この分類は、「前代の者達」に帰されているので、インドではなくチベットにおいて、恐らくは、ゴク翻訳師の直弟子達のうちの或る人物の解釈であったと推定される<sup>207</sup>。続く文章で、ギャマルワは、この分類を批判し (同2a5-7)、最後に自説として以下のような中観派の分類を提示している (同2a7)。

図2. ギャマルワによる中観派の分類 (『中観真実決択』<sup>208</sup> 2a7)

1. 元祖の中観派 (gZhung phyi mo'i dbu ma [pa])

207 『中観真実決択』の写本には多数の傍註が付されており、時として前主張者の情報を得ることが出来るが、この箇所には特に傍註は付されていない (同2a4)。ゴク翻訳師自身は、前述したように、『甘露一滴』14において幻喩派と不住論者に分ける仕方に対して批判的であるので、ゴク翻訳師自身の解釈ではなく、その周辺の誰かの説であろう。

208 des na don dam la sGyu ma dang Rab du myi gnas pa gnyis dang/ kun rdzob la rNal 'byor spyod pa dang Phyil rol gyi don yod pa gnyis pa'o (read: po'o?)// don kyang mDo sde pa ltar ram Bye brag smra ba ltar 'dod pa'o// 「それ故、[中観派には、] (I.) 勝義については、(1)幻喩 [派] (sGyu ma [ba]) と(2)無住派 (Rab du mi gnas pa) の二つと、(II.) 世俗については、(1)瑜伽行 [中観派] (rNal 'byor spyod pa [i dbu ma pa]) と、(2)外界實在 [論者の中観派] 二派 (Phyil rol gyi don yod pa[r smra ba'i dbu ma pa] gnyis po) の二つがある。[外部] 対象もまた、(2a) 経量部のように [認める者]、あるいは、(2b) 毘婆娑師のように認める者がある。」

## 2. 分派した中観派 (Phyogs 'dzin pa'i dbu ma [pa])

## • 勝義の設定に基づく分類

1. 幻喩派 (sGyu ma pa)
2. 不住派 (Rab du mi gnas pa)

## • 世俗の設定に基づく分類

1. 瑜伽行 [中観派] (rNal 'byor dpyod pa[i dbu ma pa])
2. 外界實在 [論者の中観派] (Phyi rol gyi don yod pa[r smra ba'i dbu ma pa])
  1. 経量部の如く主張する者 (sDo sde pa ltar 'dod pa, i.e., sDd sde spyod pa'i dbu ma pa)
  2. 毘婆娑師の如く主張する者 (Bye brag smra ba ltar 'dod pa)

この分類から読み取れることとしては、第一に、ギャマルワの時代においては、まだ中観派を自立派と帰謬派の二つに分ける解釈は流布していなかったことが挙げられる。既に指摘したように、この分類はトルンパの『教次第大論』やチャパの一連の著作にも見出され<sup>209</sup>ず、ギャマルワもその分類に全く言及していない。他方、この二つの用語は、パツァブ翻訳師の『根本中論註』には見出されるので、恐らくは、<sup>210</sup> Samp寺の外部において、特にパツァブ翻訳師の学統において成立した分類であったと推察される。それ故、幻喩派と不住派の分類は、自立派と帰謬派の分類とは基本的に区別して考える必要がある。

他にも、「毘婆娑師の如く主張するもの」、即ち、外界の主張方法が毘婆娑師と一致する中観派が立てられていることが注目に値する。この学派は、サキャ派の学匠ジェツウン・タクパギエルツェン (rJe btsun grags pa rgyal mtshan, 1147-1216) の『タントラ現観・珍宝樹』(rGyud kyi mngon par rtogs pa rin po che'i ljon shing) にも「毘婆娑師と流儀が一致する [中観派] (Bye brag smra ba dang tshul mtshungs pa)」という形で見いだされるが<sup>211</sup>、後代のゲルク派では採用されなかった分類である。筆者は、これをチャパの中観思想を念頭に置いたものと

209 西沢2018a, p. 47参照。

210 西沢2017b, p. 100, n. 1参照。

211 Mimaki 1982, p. 31f. 参照。

212 西沢2017a, p. 33参照。

解釈したが<sup>212</sup>、既にチャパの師であるギャマルワの著作に見られるので、その起源をチャパの中観説に求めることは出来ず、むしろ逆に、このような分類を背景として、チャパが毘婆娑師的な立場に立脚して自らの中観説を形成したと解釈するべきかと思われる。

これに関連して注目すべきは、ギャマルワは、彼の『中観真実決択』において、知と対象の設定は毘婆娑師説に随順することを明記していることである。即ち、

「私の説は如何なるものであるのか、と云うならば、対象と心の二つは<sup>213</sup>  
毘婆娑師と一致することを認める。」（『中観真実決択』13a7）

それ故、この記述から、ギャマルワの思想的立場は、上述の彼自身の学説分類に依れば、外界实在論者の中観派の二派のうち、特に、「毘婆娑師の如く主張する者 (Bye brag smra ba ltar 'dod pa)」と一致することが分かる。この立場は、前伝期のイエシェデの『見解区別』(lTa ba'i khyad par) や後代のゲルク派等の教義書には知られておらず、かなり独自の思想的立場かと思われるが、直弟子のチャパにも受け継がれることになる。その学説の委細については、項を改めて検討することにしたい。

また、前述したように、ゴク翻訳師師弟の中観説には、その背景に如来蔵思想が潜在していたが、ギャマルワの『二諦分別論』と『入菩薩行論』の二つの註釈と『中観真実決択』において、少なくとも、その二諦説の総論の箇所には、如来蔵思想を示す記述は確認されなかった。それ故、ギャマルワは、中観思想と如来蔵思想を峻別し、ゴク翻訳師師弟のように、空性を如来蔵と同一視する解釈を取っていない可能性がある。もしそうであれば、この点もまた、ギャマルワとゴク翻訳師師弟の中観説に関する大きな解釈の相違点となろう。但し、この三つの著作全体についてはまだ筆者の研究が至っていないので、確言は控えることにして、この点も今後の検討課題として稿を改めて検討することにしたい。

213 bdag nyid kyi lugs ji ltar zhe na/ yul sems gnyis Bye brag du smra ba dang mthun par 'dod de/..



## (8) ギャマルワの二諦説に関する纏め

以上、ギャマルワの『二諦分別論』の註釈を主資料として、特にトルンパの『教次第大論』との対比に重点を置いて、彼の二諦説について考察した。ここに同書に見られるギャマルワの二諦説の要点を纏めておこなうならば、以下の通りである。

1. ギャマルワは、『二諦分別論』の註釈を著作にする際にして、トルンパの『教次第大論』に見いだされる二諦説を批判的に検討することを通じて自身の二諦説を打ち立てた。即ち、トルンパは、空性を所知を超えたものとして知の対象と見なさなかったのに対して、ギャマルワは、空性を正理知の対象として存在するものと解釈し、その点で、両者は見解を異にした。
2. ギャマルワの論述の特徴は、概して、最初にトルンパの見解を恰も自説の如く提示しつつ、その後でそれを批判的に検討し、最後に自説を立てるという手順を取っていることである。その際、あからさまにトルンパの説を批判せずに、意図的にトルンパが用いている表現を流用しつつも、それを換骨奪胎して全く別の意味で使用するなどかなり婉曲的な手段を取っている。
3. トルンパは二諦説を設定するに際して、二諦のレベルの差を導入したが、ギャマルワは、それを受け入れず批判した。
4. ギャマルワは、『二諦分別論』を註釈するに際して、そこに見いだされる二種の二諦説のうち、ジュニャーナガルバ自身が〈相応する勝義 (= 仮の勝義)〉と見なした SDV 4 及びその自註の規定を取って密意と見なし、それに立脚して自身の二諦説を打ち立てた。
5. ギャマルワは、空性を、否定対象である戯論が〈断除されただけのもの (rnam gcad tsam, \*vyavacchedamātra)〉と解釈し、正理知の対象として存在すると見したが、それは後代のゲルク派の解釈を先取りしたものである。
6. ギャマルワの思想的背景には、ギャマルワ自身が明言しているように、特にシャーンティデーヴァとジュニャーナガルバの中観説があり、その点で、トルンパと共通している。しかるに、その両者の説を如何

に解釈するかで、ギャマルワはトルンパと立場を異にした。

7. 空性を知の対象と認めるギャマルワは、二諦の関係として、実質的に〈同一自体にして別異反体〉の解釈を取ったが、それは幻喩派の説と一致するものであった。
8. ギャマルワの三つの著作のうち、『入菩薩行論』の註釈はトルンパの『教次第大論』と同様の解釈を取っており、彼の三つの著作の中で最も古いものと推定される。
9. ギャマルワの思想的立場は、彼自身の学説分類によれば、外界実在論者の中観派、その中でも、特に「毘婆娑師の如く主張する者」に一一致するものであり、トルンパのように、如来蔵思想に基づく中観説とは立場を異にする。

ギャマルワはトルンパの見解を批判するに際してかなり婉曲的な手法を用いたが、それは彼の批判の矛先が、単にトルンパのみではなく、その背後に控えているゴク翻訳師及び他の高弟達にも向かうものであったからでもあろう。実際、ゴク翻訳師はサンブ教学の創始者であり、その見解を批判することは当然のことながらかなり勇気のいることであった。しかるに、その批判は揉み消されることなく、直弟子のチャバに受け継がれ、サンブ寺においてゴク翻訳師とは異なるもう一つの学統を形成した。そのことから、当時のサンブ寺では、先達の解釈に対する批判を許容し相互に議論を戦わせることが出来る自由な学問の土壌が成立していたことが窺われるのである。これは、まさにサンブ教学がゲルク派やサキャ派等の後代の顕教教学を生み出す母胎となったこととも決して無関係ではない。

ギャマルワの二諦説については、『二諦ギャ註』以外にも、独自の中観綱要書である『中観眞実決択』や『入行ギャ註』（特に第九章）をも読解する必要がある。後二者については本稿においてはごく部分的にしか触れることが出来なかったが、特に、これらの三著作における解釈の異同や変遷など未知な主題が多々残されている。両著作をも視野に入れたより包括的なギャマルワの中観思想研究は稿を改めて試みることにしたい。

## 結 語

以上、トルンパの『教次第大論』とギャマルワの『二諦分別論』の註釈を主資料として、彼らの二諦説の概要を紹介した。既に、西沢2018aにおいて、ギャマルワやチャパが『教次第大論』に見られる二諦の定義を引いて批判したことは指摘したが、紙幅の関係上、それ以上を論ずることは出来なかった。その点については、本稿において、ギャマルワのトルンパ批判は、それに留まらず、二諦説の全般に渡っていることが具体的な原典資料に基づき確認されたことになる。即ち、ギャマルワは、明らかにトルンパの『教次第大論』を見ており、<sup>214</sup>『二諦ギャ註』を著すに際して、そこに見いだされる二諦説を批判的に検討することを通じて自身の二諦説を打ち立てたことが明らかとなった。このことはこれまで全く知られていなかったことである。トルンパの『教次第大論』とギャマルワの『二諦ギャ註』に見られる両者の解釈の異同を一覧にして纏めるならば、次頁の通りである。

トルンパとギャマルワの二諦説に関する論争の争点となったのは、ひとえに、空性(=勝義諦)を如何に解釈するのかという問題であった。両者の二諦説の一連の主題に関する解釈の相異は両者の空性理解の相異に起源している。トルンパは、言説の立場では、空性を正理知の対象として認め、それに依拠して、二諦の語釈、分類基体、数の確定等を設定したが、真実としては、空性を一切の知や言語表現を超えたものと捉えた。それ故、トルンパにとっては、空性は知の対象として存在するものではなかった。前述したように、このような空性理解は、ゴク翻訳師の『甘露一滴』にも見いだされるものであり、ゴク翻訳師及びその直弟子達の間で広く受け入れられていた解釈かと思われる。

214 可能性としては、トルンパの『教次第大論』に見られる記述は、トルンパ自身のものではなく、他の典籍からの引き写しであり、ギャマルワはその元本のほうを見て批判していた可能性も皆無ではない。但し、現状ではそれを裏付ける資料を欠いており、さらには、先に指摘したように、ギャマルワ自身、『中観真実決択』において、この見解を「軌範師ゲシェ達」の見解に帰しているが、その「ゲシェ」という呼称はこの時代において伝統的に特にトルンパを示すものであることから、ギャマルワが前主張として念頭に置いていたのは、特にトルンパの『教次第大論』であったと断定してよいかと思われる。

図. 二諦説に関するトルンパとギャマルワの解釈の異同一覧

主題	トルンパの解釈 (『教次第大論』)	ギャマルワの解釈 (『二諦ギヤ註』)
語義	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 世俗諦の語義：世俗、即ち、迷乱知 (‘khrul ba’i blo) の思考の力により／の側において真実であるので、「世俗諦」と云われる。[609.10-22]</li> <li>• 勝義諦の語義：(1)勝義、即ち、実性を認識する正理知 (de kho na’i ’jal byed rigs pa’i shes pa) の側において真実であるので、「勝義諦」と云われる。それは、正理 [知] により成立する真実 (rigs pas grub pa’i bden pa) である。(2)あるいは、正理知の対象である空性もまた「勝義」と云われる。[609.22-610.3]</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 世俗諦の語義：世俗、即ち、迷乱知 (‘khrul ba’i blo) の思考により／の側において真実であるので、「世俗諦」と云われる。[8b3f.]</li> <li>• 勝義諦の語義：勝義、即ち、正理知 (rigs pa’i shes pa) の側において真実であるので、「勝義諦」と云われる。それは、正理 [知] により存立する対象 (rigs pas gnas pa’i don) である。[8b4f.]</li> </ul>
分類基体	<p>一切の知と所知の対象 (shes pa dang shes bya’i don mtha’ dag) (=所知のみ) [610.13f.]</p> <p>[註. 真実としては勝義諦は所知ではないので、二諦の分類基体は存在しない。]</p>	<p>所知のみ (shes bya tsam) [7a3]</p> <p>[註. トルンパの言説の立場の解釈を自説として受容する。]</p>
分類の意味	<p>同じものとも他のものとも言表されることがないもの (de nyid dang gzhan du brjod du med pa); 同一が否定されただけの別異 (gcig pa bkag pa tsam gyi tha dad) [610.18f.]</p> <p>[註. 勝義諦を所知と見なさないで、世俗諦と同一とも別異とも立てない。その関係を表現するものとして、〈同一が否定された別異〉という独特な概念を使用する。『解深密経』所説の二諦の同一と別異を否定する議論では、自体と反体の区別を立てず、全て自体に結び付ける。]</p>	<p>同じもの (=同一反体) としても他のもの (=別異自体) としても存在しない有法と法性 (de nyid dang gzhan du med pa’i chos can dang chos nyid) (= * 同一自体にして別異反体 (ngo bo gcig la ldog pa tha dad)) [8b2]</p> <p>[註. 同経の議論において、自体と反体の区別を立て、別異を否定する場合にはトルンパ同様に自体に結び付けるが、同一を否定する場合にはトルンパの解釈を批判して、反体に結び付ける。]</p>
数の確定	<p>矛盾していることそれ自体によって、対象は真実 (=勝義諦) と虚偽 (=世俗諦)、知は迷乱不迷乱の二つに確定される。その両者は、〈相互に単一の理解の対象 (phan tshun rtogs pa gcig gi yul)〉である。[611.21-612.8]</p> <p>[註. 真実としては勝義諦は所知ではないので、二諦の数の確定は存在しない。]</p>	<p>知が迷乱知と不迷乱知 (=正理知) の二つに確定されることと、対象が二諦に確定されることは、〈単一の理解の対象〉であり [8b6]、存否を共にするもの (grub bde gcig pa, *ekayogakṣema) である。[9b3f.]</p> <p>[註. トルンパの言説の立場の解釈を自説として受容する。]</p>

<p>定義</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 世俗諦の定義：顛倒 [知] の所縁 (phyin ci log gi dmigs pa) [615.20]</li> <li>• 勝義諦の定義：一切の顕現を超えたもの (snang ba thams cad las 'das pa); 所知の相から離れたもの (shes bya'i mtshan ma dang bral ba); 一切の自性から離れたもの (rang bzhin thams cad dang bral ba); * 五相 (無戲論 (spros pa med pa) ・ 無二 (gnyis med pa) ・ 無相 (mtshan nyid med pa) ・ 非事物 (dngos po med pa) ・ 空 (stong pa)) [614.13-615.2]</li> </ul> <p>[註. 真実としては勝義諦は所知ではないので、勝義諦の定義は存在しない。]</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 世俗諦の定義：そのように (= 正理により) 考察するならば存立しない所知 (de ltar (i.e., rigs pas) dpyad na mi gnas pa'i shes bya) [10a2]</li> <li>• 勝義諦の定義：[正理により] 考察せずに顕現のみとして働く知 (= 世俗の知) の対象より他のものとして存立する対象 (ma dpyad par snang pa tsam du 'jug pa'i yul las g[ghan du/par] gnas pa'i don) (= * 正理知の対象 (rigs shes kyi yul)) [10b1f.]</li> </ul> <p>[註. トルンパの二諦の定義を引いて一応「正しい」と称しつつも実際には批判する。]</p>
<p>認識手段</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 勝義諦の定義を確定する認識手段：(1)彼岸をご覧になる者達 (= 聖者) の無顕現の智である瑜伽行者の直接知覚と、(2)此岸を見る者達 (= 凡夫) の増益を否定する離一多等の証因に基づき働く推論の認識手段 [616.9-11]</li> <li>• 世俗諦の定義を確定する認識手段：推論により行が堅固にされた直接知覚 [616.12-14]</li> </ul> <p>[註. 真実としては、勝義諦は所知ではないので、二諦の定義を確定する認識手段は存在しない。]</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 勝義諦の定義を確定する認識手段：(1)無顕現の智である直接知覚の認識手段か、あるいは、(2)離一多等の証因により確定する推論 [10b5]</li> <li>• 世俗諦の定義を確定する認識手段：(1) [壺等が] 考察するに耐えるものであることを否定する正理知と、(2) [壺等を] 顕現分として設定する考察しない認識手段 (= 言説の知) の二つ [10b6]</li> </ul> <p>[註. 勝義諦の定義を確定するものについては、トルンパに随順。世俗諦のそれは異なる解釈を提示。]</p>
<p>備考</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• SDV 3cd に基づき、勝義諦は知に顕現せず、一切の知や言説の対象を超えたものと解する。</li> <li>• 勝義諦に関する上記一連の規定は言説として認められるに過ぎず、勝義としては否定する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• SDV 4及びその自註に基づき、勝義諦を正理知の対象と認める。</li> <li>• トルンパのように二諦のレベルの差を立てずに、概してトルンパの言説の立場の解釈を自説として認めるが、勝義諦を正理知の対象として存在すると認めるので、トルンパがそれを勝義の立場から否定する点は批判する。</li> </ul>

これに対して、ゴク翻訳師の四大弟子の一人であるキュン・リンチェンタクの弟子筋に当たるギャマルワは、空性は真実として正理知の対象であり存在するものと解釈し、それを勝義の立場から否定するトルンパの解釈を批判した。このギャマルワの解釈は彼の直弟子のチャバにも受け継がれ、ここに、チベットの中観説の学統において、空性を知の対象と見なさない学統とそれを知の対象と見做す学統の二つが生じ、それが後代のゲルク派やサキヤ派等の中観説の異なる起源となったのである。後代、ゲルク派とサキヤ派の間に、特に空性理解を巡って激しい論争が展開したが、その起源は、実に、このトルンパとギャマルワの論争に遡ることが出来る。

さらに、トルンパとギャマルワの解釈が分かれることになった文献上の起源は、一連のインド原典の中でも、特に、『二諦分別論』であることが再確認された。即ち、『二諦分別論』に見られる二種類の異なる二諦の設定のうち、顕現の有無に応じて二諦を分ける SDV 3cd に見られる規定に立脚するか、あるいは、有欺と無欺の点から二諦を分け、正理知及びその対象を勝義と認める SDV 4 及びその自註の規定に立脚するかで、トルンパとギャマルワは解釈を異にしたのである。このうち、ジュニャーナガルバの密意は、SDV 3cd に見られるように、勝義諦を一切智者の知を含め如何なる知にも顕現しないものとする解釈にあり、SDV 4 に示された勝義の規定は、相応する勝義、即ち、仮の勝義の規定であった。それ故、ジュニャーナガルバの密意に随順するのは、端的にはゴク翻訳師・トルンパ師弟の解釈である。しかるに、興味深いのは、ギャマルワは、そのことを知悉していたにもかかわらず、敢えてジュニャーナガルバの密意に反して、SDV 4 及びその自註に立脚して自らの二諦説を構築した。その背景に如何なる理由があったのかということはギャマルワの二諦説の本質にかかわる重要な問題である。

最後に、トルンパとギャマルワの思想的立場については、共に中観説に立脚することが確認されたが、その解釈には大きな隔たりがあることもまた判明した。即ち、トルンパは、師であるゴク翻訳師の解釈を受け継ぎ、如来蔵思想に基づく中観説を提示したが、これに対して、ギャマルワの中観説には、そのような如来蔵思想的な傾向は見出されず、むしろ、知と対象の設定については、毘婆娑師と一致する立場であることが確認された。これは、ギャマルワ自身の学説分類によれば、外界実在論と一致する中観派であり、その中でも特に、

「毘婆娑師の如く主張する者」と云われるものの説である。このような両者の学説の違いが、先に言及した『二諦分別論』の解釈の相異と全く無関係であったとは考え難い。端的に言えば、ギャマルワは、毘婆娑師説に立脚して、知と対象の設定を立てたからこそ、空性を知の対象として設定したのに対して、トルンパは、空性とそれを理解する知が無差別に混じり合った境地を法身とし、それを如来蔵と同一視する立場から、空性を知の対象ではなく一切の知の顕現を超えたものと規定したと推定される。空性を理解する知が空性と無差別に混じり合い、知と所知が「一味 (ro gcig)」となったのであれば、空性をその知の対象として立てることは不可能であるからである。このように、両者の中観説については、論ずべきことは多々あるが、その委細については、稿を改めて検討することにしたい。

## 文献表

### 略号

[...]	補足
<...>	削除
(read:...)	訂正
{...}	欄外書き込み
ad.	add
om.	omit
ACIP	Asian Classics Input Project (アジア古典入力プロジェクト)
D	sDe dge dpar ma (デルゲ版)
KS	<i>bKa' gdams gsung 'bum phyogs bsgrigs</i> (『カダム全集』)
T	大正新脩大藏經
TBRC	Tibetan Buddhist Resource Center, alias, Buddhist Digital Resource Center (仏教電子資料センター)
TSD	Lokesh Chandra, <i>Tibetan-Sanskrit Dictionary</i> . Reprint, Kyoto. 1990.

### 辞典・目録・便覧類

『アク稀観書目録]: *dPe rgyun dkon pa 'ga' zhig gi tho yig don gnyer yid kyi kunda*



- bzhad pa'i zla 'od 'bum gyi snye ma bzhugs so.* In: *Materials for a History of Tibetan Literature.* Part 3. Lokesh Chandra (ed.), New Delhi, 1963, pp. 503-601.
- 『カダム全集第一集目録』: *bKa' gdams gsung 'bum phyogs sgrigs thengs dang po'i dkar chag bzhugs so.* dPal brtsegs bod yig dpe rnying zhib 'jug khang (ed.), Si khron mi rigs dpe skrun khang, 2006. [Appended to *bKa' gdams gsung 'bum*, Vol. 1-30.]
- 『雪域人名辞典』: *Gangs can mkhas grub rim byon ming mdzod.* Ku zhul grags pa 'byung gnas/ rGyal ba blo bzang mkhas grub (ed.), mTsho sngon mi rigs par khang, 1992.
- 『藏漢大辞典』: *Bod rgya tshig mdzod chen mo.* 2 vols., Mi rigs dpe skrun khang, 1993.
- 『トゥンカル大辞典』: *Dung dkar tshig mdzod chen mo.* Dung dkar blo bzang 'phrin las (ed.). Krung go'i bod rig pa dpe skrun khang, 2002.

## インド原典

- 『解深密経』(SN): *Samdhinirmocana-nāma-mahāyānasūtra.* Tib. D 106.
- 『光明鬘論』(ĀM): Kambala, *Ālokamālā.* Tib. D 3895.
- 『集学論』(ŚS): Śāntideva, *Śikṣāsamuccaya.* C. Bendall (ed.), Bibliotheca Buddhica I. Reprint: Tokyo, 1977; Tib. D 3940.
- 『世俗勝義所説経』(SPN): *Ārya-saṃvṛti-ṣaramārthasatya-nirdeśa-nāma-mahāyāna-sūtra.* Tib. D 179.
- 『智心髓集』(JSS): *Jñānasārasamuccya.* Tib. D 3851. Cf. Mimaki 1976.
- 『中観莊嚴論』(MA): Śāntarakṣita, *Madhyamakālaṃkāra.* Tib. D 3885. Cf. 一郷1985.
- 『中観莊嚴論細註』(MAP): Kalamaśīla, *Madhyamakālaṃkārapañjikā.* Tib. D 3886. Cf. 一郷1985.
- 『二諦分別論』(SDV): Jñānagarbha, *Satyadvayavibhaṅga.* Tib. D 3882.
- 『二諦分別論自註』(SDVV): Jñānagarbha, *Satyadvayavibhaṅgavṛtti.* Tib. D 3882.
- 『二諦分別論細註』(SDVP): Śāntarakṣita, *Satyadvayavibhaṅgapañjikā.* Tib. D 3883.
- 『入菩薩行論』(BCA): Śāntideva, *Bodhisattvacaryāvatāra.* Tib. D 3871. 偈番号は、BCAP に依る。
- 『入菩薩行論細註』(BCAP): Prajñākaramati, *Bodhisattvacaryāvatārapañjikā.* Skt. L. de La Vallée Poussin (ed.); Tib. D 3872.
- 『入中論』(MAV): Candrakīrti, *Madhyamakāvātāra.* Tib. D 3862. Cf. Li 2012.

- 『入二諦論』(SDA): Atiṣa, *Satyadvayāvātāra*. Tib. D 3902. Cf. 望月2016, pp. 931-935.
- 『入楞伽經』(LA): *Lankāvatārasūtra*. Tib. D 107.
- 『父子合集經』(PPS): *Pitāputrasamāgama-nāma-mahāyānasūtra*. Tib. D 60.
- 『法集經』(DS): *Dharmasaṃgīti-nāma-mahāyānasūtra*. Tib. D 238.
- 『宝徳蔵般若經』(PSG): *Prajñāpāramitā-[ratna-guṇa-]sañcayagāthā*. Tib. D 13. Cf. Yuyama 1976.
- 『明句論』(PrasP): Candrakīrti, *Prasannapadā*. L. de la Vallée Poussin (ed.), Bibliotheca Buddhica IV. Reprint. Tokyo, 1977; Tib. D 3860.
- 『宝性論』(RGV): Maitreya, *Ratnagotravibhāga/ Mahāyānottaratantrasāstra-vyākhyā*. Tib. D 4025. Cf. 中村1967.
- 『無尽慧所説經』(AN): *Āryākṣayamatīrdeśasūtra*. Tib. D 175.
- 『六十頌如理論』(Yṣ): Nāgārjuna, *Yuktiṣaṣṭikā*. Tib. D 3825. Cf. Lindtner 1982, pp. 102-119.

## 蔵外文献

- 『カダム全集』(KS): *bKa' gdams gsung 'bum phyogs bsgrigs bzhugs so*. dPal brtsegs bod yig dpe rnying zhib 'jug khang (ed.), Vol. 1-30, Si khron mi rigs dpe skrun khang, 2006; Vol. 31-60, Si khron mi rigs dpe skrun khang, 2007; Vol. 61-90, Si khron mi rigs dpe skrun khang, 2009.
- 『カダム明灯史』: Las chen kun dga' rgyal mtshan, *bKa' gdams chos 'byung gsal ba'i sgron me*. Bod ljongs mi dmangs dpe skrun khang, 2000.
- 『甘露一滴』: rNgog blo ldan shes rab, *sPrings yig bdud rts'i'i tshig le*. Cf. 加納2007.
- 『教次第大論』(TR): Gro lung pa blo gros 'byung gnas, *bDe bar gshegs pa'i bstan pa rin po che la 'jug pa'i rin chen phreng ba zhes bya ba'i rnam par bshad pa bzhugs*. In: *Gro lung pa blo gros 'byung gnas kyi gsung chos skor*, smad cha. dPal brtsegs bod yig dpe rnying zhib 'jug khang (ed.), Krung go'i bod rig pa dpe skrun khang, 2009. [=P]
- A : ACIP 電子入力ファイル (ACIP nos. SE00070; SL00070) [=シヨル版]
- K : Dam chos yar 'phel 筆写本 (KS 4, pp. 35-735 (1-351a3))
- U : ウメ書体の写本 (TBRC no. W1CZ1114)
- B : ティチャン・ラプラン本 : *bsTan rim chen mo: The Great Book on the Steps*

- of the Teaching*. The Library of His Eminence Trijang Rinpoche (ed.), Mundgod: Ganden Tibetan Monastery, 2001 (活字本、TBRC no. W1PD45157)
- T : チベットハウス本 : *bsTan rim chen mo*, Brag g-yab brtan bzhugs go sgrig tshogs chung (ed.), Delhi: Edition Tibethaus Deutschland, 2014. (活字本、TBRC no. W1KG24221)
- 『青冊』: 'Gos lo tsā ba gZhon nu dpal, *Deb ther sngon po*. Si khron mi rigs dpe skrun khang, 1984.
- 『善説真髓』: Tsong kha pa blo bzang grags pa, *Drang ba dang nges pa'i don rnam par phye ba'i bstan bcos legs bshad snying po bzhugs so*. Mundgod: Drepung Loseling Library Society, 1991.
- 『善説真髓大註』: 'Jigs med dam chos rgya mtsho, *Drang nges legs bshad snying po'i 'jug ngogs*. Krung go'i bod kyi shes rig dpe skrun khang, 1999.
- 『チャンキヤ教義書』: lCang skya rol pa'i rdo rje, *Grub mtha' thub bstan lhun po'i mdzes rgyan*. Krung go'i bod kyi shes rig dpe skrun khang, 1989.
- 『中観真実決択』 (*rGya dbu bsdus*): rGya dmar ba byang chub grags, *dBu ma'i de kho na nyid gtan la dbab pa*. In: KS 31, 7-67 (1-31a4). Cf. Hugon/Kevin 2018.
- 『中観提要』 (*Phya dbu bsdus*): Phya pa chos kyi seng ge, *dBu ma shar gsum gyi stong thun*. Cf. Tauscher 1991.
- 『道次第小論』: Tsong kha pa blo bzang grags pa, *Byang chub lam rim 'bring ba'i sa bcad kha skong dang bcas pa bzhugs so*. Bylakuppe: Sera Je Library, 1999.
- 『道次第相承伝』: Yongs 'dzin ye shes rgyal mtshan, *Lam rim bla ma brgyud pa'i rnam thar bzhugs*. 1st ed. Bod ljongs mi dmangs dpe skrun khang, 1900, Reprint. Twaiwan, 2006.
- 『二諦ギヤ註』 (*SDV rGya tik*): rGya dmar ba byang chub grags, *dBu ma bden gnyis kyi rnam bshad ti ka dang bcas pa*. In: KS 19, 247-316 (4a1-45b3).
- 『二諦チャバ註』 (*SDV Phya tik*): Phya pa chos kyi seng ge, *Phya pa chos seng gis mdzad pa'i dBu ma bden gnyis kyi 'grel pa*. In: KS 6, 185-250 (1-33b3).
- 『入行ギヤ註』 (*BCA rGya tik*): rGya dmar ba byang chub grags, *Byang chub sems dpa'i spyod pa la 'jug pa'i tshig don gsal bar bshad pa*. In: KS 6, pp. 11-174 (1-83b4).
- 『入行タル註』 (*BCA Dar tik*): rGyal tshab dar ma rin chen, *Byang chub sems pa'i spyod*

*pa la 'jug pa'i rnam bshad rgyal sras 'jug ngogs zhes bya ba bzhugs so.* Sarnath, Varanasi: GSWC, 1999.

## 参考文献

赤羽律

2010 「チベットに於ける『二諦分別論』に対する三編の注釈書」『日本西藏学会々報』56、pp. 77-85

2012 「ジュニャーナガルバの中観思想」『空と中観』（シリーズ大乘仏教6）、春秋社、pp. 113-135。

一郷正道

1985 『中観莊嚴論の研究—シャーントラクシタの思想—』、二巻。文栄堂。

梶山雄一/瓜生津隆真

1974 『大乘仏典』14（龍樹論集）、中央公論社。

加納和雄

2007 「ゴク・ロデンシェーラブ著『書簡—甘露の滴』—校訂テキストと内容概観—」『高野山大学密教文化研究所紀要』20、pp. 9-13。

2009 「ゴク・ロデンシェーラブ著『書簡—甘露の滴』—訳注篇—」『高野山大学密教文化研究所紀要』22、pp. 121-178。

小林守

1991a 「如幻中観・無住中観の一典拠— dPaḥ bo 作『勝義菩提心修習次第書』」『印仏研』39-2、pp. 173-177。

1991b 「Ārya dPa' bo 作『勝義菩提心修習次第書』蔵訳テキスト」『インド思想における人間観：東北大学印度学講座六十五周年記念論集』、平楽寺書店、1991、pp. 179-200。

1993 「チベットにおける如幻中観・無住中観をめぐる論争(1)— rTag lo chen/ Tsong kha pa/ mKhas grub rje —」『塚本啓祥教授還暦記念論文集：知の邂逅—仏教と科学』、佼成出版社、pp. 473-488。

2008 「中観派からみた智慧の優劣」『日本仏教学会年報—仏教と智慧—』73、pp. 193-209。

ツルティム・ケサン/片野道雄

1998 『ツォンカバ中観哲学の研究：『レクシェーニンポ』—中観章—和訳』、文栄堂。

ツルティム・ケサン/高田順仁

1996 『ツォンカパ中観哲学の研究：『菩提道次第論・中篇』一観の章一和訳』、文栄堂。

ツルティム・ケサン/藤仲孝司

2003 『ツォンカパ中観哲学の研究：ケドゥブ・ゲルク・ベルサンボ著『深淵な空性の真実を明らかにする論書・幸いなる者の開眼（千楽大論）』和訳と研究（下）』、文栄堂。

2005 『ツォンカパ菩提道次第大論の研究』、文栄堂。

中村瑞隆

1967 『蔵和对訳・究竟一乗宝性論研究』、鈴木学術財団。

西沢史仁

2010 「チャバ・チューキセンゲの認識手段論—認識手段の定義をめぐる—」『日本西蔵学会々報』56、pp.61-75。

2011a 「チャバ・チューキセンゲのゴク翻訳官批判—認識手段性の確定をめぐる—」『印仏研』59-2、pp.76-79。

2011b 『チベット仏教論理学の形成と展開—認識手段論の歴史の変遷を中心として—』、全四巻、東京大学、2011。（国立国会図書館 請求記号：UT51-2012-M586；東京大学文学部図書館 請求記号：2011:Ⅲ:7:4）。

2012a 『論理学意圖拏拭』におけるチャバの思想的立場』『印仏研』60-2、pp.63-66。

2012b 「チベット仏教論理学における〈理解（rtogs pa）〉の概念について」『インド論理学研究』4、pp.97-122。

2012c 「非認識手段の知の起源に関する一考察」『インド哲学仏教学研究』19、pp.105-118。

2013 「チャバ・チューキセンゲの教義書」『日本西蔵学会々報』59、pp.67-84。

2014 「チベットにおける他者排除（anyāpoha）論の形成と展開—11-12世紀サンブ系論理学の伝承を中心として—」『インド論理学研究』7、pp.227-282。

2015 「チベットにおける他者排除（anyāpoha）論の形成と展開(2)—12-13世紀サンブ系及びサキヤ系論理学者の論争史の一局面—」『Acta Tibetica et Buddhica』8、pp.1-168。

2016 「チャバ・チューキセンゲの直接知覚論—直接知覚と対象確定作用の関係を中心として—」『印仏研』64-2、pp.71-75。

2017a 「チャバ・チューキセンゲの中観思想—その独自性と思想的背景—」『日本西蔵学

会々報』62、pp.25-39。

2017b 「中観帰謬派の開祖について」『印仏研』65-2、pp.95-100。

2018a 「チベット初期中観思想における空性理解—ゴク翻訳師、トルンパ、ギャマルワ、チャパー—」『日本西蔵学会々報』64、pp.35-54。

2018b 「チベット初期中観思想における二諦説—二諦の分類の意味をめぐって—」『印仏研』67-1、pp.188-193。

羽田野伯猷

1954 「カーダム派史 資料篇」『チベット・インド学集成 第一巻チベット篇 I.』法蔵館、1986、pp.46-191。(初出：『東北大学文学部研究年報』5)

福田洋一

2018 『ツォンカパ中観思想の研究』、大東出版社。

伏見英俊

2003 「bsTan rim 文献について」『印仏研』52.1、pp.72-76。

松本史朗

1978 「Jñānagarbha の二諦説」『仏教学』5、pp.109-137。

1982 「チベットの中観思想」『東洋学術研究』21-2、pp.161-178。

1997 『チベット仏教哲学』、大蔵出版。

松下了宗

1983 「ジュニャーナガルバの二諦分別論—和訳研究(上)—」『龍谷大学大学院紀要』5、pp.27-49。

望月海慧

2016 『ディーパンカラシュリージュニャーナ研究』(博士論文)、立正大学。

森山清徹

2001 「チャパチヨキセンゲの二諦説 dBu ma Śar gyi ston thun 和訳研究」『香川孝雄博士古稀記念論集：仏教学浄土学研究』、永田文昌堂、pp.185-202。

2002 「チャパチヨキセンゲの二諦説—dBu ma shar gsum gyi stong thun 和訳研究(2)—」『文部科学省科学研究費補助金特定領域研究(A)「古典学の再構築」第1期公募研究論文集』、pp.57-63。

2003 「チャパチヨキセンゲの二諦説—dBu ma shar gsum gyi stong thun 和訳研究(3)—」『文部科学省科学研究費補助金特定領域研究(A)「古典学の再構築」第2期公募研究論文集』、pp.158-172。

吉水千鶴子

1990a 「ツォンカパの『入中論』註釈における二諦をめぐる議論：Ⅰ．世俗諦をめぐる議論」『成田山仏教研究所紀要』13、pp. 105-149。

1990b 「ツォンカパの『入中論』註釈における二諦をめぐる議論：Ⅱ．勝義諦をめぐる議論」『伊原照蓮博士古稀記念論文集』、pp. 135-152。

Chos 'phel

2004 *Gangs can bod kyi gnas yig lam yig gсар ma — lHa sa sa khul gyi gnas yig*. 1st. ed. Mi rigs dpe skrun khang, 2004, 5th ed. 2012.

bShes gnyen tshul khrims

2001 *lHa sa'i dgon tho rin chen spungs rgyan*. Bod ljongs mi dmangs dpe skrun khang.

Eckel, Malcolm David

1987 *Jñānagarbha on the Two Truths: An Eighth Century Handbook of Madhyamaka Philosophy*. 1st ed. New York, 1987, Reprint, Delhi, 1992.

Ichigo, Masamichi

1985 *Madhyamakālamkāra of Śāntarakṣita with his own commenatry of Vṛtti and with the subcommentary of Pañjikā of Kamalaśīla*. See 一郷1985.

Hugon, Pascale/ Vose, Kevin

2018 *rGya dmar ba - dBu ma'i de kho na nyid*. 1st published online: 2017/10/2, Updated: 2018/6/19. [http://www.ikga.oeaw.ac.at/RGyadMarBaByangChubGrags\\_dBu\\_ma\\_de\\_kho\\_na\\_nyid](http://www.ikga.oeaw.ac.at/RGyadMarBaByangChubGrags_dBu_ma_de_kho_na_nyid)

Jackson, David Paul

1989 *The 'Miscellaneous Series' of Tibetan Texts in the Bihar Research Society, Patna: A Handlist*. Tibetan and Indo-Tibetan Studies 2, Stuttgart: Franz Steinr Verlag Wiesbaden GmbH.

1996 The bsTan rim ("Stages of the Doctrine") and Similar Graded Expositions of the Bodhisattva's Path. In: *Tibetan Literature: Studies in Genre*. New York: Snow Lion, pp. 229-243.

Kano, Kazuo

2010 "rNgog Blo ldan shes rab's Position on the Buddha-nature Doctrine and its Impact



on Early bKa' gdams pa Masters." Journal of the International Association of Buddhist Studies 32 (1-2), pp. 249-283.

Kramer, Ralf

2007 *The Great Tibetan Translator: Life and Works of rNgog Blo ldan shes rab* (1059-1109). München: Indus Verlag.

Li, Xueshu

2012 "Madhyamakāvātāra-kārikā." China Tibetology 18, pp. 1-16.

Lindtner, Christian

1982 *Nagarjuniana. Studies in the Writings and Philosophy of Nāgārjuna*. 1st Indian ed., Delhi, 1987.

Newland, Guy

1992 *The Two Truths*. New York: Snow Lion Publications.

Mimaki, Katsumi

1976 *La réfutation bouddhique de la permanence des choses (sthirasiddhidūṣaṇa) et la preuve de la momentanéité des choses (kṣaṇabhaṅgasiddhi)*. Paris.

1982 *Blo gsal grub mtha'. Chapitres IX (Vaibhāṣika) et XI (Yogācāra) édités Chapitre XII (Mādhyamika) édité et traduit*. 京都大学人文科学研究所。

Roach, Michael (Geshe Lobsang Chunzin)

2001 [English Introduction] In: *bsTan rim chen mo: The Great Book on the Steps of the Teaching*. The Library of His Eminence Trijang Rinpoche (ed.), Mundgod: Ganden Tibetan Monastery, pp. i-xi.

Tauscher, Helmut,

1991 *Phya pa chos kyi sen ge: dBu ma shar gsum gyi stong thun*. Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde 43, Wien.

Van der Kuijp, Leonard W. J.

1983 *Contributions to the Development of Tibetan Buddhist Epistemology: From the eleventh to the thirteenth century*. Wiesbaden: Franz Steiner Verlag GmbH.

Yoshimizu, Chizuko

1993 "The Madhyamaka Theories Regarded as False by the dGe lugs pas." WZKS 37, pp. 201-227.

Yuyama, Akira

1976 *Prajñā-pāramitā-ratna-guṇa-saṃcaya-gāthā*. Cambridge, New York: Cambridge University Press.

\*本稿は、平成27年度科学研究費「基盤研究 C」(15K02046)の助成に基づく研究成果の一部である。同科学研究費を遂行するに当たり、受け入れ先の大谷大学真宗総合研究所所長(当時)松川節先生を始め、連携研究者としてご協力頂いた三宅伸一郎先生、その他、関係者各位の方々には大変にお世話になった。ここに記して感謝の意を表す。

## 付録 (Appendices)

1. 『教次第大論』 諸本対応表 (二諦総論の箇所のみ)

2. 二諦総論主題別諸本対応表

3. トルンパ造『教次第大論』校訂テキスト (二諦総論の箇所のみ)

Critically edited Text of the Great Treatise on the Stages for entering the Buddhist Doctrine (*bsTan rim chen mo*) by Gro lung pa blo gros 'byung gnas  
[Part: General Meaning (\*spyi don) of the Two-truths]

4. ギャマルワ造『二諦分別論解説』校訂テキスト (二諦総論の箇所のみ)

Critically edited Text of the Commentary of *Satyadvayavibhaṅga* (\**bDen gnyis kyi rnam bshad*) by rGya dmar ba byang chub grags  
[Part: General Meaning (\*spyi don) of the Two-truths]

## 1. 『教次第大論』諸本対応表（二諦総論の箇所のみ）

科段内容	P	A	K	U	B	T
A1. 二諦総論	609.8	357a7	302a2	73a9	651.12	449.7
A1B1. 二諦の語義	609.9	356b1	302a3	73b1	651.14	449.8
A1B2. 二諦の自性	610.8	357a2	302b3	74a1	652.17	450.1
A1B2C1. 分類基体	610.13	357a4	302b5	74a3	653.1	450.5
A1B2C2. 分類の意味	610.15	357a6	302b6	74a4	653.3	450.7
A1B2C3. 数の確定	611.21	358a2	303b1	74b7	654.12	451.6
A1B3. 二諦の定義	614.13	359b6	305a1	76a6	657.16	453.9
A1B4. 認識手段	616.1	360b6	305b6	77a4	659.13	454.15
A2. 二諦各論	616.18ff.	361a5ff.	306a4ff.	77b2ff.	660.10ff.	455.3ff.

注. 諸本の略号については、文献表の『教次第大論』の項参照。科段番号は、後で提示する『教次第大論』二諦総論の箇所の科段を参照。

## 2. 二諦総論主題別諸本対応表

科段内容	TR (A)	<i>SDV rGya tik</i>	<i>rGya dbu bsdus</i>	<i>BCA rGya tik</i>	<i>SDV Phya tik</i>	<i>Phya dbu bsdus</i>
語義	356b1-357a2	8b3-5	5a8-7a6	59b6-8	7a3-5	1.17-2.2
分類基体	357a4-5	7a3	2a8-2b1	59a2-3	5b5-6	2.3-13.16
分類の意味	357a5-358a2	7a3-8b3	2b1-5a8	59a3-b5	5b6-6b8	13.17-14.15
数の確定	358a2-359b6	8b5-9b5	7a6-8a6	60a1-2	6b8-7a3	14.16-15.16
定義	359b6-360b6	9b5-10b4	8a6-15a7	60a2-7	7a5-7	15.17-125.15
認識手段	360b6-361a5	10b4-6	15a7-29a5	60a7-61b5	7a7-b1	125.16-22
必要性	om.	om.	om.	59b5	om.	om.

注. 語義 (sgra don) ; 分類基体 (dbye gzhi) ; 分類の意味 (dbye ba'i don) ; 数の確定 (grangs nges) ; 定義 (mtshan nyid) ; [二諦の定義を確定する] 認識手段 ([mtshan nyid de dag nges byed kyi] tshad ma) ; 必要性 (dgos pa)

**3. Critically edited Text of the Great Treatise on the Stages for entering  
the Buddhist Doctrine (*bsTan rim chen mo*) by  
Gro lung pa blo gros 'byung gnas  
(Part: General Meaning (\*spyi don) of the Two-truths)**

**I. Editorial Notes**

**Text Information**

Title: *bDe bar gshes pa'i bstan pa rin po che la 'jug pa'i rim pa rin chen phreng ba zhes bya ba'i rnam par bshad pa.*

A: ACIP Inputted text (ACIP nos. SE00070; SL00070) [= Zhol edition published at the beginning of the 19th. century]

K: dBu can manuscript by Klong rdor drung yig Dam chos yar 'phel (18 c.) [In: KS 4, 5]

U: An incomplete dBu med manuscript (TBRC no. WICZ1114)

P: A text published by dPal brtsegs bod yig dpe rnying zhib 'jug khang based on K.

This critically edited text is generally based on the Zhol edition (A). As for the details of the above-mentioned texts and editorial guideline, see pp. 3-17, 23-24.

**Part of the text critically edited**

The part of general meaning (\*spyi don) of the Two-truths (bden gnyis, \*satyadvaya) alone (ff. 357a7-361a5 of Zhol edition)

**Notes**

- Footnotes: information of readings of the manuscript and text-related notes
- Endnotes: information of citations and reference texts with content-related notes

**Abbreviations**

[...]	reconstructions or additions by the editor
<...>	deletion
{...}	marginal scripts/notes
+	broken or illegible parts of the manuscript
Ms.	manuscript of the above-mentioned text
Cit.	citation

II. Contents (ས་བཅད) of the part of “\*བདེན་གཉིས་ཀྱི་སྤྱི་དོན་”  
of གྲོ་ལྷང་པའི་བསྟན་འཛིན་ཆེན་མོ།

om.

- A1. དེ་དག་(i.e., བདེན་གཉིས་)གི་སྤྱི་དོན། [A 357a7] [K302a2] [U73a9] [P609.8]
- B1. སྤྱི་དོན། [A356b1] [K302a3] [U73b1] [P609.9]
  - C1. \*ཀུན་རྫོབ་བདེན་པའི་སྤྱི་དོན། [A356b1] [K302a3] [U73b1] [P609.10]
  - C2. \*དོན་དམ་བདེན་པའི་སྤྱི་དོན། [A356b6] [K302a7] [U73b6] [P609.22]
- B2. དབྱེ་བའི་རང་བཞིན། [A357a2] [K 302b3] [U 74a1] [P610.8]
  - C1. དབྱེ་བའི་དབང་དུ་བྱ་བའི་གཞི། [A357a4] [K302b5] [U74a3] [P610.13]
  - C2. དབྱེ་བའི་དོན། [A357a6] [K302b6] [U74a4] [P610.15]
    - D1. \*རང་གི་འདོད་པ་འགོད་པ། [A357a6] [K302b6] [U74a4] [P610.15]
    - D2. \*དགོངས་འགྲེལ་ལས་གསུངས་པའི་སྦྱོན་བཞི་བཞི་བརྗོད་པ། [A357a7] [K302b7] [U74a5] [P610.19]
      - E1. \*གཅིག་པ་ཡིན་པའི་ཕྱོགས་ལ་སྦྱོན་བཞི་བརྗོད་པ། [A357a7] [K302b7] [U74a6] [P610.20]
      - E2. \*ཐ་དང་པ་ཡིན་པའི་ཕྱོགས་ལ་སྦྱོན་བཞི་བརྗོད་པ། [A357b3] [K303a3] [U74a9] [P611.4]
    - D3. \*དོན་བསྟུ་བ། [A357b6] [K303a6] [U74b3] [P611.12]
- C3. གངས་ངེས་པར་དབྱུང་བ། [A358a2] [K303b1] [U74b7] [P611.21]
  - D1. \*ཐ་སྟད་དུ་རང་གི་འདོད་པ་འགོད་པ། [A358a2] [K303b1] [U74b7] [P611.21]
  - D2. \*དེ་ལ་མཐའ་དབྱུང་བ། [A358a7] [K303b5] [U75a3] [P612.8]
  - D3. \*དེ་ལོ་ནར་དེ་བཀག་ནས་རང་ལྷགས་མཐར་ཐུག་གཞག་པ། [A359a5] [K304b1] [U75b7] [P613.17]
  - D4. \*དོན་བསྟུ་བ། [A359a7] [K304b2] [U75b9] [P613.21]
- B3. སོ་སོའི་མཚན་ཉིད། [A359b6] [K 305a1] [U 76a6] [P614.13]
  - C1. \*དོན་དམ་བདེན་པའི་མཚན་ཉིད། [A359b6] [K 305a1] [U 76a7] [P614.13]
  - C2. \*ཤེས་བྱ་དབྱེ་གཞིར་བཀོད་པ་ལ་ཚིང་པ་སྤང་བ། [A360a5] [K 305a7] [U 76b4] [P615.4]
  - C3. \*ཀུན་རྫོབ་བདེན་པའི་མཚན་ཉིད། [A360b4] [K 305b4] [U 77a1] [P615.20]

B4. མཚན་ཉིད་དེ་དག་ངེས་པར་བྱེད་པའི་ཚད་མ། [A360b6] [K305b6] [U77a4] [P616.1]

C1. \*སྦྱིར་བཞུན་པ། [A360b6] [K305b6] [U77a4] [P616.1]

C2. \*བྱེ་བྲག་ཏུ་བཤད་པ། [A361a2] [K306a1] [U77a4] [P616.8]

D1. \*དོན་དམ་བདེན་པ་ངེས་བྱེད་ཀྱི་ཚད་མ། [A361a2] [K306a1] [U77a7]  
[P616.9]

D2. \*ཀུན་རྗེས་བདེན་པ་ངེས་བྱེད་ཀྱི་ཚད་མ། [A361a3] [K306a2] [U77a8]  
[P616.12]

A2. ཡན་ལག་གི་དོན། [A361a5ff.] [K306a4ff.] [U77b2ff.] [P616.18ff.]

om.

NB. Asterisk marks (\*) suggest that the སྦྱིར་བཞུན་ is reconstructed by the editor.



III. “\*བདེན་གཉིས་ཀྱི་སྤྱི་དོན་” [Zhol ed. 356a7-361a5] of བསྟན་འཛིན་ཆེན་མོ།

by བོ་ལྷུང་པ་སློབ་ཤོས་འབྲུང་གནས།

[A1. \*བདེན་གཉིས་ཀྱི་སྤྱི་དོན།]

5 འདི་དག་གི་སྤྱི་དོན་ནི་བཞིས་གཏན་ལ་དབབ་སྟེ། སྤྱི་དོན་དང་<sup>[356b1]</sup> དབྱེ་བའི་རང་བཞིན་དང་། མོ་  
མེད་མཚན་ཉིད་དང་། དེ་ངེས་པར་བྱེད་པའི་ཚད་མའོ།།

[B1. བདེན་གཉིས་ཀྱི་སྤྱི་དོན།]

[C1. \*ཀུན་རྫོབ་བདེན་པའི་སྤྱི་དོན།]

10 དང་པོ་ལ་ཀུན་རྫོབ་ཅེས་བྱ་བ་ནི་འཁྲུལ་པའི་སློབ་ལྟེ་དེ་ལོ་ན་བསྐྱབ་<sup>1</sup>པར་བྱེད་པས་སོ།། འདི་ལྟར་མྱོང་  
བ་དང་ཞེན་པའི་སློབ་མཐའ་དག་ནི་དེ་ལོ་ན་རྗེ་ལྟ་བུ་ལས་གཞན་<sup>2</sup>དུ་ལོག་<sup>3</sup>པར་སྤང་བས་<sup>[356b2]</sup> ཀུན་དུ་སྐྱིབ་ཅིང་  
རྟོག་པར་བྱེད་པས་<sup>4</sup>ན་ཡང་དག་བསྐྱབ་<sup>5</sup>བས་ཀུན་རྫོབ་སྟེ།

གང་ཞེས་གིས་སམ་གང་ཞེས་ན། ཡང་དག་སྐྱིབ་བྱེད་ཀུན་རྫོབ་འདོད་།། (SDV 15ab<sup>A</sup>)

ཅེས་གསུངས་ལ།

15 མ་རིག་སྐྱེས་པ་ཉིད་ཀྱིས་<sup>7</sup>ན། ཡང་དག་མིན་པའི་དོན་སྤང་ཞིང་།།  
ཡང་དག་སྐྱིབ་པར་བྱེད་ལ་<sup>8</sup>འཇུག། མིག་སེར་གྱིས་<sup>9</sup>[356b3] ནི་གཞོད་<sup>10</sup>པ་བཞིན་ (AM 18<sup>B</sup>)  
ཞེས་ཀྱང་སྟེ། །མ་རིག་པ་དང་ཕྱིན་ཅི་ལོག་དང་ཚོངས་པས་སྤྱར་བའི་སྤང་བའོ།།

བདེན་པ་ནི་འཁྲུལ་པ་དེའི་བསམ་པའི་དབང་གིས་ཏེ་<sup>11</sup>རྣམ་པར་གནས་པར་མོས་པས་ན་<sup>12</sup>འཁྲུལ་པའི་  
ཡུལ་ཚམ་<sup>13</sup>དུ་བདེན་གྱི་དེ་ལོ་ནར་མི་བདེན་པའི་ཕྱིར་རོ།།

20 བྱང་ན་འདས་པ་བདེན་<sup>[356b4]</sup>གཅིག་སུ་<sup>14</sup>། རྒྱལ་བ་རྣམས་ཀྱིས་<sup>15</sup>གང་གསུངས་པ།།  
དེ་ཚེ་ལྷག་མ་ལོག་མིན་<sup>16</sup>ཞེས། མཁས་པ་སུ་ཞེས་རྟོག་པར་<sup>17</sup>བྱེད།། (Y§ 35<sup>D</sup>)

<sup>1</sup> སྐྱིབ་ KPU    <sup>2</sup> གཞིན་ K; བཞིན་ P    <sup>3</sup> ལོག་ K    <sup>4</sup> བ་ K; བ་ PU    <sup>5</sup> སྐྱིབ་ KPU  
<sup>6</sup> བོ་ KP    <sup>7</sup> ཀྱི་ A    <sup>8</sup> བ་ AKPU; ལ་ AM (Cit. BCAP)    <sup>9</sup> ཀྱི་ A    <sup>10</sup> རོན་ AKPU; གཞོད་ AM  
(Cit. BCAP)    <sup>11</sup> ནི་ U    <sup>12</sup> བ་རྣམ་ U    <sup>13</sup> འཁྲུལ་པ་ཚམ་ KPU    <sup>14</sup> དུ་ KPU    <sup>15</sup> ཀྱི་ A  
<sup>16</sup> བ་ KPU    <sup>17</sup> མི་ KPU

ཅེས་གསུངས་པ་སྟེ། ཡོག་པ་ནི་འབྲུལ་པའི་སྤང་བའོ།། དེས་ན་འདུས་བྱས་ཀྱི་དོན་ཐམས་ཅད་ནི་བརྟུན་པ་  
སྤྱི་བའི་ཚོས་ཅན་ཡིན་པས་ན་འབྲུལ་པའི་བསམ་པ་ལོ་<sup>[356b5]</sup>ནས་བདེན་པར་ཟད་དོ།།

དེའི་ཕྱིར་སློབ་འཇུག་པའི་ཡུལ་རང་དང་<sup>3</sup>གཞན་མཐའ་དག་ནི་འབྲུལ་པའི་བདེན་པར་ཟད་པས་ན་  
སློབ་ཀྱི་ཀུན་རྫོབ་ཡིན་པར་བརྗོད་ (BCA IX. 2d<sup>F</sup>)

5 ཅེས་གསུངས་པ་སྟེ། ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་བསམ་པས་ཡོད་པས་ཀུན་རྫོབ་པ་ཡིན་ལ། བསམ་པ་དོ་དམ་དུ་བདེན་  
པའང་ཡིན་པས་ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་<sup>[356b6]</sup>བདེན་པ་ཞེས་བྱ་བའི་དོན་འདི་འང་མི་འགལ་ཡོ།།

[C2. \*དོན་དམ་བདེན་པའི་སྐྱ་དོན།]

10 དོན་དམ་པ་ནི་དེ་ལོ་ནའི་འཇུག་བྱེད་རིགས་<sup>7</sup>པའི་ཤེས་པ་སྟེ། ཐར་པ་འཚོལ་<sup>8</sup>བ་རྣམས་ཀྱིས་ཆེད་དུ་  
གཏད་ནས་དོན་དུ་གཉེར་བར་བྱ་ཞིང་བཙལ་བར་བྱ་བ་ཡིན་པས་དོན་ཡང་ཡིན་ལ། མི་སྤྱི་བས་ན་དམ་པ་ཡང་  
ཡིན་ཏེ་<sup>10</sup> དམ་པའི་སྐྱ་ནི་བྱ་ཚོས་པ་ལ་<sup>[356b7]</sup>འཇུག་ལ། དེ་ལོ་ན་རྟོགས་པའི་སློབ་གཞན་གྱིས་མི་གཞོན་པའི་རང་  
བཞིན་མི་སྤྱི་བའི་ཤེས་པ་དེའང་བྱ་ཚོས་པ་ཡིན་པས་སོ།།

དེའི་ཡུལ་སྤོང་པ་ཉིད་ཀྱང་དོན་དམ་པ་སྟེ་དོན་དམ་པའི་གཞལ་བྱ་ཡིན་པས་མངོན་སུམ་བཞིན་ནོ།།  
ཤེས་པ་དེའི་འཇུག་བཟུང་བའི་དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་སྟེ་<sup>[357a1]</sup>རིགས་པས་གྲུབ་པའི་བདེན་པའོ།།

15 དེ་ལྟར་ན་ཐུ་མ་ནི་འབྲུལ་པའི་བདེན་པར་ཟད་པས་བཙུག་བྱའི་བདེན་པའོ།། འདི་ནི་གཞན་སེལ་བ་  
ལས་ཡང་དག་པར་བདེན་པས་ན་རང་བཞིན་གྱི་བདེན་པའོ།། སྐབ་པའི་ཆ་ལས་ནི་ཐུ་མ་ཉིད་བདེན་པ་མཚན་  
ཉིད་པ་<sup>[357a2]</sup> སྟེ། འབྲུལ་པའི་སློབ་ཡུལ་དེ་ལྟར་ངེས་པ་ནི་གཞོན་པའི་ཡུལ་མ་ཡིན་པས་སོ།། འདི་ནི་བདེན་  
པའི་མཚན་མ་གང་ཡང་མ་གྲུབ་པ་ལ་བདེན་པར་བཏགས་པ་ཚམ་སྟེ། དེ་ལོ་ནའི་རིགས་པའི་ཡུལ་དུ་ནི་ཡོད་  
མེད་ལ་སོགས་པའི་ཚོས་རུང་ཟད་ཀྱང་མ་གྲུབ་པའི་ཕྱིར་རོ།།

20

[B2. བདེན་གཉིས་ཀྱི་དབྱེ་བའི་རང་བཞིན།]

དབྱེ་བའི་རང་<sup>[357a3]</sup> བཞིན་ལ་གངས་ཀྱི་དབྱེ་བ་ནི་བདེན་པ་གཉིས་ཞེས་བྱ་བ་སྟེ། བདེན་པ་ནི་  
གཞིའོ།། གཉིས་ནི་ངེས་བཟུང་<sup>12</sup>དང་བཙས་པས་<sup>13</sup>གངས་ངེས་པའི་དོན་ཅན་ནོ།། གསལ་བའི་དབྱེ་བ་ནི་དོན་

<sup>1</sup> རྟུན་ P      <sup>2</sup> བསྐྱུ་ KP      <sup>3</sup> ཡུལ་དང་རང་ A <sup>4</sup> པ་ U    <sup>5</sup> KP ad. བརྟུན་པའི་.    <sup>6</sup> འདི་ཡང་ KP  
<sup>7</sup> རིག་ KP    <sup>8</sup> ཚོལ་ AKU    <sup>9</sup> ཀྱི་ A    <sup>10</sup> ཞིང་ U    <sup>11</sup> བཞི་འོ་ A    <sup>12</sup> གཟུངས་ K; གཟུང་ PU

དམ་ཀུན་རྫོབ་སྟེ། རྒྱ་དང་འབྲས་བུའམ་ཀུན་ནས་ཉོན་མོངས་པ་དང་རྣམ་པར་བྱང་བའི་བདེན་པ་ལ། <sup>[357a4]</sup>  
སོགས་པ་དངོས་པོ་གཞན་བཀག་ནས་འདོད་པའི་གསལ་བ་ངེས་པར་འཛིན་པའོ།།

འདི་དག་གི་དོན་ཡང་གསུམ་གྱིས་བཟོ་སྟེ། དབྱེ་བའི་དབང་དུ་བྱ་བའི་གཞི་དང་། དབྱེ་བའི་དོན་དང་།  
གངས་ངེས་པར་དབྱད་པའོ།།

5

[C1. དབྱེ་བའི་དབང་དུ་བྱ་བའི་གཞི།]

དང་པོ་ནི་བདེན་པར་གཞག་བྱ་ཤེས་པ་དང་ཤེས་བྱའི་དོན་ <sup>[357a5]</sup> མཐའ་དག་སྟེ། ཐམས་ཅད་མཁའ་ན་  
པའི་ཡེ་ཤེས་ནས་འགོ་བ་ཕྱ་མོ་ཡན་ཆད་ཀྱི་སྟོང་འཁྲུལ་པ་དང་མ་འཁྲུལ་པ་ཐམས་ཅད་ཀྱིས་དམིགས་པའི་དོན་མ་  
ལུས་པའོ།།

10

[C2. དབྱེ་བའི་དོན།]

[D1. \*རང་གི་འདོད་པ་འགོད་པ།]

གཉིས་པ་ནི་ཅི་ཀུན་རྫོབ་དང་དོན་དམ་པ་འདི་གཉིས་བྱས་པ་དང་མི་རྟག་པ་ལྟར་གཅིག་ལ་ཚོས་ཀྱི་  
དབྱེ་ <sup>[357a6]</sup> བས་ཐ་དང་དུ་བཞག་པ་ལའམ། འོན་ཏེ་བྱམ་པ་དང་སྣམ་བུ་ལྟར་ངོ་བོ་ཐ་དང་པའམ། དེ་སྟེ་དངོས་པོ་  
དང་དངོས་པོ་མེད་པ་ལྟར་གཅིག་དུ་མ་གྲུབ་པ་ཚམ་ལས་ཐ་དང་དུ་བཞག་ཅེ་ན། དང་པོ་གཉིས་ནི་མ་ཡིན་ཏེ།  
15 དེ་ཉིད་དང་གཞན་དུ་བརྗོད་དུ་མེད་པ་ཉིད་ཀྱིས་གཅིག་པ་བཀག་ <sup>[357a7]</sup> པ་ཚམ་གྱི་ཐ་དང་དུ་ཟད་དོ།།

[D2. \*དགོངས་པ་འགྲུལ་ལས་གསུངས་པའི་སྦྱོན་བཞི་བཞི་བརྗོད་པ།]

[E1. \*གཅིག་པ་ཡིན་པའི་ཕྱོགས་ལ་སྦྱོན་བཞི་བརྗོད་པ།]

20 དགོངས་པ་ངེས་པར་འགྲུལ་བ་ལས་གསུངས་པ་ལྟར་འདི་དག་གཅིག་ན་ཉེས་པ་བཞི་སྟེ། མོ་སེའི་སྟེ་  
བོ་མཐའ་དག་ཀུན་རྫོབ་མཐོང་བ་ན་དོན་དམ་པ་ཡང་མཐོང་བས་མུ་ངན་ལས་འདས་པ་ཐོབ་པར་ཐལ་ཏེ།  
སྟོབ་དཔོན་གྱིས་ཀྱང་།

ཇི་ <sup>[357b1]</sup> ལྟར་བྱིས་པས་མཐོང་བ་ཡི་ལ། དངོས་པོ་དེ་ལྟར་བདེན་ལྱུང་ན།།

13 པའི་ KP      1 བའམ་ KPU      2 པའི་ U      3 བཀག་ K      4 པས་ U      5 གཞག་ U  
6 དུ་ U      7 ཅས་ KP      8 དམའམ་ K; P om. པ་ཡང་.      9 པའི་ U

དེ་དག་དངོས་མེད་རྣམ་ཐར་དུ། གང་གིས་མི་འདོད་རྒྱ་དེ་ཅི། (Y§ 3<sup>6</sup>)

ཞེས་གསུངས་སོ།།

གཉིས་པ་ནི་ཀུན་རྫོང་ལ་བརྟེན་ནས་ཟག་པ་འཕེལ་བ་ལྟར་དོན་དམ་པ་<sup>1</sup>དམིགས་པ་ལ་བརྟེན་ནས་  
ཀྱང་འབྱུང་བའོ། དེས་ན་<sup>2</sup>ཀུན་རྫོང་<sup>[357b2]</sup> ལྟར་དོན་དམ་པ་ཡང་ཀུན་ནས་ཉོན་མོངས་པའི་དམིགས་པར་ལྷུང་  
5 བར་འབྱུང་རོ།།

གསུམ་པ་ནི་དོན་དམ་པ་ལ་ཕན་ཚུན་དབྱེ་བ་མེད་པ་<sup>3</sup>ལྟར་ཀུན་རྫོང་ཀྱང་འབྱུང་བས་ཀུན་རྫོང་གསུམ་  
ཅད་གམི་དད་པར་འབྱུང་བའོ།།

བཞི་པ་ནི་རྩེ་རྩེ་མ་ཐོང་བ་དང་ཐོས་པ་ལས་ལོགས་སུ་ཀུན་རྫོང་<sup>[357b3]</sup> བཅོམ་བར་བྱ་བ་མ་ཡིན་པ་  
བཞིན་དུ་དོན་དམ་པ་ཡང་བཅོམ་བྱ་མ་ཡིན་པར་འབྱུང་རོ།།

10 དེ་དག་ནི་ལྗོག་པ་ཉིད་ཀྱང་གཅིག་པ་ལ་དགོངས་པ་སྟེ། ངོ་བོ་གཅིག་པ་ཅམ་ཡིན་ན་རྒྱ་ཅིག་མ་<sup>4</sup>ལ་  
སོགས་པས་<sup>5</sup>འཁྲུལ་པར་འབྱུང་རོ།།

[E2. \*ཐ་དད་པ་ཡིན་པའི་ཕྱོགས་ལ་སྟོན་བཞི་བརྗོད་པ།]

15 ཐ་དད་པ་ལ་འང་ཉེས་པ་བཞི་སྟེ། རྟོང་པ་ཉིད་གཞན་དམིགས་<sup>[357b4]</sup> ཀྱང་ཀུན་རྫོང་དེས་མ་འདུས་པས་  
ལོགས་སུ་དམིགས་པར་འབྱུང་བས་ན། དོན་དམ་པ་བསྐྱོས་པས་འདུ་བྱེད་ཀྱི་མཚན་མ་ཟེལ་གྱིས་མི་ལོན་ཅིང་  
གནས་ངན་ལེན་གྱི་འཆིང་བ་ལས་མི་གོ་ལ་<sup>6</sup>བས་ལྷུང་ན་འདས་པ་མེད་པར་འབྱུང་རོ།།

གཉིས་པ་ནི་དོན་དམ་པ་ཀུན་རྫོང་གི་ཚོས་ཉིད་དུ་མི་འབྱུང་<sup>[357b5]</sup> ཉེ་ཐ་དད་པའི་ཕྱིར་བུམ་པ་སྐྱམ་བུའི་  
ཚོས་ཉིད་མ་ཡིན་པ་བཞིན་ཡིན་ལོ།།

20 གསུམ་པ་ནི་ཀུན་རྫོང་བདག་མེད་ཅིང་རབ་རྒྱ་མ་གྲུབ་པ་ཅམ་དོན་དམ་པ་མ་ཡིན་པར་འབྱུང་ཉེ་བུམ་  
པ་མེད་པ་ཅམ་སྐྱམ་བུམ་མ་ཡིན་པ་བཞིན་ལོ།།

བཞི་པ་ནི་ཀུན་ནས་ཉོན་མོངས་པ་དང་རྣམ་པར་བྱུང་བ་གཉིས་<sup>[357b6]</sup> སུས་གཅིག་པར་ཐལ་ཉེ།  
དམིགས་པ་སོ་སོར་གྲུབ་པའི་ཕྱིར་བུམ་པ་དང་སྐྱམ་བུའི་བློ་བཞིན་ལོ།། དེ་ལྟར་ཆགས་པ་ཟད་པ་དེ་ཉིད་ཀྱི་ཚོ་  
ཆགས་པ་དང་བཅས་པར་འབྱུང་རོ།།

<sup>1</sup> བར་ U      <sup>2</sup> དེ་ནས་ U      <sup>3</sup> A om. མེད་པ་. <sup>4</sup> KP om. མ་.    <sup>5</sup> བ་ཡང་ A      <sup>6</sup> འཁྲུལ་ KPU

དེ་དག་ཀྱང་ངོ་བོ་དང་མཚན་ཉིད་གཉིས་ཀྱི་ཐ་དང་པ་ལས་སོ།།

[D3. \*དོན་བསྟུ་བ།]

<sup>2</sup>དེས་<sup>3</sup>ན་མིག་<sup>4</sup>རབ་རིབ་ཀྱི་ཡུལ་སྐྱོ་ <sup>[357b7]</sup> ཤད་དང་དེས་དབེན་པ་དག་ཕན་ཚུན་གཅིག་དང་ཐ་དང་པ་  
 5 མ་ཡིན་པ་བཞིན་དུ་བཏྲོལ།། སྐྱེ་ཤད་ནི་དེས་དབེན་པ་ལས་ཐ་དང་པ་མ་ཡིན་ཏེ། དབེན་པར་མ་འདུས་པ་རང་  
 དབང་ཅན་གྱི་སྐྱེ་ཤད་མ་གྲུབ་པས་སོ།། གཅིག་པ་ཡང་མ་ཡིན་ཏེ། དེ་གཉིས་ལྟན་ཅིག་དམིགས་པ་དེས་པ་མེད་  
<sup>[358a1]</sup> པས་སོ།། དེ་བཞིན་དུ་འདུས་བྱས་དང་དོན་དམ་པ་སྟོང་པའང་གཅིག་དང་གཞན་མ་ཡིན་ཏེ། ངོ་བོ་  
 གཅིག་དང་ཐ་དང་པ་གཉིས་ཀྱི་<sup>6</sup>དངོས་པོའི་ཚོས་ཡིན་པས། དོན་དམ་པ་སྟོས་པ་ཞི་བ་དང་ཀུན་རྫོབ་རྒྱུན་པ་  
 གཉིས་ཀྱི་<sup>8</sup>ལ་མི་འཐད་པའི་ཕྱིར། མཚན་ <sup>[358a2]</sup> ཉིད་ཀྱི་དབྱེ་བ་ཅམ་ལས་བཞག་པར་བཏྲོལ།། དེས་ན་ན་ལེ་  
 10 ཤམ་དང་ཚ་བའམ་དུང་དང་དེའི་དཀར་པོ་ལ་སོགས་པའི་དབེས་གསུངས་ཏེ། ན་ལེ་ཤམ་ལ་སོགས་པ་རིལ་པོའི་  
 རྩས་ལ་དགོངས་པའོ།།

[C3. གྲངས་ངེས་པར་དཔྱད་པ།]

[D1. \*ཐ་སྙད་དུ་རང་གི་འདོད་པ་འགོད་པ།]

15 གྲངས་ངེས་ནི་འདི་གཉིས་ཕྱིན་ཅི་ལོག་དང་ཕྱིན་ཅི་མ་ལོག་པའི་ཤེས་ <sup>[358a3]</sup> པའི་ཡུལ་ཡིན་མོད་ཀྱི།  
 འོན་ཀྱང་ཤེས་པ་གཉིས་སུ་གྲུབ་པས་དེའི་ཡུལ་དེ་དང་མཐུན་པ་གཉིས་སུ་གྲུབ་པ་ནི་མ་ཡིན་ཏེ། ཤེས་པ་གཉིས་  
 ཉིད་ཀྱང་དོན་གཉིས་སུ་གྲུབ་པ་ལ་བཏྲོས་<sup>9</sup>པར་ཐལ་བས་ཏེ། སྟོ་འཁྲུལ་བ་དང་མ་འཁྲུལ་བ་ནི་དོན་བདེན་པ་  
 དང་བརྟུན་<sup>10</sup>པ་དང་ལྡན་པ་ཅམ་ཡིན་ <sup>[358a4]</sup> པས་ཕན་ཚུན་རྟོགས་<sup>11</sup>པ་གཅིག་གི་ཡུལ་ཡིན་པའི་ཕྱིར་རོ།། དེས་  
 ན་ཤེས་པའི་དབྱེ་བས་ཡུལ་གྱི་དབྱེ་བ་སྐྱབ་པའམ་ཡུལ་གྱི་དབྱེ་བས་ཤེས་པའི་དབྱེ་བ་སྐྱབ་པ་ནི་མ་ཡིན་ཏེ།  
 20 ཤེས་པའི་དབྱེ་བ་གྲུབ་པ་ཉིད་ཡུལ་གྱི་དབྱེ་བ་གྲུབ་པ་ཡིན་ལ། ཡུལ་གྱི་དབྱེ་བ་གྲུབ་པའང་ཤེས་པའི་དབྱེ་བ་  
<sup>[358a5]</sup> གྲུབ་པའོ།།

དེ་ལ་མ་འཁྲུལ་བའི་ཡུལ་ནི་དངོས་པོ་ལ་གྲུབ་པ་སྟོས་མ་བཅོས་པའོ།། དེ་ནི་རྟག་པའི་རང་བཞིན་ཏེ་  
སྟོ་གཞན་སྐྱེས་པས་རྣམ་པ་གཞན་དུ་མི་འགྱུར་བའི་ཕྱིར་རོ།། འཁྲུལ་པའི་ཡུལ་ནི་དངོས་པོ་མེད་ཀྱང་སྟོས་

<sup>1</sup> གཉིག་ U    <sup>2</sup> AKPU ad. གསུམ་པ་ནི་.    <sup>3</sup> ངེས་ KP    <sup>4</sup> KPU om. མིག་.    <sup>5</sup> བའམ་ AP  
<sup>6</sup> གཉིག་ U    <sup>7</sup> བརྟུན་ PU    <sup>8</sup> གཉིག་ KU    <sup>9</sup> ཏྲོས་ KPU    <sup>10</sup> རྟུན་ KP    <sup>11</sup> རྟོག་ A

བཞག་པ་ཙམ་མོ།། དེ་ནི་མི་རྟག་པ་སྟེ་སློབ་གཞན་གྱིས་དབྱུང་ན་སློབ་ <sup>[358a6]</sup> སྤྲོ་མའི་ཡུལ་ལས་ཉམས་པས་རྣམ་པ་  
གཞན་དུ་འགྱུར་བའི་ཕྱིར་རོ།།

རྟག་པ་དང་མི་རྟག་པ་འང་ཕན་ཚུན་རྣམ་པར་གཅོད་པས་སྤང་བོ་གསུམ་པ་སེལ་ཏེ། དེ་ལྟར་ན་སྟོན་དུ་  
སློབ་འབྲུལ་བ་དང་མ་འབྲུལ་བ་ལ་མ་ལྟོས་པར་འགལ་བ་དེ་ཉིད་ཀྱིས་ཤེས་བྱ་བ་དེན་པ་དང་མི་བདེན་པ་འཕམ་སློབ་

5 <sup>[358a7]</sup> འབྲུལ་བ་དང་མ་འབྲུལ་བར་ངེས་པས་གངས་ངེས་པ་གྲུབ་བོ།།

[D2. \*དེ་ལ་མཐའ་དབྱེད་པ།]

གལ་ཏེ་ཤེས་བྱ་དང་སློབ་གསུམ་པ་མི་སྲིད་པས་དེ་དག་གཉིས་ཁོ་ནར་ངེས་ན། [ ] འོ་ན་ཤེས་བྱ་བ་དེན་པ་  
དང་སློབ་པ་འབྲུལ་བ་ཉིད་མི་སྲིད་པས་དོན་དམ་པ་མེད་དོ།། དེ་དག་སྲིད་ན་ནི་དོན་དམ་པ་རང་བཞིན་དུ་གྲུབ་  
10 པར་གྲུབ་ལོ།། <sup>[358b1]</sup>

ཇི་སྟེ་དེ་ལྟར་བྱ་བ་མི་སྲིད་པ་ཉིད་དེ་ལྟར་བྱ་བ་བཞག་པའི་ཐབས་ཀྱིས་ཤེས་པར་བྱེད་ན། འོ་ན་བདེན་པ་གསུམ་  
པ་མི་སྲིད་པ་ཉིད་དེ་བཞག་པའི་ཐབས་ཀྱིས་ཤེས་པར་བྱེད་པས་གངས་ངེས་པ་ཉམས་པ་སོ་ཞེ་ན། འདིར་དངོས་པོ་  
གསུམ་པ་མི་སྲིད་པས་བདེན་པ་གསུམ་པ་མི་འདོད་ཅིང་དངོས་པོ་གཉིས་ <sup>[358b2]</sup> སྲིད་པས་བདེན་པ་གཉིས་སུ་  
འཇོག་པར་འདོད་ན་དེ་ལྟར་འགྱུར་བ་ཞིག་ན་དེ་ནི་མི་འདོད་དེ་དངོས་པོ་གཉིས་མ་གྲུབ་ཀྱང་མཐའ་གཉིས་གྲུབ་  
15 པ་དང་མཐའ་གསུམ་པ་འང་མེད་པས་དེའི་དབང་གིས་བདེན་པ་གཉིས་ཁོ་ནར་ཁས་ལེན་ཏོ།།

མཐའ་ཞེས་བྱ་བ་ནི་དེ་ཁོ་ནར་གྲུབ་བམ་མ་གྲུབ་ཀྱང་ <sup>[358b3]</sup> སློབ་ཤེས་བྱ་སྲིད་པ་<sup>2</sup>ཉེ་བར་བཟུང་ནས་  
རྣམ་པར་<sup>3</sup>བརྟག་པས་ཁས་སྤང་བར་བྱ་སྟེ། ཡོད་པ་ཡིན་ཕྱིན་ཆད་རྟག་པ་དང་མི་རྟག་པ་འབྲུལ་བ་དང་མ་  
འབྲུལ་བའི་ཡུལ། སློབ་མ་བཞག་པར་གྲུབ་པ་དང་རང་མ་གྲུབ་བཞིན་དུ་སློབ་བཞག་པ་ཙམ་དག་ཕན་ཚུན་  
རྣམ་པར་གཅོད་པའི་ <sup>[358b4]</sup> འགལ་བ་ལས་གཉིས་ཁོ་ནར་གྲུབ་ཅིང་གཞན་མི་སྲིད་པའི་ཕྱིར་རོ།།

20 དངོས་པོ་མ་གྲུབ་པར་དེ་གཉིས་ཁོ་ནར་གྲུབ་པ་འང་ག་ལས་ཞེ་ན། དེ་ནི་མཐའ་རྟོག་<sup>4</sup>པའི་སློབ་མ་ཚན་  
ཉིད་གཉིས་ཁོ་ནར་ངེས་པས་ཏེ། དངོས་པོ་[ལ་]གནས་པ་སློབ་མ་བཞག་པ་དང་མི་གནས་པ་སློབ་བཞག་ཙམ་  
<sup>[358b5]</sup> དུ་རྟོག་པ་ལས་མ་གཏོགས་པ་འགའ་ཞིག་ཡོད་པར་རྟོག་པ་མི་སྲིད་པས། འདི་གཉིས་ཕན་ཚུན་སྤངས་  
པའི་ཡུལ་ཅན་ཡིན་པས་སོ།།

<sup>1</sup> U ad. གྲུབ་པ་.      <sup>2</sup> བར་ U      <sup>3</sup> བ་ AKP      <sup>4</sup> རྟག་ KP      <sup>5</sup> སློབ་ AKPU

འོ་ན་དེ་གཉིས་ཀྱི་མ་ཡིན་པ་དང་གཉིས་ཀྱི་ཡིན་པར་རྟོག་པའང་ཉམས་སུ་སྤོང་བས་གྲུབ་པ་ཅི་ལྟར་  
 དགག་སྟེ། དེ་གཉིས་སུ་རྟོག་པ་ཉིད་ཀྱང་དངོས་<sup>[358b6]</sup> རོའི་ཡུལ་ཅན་ནི་མ་ཡིན་ལ། བརྟགས་པའི་ཡུལ་གྱིས་  
 དབུལ་བ་ནི་གང་ཡང་མེད་དོ་སྟེ་མ་ན། གཉིས་ཀྱི་དང་གཉིས་ཀྱི་མ་ཡིན་པར་རྟོག་པར་རྫོང་མས་<sup>6</sup>དེ་ལྟར་བརྗོད་དུ་  
 ཟེན་ཀྱང་། ལྷོ་གཞན་གྱིས་དབུད་ན་དེ་གཉིས་ཀྱི་མཚན་ཉིད་ཀྱིས་མ་ལུབ་པའི་རྟོག་པ་ནི་མི་སྲིད་དེ། འདི་  
 5 གཉིས་<sup>[358b7]</sup> གཅིག་གི་མཚན་ཉིད་གྲུབ་པ་ཉིད་<sup>8</sup>གཅིག་གི་མཚན་ཉིད་བཀག་པའི་རྟོག་པ་དང་། གཅིག་གི་  
 མཚན་ཉིད་བཀག་པའི་རྟོག་པ་ཉིད་གཅིག་གི་མཚན་ཉིད་གྲུབ་པ་ཡིན་པས་སོ།<sup>9</sup> འདི་ལྟར་གཉིས་<sup>10</sup>མ་ཡིན་  
 པར་ངེས་པར་བྱ་བ་དེ་ཡང་དེ་ལོ་ནར་གཉིས་ལས་མ་འདས་བཞེན་<sup>[359a1]</sup> དུ་སྒྲོས་གཉིས་<sup>11</sup>མ་ཡིན་པར་བཞག་  
 པར་རྟོག་པ་དང་། དེ་ལོ་ནར་གཉིས་<sup>12</sup>ལས་འདས་པར་གྲུབ་པ་ཉིད་དུ་རྟོག་པའི་མཚན་ཉིད་གཉིས་ལས་མི་  
 འདའ་བས་<sup>13</sup>སྤང་པོ་གསུམ་པ་མི་སྲིད་པའི་ཕྱིར་དོ། གཉིས་<sup>14</sup>རྟོག་པ་ཡང་དེ་བཞེན་ནོ། དེས་ན།  
 10 དངོས་པོ་<sup>[359a2]</sup>གསུམ་པ་མི་སྲིད་ལྟར། གཉིས་པའང་སྲིད་པ་མ་ཡིན་མོད་།  
 རྣམ་པར་རྟོག་པ་གཉིས་འཐད་ལྟར། གཞན་མི་འཐད་ཕྱིར་གསུམ་པ་མེད་

ཅེས་གྲུབ་པོ།  
 འོ་ན་རྟོག་པ་གཉིས་ལོ་ན་ལས་མཐའ་གཉིས་སུ་གྲུབ་པས་བདེན་པ་གཉིས་ལོ་ནར་འཛོག་པའི་ཕྱིར།  
 ཤེས་པའི་དབང་<sup>[359a3]</sup> གིས་གངས་ངེས་པ་འགོག་པ་འགལ་ལོ་ཞེ་ན། མ་ཡིན་ཏེ་སྒྲོ་འཁྲུལ་བ་དང་མ་འཁྲུལ་བ་  
 15 གཉིས་སུ་ངེས་པས་བདེན་པ་གཉིས་འཛོག་པ་འགོག་གི། ལས་ལེན་གྱི་རྣམ་རྟོག་གཉིས་ལས་བརྒྱད་ནས་བདེན་  
 པའི་གངས་ངེས་འཛོག་པ་ནི་འདོད་པའོ། མཐའ་གཉིས་སུ་རྟོག་པའི་ཤེས་པ་<sup>[359a4]</sup> དེའང་དེ་ལོ་ན་སེམས་པས་  
 དབུད་ན་གཉིས་<sup>15</sup>འཁྲུལ་པ་ཉིད་དོ།  
 དེ་ལྟར་ན་ལས་ལེན་གྱི་ཤེས་པ་གཉིས་ལོ་ནར་ཐ་སྐད་པའི་ཚད་མས་ངེས་པ་ལས་ཡུལ་མཐའ་གཉིས་སུ་  
 ངེས་ལ། དེའང་ཕན་ཚུན་སྤངས་པ་ལ་བཞུགས་<sup>16</sup>ནས་བདེན་པ་གཉིས་ལོ་ནར་འགྲུབ་པོ། འདི་ལྟར་མཐའ་དེ་  
 20 གཉིས་སུ་<sup>[359a5]</sup> བརྟགས་ནས་དང་པོ་ནི་ཤེས་བྱའི་དེ་ལོ་ནར་མི་སྲིད་དོ་ཞེས་མཐའ་གཅིག་བཀག་པས་ནི་དོན་  
 དམ་པའི་ཐ་སྐད་ཀྱི་ཡུལ་གྲུབ་ལ། གཉིས་པ་བརྒྱུད་<sup>17</sup>ཞིང་ལས་སྤངས་པས་ནི་ཀུན་རྫོབ་གྲུབ་པའོ།

<sup>1</sup> གཉིས་ཀ་ P    <sup>2</sup> གཉིས་ཀ་ P    <sup>3</sup> ཇི་ P    <sup>4</sup> གཉིས་ཀ་ P    <sup>5</sup> གཉིས་ཀ་ P    <sup>6</sup> འས་ U    <sup>7</sup> ཉིད་ U  
<sup>8</sup> P om. གཅིག་གི་མཚན་ཉིད་གྲུབ་པ་ཉིད་.    <sup>9</sup> ཡིན་པས། P    <sup>10</sup> གཉིས་ཀ་ AP    <sup>11</sup> གཉིས་ཀ་ AKP  
<sup>12</sup> གཉིས་ཀ་ KP    <sup>13</sup> བར་ A    <sup>14</sup> གཉིས་ཀར་ P    <sup>15</sup> གཉིས་ཀ་ P    <sup>16</sup> ལྟོས་ KPU    <sup>17</sup> གཟུང་ KP



[D3. \*དེའོན་དེ་བཀག་ནས་རང་ལུགས་མཐར་ཐུག་གཞག་པ།]

དེས་ན་དོན་དམ་པའི་མཐའ་ནི་བརྟགས་ནས་བཞག་པར་བྱང་ལ། དེ་བཞག་པས་ཀྱང་<sup>[359a6]</sup> དོན་དམ་  
 10 པའི་མཐར་ཐོག་པ་འགོག་གོ། ཀྱན་ཚོབ་ཀྱི་མཐའ་ནི་སྲིད་པས་མི་སྲོང་ལ། དེའང་འཁྲུལ་པའི་ཡུལ་ཙམ་ཡིན་  
 པས་མངོན་ཞེན་གྱི་གནས་མ་ཡིན་པར་གོ་བར་བྱ་བའི་དོན་དུ་བདེན་པ་གཉིས་བཞག་པ་ཙམ་སྟེ། དེའོན་ཀྱི་  
 5 བདེན་པ་དང་བརྟན་པ་ཐམས་ཅད་རབ་དུ་མ་གྲུབ་གོ།<sup>[359a7]</sup>

[D4. \*དོན་བསྟུ་བ།]

འདི་སྐད་བསྟན་པ་ནི་ཡིན་ཏེ་དངོས་པོ་ཡོད་མེད་དམ་བདེན་བརྟན་གྲུབ་པ་ལ་མ་ལྟོས་པར་རྣམ་པར་  
 བརྟག་པ་ལས་འཇུག་སྐྱོད་པར་བྱ་བ་ཤེས་བྱའི་མཐའ་གཉིས་འོན་ཀྱང་མཐའ་ཐོག་གི་ཤེས་པའི་མཚན་ཉིད་གཉིས་འོ་  
 10 ན་རྟོགས་པ་ཉིད་ཀྱི་རང་རིག་གིས་གྲུབ་པའི་ཤུགས་ལ་གྲུབ་<sup>[359b1]</sup> ས་ལ་ལྟོས་ནས། མཐའ་གཅིག་སྤངས་ཤིང་  
 གཉིས་པ་ལས་སྤངས་པས་འདི་གཉིས་ཀྱི་དབང་གིས་བདེན་པ་གཉིས་འོན་གྲུབ་པོ།<sup>9</sup>

ཚུལ་འདི་དོར་ནས་སློབ་འཁྲུལ་མ་འཁྲུལ་ལམ་བདེན་བརྟན་<sup>10</sup>འགལ་བ་ཉིད་ལས་ནི་རྣམ་པ་ཐམས་ཅད་  
 དུ་བཞག་<sup>11</sup>པར་མི་རུས་ཏེ། དོན་དམ་པར་བདེན་<sup>[359b2]</sup> པའི་མཚན་ཉིད་བདེན་པའི་ཚད་མས་ཡུལ་དུ་མ་གྲུབ་  
 པར་ནི་མི་འགྲུབ་ལ་ཡུལ་དུ་བྱེད་པའང་མ་འབྲེལ་བར་ནི་མི་རུང་སྟེ། ཐམས་ཅད་ཀྱིས་ཐམས་ཅད་ཡུལ་དུ་བྱེད་  
 15 པར་ཐལ་བས་སོ།། འབྲེལ་པའང་མི་འབྲང་དེ། དོན་དམ་པ་ཤེས་པས་མ་བསྟུས་པ་དང་།<sup>[359b3]</sup> ལྷ་འབྲས་ཀྱིས་  
 མ་བསྟུས་པའི་ཕྱིར་འབྲེལ་པ་གཉིས་ནི་མི་རུང་ལ། འབྲེལ་པ་གཞན་ཡང་མེད་པའི་ཕྱིར་རོ།།

ཀྱན་ཚོབ་ཀྱང་འཁྲུལ་པར་བྱང་པས་དེས་དམིགས་པ་ནི་གང་དུའང་མ་བཀག་པ་ན་བདེན་པ་མཐའ་  
 ཡས་པར་འཁྲུར་ལ། རྟུན་<sup>12</sup>པ་ནི་དངོས་སུ་ཚད་མའི་ཡུལ་མ་ཡིན་<sup>[359b4]</sup> པའི་ཡང་ཕྱིར་རྗེ་ལྟར་ཡང་<sup>13</sup>གངས་  
 དེས་པར་<sup>14</sup>མི་འགྲུབ་གོ།།

གལ་ཏེ་གྲུབ་དུ་རྟུག་ན་ནི་དོན་དམ་པ་སློབ་ཡུལ་མ་ཡིན་པ་ལ་སོགས་པ་དང་། སློབ་ཐམས་ཅད་ཀྱན་  
 20 ཚོབ་ཡིན་པ་ལ་སོགས་པ་དང་འགལ་བ་གཏན་མི་སྲོངས་སོ་ཞེས་ངེས་པར་བཟུང་། དེས་ན།

<sup>1</sup> ན་ U      <sup>2</sup> རྟུན་ KP      <sup>3</sup> KPU om. ནི་.      <sup>4</sup> རྟུན་ KP      <sup>5</sup> བརྟག་པ་ལས་ A  
<sup>6</sup> རྟོགས་ A      <sup>7</sup> A om. ལ་.      <sup>8</sup> ས་ U      <sup>9</sup> སའི་ A      <sup>10</sup> རྟུན་ KP      <sup>11</sup> གཞག་ U  
<sup>12</sup> བརྟུན་ U      <sup>13</sup> KP om. ཡང་.      <sup>14</sup> ས་ KPU

འཇིག་རྟེན་མཁམས་<sup>[359b5]</sup> སའི་བདེན་པ་འདི་གཉིས་ཏེ། ལྷོད་ཀྱིས་གཞན་ལས་མ་གསུམ་རང་  
གིས་གཟིགས། དེ་ནི་ཀུན་རྫོབ་བདེན་དང་དོན་དམ་སྟེ། ། བདེན་པ་གསུམ་པ་གང་ཡང་མ་  
མཆིས་སོ། (PPS 61b4-5<sup>H</sup>)

ཞེས་བྱ་བ་དང།

5 ཡང་དག་དང་ནི་བརྟུན་པའི་དངོས་མཐོང་བ། ཐོབ་ལས་དངོས་ཀུན་ངོ་བོ་གཉིས་འཇིག་ལ།  
ཡང་དག་<sup>[359b6]</sup>གཟིགས་ཡུལ་གང་དེ་དེ་ཉིད་དེས། བརྟུན་པ་མཐོང་བ་ཀུན་རྫོབ་བདེན་པར་  
བརྟེན། (MAv VI. 23<sup>1</sup>)

ཅེས་གསུངས་སོ།།

10 [B3. མོ་སའི་མཚན་ཉིད།]

[C1. \*དོན་དམ་བདེན་པའི་མཚན་ཉིད།]

མོ་སའི་མཚན་ཉིད་ལ་དོན་དམ་པའི་མཚན་ཉིད་ནི་སྣང་བ་ཐམས་ཅད་ལས་འདས་པ་<sup>2</sup>སྟེ། མཚན་ཉིད་  
ཐམས་ཅད་དང་བྲལ་བས་ཤེས་<sup>3</sup>བྱའི་མཚན་མ་དང་བྲལ་བའོ། དེས་ན་རྣམ་པར་<sup>[359b7]</sup> རྟོག་པ་དང་རྟོག་པ་  
མེད་པའི་སློ་ཐམས་ཅད་ཀྱི་སློད་ཡུལ་མ་ཡིན་པར་བརྟེན་དེ།<sup>4</sup> སློ་ཐམས་ཅད་ནི་ཡོད་པ་དང་མེད་པ་ལ་སོགས་  
15 པ་ཅི་ཞིག་ཡུལ་དུ་བྱས་ནས་འཇུག་ལ། དོན་དམ་པ་ནི་དེ་ལྟ་བུའི་མཚན་ཉིད་ཐམས་ཅད་དང་བྲལ་བས་སོ།།  
མཚན་ཉིད་འགའ་ཞིག་ཡོད་ན་ནི་ཐ་ན་ཐམས་ཅད་<sup>[360a1]</sup>མཁུན་པའི་སློའི་ཡུལ་ཡིན་པས་ཁྱབ་པས་ན།  
ཡོད་མེད་དངོས་ཀུན་མཁུན་པ་པོ། ཀུན་མཁུན་པས་ཀྱང་གང་མ་གཟིགས།  
དེ་ཡི་དངོས་པོ་ཅི་འདྲ་ཞིག། ཤིན་ཏུ་ཞིབ་པའི་ལྷ་བས་དཔྱད། (SDV 7<sup>5</sup>)

ཅེས་གསུངས་ལ།

20 ཡོད་མིན་མེད་མིན་ཡོད་མེད་མིན། གཉིས་<sup>[360a2]</sup>མིན་ཅེས་བདག་ཉིད་དུ་ཡང་མེད།  
མཐའ་བཞེད་མིན་ཅེས་གྲོལ་བ། དེ་ཉིད་དབྱ་མར་མཁམས་རྣམས་བཞེད།<sup>6</sup>

ཅེས་འབྲུང་ངོ་།།

<sup>1</sup> བདེན་ KPU    <sup>2</sup> U om. བ་.    <sup>3</sup> KP om. ཤེས་.    <sup>4</sup> རྟོ། KP    <sup>5</sup> སའི་ A    <sup>6</sup> མེད་ U  
<sup>7</sup> དུའང་ KPU

དེ་ལྟར་ན་དོན་དམ་པའི་མཚན་ཉིད་ནི་རང་བཞིན་གསལ་ཅད་དང་བྲལ་བ་སྟེ་མཚན་ཉིད་མེད་པ་  
9 ཉིད་མཚན་ཉིད་དུ་བརྗོད་པའོ།། དཔེར་ན་ཚེས་གསལ་ཅད་དང་<sup>[360a3]</sup> བྲལ་བ་ཉིད་འདི་འདྲི་ཚོས་མ་ཡིན་ནམ་  
ཞེས་<sup>1</sup>བཤད་པ་ལྟ་བུའོ།།

དེ་ནི་སྒྲིམ་པ་མེད་པ་ཡང་ཡིན་ཏེ་སྒྲིམ་དང་རྟོག་པ་གསལ་ཅད་ཀྱི་ཞེན་ཡུལ་མ་ཡིན་པའི་ཕྱིར་རོ།།  
5 གཉིས་མེད་པའང་ཡིན་ཏེ་ཡོད་པ་དང་མེད་པ་དང་གཟུང་བ་དང་འཇོག་པ་ལ་སོགས་པ་མ་ཡིན་པའི་ཕྱིར་རོ།།  
མཚན་ཉིད་མེད་<sup>[360a4]</sup> པའང་ཡིན་ཏེ་ཚོས་གང་གིས་ཀྱང་མཚན་པར་བྱ་བ་མ་ཡིན་པའི་ཕྱིར་རོ།། དངོས་པོ་མེད་  
བ་ཡང་ཡིན་ཏེ་འདུས་བྱས་ཀྱི་དོན་ལྡོག་པ་ཙམ་ཡིན་པའི་ཕྱིར་རོ།། རྟོང་པའང་ཡིན་ཏེ་མི་རྟོང་པ་སྐྱབ་པའི་  
10 ཕྱིར་རོ།།

དེ་ནི་མདོར་ན་ཅི་འདྲ་མ་གྲུབ་པ་སྟེ་ནམ་མཁའི་མེ་ཏོག་གི་དེ་ཁོ་ན་ལས་ཁྱད་པར་<sup>[360a5]</sup> མེད་པའི་དོན་  
10 ལྱིས་སོ།། དེས་ན་སྒྲིམ་པ་འགོག་པའི་ཚིག་གིས་ག་སྟངས་དུ་བྱེད་པར་ཟད་ཀྱི་རང་བཞིན་དུ་སྐྱབ་པའི་དོན་ནི་ཅི་  
འདྲ་མེད་དོ།།

[C2. \*ཤེས་བྱ་དབྱེ་གཞིར་བཀོད་པ་ལ་ཚིན་པ་སྤང་བ།]

འོ་ན་སྤང་དབྱེ་བའི་གཞིར་ཤེས་པ་དང་ཤེས་བྱ་སློབའི་ཡུལ་ཉིད་བཞག་པ་དང་འགལ་ལོ་སྟམ་ན། མ་ཡིན་  
15 ཏེ་ཡོད་མེད་ལ་སོགས་པ་འཇོག་པའི་སྒྲིམ་ཤེས་<sup>[360a6]</sup> བྱར་བཏགས་པ་ཉིད་དེ་ཁོ་ནའི་རིགས་པས་དབྱེད་ན་ཤེས་  
བྱའི་མཚན་ཉིད་དང་བྲལ་བས་སློབའི་ཡུལ་ལས་<sup>6</sup>འདས་པ་ཉིད་ཡིན་པའི་ཕྱིར་ཏེ།<sup>7</sup> རྣམ་རྟོག་རྗེས་དབག་ཡུལ་  
རང་གི་མཚན་ཉིད་དུ་རྫོང་ཡང་སློབ་གཞན་གྱིས་དབྱེད་ན་སྤྱི་ལས་མ་འདས་པས་དེའི་ཡུལ་སྤྱིར་བརྗོད་པ་བཞིན་  
10 མོ།།<sup>[360a7]</sup> དེས་ན་སློབའི་ཡུལ་གསལ་ཅད་ཀྱང་རྟོག་ཏུ་<sup>8</sup>བརྗོད་དེ་འབྲུལ་པའི་སྒྲིམ་དོན་དམ་པ་ཡུལ་དུ་མི་བྱེད་པའི་  
ཕྱིར་རོ།། དེ་སྤང་དུ་ཀྱང་རྗོད་དང་དོན་དམ་པ་བསྟན་པའི་མདོ་<sup>9</sup>ལས།

གལ་ཏེ་དོན་དམ་པར་ན་དོན་དམ་པ་<sup>10</sup>ལུས་དང་ངག་དང་ཡིད་ཀྱི་ཡུལ་གྱི་དངོས་པོར་ལྷུར་ན་ནི་  
20 དོན་དམ་པའི་གངས་སུ་མི་འགོ་སྟེ་ཀྱང་<sup>[360b1]</sup> རྗོད་ཉིད་དུ་འབྱུར་རོ།། འོན་ཀྱང་<sup>11</sup>དོན་དམ་པར་  
ན་དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་ནི་གསྟངས་གསལ་ཅད་ལས་ཡང་དག་པར་འདས་པ། བྱེད་བྲག་མེད་པ།  
མ་སྐྱེས་པ་མ་འགགས་པ། བརྗོད་བྱ་དང་བརྗོད་པ་དང་ཤེས་བྱ་དང་ཤེས་པ་དང་བྲལ་བའོ།། དོན་

<sup>1</sup> KP om. ཉིད་. <sup>2</sup> བ་འདྲ་ KP <sup>3</sup> ཅིའད་ U; ཅི་ཡང་ KP <sup>4</sup> ཅིའད་ U; ཅི་ཡང་ KP <sup>5</sup> བརྟགས་ KU  
<sup>6</sup> ས་ KP <sup>7</sup> རོ།། KP <sup>8</sup> དུ་ K <sup>9</sup> བསྟན་པ་མདོ་ KP; བསྟན་པ་ U <sup>10</sup> A om. ན་དོན་དམ་པ་. <sup>11</sup> འོན་ A

དམ་པ་ནི་རྣམ་པ་ཐམས་ཅད་ཀྱི་མཚན་དང་ལྡན་<sup>[360b2]</sup> པ་ཐམས་ཅད་མཁུན་པའི་ཡེ་ཤེས་ཀྱི་  
 ཡུལ་ལས་ཀྱང་འདས་པ་སྟེ། དེ་ལ་ནི་རྣམ་རྟོག་ཐམས་ཅད་འཇུག་པའང་མེད། ལྷོག་པའང་མེད་  
 དོ། དེ་ལ་ལ་ལ་དང་ལྷོ་ལ་དང་དབུས་ཀྱང་མེད་དོ། འདི་ནི་དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་ཞེས་  
 ལྷོ་བཏགས་ཏེ་བཟོད་མོད་ཀྱི། དོན་ནི་དོན་དམ་པར་མི་<sup>[360b3]</sup> ལྷེ་བ་སྟེ་དེ་ལ་ཐ་སྐྱད་ཐམས་ཅད་  
 5 མི་འཇུག་གོ། གང་ལ་ཐ་སྐྱད་མི་འཇུག་པ་དེ་ནི་དོན་དམ་པ་སྟེ་ཇི་ལྟར་དོན་དམ་པའོ་ཞེས་བཟོད་  
 པ་ལྟར་ནི་མ་ཡིན་ནོ། ལྷོན་པས་ཀྱང་དོན་དམ་པར་ན་ཚས་ཐམས་ཅད་དང་སྐྱ་ཐམས་ཅད་ནི་  
 བརྟུན་པ་སྟེ་བསྐྱེ་བའི་ཚས་ཅན་ལོ་ཞེས་བཀའ་སྤྲུལ་ཏེ་ (SPN 247a3-247b1M)

<sup>[360b4]</sup>ཞེས་སོ།།

10 [C3. \*ཀྱན་ཚེབ་བདེན་པའི་མཚན་ཉིད།]

ཀྱན་ཚེབ་ཀྱི་མཚན་ཉིད་ནི་ཕྱིན་ཅི་ཡོག་གི་དམིགས་པ་ཡིན་པས་སློ་མ་ལུས་པ་ལ་སྤང་བ་ཇི་ལྟར་བ་སྟེ།  
 ཕྱིན་ཅི་ཡོག་ནི་འབྲུལ་པའི་སློ་མ་ཐའ་དག་གོ། དེས་དམིགས་པར་བྱ་བ་ནི་འབྲུལ་པའི་ཡུལ་ཡིན་པས་ན་ཀྱན་  
 ཚེབ་ཀྱི་བདེན་པ་སྟེ། ཚད་མས་གཞོན་བཞིན་དུ་སྤང་བ་ནི་བརྟུན་<sup>3པ་</sup> <sup>[360b5]</sup> ཡིན་པས། ཚད་མའི་ཡུལ་དེ་འོ་  
 ཉར་དེ་ལྟར་གནས་པ་བཀག་པས་ན་ཚད་མས་གཞོན་པའི་ཐ་སྐྱད་དུ་འཐད་པས་སོ།། སྤང་བཞིན་པ་ལ་འབྲུལ་  
 15 པའི་ཡུལ་ཅམ་ལ་ནི་ཚད་མ་མི་འཇུག་པས་སྤང་བ་འགོག་པར་<sup>5</sup>ཡང་མི་ཐལ་ལོ།། སློའི་ཡུལ་མ་ལུས་པ་ཀྱན་  
 ཚེབ་ཡིན་པས་ན།

དོན་དམ་སློ་ཡི་སློད་<sup>[360b6]</sup> ཡུལ་མིན།། སློ་ནི་ཀྱན་ཚེབ་ཡིན་པར་འདོད།། (BCA IX. 2cdN)  
 ཅེས་གསུངས་སོ།།

20 [B4. མཚན་ཉིད་དེ་དག་ངེས་པར་བྱེད་པའི་ཚད་མ།]

[C1. \*སྦྱར་བསྟན་པ།]

མཚན་ཉིད་དེ་དག་དེ་ལྟར་ཡིན་པའི་སྦྱབ་བྱེད་ཅི་ཡོད། ཚིག་ཅམ་ལ་སྦྱུ་ཡིད་རྟོན་སྦྱམ་ན་ཉོན་ཅིག།  
 སྤང་བ་དང་ལྡན་པའི་སློ་ཐམས་ཅད་ནི་སོ་སོ་ནས་རང་གི་ཡུལ་ཇི་ལྟར་བདེན་པར་རྫོགས་པར་ ལྷུང་ལྷུགས་

<sup>1</sup> KP om. དེ་ལ་.    <sup>2</sup> སླུ་ KPU    <sup>3</sup> ལྷོན་ KP    <sup>4</sup> པས་ KPU    <sup>5</sup> པ་ KP    <sup>6</sup> ཉེ་ A  
<sup>7</sup> ལས་ P

པའི་ <sup>[360b7]</sup> ལྷོ་གཞན་གྱིས་དེ་དག་ལ་གཞོན་པ་དང་ལྷན་པས་ན་རྣམ་འགྱུར་དང་ལྷན་པ་བཙོས་བྱུང་ཟད་ལ།  
རིགས་པ་ངེས་པར་སེམས་པ་མཚན་ཉིད་ཐམས་ཅད་སྤོང་པར་རྟོགས་པའི་ཤེས་རབ་ནི་སྤྱོད་ཡུལ་དེ་རྣམ་གཅོད་  
གྱི་ཆ་ལ་ལྷོ་གཞན་གྱིས་གཞོན་པ་མེད་པས་རྣམ་པར་མི་ <sup>[361a1]</sup> འགྱུར་བ་རང་བཞིན་གྱིས་འོད་གསལ་བ་འདྲེ་ལོ་  
ནས་རབ་དུ་ཕྱེ་བའི་ཕྱིར་ཏེ།

5 དེ་ལ་འཇིག་རྟེན་རྣམ་གཉིས་མཐོང་།། རྣལ་འབྱོར་པ་དང་ཕལ་པའོ།།  
དེ་ལ་འཇིག་རྟེན་ཕལ་པ་ནི།། རྣལ་འབྱོར་འཇིག་རྟེན་གྱིས་གཞོན་ཅིང་།།  
རྣལ་འབྱོར་པའང་སློབ་ཁྲུང་གྱིས།། <sup>[361a2]</sup> ལོང་མ་གོང་མ་རྣམས་གྱིས་གཞོན།། (BCA IX.  
3-4ab<sup>P</sup>)  
ཅེས་གསུངས་པ་ལྟར་རོ།།

10

[C2. \*བྱེ་བྲག་དུ་བཤད་པ།]

[D1. \*དོན་དམ་བདེན་པ་ངེས་བྱེད་ཀྱི་ཚད་མ།]

མཚན་ཉིད་དེ་དག་ངེས་པར་བྱེད་པའི་ཚད་མ་ལ་དོན་དམ་པ་རྟོགས་པ་ལ་བྱེད་པ་ནི་ཕ་རོལ་གཟིགས་  
པ་རྣམས་ཀྱི་<sup>2</sup>སྒྲུང་བ་མེད་པའི་ཡེ་ཤེས་རྣལ་འབྱོར་གྱི་མངོན་སུམ་དང་། ལྷ་<sup>3</sup>རོལ་མཐོང་བ་རྣམས་ཀྱི་སློབ་འདོགས་  
15 <sup>[361a3]</sup> འགོག་པར་བྱེད་པ་གཅིག་དང་དུ་མ་དང་བྲལ་བ་ལ་སོགས་པའི་རྟོགས་ལས་འཇུག་པའི་རྗེས་དཔག་གི་  
ཚད་མ་དག་གོ།།

[D2. \*ཀྱུན་རྗེས་བདེན་པ་ངེས་བྱེད་ཀྱི་ཚད་མ།]

ཀྱུན་རྗེས་རྟོགས་པར་བྱེད་པ་ནི་དེ་ལོ་ནར་ཡོད་པ་ལ་གཞོན་པར་བྱེད་པ་དག་གིས་བདེན་པར་ཡོད་  
20 པའི་སློབ་འདོགས་བཀག་པའི་ཤུགས་ཀྱིས་སྤང་བཞིན་པར་ <sup>[361a4]</sup> མངོན་སུམ་ཉིད་ཀྱིས་གྲུབ་པ་ལ་འདི་བརྒྱན་པར་  
ཡོད་པ་ཙམ་དུ་ངེས་པས་ན་རྗེས་དཔག་གིས་འདུ་བྱེད་བརྟན་པར་བྱས་པའི་མངོན་སུམ་ཉིད་དེ།  
དེ་ལ་སློབ་འདོགས་གཅོད་བྱེད་པ།། ཤེས་པར་བྱེད་པའི་གཏན་ཚིགས་ཀྱིས།།  
རྗེས་སུ་དཔོག་རྣམས་ཤེས་པར་བྱེད།། རྣལ་འབྱོར་དབང་རྣམས་ <sup>[361a5]</sup> མངོན་སུམ་གསལ།།  
(MA 75<sup>o</sup>)

<sup>1</sup> རྟོག་ A      <sup>2</sup> ཀྱིས་ A      <sup>3</sup> ལྷལ་ KP      <sup>4</sup> འགྲུབ་ U

ཞེས་བྱ་བ་དང་།

དེ་ལྟེང་དངོས་པོ་འདི་དག་ནི། ལྷན་རྒྱུ་པ་ཉིད་མཚན་ཉིད་འཛིན།

གལ་ཏེ་འདི་དག་མདོན་འདོད་ན། དེ་ལ་བདག་གིས་ཅི་བྱར་ཡོད་ (MA 63<sup>B</sup>)

ཅེས་གང་གསུངས་པ་ལོ།

---

<sup>1</sup> དེའི་ A      <sup>2</sup> བདག་ U

- A SDV 15ab: གང་ཞིག་གིས་སམ་གང་ཞིག་ལ། ། ཡང་དག་སྐྱབ་བྱེད་ཀྱང་ཚོལ་བཞེད།། (D 9a2)
- B ĀM 18: ཡང་དག་མ་ཡིན་དོན་སྣང་བས། ། ཡང་དག་དོན་ནི་བསྐྱབས་ནས་གནས། ། མ་རིག་པ་ཡིས་བསྐྱེད་པ་  
ཉིད། ། མིག་མེར་ནད་ཀྱིས་བཏབ་པ་བཞིན།། (D 52a1-2); Skt. abhūtaṃ khyāpayaty arthaṃ  
bhūtaṃ avṛtya vartate/ avidyā jāyanānaiva kāmala-taṅk-vṛttivat// (Cit. BCAP p.  
352.11-12)  
Gro lung pa probably cited it from BCAP: མ་རིག་སྐྱེས་པ་ཉིད་ཀྱིས་ན། ། ཡང་དག་མིན་པའི་དོན་  
སྣང་བཞེད། ། ཡང་དག་སྐྱབ་པར་བྱེད་ལ་འཇུག། མིག་མེར་ཀྱིས་ནི་གནད་པ་བཞིན།། (D 188b6 ad. IX 2)
- C Cf. BCAP 188b5: ཀྱང་ཚོལ་དང་མ་རིག་པ་དང་མོངས་པ་དང་ཕྱིན་ཅི་ལོག་ཅེས་བྱ་བ་ནི་རྣམ་གངས་ཡིན་  
ལོ།།; Skt. p. 352.6f.: avidyā moho viparyāsa iti paryāyāh/
- D Y§ 35: ལྷ་འདས་པ་བདེན་གཅིག་ལུང་། རྒྱལ་བ་རྣམས་ཀྱིས་གང་གསུངས་པ། ། དེ་ཚེ་ལྷ་མ་ལོག་མིན་  
ཞེས། ། མཁས་པ་སྤྱི་ཞིག་རྟོག་པར་བྱེད།། (D 21b5)
- E BCA IX. 2d: ལྷོ་ནི་ཀྱང་ཚོལ་ཡིན་པར་བཟོད།། (D 30b7)
- F Cf. SN 14b2: འདུ་བྱེད་ཁམས་དང་དོན་དམ་མཚན་ཉིད་ནི། ། གཅིག་དང་ཐ་དང་བྲལ་བའི་མཚན་ཉིད་དེ། །  
གཅིག་དང་ཐ་དང་དུ་ཡང་གང་རྟོག་པ། ། དེ་དག་ཚུལ་བཞིན་མ་ཡིན་ཞུགས་པ་ཡིན།།
- G Y§ 3: ཇི་ལྟར་བྱིས་པས་རྣམ་བཏགས་བཞིན། ། དངོས་པོ་གལ་ཏེ་བདེན་འགྲུར་ན། ། དེ་དངོས་མེད་པས་རྣམ་  
ཐར་དུ། ། གང་གིས་མི་འདོད་རྒྱ་ཅི་ཞིག། (D 20b3)
- H PPS 61b4-5: འཇིག་རྟེན་མཁས་པའི་བདེན་པ་གཉིས་ཡིན་ཏེ། ། ལྷོད་ཀྱིས་གཞན་ལས་མ་གསལ་རང་གིས་  
གཟིགས། ། དེ་ནི་ཀྱང་ཚོལ་བདེན་དང་དོན་དམ་སྟེ། ། བདེན་པ་གསུམ་པ་གང་ཡང་མ་མཆིས་སོ།།  
Gro lung pa probably cited it from BCAP: འཇིག་རྟེན་མཁས་པའི་བདེན་པ་འདི་གཉིས་ཏེ། ། ལྷོད་  
ཀྱིས་གཞན་ལས་མ་གསལ་རང་གིས་གཟིགས། ། དེ་ནི་ཀྱང་ཚོལ་བདེན་དང་དོན་དམ་སྟེ། ། བདེན་པ་གསུམ་པ་  
གང་ཡང་མ་མཆིས་སོ།། (D 192a3-4 ad IX. 2); Skt. satya ime duvi lokavidūnām diṣṭa  
svayaṃ aśruṇitva pareṣām/ saṃvṛti yā ca tathā paramārtho satyu na sidhyati kiṃ ca  
tṛtīyu// (BCAP pp. 361.16-362.2); Ch. 世間智者於實法，不由他悟自然解。所謂世  
俗及勝義，離此更無第三法。（『父子合集經』 T320, 942a29-b1）；世間智者於  
實法，不從他聞自然解。所謂世諦及真諦，離此更無第三法。（『大寶積經第十  
六會』 T310, 378c23-24)
- I MAv VI. 23: དངོས་ཀྱང་ཡང་དག་བརྗེན་པ་མཐོང་བ་ཡིས། ། དངོས་རྟེན་དོ་བོ་གཉིས་ནི་འཛོལ་པར་འགྲུར། །  
ཡང་དག་མཐོང་ལུག་གང་ཡིན་དེ་ཉིད་དེ། ། མཐོང་བ་བརྗེན་པ་ཀྱང་ཚོལ་བདེན་པར་གསུངས།། (D 253a5).  
Gro lung pa probably cited it from BCAP: ཡང་དག་དང་ནི་བརྗེན་པའི་དངོས་མཐོང་བ། ། འཛོལ་

པས་དངོས་ཀྱི་ངོ་བོ་གཉིས་འཛིན་ལ། ཡང་དག་གཟིགས་ཡུལ་གང་དེ་དེ་ཉིད་དེ། བརྟུན་པ་མཐོང་བ་ཀྱི་  
རྗེས་བདེན་པར་བརྗོད། (D 191b6-7 ad IX. 2); Skt. samyag-mṛṣā-darśana-labdha-bhāvaṃ  
rūpa-dvayaṃ bibhrati sarva-bhāvāḥ/ samyag-dṛśāṃ yo viśayaḥ sa tattvaṃ, mṛṣādrśāṃ  
saṃvṛti-satyam uktam// (BCAP p. 361.4-7; Li 2012, p. 5)

<sup>J</sup> SDV 7: ཡོད་མེད་དངོས་པོ་མཁྱེན་པ་པོ། ཀྱི་མཁྱེན་པས་ཀྱང་གང་མ་གཟིགས། དེ་ཡི་དངོས་པོ་ཅི་འདྲ་  
ཞིག། ཤིན་ཏུ་ཞིབ་པའི་ལྟ་བུ་བསྟོད། (D 4b7)

<sup>K</sup> This is cited in BCAP: ཡོད་མེད་མེད་མེད་ཡོད་མེད་མེད། གཉིས་ཀྱི་བདག་ཉིད་དུ་ཡང་མེད། མཐའ་  
བཞི་དག་ལས་ངེས་གྲོལ་བ། དེ་ཉིད་དབུ་མར་མཁས་རྣམས་བཞེད། (D 191a6-7 ad IX. 2); Skt. na  
san nāsan na sad-āsan na cāpy anubhayātmakam/ catuḥkoṭi-vinirkmuktam tattvaṃ  
mādhyamikā viduḥ// (BCAP p. 359.10-11). Cf. JSS 28: ཡོད་མེད་མེད་མེད་ཡོད་མེད་མེད།  
གཉིས་ཀའི་བདག་ཉིད་ཀྱང་མིན་པས། མཐའ་བཞི་ལས་གྲོལ་དབུ་མ་པ། མཁས་པ་རྣམས་ཀྱི་དེ་ལོ་ཚོ།  
(Mimaki 1976, p. 204)

<sup>L</sup> A similar passage is found in *Pramāṇasamuccayaṭīkā* (D 4268) of Jinendrabuddhi  
as follows: མེད་པ་ནི་ཚོས་འགའ་ཡང་མ་ཡིན་པ་ལོ་ཚོ་ལོ་ལོ་ན། ཚོས་ཐམས་ཅད་དང་བྲལ་བ་ཞེས་བྱ་བ་འདི་  
ལོ་ན་དེའི་ཚོས་མ་ཡིན་ནས། སློས་སླུལ་པ་ནི་མེད་པ་ལ་ཡང་མི་འགའ་བའི་ཕྱིར་རོ། (D 171b2)

<sup>M</sup> SPN 247a3-247b1: ལྷའི་བྱ་གཤམ་ཏེ་དོན་དམ་པར་ན་དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་ལྷས་དང་། དག་དང་། ཡིད་  
ཀྱི་ཡུལ་གྱི་རང་བཞིན་དུ་འལྱར་ན་ནི་དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་ཞེས་བྱ་བའི་གངས་སུ་མི་འགྲོ་སྟེ། ཀྱི་རྗེས་ཀྱི་  
བདེན་པ་ཉིད་དུ་འལྱར་རོ། འོན་ཀྱང་ལྷའི་བྱ་དོན་དམ་པར་ན་དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་ནི། སྐྱེད་ཐམས་ཅད་  
ལས་ཡང་དག་པར་འདས་པ། འཇུག་མེད་པ། མ་སྟེས་པ། མ་འགགས་པ། སློབ་བྱ་བ་དང་། སློབ་དང་།  
ཤེས་པར་བྱ་བ་དང་། ཤེས་པ་དང་བྲལ་བའོ། ལྷའི་བྱ་དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་ནི་རྣམས་པ་ཐམས་ཅད་ཀྱི་མཚོག་  
དང་ལྷན་པ་དང་། ཐམས་ཅད་མཁྱེན་པའི་ཡེ་ཤེས་ཀྱི་ཡུལ་གྱི་བར་ལས་ཡང་དག་པར་འདས་པ་ཡིན་ཏེ། ལྷའི་བྱ་  
དེ་ལ་རྟོག་པ་དང་རྣམས་པར་རྟོག་པ་ཐམས་ཅད་འཇུག་པའང་མེད། ལྷོག་པའང་མེད། དོན་དམ་པར་ན་དེ་ལ་པ་  
རོལ་ཡང་མེད། ལྷོ་རོལ་ཡང་མེད། དབུས་ཀྱང་མེད་དེ། ལྷའི་བྱ་འདི་ནི་དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་ཞེས་སྟོབ་བྲགས་  
ཏེ་བརྗོད་མོད་ཀྱི། ཇི་ལྟར་དོན་དམ་པའི་བདེན་པའོ་ཞེས་བྱ་བ་ལྟར་ནི་མ་ཡིན་ནོ། ལྷའི་བྱ་དོན་དམ་པར་  
མི་སྟེ་བ་སྟེ། དེ་ལ་ཐ་སྐྱེད་ཐམས་ཅད་མི་འཇུག་གོ། དོན་དམ་པར་གང་ལ་ཐ་སྐྱེད་ཐམས་ཅད་མི་འཇུག་པ་དེ་ནི་  
ལྷའི་བྱ་དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་སྟེ། ཇི་ལྟར་དོན་དམ་པའི་བདེན་པའོ། ཞེས་བརྗོད་པ་ལྟར་ན་མ་ཡིན་ནོ། ལྷའི་  
བྱ་དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་དག་བཅོམ་པ་ཡང་དག་པར་རྗོགས་པའི་སངས་རྒྱས་ཀྱིས་ཀྱང་དོན་དོན་པར་ན་ཚོས་  
ཐམས་ཅད་དང་། སྐྱེ་ཐམས་ཅད་ནི་བརྟུན་ཏེ་སྐྱེ་བའི་ཚོས་སོ་ཞེས་བཀའ་སྟུང་ཏེ།

Cit. BCAP 193b4-6: བཅོམ་ལྷན་འདས་ཀྱིས་འཕགས་པ་བདེན་པ་གཉིས་ལ་འཇུག་པ་དེར་ཡང་། ལྷའི་



བྱ་གལ་ཏེ་དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་ལྷུས་དང་ངག་དང་ཡིད་ཀྱི་སློབ་ལྷུའ་བྱ་ལྷུར་ན་དེ་དོན་དམ་པའི་གངས་སུ་མི་  
 འགྲོ་ཞིང་ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་བདེན་པ་ཉིད་དུ་འབྱུར་རོ།། ལྷའི་བྱ་འོན་ཀྱང་དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་ནི་ཐ་སྐད་ཐམས་  
 ཅད་ལས་འདས་པ་དང་། ཡང་དག་པར་མ་སྐྱེས་པ་དང་། མ་འགགས་པ་དང་། བརྗོད་པར་བྱ་བ་དང་། རྗོད་  
 པར་བྱེད་པ་དང་། ཤེས་བྱ་དང་། ཤེས་པ་དང་བྲལ་བ་ཡིན་ཏེ། ཇི་སྲིད་དུ་རྣམ་པ་ཐམས་ཅད་ཀྱི་མཚོག་དང་  
 ལྷན་པའི་ཐམས་ཅད་མཁྱེན་པའི་ཡེ་ཤེས་ཀྱི་ལྷུའ་ལས་འདས་པ་ནི་དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་ཡིན་ཞོ་ཞེས་རྒྱས་པར་  
 གསུངས་སོ།།; Skt. tatra cedam uktaṃ bhagavatā Ārya-satyadvayāvātāre/ yadi hi deva-  
 putra paramārthataḥ paramārtha-satyam kāya-vān-manasām viṣayatām upagacchet/  
 na tat paramārthasatyam iti saṃkhyāṃ gacchet/ saṃvṛtisatyam eva tad bhavet/ api tu  
 devaputra paramārtha-satyam sarva-vyavahāram atikrāntaṃ nirviśeṣaṃ/ asamut-  
 pannaṃ aniruddhaṃ/ abhidheyābhidhāna-jñeya-jñāna-vigataṃ/ yāvat sarvākāra-  
 varopeta-sarvajña-jñāna-viśaya-bhāva-samatikrāntaṃ paramārtha-satyam/ iti vistaraḥ/  
 (BCAP p. 366.10-16)

Cit. MAV 255b7-256a4 ad VI. 29: ཇི་སྐད་དུ་འཕགས་པ་བདེན་པ་གཉིས་ལ་འཇུག་པ་ལས། ལྷའི་བྱ་  
 གལ་ཏེ་དོན་དམ་པར་ན་དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་ལྷུས་དང་ངག་དང་ཡིད་ཀྱི་ལྷུའ་ཀྱི་རང་བཞིན་དུ་འབྱུར་ན་ནི།  
 དེ་དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་ཞེས་བྱ་བའི་གངས་སུ་མི་འགྲོ་སྟེ་ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་བདེན་པ་ཉིད་དུ་འབྱུར་རོ།། འོན་ཀྱང་  
 ལྷའི་བྱ་དོན་དམ་པར་ན་དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་ནི་ཐ་སྐད་ཐམས་ཅད་ལས་འདས་པ། བྱེ་བྲག་མེད་པ། མ་སྐྱེས་  
 པ། མ་འགགས་པ། སྐྱ་བར་བྱ་བ་དང་། སྐྱ་བ་དང་། ཤེས་པར་བྱ་བ་དང་། ཤེས་པ་དང་བྲལ་བའོ།། ལྷའི་བྱ་  
 དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་ནི་རྣམ་པ་ཐམས་ཅད་ཀྱི་མཚོག་དང་ལྷན་པ་ཐམས་ཅད་མཁྱེན་པའི་ཡེ་ཤེས་ཀྱི་ལྷུའ་ཀྱི་  
 བར་ལས་འདས་པ་ཡིན་ཏེ། ཇི་ལྟར་དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་འོ་ཞེས་བརྗོད་པ་ལྟར་ནི་མ་ཡིན་ནོ།། ཚས་ཐམས་  
 ཅད་ནི་བརྗོད་ཏེ་སྐྱེ་བའི་ཚས་སོ།། ལྷའི་བྱ་དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་ནི་བཟོན་པར་མི་རུས་སོ།། དེ་ཅིའི་ཕྱིར་ཞེ་ན།  
 གང་གིས་སྟོན་པ་དང་། ཅི་སྟོན་པ་དང་། གང་ལ་སྟོན་པའི་ཚས་དེ་དག་ཐམས་ཅད་ནི་དོན་དམ་པར་རབ་དུ་མ་  
 སྐྱེས་པའོ།། རབ་དུ་མ་སྐྱེས་པའི་ཚས་རྣམས་ཀྱིས་ནི་རབ་དུ་མ་སྐྱེས་པའི་ཚས་རྣམས་བཤད་པར་མི་རུས་སོ་  
 ཞེས་ ...

<sup>N</sup> BCA IX. 2cd: དོན་དམ་སྟོ་ཡི་སློབ་ལྷུའ་མིན།། སྟོ་ནི་ཀུན་རྫོབ་ཡིན་པར་བརྗོད།། (D 31a1); Skt.  
 buddher agocaras tattvaṃ, buddhiḥ saṃvṛtir ucyate// (BCAP p. 352.4)  
<sup>O</sup> Gro lung pa defines this concept as follows: TR p. 630.12-15; A 370a5-6; K 313b2-3;  
 U 85a1-3: འོད་གསལ་ལ་བའི་མཚན་ཉིད་ནི། དེས་ན་རང་བཞིན་འོད་གསལ་ཡོངས་དག་སེམས།། མེད་ལ་  
 མངོན་ཞེན་མ་རིག་ཐོགས་མེད་པའི།། ཕྱིན་ཅི་འོག་ལས་ཉོན་མོངས་སོགས་ཀྱིས་བསྐྱབས།། སྟོང་ལ་སྐྱོས་མེད་  
 འོད་གསལ་བྱང་ཆུབ་ཉིད།། འོད་གསལ་བ་ནི་སེམས་ཀྱི་ཚས་ཉིད་གདོད་མ་ནས་(མས་ན་ P)ཀུན་དུ་རྟོག་པ་  
 ཐམས་ཅད་དང་མ་འདྲེས་པའི་རང་བཞིན་ནོ།།  
<sup>P</sup> BCA IX. 3-4ab: དེ་ལ་འཇིག་རྟེན་རྣམ་གཉིས་མཐོང་།། རྣལ་འབྱོར་པ་དང་ཕལ་པའོ།། དེ་ལ་འཇིག་རྟེན་

ཕལ་པ་ནི། རྣལ་འབྱོར་འཇིག་རྟེན་གྱིས་གཞི་ཅིང་། རྣལ་འབྱོར་པ་ཡང་སློབ་ལྷན་གྱིས། གོང་མ་གོང་མ་  
རྣམས་གྱིས་གཞོན། (D 31a1-2); Skt. tatra loko dvidhā dṛṣṭo yogī prākṛtakas tathā/ tatra  
prākṛtako loko yogilokena bādhyate// bādhyante dhīviśeṣeṇa yogino 'py uttarottaraiḥ/  
(BCAP pp. 368, 370)

<sup>Q</sup> MA 75: དེ་ལ་སློབ་འདོགས་གཅོད་བྱེད་པ། ཤེས་པར་བྱེད་པའི་གཏན་ཚིགས་གྱིས། རྗེས་སུ་དཔོག་རྣམས་ཤེས་  
པར་བྱེད། རྣལ་འབྱོར་དབང་རྣམས་མངོན་སུམ་གསལ། (D 74b2-3; Ichigo 1985, p. 248)

<sup>R</sup> MA 63: དེ་ཕྱིར་དངོས་པོ་འདི་དག་ནི། ཀུན་རྗེས་ཁོ་ནའི་མཚན་ཉིད་འཇིག། གལ་ཏེ་འདི་དག་དོན་འདོད་ན།  
དེ་ལ་ཁོ་བོས་ཅི་ཞིག་བྱ། (D 70a2; Ichigo 1985, p. 196)

**4. Critically edited Text of the Commentary of *Satyadvayavibhaṅga* by  
rGya dmar ba byang chub grags  
(Part: General Meaning (\*spyi don) of the Two-truths)**

**I. Editorial Notes**

**Manuscript Information**

Title: \**bDen gnyis kyi rnam bshad*. In: KS 19, pp. 247-316 (4a1-45b3). [ff. 1-3, 13-16, 26-28 missing]

Script: dBu med script

Conditions: Generally, the right edges of the folios are damaged and some scripts are illegible.

**Part of the text critically edited**

Ms. 6b7-10b6 only (the part of general meaning (\*spyi don) of the Two-truths (*bden gnyis*, \**satyadvaya*) [7a2-10b6] with its introductory part [6b7-7a2])

**Abbreviations**

[...]	reconstructions or additions by the editor
<...>	deletion
{...}	marginal scripts/notes
+	broken or illegible parts of the manuscript
Ms.	manuscript of the above-mentioned text
Cit.	citation

**Notes**

- Footnotes: information of readings of the manuscript and text-related notes
- Endnotes: information of citations and reference texts with content-related notes

**Main reference texts of Tibetan authors**

TR: *bsTan rim chen mo* by Gro lung pa blo gros 'byung gnas. [folio no.: Zhol ed.]

*rGya dbu bsdus*: *dBu ma'i de kho na nyid gtan la dbab pa* by rGya dmar ba byang chub grags<sup>1</sup>.

*BCA rGya tik*: *Byang chub sems dpa'i spyod pa la 'jug pa'i tshig don gsal bar bshad pa* by rGya mar ba byang chub grags.

*Phya dbu bsdus*: *dBu ma shar gsum gyi stong thun* by Phya pa chos kyi seng ge.

*SDV Phya tik*: *dBu ma bden gnyis kyi 'grel pa* by Phya pa chos kyi seng ge.

<sup>1</sup> The editing and translating work of this text is going on by Pascale Hugon and Kevin Vose (Hugon/Vose 2018).

**II. Contents (ས་བཅད) of the part of “\*བདེན་གཉིས་ཀྱི་སྤྱི་དོན་” [7a2-10b6]  
of ལྷ་དམར་བའི་བདེན་གཉིས་ཀྱི་རྣམ་བཤད།**

om.

རང་ལྷགས་གཞག་པ། [7a2] ad SDV 3-5

A1. [རིགས་པས་]མདོར་བསྟན་པ། (= \*བདེན་གཉིས་ཀྱི་སྤྱི་དོན་) [7a2-10b6]

B1. བདེན་གཉིས་ཀྱི་དབྱེ་བ། [7a2]

C1. དབྱེ་བའི་གཞི། [7a3] [cf. TR, P 610.13-15; A 357a4-5]

C2. དབྱེ་བའི་དོན། [7a3]

D1. \*དགེ་བཤེས་གོ་ལུང་པའི་ལྷགས་དགག་པ། [7a3]

E1. \*དགེ་བཤེས་ཀྱི་བཞེད་པ་འགོད་པ། [8b5] [cf. TR 610.15-19; 357a5-6]

E2. \*དགོངས་འགྲེལ་ལས་གསུངས་པའི་སྦྱོན་བཞི་བཞི་བཟོད་པ། [7a4]

F1. \*གཅིག་པ་ཡིན་པའི་ཕྱོགས་ལ་སྦྱོན་བཞི་བཟོད་པ། [7a4]

G1. \*དགེ་བཤེས་ཀྱི་བཞེད་པ་འགོད་པ་དང་དེ་དགག་པ། [7a4] [cf. TR 611.20-611.4; 357a7-b3]

G2. \*རང་ལྷགས་གཞག་པ། [7a8]

F2. \*ཐ་དང་པ་ཡིན་པའི་ཕྱོགས་ལ་སྦྱོན་བཞི་བཟོད་པ། [7b1] [cf. TR 611.4-18; 357b3-6]

F3. \*རང་ལྷགས་གཞག་པ། [7b5]

D2. \*དངོས་པོ་གཅིག་ལ་ཚོས་ཀྱི་དབྱེ་བས་བདེན་པ་གཉིས་སུ་དབྱེ་བའི་ལྷགས་དགག་པ། [7b6]

E1. ལུང་གིས་གཞོད་པ། [7b7]

E2. རིགས་པས་གཞོད་པ། [7b8]

F1. \*སྦྱབ་བྱེད་མེད་པ། [7b8]

F2. \*གཞོད་བྱེད་ཡོད་པ། [8a3]

D3. \*རང་ལྷགས་གཞག་པ། [8b2]

C3. མིང་གི་དོན། [8b3] [cf. TR 609.9-610.7; 356b1-7]

C4. གྲངས་ངེས་པ། [8b5]

D1. \*གཞན་ལྷགས་དགག་པ། [8b5]

- E1. \*དགེ་བཤེས་གོ་ལུང་པའི་བཞེད་པ་འགོད་པ། [8b5] [cf. TR 611.21-612.8; 358a2-6]
- E2. \*དགེ་བཤེས་རང་ཉིད་ཀྱིས་དེ་ལ་མཐའ་དཔུང་པ། [8b8] [cf. TR 612.8-613.17; 358a7-359a4]
- E3. \*དགེ་བཤེས་ཀྱི་དགོངས་པ་མཐར་ཐུག་བསྟན་པ། [9a7] [cf. TR 613.17-20; 359a5-6]
- E4. \*དེ་དགག་པ། [9b1]
- D2. \*རང་ལུགས་གཞག་པ། [9b3]
- B2. བདེན་གཉིས་ཀྱི་མཚན་ཉིད། [9b5]
- C1. མཚན་ཉིད་ཀྱི་རང་བཞིན། [9b5]
- D1. \*ཀྱུན་ཚོབ་བདེན་པའི་མཚན་ཉིད། [9b5]
- E1. \*དགེ་བཤེས་གོ་ལུང་པའི་བཞེད་པ་འགོད་པ། [9b5] [cf. TR 615.20-616.1; 360b3-6]
- E2. \*དེ་དགག་པ། [9b6]
- E3. \*རང་ལུགས་གཞག་པ། [9b8]
- D2. \*དོན་དམ་བདེན་པའི་མཚན་ཉིད། [10a2]
- E1. \*དགེ་བཤེས་གོ་ལུང་པའི་བཞེད་པ་འགོད་པ། [9b5] [cf. TR 614.13-615.9; 359b6-360a7]
- E2. \*དེ་དགག་པ། [9b6]
- E3. \*རང་ལུགས་གཞག་པ། [9b8]
- D3. \*བདེན་གཉིས་ཀྱི་དོན་བསྟུ་བ། [10b2]
- C2. མཚན་ཉིད་དེ་དག་ངེས་བྱེད་ཀྱི་ཚད་མ། [10b4]
- D1. \*དོན་དམ་བདེན་པ་ངེས་བྱེད་ཀྱི་ཚད་མ། [9b5] [cf. TR 616.9-11; 361a2]
- D2. \*ཀྱུན་ཚོབ་བདེན་པ་ངེས་བྱེད་ཀྱི་ཚད་མ། [9b5]
- A2. [\*གཞུང་གིས་མདོར་བསྟན་པ།] (= \*གཞུང་རྣམ་པར་འགྲེལ་པ།) [10b6-12a1]  
 ཀྱུན་ཚོབ་ཀྱི་མཚན་ཉིད་རྣམ་པར་འགྲེལ་པ། [10b6] ad SDV 3abc  
 དོན་དམ་ཀྱི་མཚན་ཉིད་རྣམ་པར་འགྲེལ་པ། [11b2] ad SDV 3d-5  
 om.

NB. Asterisk marks (\*) suggest that the ས་བཅད་ is reconstructed by the editor.

III. “\*བདེན་གཉིས་ཀྱི་སློབ་དོན་” [7a2-10b6] of བདེན་གཉིས་ཀྱི་རྣམ་པ་འདད་

by ལྷ་དམར་བ་བྱང་ལྷུ་གཤམ་མཁུ་

with its Introductory Part [6b7-7a2]

5 [\*ཐུབ་པས་གསུང་པའི་བདེན་པ་གཉིས་དངོས་སུ་བཤད་པ།]

དེ་ལྟར་བདེན་པ་གཉིས་ཐུབ་པས་གསུངས་པ་ (SDV 3b) ཉིད་དུ་བཤད་པའི་སྐབས་ཕྱེ་ནས། ད་ནི་  
ཐུབ་པས་གསུང་པའི་བདེན་པ་གཉིས་དངོས་སུ་བཤད་པ་ཡང་གཉིས་ལས།

[དང་པོ། མདོར་བསྟན་པ།]

10 [དང་པོ། རིགས་པས་མདོར་བསྟན་པ།]

མདོར་བསྟན་པ་ཡང་རིགས་པས་མདོར་བསྟན་པ་ནི། ཇི་ལྟར་སྤང་བ་འདི་ལོ་ལྟོ་ན། ཀུན་རྫོབ་ (SDV  
3cd) ཅེས་འགྲེལ་པ་དང་བཅས་པས་ཀུན་རྫོབ་མདོར་བསྟན་པ་དང་། གཞལ་ནི་གཅིག་ཤོས་ཡིན། (SDV  
3d) དོན་དམ་པའི་<sup>[6b8]</sup>བདེན་པ་ཞེས་བྱ་བའི་བརྗོད་གཏམ། (SDVV 4a3-4 ad 3d)

རིགས་པ་ཇི་ལྟར་བ་ཞེན་ཉིད་ནི་ (SDVV 4a4 ad 3d) ཞེས་པ་ལ་སོགས་པས་རྣམ་གངས་ཀྱི་དོན་  
15 དམ་དང་། ཇི་ལྟར་སྤང་བའི་དངོས་པོར་ནི་ (SDV 5a) ཞེས་པ་ལ་སོགས་པ་[ས]་རྣམ་གངས་མ་ཡིན་པའི་  
དོན་དམ་མདོར་བསྟན་པའི་ཞེས་འགྲེལ་པར་འཆད་དོ།

འདིར་བདེན་པ་གཉིས་ཐུབ་པས་གསུངས་པ་ (SDV 3b) ཉིད་དུ་བཤད་པའི་སྐབས་དབྱེའ་ཞེས་བྱས་  
ནས། འདིར་བདེན་པ་གཉིས་ལོ་ནའི་རྒྱལ་གྱིས་གཞུང་རྩོམ་པའི་<sup>[7a1]</sup>རྒྱ་མཚན་དུ་སྦྱོར་བ་ནི་མི་འཐད་དེ། དེ་ལྟར་  
ན་ཐུབ་པའི་རྗེས་སུ་འབྲངས་པའི་བསྟན་བཅོས་ཐམས་ཅད་བདེན་པ་གཉིས་ཀྱི་རྒྱལ་ལོ་ནས་རྩོམ་པར་འགྱུར་ཏེ།  
20 ཐུབ་པའི་གསུང་ཐམས་ཅད་བདེན་པ་གཉིས་ལ་གཞེས་བའི་ཕྱིར་རོ། དེ་ལྟར་ན་རྒྱལ་གཞལ་ནས་བསྟན་བཅོས་  
མི་རྩོམ་པར་འགྱུར་རོ།

མདོར་བསྟན་པ་གིན་དུ་གཞུང་མང་པོ་ན་ཏི་ཀས་བཤད་པ་དང་མཐུན་མོད་ཀྱི། མདོར་བསྟན་<sup>[7a2]</sup>ཀྱི་  
དོན་མི་གནས་སྟེ། གཞུང་གིན་དུ་རྒྱས་པའི་ཕྱིར་རོ།

[**དང་པོ། རང་ལུགས་གཞག་པ།**]

[**A1. [རིགས་པས་]མདོར་བསྟན་པ།** [=\*བདེན་གཉིས་ཀྱི་སྤྱོད་ན།]

དེས་ན་འདིར་རང་ལུགས་གཞག་པ་ལ་གཉིས་ལས་མདོར་བསྟན་པ་ནི།

ཀུན་རྫོབ་དང་ནི་དམ་པའི་དོན།། བདེན་གཉིས་ཐུབ་པས་གསུངས་པ་ལ།།

5 ཇི་ལྟར་སྤང་བ་འདི་ལོ་ན།། ཀུན་རྫོབ་གཞན་ནི་གཅིག་ཤོས་ཡི་ན།། (SDV 3<sup>A</sup>)

ཞེས་ཕྱེད་ལྷ་མ་དང་ཕྱི་མས་རབ་དུ་དབྱེ་བ་དང་སོ་སོའི་མཚན་ཉིད་དུ་མཛད་པ་ལོ་ན་ལྟར་བྱའོ།།<sup>B</sup>

[**B1. བདེན་གཉིས་ཀྱི་དབྱེ་བ།**]

དེ་དག་དབྱེ་བ་ནི། དབྱེ་<sup>[7a3]</sup>བའི་གཞིའ་དང་། དོན་དང་། མིང་གི་དོན་དང་། གྲངས་ངེས་པའོ།།

10

[**C1. དབྱེ་བའི་གཞི།**]

<sup>D</sup>དང་པོ་ཤེས་བྱ་ཙམ་སྟེ། ཐམས་ཅད་མཁྱེན་པ་ནས་འཇག་མིག་གི་སྲིན་བུའི་བར་གི་སྒོའི་ཡུལ་ལོ།།

[**C2. དབྱེ་བའི་དོན།**]

15 [D1. \*དགོ་བཤེས་ཤོ་ལྷང་པའི་ལུགས་དགག་པ།]

[E1. \*དགོ་བཤེས་ཀྱི་བཞེད་པ་འགོད་པ།]

<sup>E</sup>དོན་ནི་བྱས་པ་དང་མི་རྟག་པ་བཞིན་དངོས་པོ་གཅིག་ལ་ཚོས་ཀྱི་དབྱེ་བས་གཉིས་སམ། བུམ་པ་དང་

སྤམ་བུ་བཞིན་དུ་དངོས་པོ་གཉིས་ཐ་དད་པར་གནས་ཞེ་ན། གཉིད་གཞུར་ཡང་མ་ཡིན་ཏེ། དེ་ཉིད་དང་གཞན་

དུ་རྫོང་<sup>[7a4]</sup>དུ་མེད་པ་གཅིག་བཀག་པ་ཙམ་ལ་གཉིས་ཞེས་བྱའོ།།

20

[E2. \*དགོངས་འགྲེལ་ལས་གསུངས་པའི་སྟོན་བཞི་བཞི་བཛོད་པ།]

[F1. \*གཅིག་པ་ཡིན་པའི་ལྷོགས་ལ་སྟོན་བཞི་བཛོད་པ།]

[G1. \*དགོ་བཤེས་ཀྱི་བཞེད་པ་འགོད་པ་དང་དེ་དགག་པ།]

<sup>F</sup>དེ་ལ་གཅིག་ཡིན་ན་ཉེས་པ་བཞི་སྟེ། སྟེ་བོ་མཐའ་དག་གིས་ཀུན་རྫོབ་མཐོང་བ་ན། དོན་དམ་པ་ཡང་

25 མཐོང་བེན་པས་སྤང་བ་ལས་འདས་པ་ཐོབ་བེན་པར་འགྱུར་རོ།།

གཉིས་པ་ཀུན་རྫོབ་[ལ་བ]རྟེན་ནས་ཟག་པ་འཕེལ་བ་ལྟར་དོན་དམ་དམིགས་པས་ཀྱང་འཕེལ་བར་  
འགྱུར་བས། ཀུན་རྫོབ་བཞིན་དུ་དོན་དམ་ཡང་ཀུན་ནས་ཉོན་མོང་<sup>[7a5]</sup>པའི་དམིགས་པར་འགྱུར་རོ།

གསུམ་པ་ནི་དོན་དམ་ལ་ཕན་ཚུན་དབྱེ་བ་མེད་པ་ལྟར་བུམ་པ་ལ་སོགས་པ་ཀུན་རྫོབ་གསལ་ཅད་ག་མི་  
དང་པར་འགྱུར་རོ།

5       བཞི་པ་ནི་ཅི་ལྟར་མཐོང་བ་དང་ཐོས་པ་ལས་ཀུན་རྫོབ་ལོགས་སུ་བཙལ་དུ་མེད་པ་ལྟར། མཐོང་བ་  
དང་ཐོས་པ་ལས་དོན་དམ་ལོགས་སུ་ཐོས་བསམ་གྱིས་བཙལ་དུ་མེད་པར་འགྱུར་རོ། ཞེས་དགོངས་པ་ངེས་  
**པར་འགྲེལ་པའི་མདོའ་**<sup>6</sup>ནས་[གསུངས་]<sup>2</sup> <sup>[7a6]</sup>པས་འགོག་པ་མ་ལེགས་ཏེ། བུས་པ་དང་མི་རྟག་པ་བཞིན་  
དངོས་པོ་གཅིག་པ་ལ་ཉེས་པ་དེ་དག་མེད་པའི་ཕྱིར་རོ།

10       <sup>1</sup>འདིའ་ལྟར་མཚན་ཉིད་ཐ་དང་ན་དངོས་པོ་གཅིག་ཀྱང་། དེ་མཐོང་པའི་སློབ་པ་དེ་སྐད་ཡང་ཕྱིན་ཅི་  
ལོག་མི་སྤོང་བས་ཉེ་དམ་འདས་པ་མི་ཐོབ་པར་འགྱུར་ཏེ། སློན་པོ་མཐོང་ཡང་རྟག་པར་ཕྱིན་ཅི་ལོག་མི་  
སྤོང་བ་བཞིན་ལོ།

དེ་ཀུན་ནས་ཉོན་མོངས་པའི་དམིགས་[པ་]<sup>4</sup> <sup>[7a7]</sup>ཡིན་ཡང་དེ་དང་ངོ་བོ་གཅིག་པའི་ཚོས་གཞན་ཉོན་  
མོངས་པའི་དམིགས་པར་མི་འགྱུར་ཏེ། སློན་པོ་ཆགས་པའི་ཡུལ་ཡིན་ཡང་སྐད་ཅིག་མ་སྟེ་བསྟེ་བའི་ཡུལ་ཡིན་  
པ་བཞིན་ལོ།

15       ཚོས་ཉིད་དབྱེ་བ་མེད་ཀྱང་དེ་དང་ངོ་བོ་གཅིག་པའི་ཚོས་ཅན་ཐ་དང་པར་མི་འགལ་ཏེ། བསྐྱབ་པར་བྱ་  
བའི་ཚོས་ཀྱི་སྟེ་མི་རྟག་པ་ལ་དབྱེ་བ་མེད་ཀྱང་དཔེའ་དང་ཚུད་གཞིའ་ཐ་དང་པ་བཞིན་ལོ།

མ[ཐོང་བ་དང་]<sup>5</sup> <sup>[7a8]</sup>ཐོས་པ་ལས་རྗེས་ཀྱི་ངོ་བོ་ལོགས་སུ་བཙལ་དུ་མེད་པར་གལ་པ་ནི་འདོད་པར་  
འགྱུར་ལ། མཚན་ཉིད་ཀྱི་ལོག་པ་ནི་སློན་པོ་མཐོང་ཡང་སྐད་ཅིག་མ་རྗེས་དཔག་གིས་བཙལ་བར་བྱ་བ་བཞིན་  
དུ་བཙལ་བར་མི་འགལ་ལོ།

20

1 Ms. གིས་    2 Ms. +++++. Cf. TR 357a7: དགོངས་པ་ངེས་པར་འགྲེལ་བ་ལས་གསུངས་པ་ལྟར་  
3 {ཀུན་རྫོབ་}    4 Ms. +?. Cf. rGya dbu bsdus, 2b3: ཀུན་ནས་ཉོན་མོངས་པའི་དམིགས་པ་ཡིན་ཡང་།  
5 Ms. +++++. Cf. BCA rGya tik, 59a5: མཐོང་བ་དང་ཐོས་པ་ལས་; rGya dbu bsdus, 2b5: མཐོང་བ་  
དང་ཐོས་པ་ལས་



[G2. \*རང་ལུགས་གཞག་པ།]

དེས་ན་ཐལ་བ་བཞིའང་ཅར་ཡང་ཕྱོད་པོ་དང་སྐད་ཅིག་མས་མ་ངེས་པས། **དགོངས་འགྲེལ་གྱི་དགོངས་**  
པ་ནི་ཀུན་རྫོབ་དང་དོན་དམ་མཚན་ཉིད་<sup>[7b1]</sup> །ཤིན་དུ་གཅིག་པར་འདོད་ན་ཉེས་པ་བཞི་པོ་གདོན་མི་ཟེེ།

5 [F2. \*ཐ་དད་པ་ཡིན་པའི་ཕྱོགས་ལ་སྤྱོད་བཞི་བཟོད་པ།]

དངོས་པོ་ཉིད་ཐ་དད་ན་ཉེས་པ་བཞི་སྟེ། དོན་དམ་མཚན་དུ་མཐོང་ཡང་ཀུན་རྫོབ་དེར་མ་འདུས་པས་  
ལོགས་སུ་དམིགས་པར་འགྱུར་རོ། དེས་ན་འདུ་བྱེད་ཀྱི་མཚན་མ་ཟེེལ་གྱིས་མི་འོན་ཅིང་། བཅིང་པ་ལས་མི་  
གྲོལ་བས་མྱ་ངན་ལས་འདས་བར་མི་འགྱུར་རོ། འདིའལ་ནི་དཔེར་ན་བུམ་པ་མི་རྟག་པ་མཐོང་ཡང་སྐྱ་དེ་ལས་  
<sup>[7b2]</sup> ལོགས་ན་ཡོད་པས་རྟག་པར་འཛིན་པ་མི་ལྡོག་པ་བཞིན་དུ། དོན་དམ་ལོགས་སུ་མཐོང་ཡང་ཀུན་རྫོབ་ལ་  
10 ཕྱིན་ཅི་ལོག་སྤོང་པའི་གཉེན་པོར་མི་འགྱུར་བས། དོན་དམ་མཐོང་ཡང་ཐར་པའི་ལམ་མ་ཡིན་ནོ་ཞེས་བྱ་བ་  
ཡིན་ནོ།

གཉིས་པ་ནི་སྤྱིར་འབྲུལ་པའི་དམིགས་པ་ཀུན་རྫོབ་པ་འདིའང་ལ་རིགས་པས་དབྱེད་ན་རྗེ་ལྟར་གནས་  
པའི་ཚོས་ཉིད་འགའ་ཞིག་མེད་དུ་མི་རུང་པས་ཡོད་ལ། <sup>[7b3]</sup> དེ་ཉིད་ནི་དོན་དམ་པ་ཞེས་བྱ་བ་ཡིན་པས་དེ་གཉིས་  
ནི་ཚོས་ཅན་དང་ཚོས་ཉིད་ཡིན་པར་གྲུབ་མཐའ་སྐྱ་བ་ཐམས་ཅད་འདོད་པ་ཡིན་ལ། དངོས་པོ་ཐ་དད་ན་དེ་དེའི་  
15 ཚོས་ཉིད་དུ་མི་འགྱུར་ཏེ་བུམ་པ་དང་སྐམ་བུ་བཞིན་ནོ།

གསུམ་པ་ནི་སྤྱིར་འབྲུལ་པའི་དམིགས་པ་ཀུན་རྫོབ་ནི་བརྟགས་པ་ཞེས་བྱ་ལ། བརྟགས་པས་དབེན་པ་  
ནི་ཡོངས་སུ་གྲུབ་པ་ཞེས་བྱ་བ་དོན་དམ་པ་ཡིན་པར་གྲུབ་མཐའ་<sup>[7b4]</sup> སྐྱ་བ་ཐམས་ཅད་འདོད་པ་ཡིན་ནོ།  
དངོས་པོ་ཉིད་ཐ་དད་ན་ཀུན་རྫོབ་བདག་མེད་ཅིང་རབ་དུ་མ་གྲུབ་པ་ཙམ་དོན་[དམ་པ་]<sup>3</sup>མ་ཡིན་པར་འགྱུར་  
ཏེ། བུམ་པས་དབེན་པ་ཙམ་སྐམ་བུ་མ་ཡིན་པ་བཞིན་ནོ། དེས་ན་བརྟགས་པས་དབེན་པ་ཙམ་ཡོངས་སུ་གྲུབ་  
20 པ་དོན་དམ་པ་ཞེས་བྱ་བ་དེར་མི་འགྱུར་རོ།

བཞི་པ་ནི་གང་ཟག་གཅིག་ལ་ཀུན་ནས་ཉོན་མོངས་པ་དང་རྣམ་པར་བྱེད་པ་དུས་གཅིག་པར་<sup>[7b5]</sup> ཐལ་  
ཏེ། དམིགས་པ་སོ་སོར་གྲུབ་པའི་ཕྱིར། བུམ་པ་དང་སྐམ་བུའི་སྐྱོ་བཞིན་ནོ། འདིའལ་ནི་སྐུག་པ་ལ་སོགས་པ་

<sup>1</sup> Ms. མཚན་ཉིད་<sup>[7b1]</sup>པ་. Cf. rGya dbu bsdus, 2b5: མཚན་ཉིད་ཀྱི་དབྱེ་བ་ཙམ་ཡང་ཁས་མི་ཡེན་ན་  
<sup>2</sup> Ms. ཤིས་ <sup>3</sup> Cf. TR 357b5: ཀུན་རྫོབ་བདག་མེད་ཅིང་རབ་དུ་མ་གྲུབ་པ་ཙམ་དོན་དམ་པ་མ་ཡིན་པར་  
འགྱུར་ཏེ་; BCA rGya tik, 59a8; rGya dbu bsdus, 2b6.

ཕྱིན་ཅི་ཡོག་གི་ཡུལ་ཀུན་རྫོབ་དང་དོན་ [དམ་] དངོས་པོ་ཐ་དང་ན་སོ་སོར་དམིགས་པ་མི་འགལ་བའི་ཕྱིར།  
ཆགས་པ་དང་ཆགས་བྲལ་དུས་གཅིག་པ་སྲིད་ཅིང་མི་འགལ་བར་ཐལ་ལོ་ཞེས་དགོངས་པར་སེམས་སོ།།

[F3. \*རང་ལྷགས་གཞག་པ།]

5 འདྲ་ལྟར་མཚན་ཉིད་ཀྱང་ཤིན་དུ་གཅིག་པ་དང་། དངོས་པོ་ཐ་དང་ལ་ཉེས་པ་དགོངས་ <sup>[7b6]</sup> བའེས་  
[པར་]འགྲེལ་པར་བཞི་བཞི་གསུངས་སོ།།

[D3. \*དངོས་པོ་གཅིག་ལ་ཚོས་ཀྱི་དབྱེ་བས་བདེན་པ་གཉིས་སུ་དབྱེ་བའི་ལྷགས་དགག་པ།]

10 འདྲ་དངོས་པོ་གཅིག་ལ་ཚོས་ཀྱི་དབྱེ་བས་བདེན་པ་གཉིས་ཡིན་ཏེ། མིག་ལ་སོགས་པའི་ཤེས་འོང་[ར་]  
གཟུགས་ལ་སོགས་པ་འདིའདྲི་ཕྱིན་ཅི་ཡོག་གི་ཞེན་གཞི་ཆགས་སྣང་འཇུག་པའི་རྟེན་ལ་སོགས་པའི་ཆ་ནས་  
ཀུན་རྫོབ་ཀྱང་ཡིན་ལ། དེ་ཉིད་རིགས་པས་དབྱེད་ན་བརྟུན་པའི་ཚོས་སྣུ་མ་ལྟ་བུར་གནས་པའི་ཆ་ནས་སྐྱབ་པ་  
ཟད་པའི་རྟེན་ལེ་ཤེས་དམ་པའི་ཡུལ་དོན་དམ་པའང་ <sup>[7b7]</sup>ཡིན་ཞོ་ཞེ་ན། ལྷང་དང་རིགས་པས་གཞོད་དེ།

[E1. ལྷང་གིས་གཞོད་པ།<sup>M</sup>]

15 ཚོས་གང་ཞིག་མངོན་པར་རྫོགས་པར་སངས་རྒྱས་པ་དེ་ལ་ནི་བདེན་པའང་མེད་བརྟུན་པའང་  
མེད་<sup>N</sup>

ཅེས་གསུངས་པ་དང་།

ནམ་པར་མི་རྟོག་པའི་ཡེ་ཤེས་ཀྱིས་ནི་ཚོས་ཐམས་ཅད་ནམ་མཁའི་དཀྱིལ་]ལྟ་བུར་མཆེན་ལ།  
རྗེས་ལས་ཐོབ་པའི་ཡེ་ཤེས་ཀྱིས་ནི་སྣུ་མ་ལྟ་བུར་མཆེན་ཞོ་<sup>O</sup>

20 ཞེས་སྣུ་མ་ནི་ཀུན་རྫོབ་གཟིགས་པའི་ཡུལ་དུ་གསུངས་ཀྱི། མཉམ་ <sup>[7b8]</sup> གཞག་གི་ཡུལ་དུ་མ་གསུངས་པས་ན།  
དོན་དམ་པ་མ་ཡིན་པར་གསལ་ལོ།།

དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་ལ་སེམས་རྒྱ་བ་ཡང་མེད་<sup>P</sup>

ཅེས་བྱ་བ་དང་། དྲི་མ་མེད་པར་གྲགས་པས་ཅང་མ་གསུངས་པ་ཉིད་ཀྱིས་རྒྱ་རྒྱུ་ཆེར་བཤད་པ་ལ་སོགས་པའི་ཕྱིར་  
རོ།།

[E2. 二ヶ亭'པས་གནོད་པ།]

[F1. ལྷ་བ་བྱེད་མེད་པ།]

<sup>R</sup>ལྷ་བ་བྱེད་མེད་ཅིང་གནོད་བྱེད་ཡོད་པས་རིགས་པས་མི་རླུང་སྟེ། གཅིག་དང་དུ་མ་མེད་པར་བཀལ་  
པ་ཙམ་ནི་རི་བོང་གི་ <sup>[8a1]</sup>རྩ་ལ་སོགས་པ་ལྷུ་མར་མི་གནས་པ་ལ་ཞུགས་པས་མ་ངེས་སོ།།

5 དབྱེད་ན་གཅིག་དང་དུ་མར་མེད་བཞེན་དུ་སྣང་པའི་ཕྱིར་ཞེས་མ་ཡིན་པར་དགག་པ་ཙམ་ཡང་། ལྷ་  
མ་དོན་དམ་པ་ལ་འབྲལ་ཏེ། ལྷུ་ས་ཀྱང་པར་དཔོག་ན་གིང་གིས་ཤ་པ་ཡང་འཁྲུག་པར་འབྱུར་རོ།།

གཅིག་དང་དུ་མར་མེད་པའི་སྣང་པ་རིགས་པས་གྲུབ་པའི་ཕྱིར་ཞེས་མ་ཡིན་པར་དགག་པ་ཀྱང་པར་  
ཙམ་རྟལ་[ས་] <sup>[8a2]</sup>སུ་འདོད་ན། མ་གྲུབ་པ་ལོ་ནར་འབྱུར་སྟེ། སྣང་པ་རིགས་པས་གྲུབ་ན་གཅིག་དང་དུ་མ་  
དང་བུལ་བར་འགལ་ཏེ། རིགས་པས་ཡོངས་གཙོ་དུ་གྲུབ་པ་ལ་གཅིག་དང་དུ་མ་ལས་མི་འདའ་བའི་ཕྱིར་རོ།།

10 དེ་ལྟར་མ་ཡིན་ན་ལྷུ་མའི་དགག་བྱ་བ་དེ་ན་པ་ལ་ཡང་གཅིག་དང་དུ་མས་མ་ཀྱང་པར་འབྱུར་རོ།།

དེ་ལྟར་སུ་བཞེན་སྟེ་འགོག་དང་རོ་རྗེ་གཟེགས་མ་དང་ཡོད་མེད་སྟེ་དག་[ག་] <sup>[8a3]</sup>ལ་སོགས་པ་ཀུན་ལ་  
ལྷུ་ཏེ་སུ་[བ]ཞིའི་སྟེ་བ་མེད་པར་དགག་པ་འཇམ། མ་ཡིན་པར་དགག་པ་ཙམ་འཇམ། མ་ཡིན་པར་དགག་པ་  
ཀྱང་པར་ཙམ་ཞེས་གསུམ་ལས་མི་འདའོ།།

[F2. གནོད་བྱེད་ཡོད་པ།]

15 <sup>S</sup>ཡང་དག་པའི་ཀུན་རྫོབ་དང་ཀྱང་པར་མེད་པས་ལྷུ་མ་དོན་དམ་དུ་འགལ་བའི་གནོད་པ་ཡོད་དེ།  
བདེན་པར་བརྟགས་པས་བཅེན་པའི་དངོས་པོ་ནི་ཡང་དག་པའི་ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་མཚན་ཉིད་ཡིན་ལ་ <sup>[8a4]</sup> ལྷུ་མའི་  
དོན་ཡང་དེ་ཉིད་ཡིན་པས་སོ།།

20 ལྷུ་མའི་དོན་དེ་ཙམ་ཡང་དག་པའི་ཀུན་རྫོབ་ཀྱང་ཡིན་མོད་ཀྱི། ལྷུ་མ་དོན་དམ་པ་ཞེས་ཀྱང་པར་དུ་  
བྱེད་དོ་ཞེ་ན། དོན་དམ་པ་ཞེས་བྱ་བ་ཉིད་གང་ལ་བྱ། རིགས་པས་གྲུབ་པའོ་ཞེ་ན། རིགས་པས་ཡོངས་གཙོ་  
དུ་གྲུབ་པ་ལ་གཅིག་དང་དུ་མ་ལས་མི་འདའ་བར་བཞུན་བློན་ཏེ། ལྷུ་མ་པར་གཙང་པ་ཙམ་རིགས་པས་གྲུབ་  
ནས་ <sup>[8a5]</sup> དོན་དམ་པ་ཞེས་རྒྱུང་མོད་ཀྱི། དེ་ཡོངས་གཙོ་དུ་འོ་བོར་འགལ་བའི་ཕྱིར་དང་། ལྷུ་མ་ལ་ཡོངས་  
གཙོ་དུ་འོ་བོས་ཀྱང་པའི་ཕྱིར་རོ།།

25 གང་ཞེས་མཐོང་ན་ལུས་ཙམ་རྣམས་ཀྱི་སྒྲིབ་པ་ཟད་པར་འབྱུར་པས་འདོད་ཆགས་དང་བུལ་པའི་  
དམིགས་པར་འབྱུར་བའི་ཆ་ནས་དོན་དམ་པ་ཡིན་ལ། དེ་ལས་བཞློག་པ་ཀུན་རྫོབ་ཡིན་པས། མཚན་ཉིད་ཐ་

དང་དོ་ཞེ་ན། རང་བཞིན་[ལ་] <sup>[8a6]</sup> ཚོས་ཀྱི་དབྱེ་བ་མེད་པར། སྐྱབ་པ་ཟད་པར་འགྱུར་བའི་ཆ་དང་མི་འགྱུར་  
བའི་ཆ་མི་རྟེན་དེ། རྟེན་ཅིག་གཞན་དུ་མི་གནས་པའི་མཚན་ཉིད་དེ། ཆགས་པ་འཇུག་པ་དང་ཡིད་འབྱུང་པའི་  
དམིགས་པར་འགྱུར་བའི་ཆ་གཉིས་སུ་མི་སྲིད་པ་བཞིན་ལོ། ། གཞན་ཡང་རིགས་པས་ཡོངས་གཙོ་དུ་གྲུབ་ན།  
གཅིག་པའམ་དུ་མར་གྲུབ་ཅེས་པ་ལ་སོགས་པས་བརྟག་གོ།

5 སྐྱུ་མ་སྟོང་པ་ཉིད་ <sup>[8a7]</sup> ཡིན་པས་གཅིག་དང་དུ་མའི་བརྟག་པ་མི་འཇུག་གོ་ཞེ་ན། སྐྱུ་[མ་]ཚམ་ལ་  
བརྟག་པ་སུ་བྱེད། ཡོངས་གཙོ་དུ་རིགས་པའི་ཡུལ་དུ་ཁས་སྒྲུངས་པ་ལ་རྟོག་པ་ཡིན་ལོ། ། ཡོངས་གཙོ་དུ་ཁས་མི་  
ལེན་ན་སྐྱུ་མའི་མིང་ལ་མི་བརྟོན་དོ། ། ཡོངས་གཙོ་དུ་རིགས་པའི་ཡུལ་ཡིན་ཡང་སྐྱུ་མར་འདོད་པས་བརྟག་པ་མི་  
འཇུག་ན། བདེན་པའི་དངོས་པོ་ལ་ཡང་མི་འཇུག་པར་འགྱུར་རོ། །

10 བདེན་པའི་ <sup>[8a8]</sup> དངོས་པོ་ལ་གཅིག་དང་དུ་མ་ལས་མི་འདའོ་ཞེ་ན། ཡོངས་གཙོ་དུ་རིགས་པའི་ཡུལ་ལ་  
ཡང་མི་འདའ་སྟེ། ཡོངས་གཙོ་དུ་རིགས་པའི་ཡུལ་ཉིད་བདེན་པའི་དངོས་པོའི་དོན་ལས་མི་འདའ་མོད་ཀྱི། སྐྱུ་  
མར་ཁས་སྒྲུངས་པས་ཉེས་པ་མི་སྐྱོངས་སོ། ། ཞེས་མཚུངས་པར་བསྟན་དུ་ཟད་ཀྱི། དོན་ནི་གཅིག་ཉིད་ཡིན་ལོ། །

15 གཅིག་དང་དུ་མར་བརྟག་མི་བཟོད་པ་ཉིད་སྐྱུ་མ་ཡིན་ལོ་ཞེ་ན། <sup>[8b1]</sup> བརྟག་མི་བཟོད་པའི་རིགས་པས་  
ཡོངས་སུ་བཅད་པའི་ཤེས་བྱ་དོན་དམ་པ། མཁས་པ་རྣམས་ལ་མཚན་དུ་འཛིན་ཏེ། འོ་མཚར་ཆེ་བའི་གྲུབ་  
མཐའ་གཞན་ཅི་ཡོད། དེས་ན་སྐྱུ་མ་ལ་ནི་ཡོངས་གཙོ་དུ་གྱིས་ཁྱབ་ལ། དེ་རིགས་པའི་ཡུལ་དུ་ཁས་སྒྲུངས་ན་  
བདེན་པའི་དངོས་པོ་ཉིད་དུ་ཟད་དོ། །

ཁོ་བོ་ཅག་གི་[ས་]་ཀུན་རྗེ་བ་སྐྱུ་མ་ལ་ནི། བདེན་པར་རིགས་པས་རྣམ་པ་[ར་བཅད་?] <sup>[8b2]</sup> པ་ཚམ་དུ་  
ཟད་ལ། མ་དབྱེད་པའི་སྐྱོས་ཡོངས་སུ་བཅད་པ་ཚམ་ལ་འདོད་ཀྱི། མཐར་ཐུག་གི་རིགས་པས་ཡོངས་སུ་བཅད་  
པར་ནི་མི་འདོད་དེ། འདོད་ན་བདེན་པའི་དངོས་པོ་ཉིད་ཁས་ལེན་ལོ། ། འདི་ལ་ནི་སྐབས་གཞན་དུ་ཞིབ་མོར་  
རིག་པར་བྱའོ། །

20

**[D4. \*རང་ལྷགས་གཞག་ས།]**

‘དའི་ཕྱིར་དེ་ཉིད་དང་གཞན་དུ་བརྗོད་དུ་མེད་པ་གཅིག་[དུ་]རབ་དུ་མ་གྲུབ་པ་ཚམ་གྱིས་ཡག་ཉེས་ཏེ།  
དཔེར་ན་སྐྱུ་མ་དང་དེས་དབེ[ན་པ་དག] <sup>[8b3]</sup> དེ་ཉིད་དང་གཞན་མ་ཡིན་པ་བཞིན་ལོ། ། སྐྱུ་མ་དེ་དབེན་པ་  
ལས་ཐར་དང་པ་མ་ཡིན་ཏེ། དབེན་པར་མ་འདུས་པའི་སྐྱུ་མ་དང་དངོས་པོར་མེད་པའི་ཕྱིར་རོ། ། དེ་ཉིད་གཅིག་པ་

<sup>1</sup> Ms. +++++ <sup>2</sup> Ms. གིས་ <sup>3</sup> Ms. +++++. Cf. TR 357b6-7: སྐྱུ་མ་དང་དེས་དབེན་པ་དག་

ཡང་མ་ཡིན་ཏེ། ལྷན་ཅིག་དམིགས་པ་མེད་པའི་ཕྱིར་རོ།། དེ་བཞིན་དུ་སྤང་བ་དང་སྤོང་བ་ཡང་དེ་ཉིད་དང་གཞན་དུ་མེད་པའི་ཚོས་ཅན་དང་ཚོས་ཉིད་ཡིན་ནོ།།

[C3. བདེན་གཉིས་ཀྱི་མིང་དོན།]

5 མྱིང་གི་དོན་ནི། ལྷ[ན་རྫོབ་]<sup>1</sup> [8b4] ཅེས་བྱ་བ་ནི་འཁྲུལ་པའི་སློབ་ལྷོ། སློབ་པར་བྱེད་པའི་ཕྱིར་རོ།།  
འཁྲུལ་པ་དེའི་བསམ་པས་བདེན་པ་ནི་བདེན་པ་སྟེ། འཁྲུལ་དོར་བདེན་པ་ནི་ཀྱན་རྫོབ་དུ་བདེན་པ་ཞེས་བྱའོ།།

འདོན་དམ་པ་ཞེས་བྱ་བ་རིགས་པའི་ཤེས་པ་སྟེ། དོན་དུ་གཉེར་བྱ་ཡིན་པས་དོན་ཡིན་ལ། མི་སྤྲུལ་བས་ན་  
གྲུ་ཚོམ་པ་དམ་པ་ཡིན་ནོ།། དོན་དམ་པ་དེའི་དོར་བདེན་པས་དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་སྟེ། <sup>[8b5]</sup> རིགས་པས་  
གནས་པའི་དོན་ཏོ།།

10 འདི་ལྟར་སྔ་མ་ནི་འཁྲུལ་པའི་བསམ་པ་དོར་བདེན་པ་ཡིན་ལ། འདིའ་ནི་ཡང་དག་པར་བདེན་པ་ཡིན་  
ནོ།།

[C4. གངས་ངེས་པ་དབྱེད་པ།]

[D1. \*གཞན་ལྷགས་དགག་པ།]

15 [E1. \*དགོ་བཤེས་ཤོ་ལུང་པའི་བཞེད་པ་འཤོད་པ།]

\*གངས་ངེས་པ་དབྱེད་པ་ནི། དོན་དམ་པ་ནི་ཕྱིན་ཅེ་མ་ལོག་པའི་སློབ་ལྷོའི་ཡུལ་ཡིན་ལ། ཀྱན་རྫོབ་ནི་ཕྱིན་  
ཅེ་ལོག་གི་སློབ་ལྷོའི་ཡུལ་ཡིན་པས། སློབ་ལྷོའི་མཐའ་དག་གཉིས་ཁོ་ནར་ངེས་སོ།། དེའང་སློ་གཉིས་སུ་ངེས་པས་  
<sup>[8b6]</sup> ཡུལ་གཉིས་སུ་འདོགས་པ་ནི་མ་ཡིན་ཏེ། སློ་འཁྲུལ་མ་འཁྲུལ་ཉིད་ཡུལ་བདེན་བརྒྱན་ལས་ཡིན་པས་ཤར་ཚུན་  
རྟེན་པར་འགྱུར་བའི་ཕྱིར་རོ།།

20 འོ་ན་ཅེ་ལྟར་ཞེ་ན། རྟོགས་པ་གཅིག་གི་ཡུལ་ཏེ། སློབ་དབྱེ་བ་གྲུབ་པ་ཉིད་ཡུལ་གྱི་དབྱེ་བ་གྲུབ་པ་  
ཡིན། ཡུལ་གྱི་དབྱེ་བ་གྲུབ་པ་ཉིད་ནི་སློབ་དབྱེ་བ་གྲུབ་པ་ཡིན་ནོ།།

དེ་ལ་མ་འཁྲུལ་པའི་ཡུལ་ནི་ <sup>[8b7]</sup> དངོས་པོ་ལ་གྲུབ་པ་སློས་བཙུག་པ་མ་ཡིན་པའོ།། དེ་ནི་རྟོག་པ་ཞེས་  
ཐ་སྦད་དུ་བྱ་བུ། སློ་གཞན་སྤྲེལ་པས་རྣམ་པ་གཞན་དུ་མི་འགྱུར་བའི་ཕྱིར་རོ།། འཁྲུལ་པའི་ཡུལ་ནི་དངོས་པོ་ལ་  
མེད་བཞིན་དུ་སློས་བཞག་པའོ།། དེ་ནི་མི་རྟོག་པ་ཞེས་བྱ་བུ། ཚད་མས་དབྱེད་ན་སློ་སྔ་མའི་ཡུལ་ལས་ཉམས་

<sup>1</sup> Ms. +++. Cf. TR 356b1: ཀྱན་རྫོབ་ཅེས་བྱ་བ་ནི་འཁྲུལ་པའི་སློབ་ལྷོ་སྟེ། <sup>2</sup> Ms. ཅ

པར་འགྲུར་བའི་ཕྱིར་རོ།། རྟག་པ་དང་མི་རྟག་པ་<sup>[8b8]</sup> དག་ཀྱང་ཕན་ཚུན་རྣམ་པར་གཅོད་པའི་དོན་གྱིས་ལུང་  
པོ་གཞན་སེལ་དོ།།

[E2. \*དག་བཤེས་རང་ཉིད་གྱིས་དེ་ལ་མཐའ་དཔུང་པ།]

5 འདིའ་ལ་བརྩེད་པ་ནི། ཚཤེས་བྱ་གསུམ་པ་དང་སློབ་གསུམ་པ་མི་སྲིད་པས། ཤེས་པ་དང་ཤེས་བྱ་  
གཉིས་ཁོ་ནར་ངེས་པར་འདོད་ན། ཤེས་བྱ་བདེན་པ་དང་། ཤེས་པ་མ་འཕུལ་པ་ཡང་མི་སྲིད་པས་དོན་དམ་  
པའི་བདེན་པ་མེད་དོ།། འོན་ཀྱང་དེ་དག་སྲིད་ཀྱི་དངོས་པོ་གྲུབ་པར་འགྲུར་རོ།།<sup>[9a1]</sup> འོན་ཏེ་དེ་དག་མི་སྲིད་  
ཀྱང་ཡོད་དེ་ཤེ་ན་ཞེས་རྣམ་པར་བརྟགས་ནས་བདེན་པ་གཉིས་ངེས་པར་བྱེད་ན། འོ་ན་བདེན་པ་གསུམ་པ་མི་  
སྲིད་ཀྱང་རྣམ་པར་བརྟགས་ནས་གསུམ་དུ་ངེས་པར་བྱེད་པས་གངས་ངེས་ཉམས་སོ་ཞེ་ན།

10 <sup>AA</sup>ཡན་ནི་དངོས་པོ་གསུམ་པ་མི་སྲིད་པས་བདེན་པ་གསུམ་པ་མེད་ཅེས་འདོད་ལ། དངོས་པོ་གཉིས་  
ཡོད་པས་བདེན་པ་གཉིས་འདོད་ན་བདེན་པ་ཞིག་<sup>[9a2]</sup> ཅུ་ དེ་ལྟར་མི་འདོད་དོ།། དངོས་པོ་གཉིས་མ་གྲུབ་ཀྱང་  
མཐའ་གཉིས་ལས་མི་འདའ་བར་ངེས་པས་བདེན་པ་གཉིས་ཁོ་ནར་ཁས་ལེན་ལོ།།

མཐའ་ཞེས་བྱ་བ་ནི་དངོས་པོ་ལ་གྲུབ་བམ་མ་གྲུབ་ཀྱང་སྤྲེ། རྣམ་པར་བརྟགས་ནས་ཁས་སྲུང་པར་  
བྱ་བའི་རང་བཞིན་གཉིས་ཁོ་ནར་ངེས་སོ།།

15 <sup>AB</sup>དེའང་ཁས་ལེན་གྱི་<sup>2</sup>རྟོག་པ་གཉིས་ཁོ་ནར་ངེས་པས་སྤྲེ། དེ་ཁོ་ན་ཉིད་དུ་<sup>[9a3]</sup> མ་བརྟགས་པར་གྲུབ་  
པར་ཁས་ལེན་པ་དང་། རྣམ་པར་བརྟགས་ནས་གྲུབ་པར་ཁས་སྲུང་པ་ལས་མ་གཏོགས་པ། འགའ་ཞིག་གྲུབ་  
པར་རྟོག་པ་ནི་མི་སྲིད་ལ། ཁས་ལེན་དེ་དག་གི་ཡུལ་ནི་མཐའ་གཉིས་སུ་ངེས་པ་ཞེས་བྱའོ།།

<sup>AC</sup>གཉིད་ག་དང་གཉིད་ག་མ་ཡིན་པར་རྫོམ་<sup>3</sup>པའི་རྟོག་པའང་མཚོང་པས་གྲུབ་པ་མ་ཡིན་ཅུག། རྟོག་པ་  
གཉིས་སུ་ངེས་པ་ཉིད་མ་གྲུབ་པོ་<sup>[9a4]</sup> ཞེ་ན། མ་ཡིན་ཏེ། གཉིད་ག་མ་ཡིན་ཏེ་ཞེས་རྟོག་པ་ལ་སོགས་པ་མཚོང་  
20 བས་གྲུབ་མོད། སློབ་གཞན་གྱིས་དཔུང་ན་མཐའ་གཉིས་སུ་འཛིན་པ་ལས་མ་འདས་སོ།། འདི་ལྟར་གཉིད་ག་མ་  
ཡིན་པ་སློབ་ངེས་པར་བྱ་བ་དེ་དོན་དམ་པར་གཉིད་ག་ལས་མ་འདས་བཞིན་དུ་སློབ་པའི་གཉིད་ག་མ་ཡིན་ཅེ་ཞེས་  
རང་དགར་རྟོག་གས། དེ་ཁོ་ན་ཉིད་དུ་གཉིད་ག་ལས་འདས་<sup>[9a5]</sup> པ་ཉིད་ལ་གཉིད་ག་མ་ཡིན་པ་ཉིད་དུ་གྲུབ་  
པར་རྟོག་ཅེས་བྱ་བའི་རྩལ་ལས་མི་འདའ་སྤྲེ། དེ་བཞིན་དུ་གཉིད་གར་རྟོག་པ་དེ་དང་འདྲ་པའོ།།

<sup>1</sup> Ms. བས་    <sup>2</sup> Ms. གི་    <sup>3</sup> Ms. སློམ་    <sup>4</sup> Ms. པའི་. Cf. TR 358b5: དེ་གཉིད་ག་མ་ཡིན་པ་དང་  
གཉིད་ག་ཡིན་པར་རྟོག་པའང་ཉམས་སུ་མཚོང་བས་    <sup>5</sup> Ms. གིས་

དེ་ལྟར་ཡིན་དང་།

དངོས་པོ་གསུམ་པ་མི་སྲིད་ལྟར། གཉིས་པ་འང་སྲིད་པ་མ་ཡིན་ནོ།།

རྣམ་པར་རྟོག་པ་གཉིས་འབྲང་ལྟར། གཞན་མི་འབྲང་ཕྱིར་གསུམ་པ་མེད།<sup>AD</sup>

ཅེས་བྱ་བ་སྟེ། ཤེས་པ་གཉིས་སུ་ངེས་<sup>19a6</sup> ཡུལ་བདེན་པ་གཉིས་སུ་གངས་ངེས་གྲུབ་པོ།།

5 <sup>AE</sup>གལ་ཏེ་ཤེས་པ་གཉིས་སུ་ངེས་པའི་དབང་གིས་ཡུལ་བདེན་པ་གཉིས་སུ་རྣམ་པར་འཛོག་ན། ལྟར་  
 ཤེས་པ་གཉིས་གྲུབ་པས་ཡུལ་གཉིས་སྐྱབ་པ་འགོག་པ་འགལ་ལོ་ཞེ་ན། ཤེས་པ་འབྲུལ་པ་དང་མ་འབྲུལ་  
 [པ་]གཉིས་ཉིད་དུ་<sup>2</sup>ངེས་པས་ཡུལ་བདེན་བརྒྱན་གཉིས་ཉིད་བསྐྱབ་པ་འགོག་པར་ཟད་ཀྱི། ལས་ལེན་གྱི་ངེས་  
<sup>19a7</sup> པ་གཉིས་ཐ་སྐྱད་པའི་ཚད་མས་ངེས་པར་གྲུབ་པས་མཐའ་གཉིས་ཙམ་དུ་ངེས་པ་ནི་འདོད་པ་ཡིན་ལ། ལས་  
 10 ལེན་གྱི་<sup>3</sup>རྟོག་པ་ནི་དེ་ལོ་ན་སེམས་པས་ན་འབྲུལ་པ་ཉིད་དུ་འདྲ་བས། ལྟོ་མ་འབྲུལ་པ་ལས་སྐྱངས་པར་མི་  
 འགྱུར་རོ།།

[E3. \*དགེ་བཤེས་ཀྱི་དགོངས་པ་མཐའ་ཐུག་བཟུང་བ།]

<sup>AF</sup>དེས་ན་མཐའ་གཉིས་ལས་དེ་ལོ་ན་ཉིད་ལས་སྐྱང་པར་བྱ་བའི་མཐའ་ནི་རྣམ་པར་བརྟགས་ནས་  
 གཞག་པར་བྱ་བར་ཟད་ལ། དེ་བསྐྱབ་<sup>19a8</sup> རྣམ་དོན་དམ་པའི་མཐའ་ནི་འགོག་པར་བྱེད་ལ། མ་དཔུང་པར་  
 15 ལས་སྐྱང་པར་བྱ་བའི་མཐའ་ནི་སྲིད་པས་མི་འགོག་གོ། དེའང་འབྲུལ་པའི་དམིགས་པ་ཙམ་ཡིན་པས་ཞེན་པའི་  
 གནས་མ་ཡིན་ནོ་ཞེས་ཤེས་པར་བྱ་བའི་ཕྱིར་བདེན་པ་གཉིས་རྣམ་པར་བཞག་པ་ཙམ་སྟེ། དེ་ལོ་ནར་བདེན་  
 བརྒྱན་ཐམས་ཅད་མ་གྲུབ་པོ།། གངས་ངེས་པ[འོ]།<sup>19b1</sup>

[E4. \*དེ་དགག་པ།<sup>AG</sup>]

20 འདིར་ལྟོ་མ་འབྲུལ་པ་ནི་སྐྱོམ་པ་གཙོད་པའི་རིགས་པ་ཡིན་པས། དེ་མེད་ན་སྐྱོམ་པ་ལོག་ཤེས་ཀྱིས་  
 གཙོད་དམ། དེ་ཡོད་ན་སྐྱོམ་པ་འབྲུལ་པ་དང་ཡུལ་བདེན་པ་མི་འདོད་ཅེས་པ། ལས་སྐྱངས་ནས་བརྩོན་ཀྱིས་  
 ཡོངས་གཙོད་བྱེད་པའི་སྐྱོམ་པ་འབྲུལ་པ་མེད་པས་ནི། ལྟོ་མ་འབྲུལ་པ་དང་ཡུལ་བདེན་པ་མི་ལྟོག་གོ། བེས་ན་

<sup>1</sup> Read: དེ་ལྟར་ཡིན་ན།? Cf. TR 359a1: དེས་ན། <sup>2</sup> Ms. ཤེས་པ་འབྲུལ་པ་དང་ཡུལ་མ་འབྲུལ་གཉིས་ཉིད་  
 དུ་ ... Cf. TR 359a3: ལྟོ་འབྲུལ་བ་དང་མ་འབྲུལ་བ་གཉིས་སུ་ ... <sup>3</sup> Ms. གི་ <sup>4</sup> Ms. +  
<sup>5</sup> Read: ལྟོ་མ་? <sup>6</sup> {འོ་ན་གངས་ངེས་ཇི་ལྟར་འཛོག་ཞེན་}

ད་ལྟ་སློམ་པ་གཙོད་པའི་རྗེས་དཔག་གམ། [རྣམ་]<sup>1</sup> 19b21 པར་མི་རྟོག་པའི་མངོན་སུམ་སློམ་འཁྲུལ་པ་དང་།  
ཡུལ་སློམ་པ་ཐམས་ཅད་ཀྱིས་དབེན་པའི་སྣོད་པ་ཉིད་གནས་པས། དེ་ཉིད་དང་གཞན་དུ་བརྗོད་དུ་མེད་པར་  
ཟུར་བསྟན་མ་ཐག་པ་དེ་དག་གངས་ངེས་བཞག་ན་ཉེས་པ་ཅི་ཡོད།

AH དགག་པར་བྱ་བའི་དོན་དམ་པའི་མཐའ་ཞི་གཞན་ལུགས་ཀྱི་དོན་དམ་ཡིན་པས། དེ་དང་རང་གི་  
5 ཀུན་རྗེས་གངས་ངེས་པ་མཛད་པ་ལ་ཞི་དུ་གོས་པ་]<sup>2</sup> 19b31 མེད་ལ། འདྲིར་དབུའ་མ་པའི་བདེན་པ་གཉིས་ཀྱི་  
སྐབས་སུ་མ་བབ་པོ། དེ་ལྟ་མ་ཡིན་ན། གཅིག་གམ་ཐ་དད་བརྟག་པ་དང་། མོ་མའི་མཚན་ཉིད་ལ་སོགས་པ་  
ཡང་། རང་ལུགས་ཀྱི་དོན་དམ་བོར་དེ། གཞན་ལུགས་ཀྱི་དོན་དམ་དང་། རང་གི་ཀུན་རྗེས་པ་ཅིའི་ཕྱིར་མི་  
གཞག།

10 [D2. \*རང་ལུགས་གཞག་པ།]

A1 དེས་ན་གངས་ངེས་པ་ནི། སློམ་འཁྲུལ་བ་རྣམ་པར་དཔྱོད་པའི་རིགས་ཤེས་དང་།<sup>3</sup> 19b41 དེ་ལས་  
གཞན་པ་གཉིས་སུ་ཐ་སྟད་པའི་ཚད་མས་ངེས་ལ། དེ་ཉིད་ཡུལ་གཉིས་སུ་ངེས་པ་དང་གྲུབ་བདེ་གཅིག་གོ།

A2 ཅུད་པ་སྤང་བ་ནི་མི་དགོས་ཏེ་སློམ་འཁྲུལ་པ་དང་ཡུལ་བདེན་པ་ཁས་སྤངས་པས་དོན་དམ་ཁས་  
སྤངས་པ་ནི་འདོད་པ་ཁོ་ན་ཡིན་ལ། དེ་ཙམ་གྱིས་མུ་མ་པར་ནི་མི་འགྱུར་ཏེ། སློམ་བྲལ་ཡང་དོན་དམ་ཡིན་པར་  
15 འཐད་པའི་ཕྱིར་རོ་ཞེས་སེ།<sup>5</sup> 19b51 ཏེ། ཞིབ་དུ་ནི་གཞན་དུ་རིག་པར་བྱའོ།

དེ་ལྟར་དོན་བཞེས་དབྱེ་བ་བཤད་དོ། །།

[B2. བདེན་གཉིས་ཀྱི་མཚན་ཉིད།]

20 མཚན་ཉིད་ལ་གཉིས་ལས།

[C1. མཚན་ཉིད་ཀྱི་རང་བཞིན།]

[D1. \*ཀུན་རྗེས་བདེན་པའི་མཚན་ཉིད།]

<sup>1</sup> Ms. ཡན་? (illegible) <sup>2</sup> Ms. +++. Cf. *rGya dbu bsdus*, 7b3: དགོས་པ་ཡང་མེད་པའི་ཕྱིར་རོ།

<sup>3</sup> Ms. + <sup>4</sup> Ms. གིས་ <sup>5</sup> Ms. ++



[E1. \*དག་བཤེས་གྲོ་ལུང་པའི་བཞེད་པ་འགོད་པ།]

མཚན་ཉིད་ཀྱི་རང་བཞིན་ནི། ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་མཚན་ཉིད་ཕྱིན་ཅི་ལོག་གི་དམིགས་པ་དོ། ཕྱིན་ཅི་ལོག་ནི་  
 འཕྲུལ་པ་སྒྲོ་མཐའ་དག་གོ། དེའི་ཡུལ་ནི་ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་བདེན་པ་ཡིན་ལ། དེ་ཉིད་བདེན་<sup>1966</sup> པར་ཚད་མས་  
 གཞོད་བཞིན་ཏུ་སྣང་པས་ན་རྒྱུན་པ་ཞེས་བྱའོ། ། སྣང་པ་ཚས་ཏུ་ནི་མི་འགོག་པས་སྣང་པ་སེལ་བ་ཡང་མ་ཡིན་  
 5 གོ། ། དེས་ན་སྒྲོ་ལུང་མཐའ་དག་ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་བདེན་པའོ<sup>Ak</sup>ཞེས་འཚད་པ་ནི་ལེགས་པར་མཛད་དོ། །

[E2. \*དེ་དག་ག་པ།]

འདིར་སྒྲོ་མཐའ་དག་འཕྲུལ་པ་ཡིན་ན། སྒྲོ་པ་གཙུག་པའི་རྗེས་དཔག་ལ་སོགས་པ་ཡང་སྐྱབ་བར་  
 འཕྲུར་བས། ཐ[ར་]<sup>1967</sup> མིང་གི་དོན་སྐྱབ་བ་མེད་པས་རིགས་པ་དོན་ཡང་ཡིན་ལ་དམ་པ་ཡིན་པར་བཤད་པ་  
 10 དེ་མི་སྲིད་པར་འཕྲུར་རོ། ། རྣམ་གཅིད་ཚམས་སྒྲོ་དེ་དག་མི་སྐྱབ་བར་ནི་བཞེད་པ་ཡང་<sup>2</sup>ཡིན་པས། སྒྲོ་ལུང་  
 ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་མཚན་ཉིད་དོན་དམ་ལ་ཁུབ་ཆེས་སོ། ། རྣམ་གཅིད་ཚམས་སྒྲོ་ལུང་མ་ཡིན་ན། རྣམ་གཅིད་ཚམས་  
 བྱེད་པའི་ཚད་མ་གཞལ་བྱ་དང་མི་ལྡན་<sup>1968</sup> པས་ཚད་མར་མི་རུང་དོ། ། རྣམ་གཅིད་སྒྲོ་ལུང་ཡིན་ཡང་དོན་  
 དམ་མ་ཡིན་ནོ་ཞེ་ན། རྣམ་གཅིད་ཚམས་དོན་དམ་པར་མེད་ན་དངོས་པོར་འཕྲུར་ཏེ། དག་ག་པ་བཀག་པའི་ཕྱིར་  
 15 རོ་ཞེས་པ་ལ་སོགས་པས་དག་ག་པར་བྱའོ། །

[E3. \*རང་ལུགས་གཞལ་པ།]

<sup>AL</sup>འོན་ཅི་ལྟར་ཞེ་ན། **ཇི་ལྟར་སྣང་པ་འདི་འཁོན་ཀུན་རྫོབ་** (SDV 3cd) ཅེས་བྱ་བ་མ་དཔུང་པའི་  
 སྒྲོ་ལུང་ཏུ་སྣང་པ་ཚམས་སྒྲེ། <sup>110a1</sup> དཔུང་བཟོད་མ་ཡིན་པའི་ཤེས་བྱའོ། ། དེས་ན་ཁོན་ཞེས་བརྒྱན་པ་ནི་**རིགས་**  
**པ་ཇི་ལྟར་བཞིན་ཏུ་ནི་མ་ཡིན་ནོ་** (SDVP 17b3-4<sup>AM</sup>) ཞེས་ཏི་གས་བཤད་པ་ལྟར་རོ། ། འགྲེལ་པ་ཉིད་  
 20 ཀྱིས་ཀྱང་། **ཀུན་རྫོབ་ཏུ་བདེན་པར་རྣམ་པར་གནས་ཀྱི། ཡང་དག་པར་ནི་མ་ཡིན་ཏེ་** (SDVV 4a3<sup>AN</sup>)  
 ཞེས་བདེན་པས་སྟོང་པའི་ཁྱད་པར་ཅན་གྱི་སྣང་པ་ལ་བཤད་དོ། ། དེའི་ཕྱིར་ཤེས་བྱ་ཚམས་ཁུབ་<sup>110a2</sup> ཆེས་པས།  
 དེ་ལྟར་དཔུང་བ་མི་གནས་པའི་ཤེས་བྱ་ནི་ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་བདེན་པའི་མཚན་ཉིད་དོ། ། དེ་ཉིད་ལ་འཕྲུལ་པའི་  
 དམིགས་པ་ཞེས་ཀྱང་བྱའོ། <sup>A0</sup>

<sup>1</sup> Ms. +      <sup>2</sup> Ms. ཡན      <sup>3</sup> Ms. བརྒྱན་པའི་. Cf. SDVP 17b3: བརྒྱན་པ་ནི་      <sup>4</sup> Ms. ཀྱི

[D2. \*དོན་དམ་བདེན་པའི་མཚན་ཉིད།]

[E1. \*དག་བཤེས་གོ་ཡུང་པའི་བཞེད་པ་འགོད་པ།]

དོན་དམ་གྱི་མཚན་ཉིད་ནི་ཇི་ལྟར་སྣང་བ་ལས་གཞན་ནི་ (SDV 3d) ལྟངས་པའི་མཚན་ཉིད་ལས་  
 འདས་པ་སྟེ། ཤེས་བྱའི་མཚན་མ་མེད་པའོ།། རྟོག་པ་དང་མི་རྟོག་པའི་ཡུལ་ལས་འདས་པས་སྒྲིབ་ཡུལ་མ་ཡིན་  
 5 པ། ལྷ་རྟོག་<sup>[10a3]</sup> གི་ཞེན་པའི་གཞི་ལས་འདས་པས་སྒྲིབ་པ་མེད་པ། ཡོད་མེད་ལ་སོགས་པར་མ་གྲུབ་པས་  
 གཉིས་སུ་མེད་པ། ཚེས་གང་གིས་ཀྱང་མཚན་དུ་མེད་པས་མཚན་ཉིད་མེད་པ། འདུ་བྱེད་<sup>2</sup>ཀྱི་དངོས་པོར་མ་  
 གྲུབ་པས་དངོས་པོ་མེད་པ། མི་སྣོང་པར་མ་གྲུབ་པས་སྣོང་པ་ཉིད་དེ། མཚན་ཉིད་འགའ་ཡང་མེད་པ་ཉིད་ལ་  
 མཚན་ཉིད་དུ་རྟམ་པར་བཞག་ནས་རང་བཞིན་འགོག་པའི་<sup>[10a4]</sup> ཚེས་གིས་གསལ་དུ་བྱེད་པར་ཟད་དོ་<sup>AR</sup>ཞེས་  
 འཆད་པ་ལྟར་ལེགས་སོ།།  
 10 <sup>AR</sup>འོ་ན་དབྱེ་བའི་གཞིའཤེས་བྱ་ཚམ་ལ་རྟམ་པར་བཞག་ནས་དེའི་ཁྱད་པར་དོན་དམ་ཤེས་བྱ་ལས་  
 འདས་པ་ཅི་ལྟར་འཐད་ཅེ་ན། མི་འགལ་ཏེ། དཔེར་ན་རྗེས་དཔག་རང་གི་བསམ་ངོ་ལས་རང་གི་མཚན་ཉིད་  
 རྟོགས་པར་རྫོམ་པས་རང་གི་མཚན་ཉིད་རྗེས་དཔག་གི་ཡུལ་ཡིན་ཞེས་འདོད་ལ། རང་<sup>[10a5]</sup> བཞིན་སེམས་པའི་  
 སྒོ་གཞན་གྱིས་<sup>3</sup>བསམས་ན་རང་གི་མཚན་ཉིད་རྗེས་དཔག་གི་ཡུལ་དུ་མི་གནས་སོ་ཞེས་འཇོག་པ་ལྟར། སྒྲིབ་པ་  
 གཙོད་པའི་རྗེས་དཔག་གིས་དོན་དམ་ཤེས་བྱར་རྫོམ་པའི་བསམ་ངོ་ལ་ལྟོས་ན་དོན་དམ་ཤེས་བྱའི་དབྱེ་བ་ཡིན་  
 15 པས། ཤེས་བྱའི་དབྱེ་བར་བྱས་པ་དང་། རིགས་པའི་ཡུལ་དུ་བདེན་པ་མིང་གི་དོན་དུ་བཞག་པ་ཡིན་ལ།  
 [རང་]<sup>4</sup> <sup>[10a6]</sup> བཞིན་དབྱེད་ན་དོན་དམ་ཤེས་བྱ་ལས་འདས་པ་ཉིད་ཡིན་པས་མི་འགལ་ལོ།།

[E2. \*དེ་དགག་པ།<sup>AR</sup>]

<sup>AS</sup>འདིར་དཔེའང་མ་གྲུབ་ཅིང་དོན་ཡང་མི་འཐད་པར་སེམས་ཏེ། རྗེས་དཔག་གིས་རང་གི་མཚན་ཉིད་  
 20 རྟོགས་པར་རྫོམས་པ། རང་བཞིན་སེམས་པའི་སྒོས་འགོག་ན། རྗེས་དཔག་ཚད་མར་མི་རུང་སྟེ། གཙོད་པ་དང་  
 བཅས་པའི་ཕྱིར་རོ།།

<sup>1</sup> Ms. ཀྱི་      <sup>2</sup> Read: འདུས་བྱས་? Cf. TR 360a4: འདུས་བྱས་ཀྱི་དོན་; *Phya dbu bsdus*, p. 18.12:  
 འདུས་བྱས་ཀྱི་དངོས་པོ་      <sup>3</sup> Ms. གིས་      <sup>4</sup> Ms. ++

རང་བཞིན་སེམས་པའི་སློབ་དེ་<sup>1</sup> <sup>[10a7]</sup> ཚད་མ་མ་ཡིན་ན་ནི་རྗེས་དཔག་གི་ཡུལ་རང་གི་མཚན་ཉིད་པ་  
ཁོ་ནར་གནས་པས། དོན་དམ་གྱི་མཚན་ཉིད་ཤེས་བྱ་མ་ཡིན་པའི་དཔེར་ཤིན་དུ་མི་རུང་ངོ་།།

དེས་ན་རྗེས་དཔག་ནི་བཟུང་ཡུལ་དོན་མེད་པ་ལ་དོན་དུ་ཞེན་པས་རང་གི་མཚན་ཉིད་མ་ཡིན་ཞེས་  
འདོད་ལ། ཞེན་ཡུལ་ནི་འབྲེལ་པ་ལ་མི་སྲུ་བས། རང་གི་མཚན་ཉིད་ཁོ་ནའོ་ཞེས་+++++<sup>2</sup> <sup>[10a8]</sup> རང་གི་  
5 མཚན་ཉིད་རྗེས་དཔག་གི་ཞེན་ཡུལ་ཁོ་ནར་གནས་པས། དོན་དམ་ཚད་མའི་ཞེན་ཡུལ་དུའང་མི་གནས་པར་  
འདོད་པའི་དཔེར་ཇི་ལྟར་རུང་།

<sup>AV</sup>དོན་ཡང་མི་འཐད་དེ། རང་བཞིན་དཔྱད་པའི་སློབ་རྗེས་དཔག་གིས་དོན་དམ་ཡུལ་[དུ་]སློབ་སེམས་པ་  
འགོག་ན། རྗེས་དཔག་ཚད་མར་གཟུང་དོན་ལ་འཛོག་གས། ཞེན་པའི་སློབ་ཡུལ་ནི་དེས་བཀག་པའི་ཕྱིར་རོ།།

<sup>AU</sup>[རང་] <sup>[10b1]</sup> བཞིན་དཔྱད་པའི་སློབ་ཡུལ་དུ་རྗེས་དཔག་གི་ཡུལ་ལས་འདས་པར་གྲུབ་ན་ནི་དོན་དམ་  
10 ཤེས་བྱར་གྲུབ་ལ། དེའི་ཡུལ་དུའང་མ་གྲུབ་ན་ནི་དེ་ཚད་ལར་མི་རུང་སྟེ། གཞལ་བྱ་དང་མི་ལྟར་པའི་ཕྱིར་རོ།།

[E3. \*རང་ལུགས་གཞག་པ།]

<sup>AV</sup>དེས་ན་དོན་དམ་པའི་མཚན་ཉིད་ནི། **གཞན་ནི་གཅིག་ཤོས་ཡིན** (SDV 3d) ཞེས་བྱ་བ་མ་དཔུང་  
པར་སྒྲུང་བ་ཙམ་དུ་འབྲུག་པའི་སློབ་ཡུལ་ལས་ག[ཞན་པར་<sup>3</sup>] <sup>[10b2]</sup> གནས་པའི་དོན་ཏེ། **རིགས་པ་ཇི་ལྟར་**  
15 **བཞིན་ཉིད་ནི་དོན་དམ་པའི་བདེན་པའོ** (SDVV 4a4<sup>AW</sup>) ཞེས་སློབ་དཔོན་ཉིད་ཀྱི་འབྲེལ་པ་དང་མཐུན་པར་  
བཤད་ཀྱང་། ཕྱར་ཀ་གཏོང་བ་མི་འབྱུང་ངོ་།།

[D3. \*བདེན་གཉིས་ཀྱི་དོན་བསྟུ་བ།]

<sup>AV</sup>དེས་ན་གྲུབ་མཐའ་སྐྱབ་བ་ཐམས་ཅད་ཀྱིས། མ་དཔུང་པའི་སྒྲུང་ངོ་ཙམ་དང་། རྣམ་པར་དཔུང་པའི་  
20 རིགས་དེའི་ཤེས་བྱ་གཉིས་ལ་བདེན་པ་གཉིས་འཛོག་པས། ཐམས་ཅད་བདེན་[པ་གཉིས་]<sup>4</sup> <sup>[10b3]</sup> ཁས་ལེན་པའི་  
རྒྱ་མཚན་ཉིད་སྦྱར་མཐུན་པ་ཡིན་ལ། རིགས་པས་གནས་པའི་དོན་དོན་དམ་པའི་མཚན་ཉིད་དེ་ཉིད། ཁ་ཅིག་  
དངོས་པོའི་ཚེས་སུ་འདོད། གཞན་དག་སློབ་བྲལ་ལ་གནས་པར་འདོད་པས་མི་མཐུན་པར་ཟད་དོ།།

<sup>1</sup> Ms. ++. Cf. *rGya dbu bsdus*, 9a4: རང་བཞིན་སེམས་པའི་སློབ་དེ་ <sup>2</sup> Read: འདོད་པས་? <sup>3</sup> Ms. ++  
++. Or read: བསྐྱོག་པར་? Cf. *rGya dbu bsdus*, 8b1: དཔུང་ན་དེ་ལྟར་མི་གནས་པའི་ཤེས་བྱ་ལས་བསྐྱོག་པ།  
<sup>4</sup> Ms. ++ (པ་འ་?) <sup>5</sup> Ms. པས་

དེས་ན་སྤང་བ་ཇི་ལྟ་བུ་ལ<sup>AY</sup>དང་། རིགས་པ་ཇི་ལྟ་བུ་ལ<sup>AZ</sup>ཞེས་བྱ་སྟེ། མ་དཔུང་པའི་སྤང་ཡུལ་ཙམ་དང་།  
རྣམ་[པར་]<sup>1 [11064]</sup>དཔྱད་པའི་ཡུལ་ལོ་ཞེས་སྟོབ་དཔོན་གཞན་གྱི་ལྟར་ལེགས་སོ།།

འོན་ཀྱང་རྣམ་པར་དཔུང་པའི་ཡུལ་ཞེས་བྱ་བ་དགག་བྱ་ལ་གཞོན་དུ་ཟད་པ་ལ་ཡུལ་ཞེས་བསྟན་གྱི་  
ཡུལ་དུ་གནས་པ་ནི་མེད་དོ་ཞེས་འཆད་པ་ནི། རྣམ་གཅད་ཙམ་ནི་ཚད་མའི་གཞལ་བྱ་ཡིན་ཏེ། དེ་ལྟར་མ་ཡིན་ན་  
5 སྟོ་ཚད་མར་མི་རུང་པས་ལེགས་པར་མི་བརྟེནོ།།

**[C2. མཚན་ཉིད་དེ་དག་ངེས་བྱེད་གྱི་ཚད་མ།]**

མཚན་ཉིད་ཀྱི་རང་བཞིན་[བཤད་?] <sup>2 [11065]</sup> རྣམ། ངེས་པར་བྱེད་པའི་ཚད་མ་ནི། <sup>BA</sup>དོན་དམ་གྱི་སྤྱི་འདུན་  
མཚན་ཉིད་སྟོན་བྲལ་ལ་གནས་པར། སྤང་བ་མེད་པའི་ཡེ་ཤེས་མངོན་སུམ་གྱི་ཚད་མ་འཕམ། གཅིག་དང་དུ་བྲལ་  
10 ལ་སོགས་པའི་རྟགས་ཀྱིས་ངེས་པའི་རྗེས་དཔག་གོ།།

དེས་ན་དོན་དམ་གྱི་མཚན་ཉིད་ཤེས་བྱ་ལས་འདས་པ་ཡིན་ན། དེ་ངེས་པར་བྱེད་པའི་སྟོན་མི་སྲིད་དེ།  
ཤེས་བྱ་མ་ཡིན་པ་ཤེས་པར་བྱེད་ན་ནི་ལྟས་ངན་ཆེ་[བའི་] <sup>6 [11066]</sup> ལྷིག་པ་ཡིན་ཅོ།།

<sup>BB</sup>ཀྱན་རྗེས་ཀྱི་བདེན་པ་ངེས་པར་བྱེད་པ་ནི། བདེན་པའི་རིགས་པས་དཔུང་བཟོན་བཀག་ཅིང་། མ་  
དཔུང་པའི་སྟོན་སྤང་ངོ་རྣམ་པར་བཞག་པའི་ཚེ། དེ་ལྟར་དཔུང་བཟོན་མ་ཡིན་པའི་དོན་དུ་ངེས་པར་བྱེད་པས།  
15 ཚད་མ་གཉིས་ཀྱི་བྱེད་པ་ལས་ངེས་སོ།།

<sup>1</sup> Ms. ++      <sup>2</sup> Ms. ++      <sup>3</sup> Ms. ཀྱི་      <sup>4</sup> Ms. ལྷིག་      <sup>5</sup> Ms. ཀྱི་      <sup>6</sup> Ms. ++  
<sup>7</sup> Read: སྤང་ངོར་?

A SDV 3: ཀུན་རྫོབ་དང་ནི་དམ་པའི་དོན།། བདེན་གཉིས་ཐུབ་པས་གསུངས་པ་ལ།། ཇི་ལྟར་སྒྲུབ་པ་འདི་ལོ་ན།། ཀུན་རྫོབ་གཞན་ནི་ཅིག་ཤོས་ཡིན།། (D 4a1-2)

B TR p. 609.8-9.: A 356a7-b1; K 302a2; U 73a9: འདི་དག་གི་སྤྱི་དོན་ནི་བཞིས་གཏན་ལ་དབབ་སྟེ། སྤྱི་དོན་དང་དབྱེ་བའི་རང་བཞིན་དང་། མོ་སའི་མཚན་ཉིད་དང་། དེ་ངེས་པར་བྱེད་པའི་ཚད་མའོ།།

C TR p. 610.8-13; A 357a2-4; K 302b3-5; U 74a1-3: དབྱེ་བའི་རང་བཞིན་ལ་ ... འདི་དག་གི་དོན་ ཡང་གསུམ་གྱིས་བལྟ་སྟེ། དབྱེ་བའི་དབང་དུ་བའི་གཞི་དང་། དབྱེ་བའི་དོན་དང་། གངས་ངེས་པར་དབྱེད་ པའོ།།

Cf. *rGya dbu bsdus*, 2a8: བདེན་གཉིས་རྣམ་དབྱེ་བཤད་པ་འདིར།། དབྱེ་གཞི་དོན་དང་མིང་གི་དོན།། གངས་ངེས་མཚན་ཉིད་ཚད་མར་བཅས།། རྣམ་པ་བླུག་དུ་ཤེས་པར་བྱ།། [Verse 2] དབྱེ་བའི་གཞི་དང་། དོན་ དང་། མིང་གི་དོན་དང་། གངས་ངེས་པ་དང་། མཚན་ཉིད་དང་། ཚད་མའོ།།; *BCA rGya tik*, 59a2: བདེན་པ་གཉིས་ཀྱི་དབྱེ་བའི་སྐབས་འདིར། གཞིའ་དང་། དོན་དང་། དགོས་པ་དང་། མིང་གི་དོན་དང་། གངས་ངེས་པ་ལྟས་སྟོན་ཏེ། ...

Cf. *SDV Phya tik*, 5b5; *Phya dbu bsdus*, p. 1.15f.

D TR p. 610.13-15; A 357a4f.; K 302b5f.; U 74a3f.: དང་པོ་ནི་བདེན་པར་གཞག་བྱ་ཤེས་པ་དང་ ཤེས་བྱའི་དོན་མཐའ་དག་སྟེ། ཐམས་ཅད་མཁྱེན་པའི་ཡེ་ཤེས་ནས་འགོ་བ་སྤྱོད་མེ་ཡན་ཆད་ཀྱི་སྒོ་འཁྲུལ་པ་དང་མ་ འཁྲུལ་པ་ཐམས་ཅད་ཀྱིས་དམིགས་པའི་དོན་མ་ལུས་པའོ།།

In general, the following passage of PPS is cited as its source. PPS 60b4: འདི་ལྟར་དེ་ བཞིན་གཤེགས་པས་ཀུན་རྫོབ་དང་དོན་དམ་པ་གཉིས་སྐབས་སུ་རྒྱུད་དེ། ཤེས་པར་བྱ་བ་ཡང་ཀུན་རྫོབ་དང་དོན་ དམ་པ་འདིར་ཟད་དོ།།

Cf. *rGya dbu bsdus*, 2a8-b1: འདིར་དབྱེ་བའི་གཞི་ནི་ཐམས་ཅད་མཁྱེན་པ་ནས་འཇག་མིག་གི་སྲིན་ སུའི་བར་གྱི་ཤེས་བྱ་ཚམ་ལ་འདོད་དོ།། གཞི་བཤད་ཟིན་ཏོ།།; *BCA rGya tik*, 59a2-3: དབྱེ་བའི་གཞིའ་ནི་ ཐམས་ཅད་མཁྱེན་པ་མན་ཆད་འཇག་དམིག་གི་སྲིན་སུ་ཡན་ཆད་ཀྱི་སྐབས་སམ་སྒྲོས་ལུལ་དུ་བྱང་པའི་(read: བྱར་རུང་བའི་)ཤེས་བྱའ་ཚམ་མོ།།

Cf. *SDV Phya tik*, 5b5f.; *Phya dbu bsdus*, pp. 1.17-2.2.

E This is the interpretaion of Gro lung pa. TR p. 610.15-19; A 357a5f.; K 302b6f.; U 74a4f.: གཉིས་པ་ནི་ཅི་ཅི་ཀུན་རྫོབ་དང་དོན་དམ་པ་འདི་གཉིས་བྱས་པ་དང་མི་རྟག་པ་ལྟར་གཅིག་ལ་ཚོས་ཀྱི་དབྱེ་ བས་ཐ་དད་དུ་བཞག་པ་འཇམ། འོན་ཏེ་བུ་མ་པ་དང་སྣམ་བུ་ལྟར་ངོ་བོ་ཐ་དད་པ་འཇམ། དེ་སྟེ་དངོས་པོ་དང་དངོས་པོ་ མེད་པ་ལྟར་གཅིག་དུ་མ་གྲུབ་པ་ཚམ་ལས་ཐ་དད་དུ་བཞག་ཅེ་ན། དང་པོ་གཉིས་ནི་མ་ཡིན་ཏེ། དེ་ཉིད་དང་ གཞན་དུ་བརྗོད་དུ་མེད་པ་ཉིད་ཀྱིས་གཅིག་པ་བཀག་པ་ཚམ་གྱི་ཐ་དད་དུ་ཟད་དོ།།

Cf. rGya dbu bsdus, 2b1-2: དོན་ནི་གཅིག་པ་བཀག་པ་ཙམ་གྱིས་གཉིས་སྟེ། དེ་ཉིད་དང་གཞན་དུ་  
བརྗོད་དུ་སྟེང་པས་སྣང་བ་དང་སྟོང་པ་དབྱེར་སྟེང་པའི་ཚོས་ཙན་དང་ཚོས་ཉིད་ཡིན་གྱི། མཚན་ཉིད་ཤིན་དུ་  
གཅིག་པ་འཇམ། ངོ་བོ་ཐ་དང་པ་ནི་མ་ཡིན་ནོ།། འདིར་དབྱེ་བ་གཏན་སྟེང་པ་འཇམ། ཡོད་ན་ཡང་ངོ་བོ་ཐ་དང་པ་  
འཇམ། ངོ་བོ་གཅིག་ལ་ཚོས་ཀྱི་དབྱེ་བ་འཇམ། གཅིག་པ་བཀག་པ་ཙམ་གྱི་དབྱེ་བ་འཇམ། དང་པོ་དང་གཉིས་པ་ནི་  
**དགོངས་འགྲེལ་ཀས་གསུངས་པའི་སྟོན་བཞི་བཞིས་དགག་པར་བྱ་ལ།** གསུམ་པ་དང་བཞི་པ་ནི་**སྐྱུ་མ་དང་རབ་དུ་  
མི་གནས་པའི་བྱེ་བྲག་ལས་དབྱེད་པར་བྱའོ།།**

BCA rGya tik, 59a3: དབྱེའ་བའི་དོན་ནི་ཤིན་དུ་ཅིག་པ་ཡང་མ་ཡིན་ལ། ཤིན་དུ་ཐ་དང་པ་ཡང་མ་ཡིན་གྱི་  
དེ་ཉིད་དང་གཞན་དུ་བརྗོད་དུ་མེད་པ་ཅིག་བཀག་པ་ཙམ་གྱི་(read: གྱི[ས?])ནས་པ་གཉིས་སོ།།

Cf. SDV Phya tik, 5b6-8; Phya dbu bsdus, pp. 2.20-3.1.

F The following interpretaion (7a4-5) is of Gro lung pa. TR pp. 610.19-611.4; A 357a7-  
b3; K 302b7-303a3; U 74a5-9: **དགོངས་པ་ངེས་པར་འགྲེལ་བ་**ལས་གསུངས་པ་ལྟར་འདི་དག་གཅིག་ན་  
ཉེས་པ་བཞི་སྟེ། (1) མོ་སེའི་སྟེ་བོ་མཐའ་དག་ཀྱན་ཚོའ་མཐོང་བ་ན་དོན་དམ་པ་ཡང་མཐོང་བས་སྤྱང་ན་ལས་  
འདས་པ་ཐོབ་པར་ཐལ་ཏེ། སྟོབ་དཔོན་གྱིས་ཀྱང་།

ཇི་ལྟར་བྱིས་པས་མཐོང་བ་ཡི།། དངོས་པོ་དེ་ལྟར་བདེན་གྱུར་ན།།  
དེ་དག་དངོས་མེད་རྣམ་ཐར་དུ། གང་ཕྱིར་མི་འདོད་རྒྱ་དེ་ཅི།། (Y§ 3)

ཞེས་གསུངས་སོ།།

(2) གཉིས་པ་ནི་ཀྱན་ཚོའ་ལ་བརྟེན་ནས་ཟག་པ་འཕེལ་བ་ལྟར་དོན་དམ་པ་དམིགས་པ་ལ་བརྟེན་ནས་ཀྱང་  
འགྱུར་བའོ།། དེས་ན་ཀྱན་ཚོའ་ལྟར་དོན་དམ་པ་ཡང་ཀྱན་ནས་ཉོན་མོངས་པའི་དམིགས་པར་ལྷུང་བར་འགྱུར་  
རོ།།

(3) གསུམ་པ་ནི་དོན་དམ་པ་ལ་ཕན་ཚུན་དབྱེ་བ་མེད་པ་ལྟར་ཀྱན་ཚོའ་ལྱང་འགྱུར་བས་ཀྱན་ཚོའ་ཐམས་  
ཅད་ཐ་མི་དད་པར་འགྱུར་བའོ།།

(4) བཞི་པ་ནི་ཇི་ལྟར་མཐོང་བ་དང་ཐོས་པ་ལས་ལོགས་སུ་ཀྱན་ཚོའ་བཙལ་བར་བྱ་བ་མ་ཡིན་པ་བཞིན་དུ་  
དོན་དམ་པ་ཡང་བཙལ་བྱ་མ་ཡིན་པར་འགྱུར་རོ།།

དེ་དག་ནི་ཚོག་པ་ཉིད་ཀྱང་གཅིག་པ་ལ་དགོངས་པ་སྟེ། ངོ་བོ་གཅིག་པ་ཙམ་ཡིན་ན་སྐད་ཅིག་མ་ལ་སོགས་  
པས་འཁྲུལ་པར་འགྱུར་རོ།།

rGya dmar ba criticizes the above-mentioned interpretation of Gro lung pa in the  
following text (7a6-8), saying "མ་ལེགས་ (not correct)". On the other hand, rGya dmar  
ba follows Gro lung pa's interpretation in BCA rGya tik, 59a3-6: འདི་ལྟར་ཤིན་དུ་གཅིག་ན་  
ཉེས་པ་བཞི་སྟེ། (1) མོ་སེའི་སྟེ་བོ་མཐའ་དག་ཀྱན་ཚོའ་མཐོང་བ་ན་དོན་དམ་མཐོང་བས་སྤྱང་ན་ལས་འདས་

པ་ཐོབ་ཟིན་པར་འགྲུར་བས་ལམ་བསྐོས་པའི་འབད་པ་དོན་མེད་པར་འགྲུར་རོ།།

(2) གཉིས་པ་ནི་ཀུན་རྫོང་ལ་བརྟེན་ནས་ཟག་པ་འཕེལ་བ་ལྟར་དོན་དམ་ལ་བརྟེན་ནས་ཀྱང་ཟག་པ་རྒྱས་པར་འགྲུར་བས། ཀུན་རྫོང་བཞིན་དུ་དོན་དམ་པ་ཡང་ཀུན་ནས་ཉོན་མོངས་པའི་དམིགས་པར་འགྲུར་རོ།།

(3) གསུམ་པ་ནི་དོན་དམ་པ་ལ་ཕན་ཚུན་དབྱེའ་བ་མེད་པ་ལྟར། ཀུན་རྫོང་བུམ་པ་དང་སྐྱམ་བུ་ལ་སོགས་ཡང་ཕན་ཚུན་དབྱེའ་བ་མེད་པར་འགྲུར་རོ།།

(4) བཞི་པ་ནི་ཇི་ལྟར་ཀུན་རྫོང་མཐོང་པ་དང་ཐོས་པ་ལས་འོགས་སུ་བརྩམ་(read: བཅའ་)བར་མི་བྱའ་བ་བཞིན་དུ། མཐོང་པ་དང་ཐོས་པ་ལས་དོན་དམ་པ་ཡང་ཐོས་བསམ་གྱིས་(read: གྱིས་)འོགས་སུ་བརྩམ་(read: བཅའ་)དུ་མེད་པར་འགྲུར་རོ།།

Cf. *Phya dbu bsdus*, p. 10.13-19.

<sup>6</sup> Cf. SNS 14b2: འདུ་བྱེད་ཁམས་དང་དོན་དམ་མཚན་ཉིད་ནི།། གཅིག་དང་ཐ་དད་བྲལ་བའི་མཚན་ཉིད་དེ།། གཅིག་དང་ཐ་དད་དུ་ཡང་གང་རྟོག་པ།། དེ་དག་ཚུལ་བཞིན་མ་ཡིན་ཞུགས་པ་ཡིན།།

<sup>H</sup> rGya dmar ba criticizes Gro lung pa's interpretation here, and its parallel text is found in *rGya dbu bdus*, 2b2-5: དེས་ན་ངོ་བོ་གཅིག་ལ་ཚས་ཀྱི་དབྱེ་བ་འདོད་པ་ལ་ནི་མདོའི་ཉེས་པ་བཞི་མི་གནས་ཏེ། (1) ཀུན་རྫོང་མཐོང་བ་ན་དོན་དམ་པ་མཐོང་ཡང་མ་ངེས་པས་སྣོ་འདོགས་པ་མི་འགལ་ཏེ། རྟན་ཅིག་མ་བཞིན་ནོ།། དེས་ན་མྱུང་ན་ལས་འདས་པ་ཐོབ་པར་འགྲུར་བ་ལྟེད་དོ།།

(2) དེ་ཀུན་ནས་ཉོན་མོངས་པའི་དམིགས་པ་ཡིན་ཡང་། དེའི་ངོ་བོར་གྱུར་བའི་ཚས་གཞན་མ་ཡིན་པ་ཡང་མི་འགལ་ཏེ། རྟོན་པོ་ཆགས་པའི་ཡུལ་ཡིན་ཡང་རྟན་ཅིག་མ་ཡིད་འབྱུང་བའི་གནས་ཡིན་པ་བཞིན་ནོ།། དེས་ན་དོན་དམ་པ་ལ་བརྟེན་ནས་ཟག་པ་རྒྱས་པར་འགྲུར་བ་ལྟེད་དོ།།

(3) ཚས་ཅན་པན་(read: ཕན་)ཚུན་ཐ་དད་ཀྱང་ཚས་ཉིད་དབྱེ་བ་ལྟེད་པ་ཡང་མི་འགལ་ཏེ། བསྐྱབ་པར་བྱ་བའི་ཚས་ཀྱི་སྤྱིས་དོན་མཐུན་པ་ཞེས་གསུངས་པ་བཞིན་ཏེ། དེ་ལྟ་མ་ཡིན་ན་ཚས་ཅན་ཕན་ཚུན་རྗེས་སུ་འགྲོ་བ་མི་སྲིད་པས་ཚས་ཀྱང་མི་སྲིད་པར་འགྲུར་རོ།། དེས་ན་ཀུན་རྫོང་རྣམས་ཐ་མི་དད་པར་འགྲུར་བ་ལྟེད་དོ།།

(4) དངོས་པོ་གཞན་དུ་མི་བཅའ་བ་ནི་འདོད་པར་འགྲུར་ལ། མཚན་ཉིད་ཀྱི་ལྡོག་པ་ནི་རྟོན་པོ་རྟོགས་ཀྱང་རྟན་ཅིག་མ་ཤེས་པར་བྱ་བ་བཞིན་ནོ།། དེས་ན་མཐོང་བ་དང་ཐོས་པ་ལས་དོན་དམ་པ་འོགས་སུ་བཅའ་བར་བྱ་བ་མ་ཡིན་པར་འགྲུར་བ་ལྟེད་དོ།།

Cf. *SDV Phya tik*, 6a6-6b4; *Phya dbu bsdus*, pp. 10.20-11.9.

<sup>1</sup> Cf. *rGya dbu bdus*, 2b5: དེའི་ཕྱིར་མཚན་ཉིད་ཀྱི་དབྱེ་བ་ཅས་ཡང་ཁས་མི་ལེན་ན་ཉེས་པ་དེ་དག་བརྗོད་པར་གཤོོན་མི་ཟེའོ།།

<sup>J</sup> Here, on the other hand, rGya dmar ba follows Gro lung pa and even paraphrases the following statements of TR p. 611.4-13; A 357b3-6; K 303a3-6; U 74a9-b4: ཐ་དད་པ་

ལའང་ཉེས་པ་བཞི་སྟེ། (1) རྗེང་པ་ཉིད་གཞན་དམིགས་ཀྱང་ཀྱན་ཚོབ་དེར་མ་འདུས་པས་འོགས་སུ་དམིགས་པར་འགྱུར་བས་ན། དོན་དམ་པ་བསྐྱོས་པས་འདུ་བྱེད་ཀྱི་མཚན་མ་ཟེལ་གྱིས་མི་འོན་ཅིང་གནས་ངན་ལེན་གྱི་འཆིང་བ་ལས་མི་གོལ་བས་སྤྱང་ན་འདས་པ་མེད་པར་འགྱུར་རོ།།

(2) གཉིས་པ་ནི་དོན་དམ་པ་ཀྱན་ཚོབ་ཀྱི་ཚོས་ཉིད་དུ་མི་འགྱུར་ཏེ་ཐ་དད་པའི་ཕྱིར་བུམ་པ་སྣམ་བུའི་ཚོས་ཉིད་མ་ཡིན་པ་བཞིན་ཡིན་ནོ།།

(3) གསུམ་པ་ནི་ཀྱན་ཚོབ་བདག་མེད་ཅིང་རབ་དུ་མ་གྲུབ་པ་ཙམ་དོན་དམ་པ་མ་ཡིན་པར་འགྱུར་ཏེ་བུམ་པ་མེད་པ་ཙམ་སྣམ་བུམ་ཡིན་པ་བཞིན་ནོ།།

(4) བཞི་པ་ནི་ཀྱན་ནས་ཉོན་མོངས་པ་དང་རྣམ་པར་བྱང་བ་གཉིས་དུས་གཅིག་པར་ཐལ་ཏེ། དམིགས་པ་སོ་སོར་གྲུབ་པའི་ཕྱིར་བུམ་པ་དང་སྣམ་བུའི་སྟོབ་བཞིན་ནོ།། དེ་ལྟ་མ་ཆགས་པ་ཟད་པ་དེ་ཉིད་ཀྱི་ཚེ་ཆགས་པ་དང་བཅས་པར་འགྱུར་རོ།།

དེ་དག་ཀྱང་ངོ་བོ་དང་མཚན་ཉིད་གཉིས་ཀྱི་ཐ་དད་པ་ལས་སོ།།

Cf. *rGya dbu bsdus*, 2b5-7: ངོ་བོ་ཐ་དད་ན་ཉེས་པ་བཞི་སྟེ། (1) དོན་དམ་མངོན་དུ་མཐོང་ན་ཡང་ཀྱན་ནས་ཉོན་མོངས་པའི་དམིགས་པ་ཀྱན་ཚོབ་འོགས་སུ་དམིགས་པ་སྟོབ་སྤྱང་ན་འདས་པ་མི་འཐོབ་པར་འགྱུར་བ་དང་། (2) བུམ་པ་དང་སྣམ་བུ་བཞིན་དུ་དོན་དམ་ཀྱན་ཚོབ་ཀྱི་ཚོས་ཉིད་དུ་མི་རུང་བ་དང་། (3) བུམ་པ་རབ་དུ་མ་གྲུབ་པ་ཙམ་སྣམ་བུམ་ཡིན་པ་བཞིན་དུ་ཀྱན་ཚོབ་བདག་མེད་པ་ལས་རབ་དུ་མ་གྲུབ་ཙམ་དོན་དམ་མ་ཡིན་པར་འགྱུར་བ་དང་། (4) བུམ་པ་དང་སྣམ་བུའི་སྟོབ་བཞིན་དུ་དམིགས་པ་སོ་སོར་གྲུབ་པའི་ཕྱིར་ཀྱན་ནས་ཉོན་མོངས་པ་དང་རྣམ་པར་བྱང་བ་གྱུར་ཅིག་ལ་ཅིག་ཅར་འགྱུར་བའོ།།

*BCA rGya tik*, 59a6-59b1: ཤིན་དུ་ཐ་དད་ན་ཡང་ཉེས་པ་བཞི་ལ་སྟེ། (1) དོན་དམ་མངོན་དུ་མཐོང་ཡང་དེ་ལ་ཐ་དད་པའི་ཀྱན་ཚོབ་ལ་ཕྱིན་ཅི་ལོག་དུ་འཛིན་པ་མི་ལྷོག་པས་སྤྱང་ན་འདས་པ་མི་འཐོབ་པར་འགྱུར་ཏེ། བུམ་པ་ལ་མི་རྟག་པར་མཐོང་ཡང་སྟོབ་ཕྱིན་ཅི་ལོག་དུ་རྟག་པར་འཛིན་པ་མི་ལྷོག་པ་བཞིན་ནོ།། དེས་ན་དོན་དམ་མངོན་དུ་མཐོང་པའི་རྒྱུ་འཚན་གྱིས་སྤྱང་ན་འདས་པ་ཐོབ་པར་འདོད་པ་དེ་མི་འཐོབ་པར་འགྱུར་རོ།།

(2) གཉིས་པ་ནི་དོན་དམ་ཀྱན་ཚོབ་ཀྱི་ཚོས་ཉིད་དུ་མི་འགྱུར་ཏེ། ཐ་དད་པའི་ཕྱིར་བུམ་པ་སྣམ་བུའི་ཚོས་ཉིད་མ་ཡིན་པ་བཞིན་ནོ།།

(3) གསུམ་པ་ནི་ཀྱན་ཚོབ་བདག་མེད་ཅིང་རབ་དུ་མ་གྲུབ་པ་ཙམ་དོན་དམ་པ་མ་ཡིན་པར་འགྱུར་ཏེ། བུམ་པ་བདག་མེད་པ་ཙམ་སྣམ་བུམ་ཡིན་པ་བཞིན་ནོ།།

(4) བཞི་པ་ནི་གང་ཟག་ཅིག་ལ་ཀྱན་ནས་ཉོན་མོངས་པ་དང་རྣམ་པར་བྱང་བ་གཉིས་ཅིག་ཆར་འཇུག་པར་འགྱུར་ཏེ། ཀྱན་ནས་ཉོན་མོངས་པའི་དམིགས་པ་ཀྱན་ཚོབ་དང་། རྣམ་པར་བྱུའི་དམིགས་པ་དོན་དམ་པ་གཉིས་



ཐ་དང་པ་སོ་སོར་དམིགས་སུ་རུང་པའི་ཕྱིར་།། ལུས་པ་དང་སྐམ་བུ་སོ་སོར་དམིགས་པ་བཞིན་ནོ།།

Cf. *SDV Phya tik*, 5b8-6a5; *Phya dbu bsdus*, pp. 5.15-7.8.

<sup>k</sup> rGya dmar ba presents a different interpretation following Gro lung pa in *BCA rGya tik*, 59b1: དེ་ལྟར་ཤིན་དུ་ཅིག་པ་དང་ཐ་དང་པའི་ཕྱོགས་ལ་རྟེས་པ་བཞིན་བཞིན་དགོས་པ་ངེས་པར་འབྲེལ་པའི་མདོའ་ནས་གསུངས་སོ།།, in which rGya dmar ba does not distinguish between མཚན་ཉིད་ (i.e., རྟོག་པ་) and དངོས་པོ་ (i.e., ངོ་བོ་).

<sup>l</sup> Cf. *rGya dbu bsdus*, 3b1-2: འོན་ཏེ་བོ་ཅིག་ལ་ཚོས་ཀྱི་དབྱེ་བ་བྱས་པ་དང་མི་རྟག་པ་ལྟ་བུ་མ་ཡིན་ནམ། བརྒྱད་རྫོང་འབྲེལ་དུ་གསལ་བར་བཤད་པ་དང་། དབུ་མ་རྒྱན་དུ་ཡང་ཀུན་རྫོབ་མཐོང་བ་ན་དོན་དམ་སྣང་ཡང་མ་ངེས་པར་བཤད་པ་དང་། དབུ་མ་སྣང་བར་འགའ་ཡང་མཐོང་བ་ཟུང་བ་ཞེས་བྱ་བའི་མདོའི་དོན་མ་ཡིན་བར་དགག་པར་བཤད་པ་ལྟར་ན་འདི་དག་ཀྱང་སྐྱུ་མ་དོན་དམ་པར་བཞེད་པར་གསལ་བས་འདི་ཁས་སྲུང་ངོ་ཞེ་ན། མ་ཡིན་ཏེ་ལྷང་དང་རིགས་པས་གཞིན་པའི་ཕྱིར་རོ།། Cf. Hugon/Vose 2018, p. 22, n. 40.

<sup>m</sup> Cf. *rGya dbu bsdus*, 3b2-4: འདི་ལྟར་རྩི་ཞུ་བའི་ལས་ཀྱི་ཚོས་གང་ཞིག་མདོན་བར་རྩི་གས་པར་སངས་རྒྱས་པ་དེ་ལ་ནི་བདེན་པ་ཡང་ཟུང་བ་བརྒྱན་པ་ཡང་ཟུང་བ་

ཅེས་བྱ་བ་དང་། རྣམ་པར་མི་རྟོག་པ་ལ་འཇུག་པའི་གསུངས་ལས།

རྣམ་པར་མི་རྟོག་པའི་ཡེ་ཤེས་ཀྱིས་ཚོས་ཐམས་ཅད་ནམ་མཁའི་དཀྱིལ་ལྷར་མཁའུལ་ལ། ཇེས་ལས་ཐོབ་པའི་ཡེ་ཤེས་ཀྱིས་ཚོས་ཐམས་ཅད་སྐྱུ་མ་ལྟ་བུར་མཁའུལ་ཏོ་

ཞེས་བྱ་བ་དང་། ཡ་རོལ་དུ་ཕྱིན་པ་ལས་

ནམ་མཁའ་མཐོང་ཞེས་སེམས་ཅན་ཚོག་དུ་རབ་བཟོད་པ།། རྣམ་མཁའ་ཇི་ལྟར་མཐོང་ཞེས་དོན་འདི་བརྟག་པར་གྱིས་

ཞེས་དཔེའི་སློ་ནས་གསུངས་པ་ལ་སོགས་པ་དཔག་དུ་ཟུང་བ་དང་།

དོན་དམ་པ་ལ་སེམས་རྒྱ་བ་ཡང་ཟུང་ན་ཡི་གེ་རྣམས་ལྟ་བུ་སློས་

ཞེས་བྱ་བ་དང་། རྒྱ་བའི་སྲས་པོ་དྲི་ཟུང་པར་གྲགས་པས་ཅང་མ་གསུངས་པ་ཉིད་ལ་སོགས་པ་ཇི་ལྟར་དང་བར་བྱ།།

<sup>n</sup> According to *rGya dbu bsdus* 3b2, this is cited from *Vajracchedikā-nāma-prajñā-pāramitāsūtra*: ཡང་རབ་འབྱོར་དེ་བཞིན་གཤེགས་པས་ཚོས་གང་ཡང་མདོན་པར་རྩི་གས་པར་སངས་རྒྱས་པའམ། བརྒྱན་པ་དེ་ལ་བདེན་པ་དེ་ཡང་མེད། རྒྱན་པ་ཡང་མེད་དོ།། (D 16, 35a5-b1). Cf. Hugon/Vose 2018, p. 22, n. 41.

A similar sentence is cited in TR p. 668.2-3; A 393b2: རྒྱད་ཅིག་གང་ལ་ཚོས་ཐམས་ཅད་ཀྱི་དེ་

ཁོ་ན་མངོན་དུ་གྱུར་པ་དེ་ལ་ནི་བདེན་པ་འང་མེད་བརྗེན་(རྗེན་ P)པ་འང་མེད་པ་དང་། ...

o According to *rGya dbu bsdus* 3b2-3, this is cited from *Ārya-vikalpapraveśa-nāma-dhāraṇī*: བྱང་རྒྱལ་སེམས་དཔལ་སེམས་དཔལ་ཚེན་པོ་རྣམ་པར་མི་རྟོག་པའི་དབྱིངས་ལ་རབ་དུ་གནས་པས་ནི་ཤེས་བྱ་དང་ཁྱད་པར་མེད་པ་རྣམ་པར་མི་རྟོག་པའི་ཡེ་ཤེས་ཀྱིས་ཚོས་ཐམས་ཅད་ནམ་མཁའི་དབྱིལ་དང་མཚུངས་པར་མཐོང་ངོ་།། རྣམ་པར་མི་རྟོག་པའི་རྗེས་ལས་ཐོབ་པའི་ཤེས་པས་ནི་ཚོས་ཐམས་ཅད་སྐྱུ་མ་དང་། སྤྲིག་རྩུ་དང་། མི་ལམ་དང་། མིག་ཡོར་དང་། བྲག་ཅ་དང་། གཟུགས་བརྟན་དང་། རྩ་རྩེ་དང་། སྤྱལ་པ་དང་མཚུངས་པར་མཐོང་ངོ་།། (D 142, 3b4-6). Cf. Hugon/Vose 2018, p. 22, n. 42.

A similar sentence is cited in TR p. 668.5-7; A 393b4: མཉམ་པར་བཞག་པས་ནི་ཚོས་ཐམས་ཅད་ནམ་མཁའི་དབྱིལ་ལྟར་མཐོང་ཞིང་རྗེས་ཐོབ་ཀྱིས་ནི་སྐྱུ་མ་ལ་སོགས་པ་ལྟར་མཐོང་བ་དང་། ...

Cf. *Bhagavatvyāmnāyānūsārīṅī-nāma-vyākhyā* (D 3811) 35a7-35b2: རྣམ་པར་མི་རྟོག་པའི་དབྱིངས་ལ་གནས་པའི་བྱང་རྒྱལ་སེམས་དཔལ་ནི་ཤེས་བྱ་དང་ཁྱད་པར་མེད་པའི་རྣམ་པར་མི་རྟོག་པའི་ཡེ་ཤེས་ཀྱིས་ནམ་མཁའི་དབྱིལ་དང་མཉམ་པའི་ཚོས་ཐམས་ཅད་མཐོང་སྟེ། དེའི་རྗེས་ལ་ཐོབ་པའི་སྐྱུ་མ་དང་སྤྲིག་རྩུ་དང་མི་ལམ་དང་སྤྲང་བ་དང་། བྲག་ཅ་དང་གཟུགས་བརྟན་དང་རྩ་རྩེ་དང་སྤྱལ་པ་དང་མཚུངས་པའི་ཚོས་རྣམས་མཐོང་ངོ་ཞེས་བྱའོ།།

p AN 123b2: དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་ནི། གང་ལ་སེམས་ཀྱི་རྒྱ་བ་མེད་པ་སྟེ། ཡི་གེ་ལྟ་ཅི་སྟོན་ལ། (Skt. paramārthasatyam katamat/ yatra jñānasyāpi apracārah, kaḥ punar vādo 'kṣārāṅām. Cit. PrasP p. 374.2/ Tib. 120a3-4) — This passage is cited in various Indian texts including SDVV 5a1-2 ad 7. As for its information, cf. Mastumoto 1978, p. 136, n. 24; Matsushita 1983, p. 147, n. 24; Ichigo 1985, p. 204, n. 2. MA p. 206.20f./ D 71a6: དེ་བས་ན་སྟོས་པའི་ཚོགས་ཐམས་ཅད་དང་བྲལ་བའི་དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་ལ་ནི་སེམས་རྒྱ་བ་ཡང་མེད་པར་བསྟན་ཏོ།།

q Cf. *rGya dbu bsdus*, 3b4-5a5: སྐབ་བྱེད་བྱེད་ཅིང་གཞོན་བྱེད་ཡོད་པས་རིགས་པས་ཀྱང་གཞོན་དེ། ...

r Cf. *rGya dbu bsdus*, 3b4-6: གཅིག་དང་དུ་མ་བྱེད་པར་བཀག་པ་ནི་རི་བོང་གི་རྩ་ལ་སོགས་པས་མ་ངེས་སོ།། མ་ཡིན་བ[ར]དགག་པ་ཙམ་སྟེ། གཅིག་དང་དུ་མར་མེད་བཞིན་དུ་སྤང་པའི་ཕྱིར་ཞེས་འདོད་ན་སྐྱུ་མ་དོན་དམ་པ་ལ་འབྲལ་ལོ།། ཁྱད་པར་ཅན་སྟེ། ཅིག་དང་དུ་མ་དང་བྲལ་བའི་སྤང་བ་རིགས་པའི་ཡུལ་ཡིན་པའི་ཕྱིར་ཞེས་འདོད་ན་རྟགས་ཀྱི་ངོ་བོ་དང་ཁྱད་པར་འགལ་བས་ཁྱད་པར་མི་འགྲུབ་སྟེ། རིགས་པའི་ཡུལ་ལ་ཅིག་དང་དུ་མ་ལས་མ་འདད་བའི་ཕྱིར་རོ།། དེ་ལྟ་མ་ཡིན་ན། སྟོབ་དཔོན་ཕྱོགས་ཀྱི་སྤང་བོས་གཉིས་ལ་གཞོན་པ་ཡོད་ཅིང་གསལ་བར་མྱོང་བས་གཉིས་མེད་དོན་དམ་དུ་སྐབ་པ་ཡམང་དག་པའི་རྟགས་སུ་འབྱུང་བས་སེམས་ཙམ་དགག་པར་མི་བྱའོ།། གཉིས་ལ་གཞོན་པ་ཡོད་པ་ཅན་གྱི་ངོ་བོ་དེ་བདེན་བར་མྱོང་བ་ནི་མ་གྲུབ་ལ། མྱོང་བ་ཙམ་གྱིས་སྤྲིང་ཁྱད་

པར་དོན་དམ་སྐབ་པ་མི་མ་ངེས་སོ་ཞེས་སྣང་བ་ནས་བཤད་པ་དེས་འགྲེལ་མ་འདྲིར་ཡང་བཟོད་པར་བྱེད། དེ་  
ལྟར་སྤྲུལ་བཞི་སྟེ་འགོག་ལ་སོགས་པ་ཡང་རྣམ་པར་རྟོག་པ་དེས་རྟོགས་སྤྲུལ་བྱེད་བྱེད་དོ།

<sup>s</sup> More detailed explanations are found in *rGya dbu bsdus*, 3b6-5a5 (cf. Hugon/Vose 2018, pp. 23-29).

<sup>t</sup> Cf. TR p. 610.18f.; A 357a6-7; K 302b7; U 74a5: དེ་ཉིད་དང་གཞན་དུ་བཟོད་དུ་མེད་པ་ཉིད་ཀྱིས་  
གཅིག་པ་བཀག་པ་ཙམ་གྱི་ཐ་དད་དུ་ཟད་དོ།; Ibid p. 611.13-19; A 357b6-358a2; K 303a6-8; U  
74b4-6: དེས་ན་མིག་རབ་རིབ་ཀྱི་ཡུལ་སྐྱེ་ཤང་དང་དེས་དབེན་པ་དག་ཡན་ཚུན་གཅིག་དང་ཐ་དད་པ་མ་ཡིན་  
པ་བཞིན་དུ་བཟོད། སྐྱེ་ཤང་ནི་དེས་དབེན་པ་ལས་ཐ་དད་པ་མ་ཡིན་ཏེ། དབེན་པར་མ་འདུས་པ་རང་དབང་  
ཅན་གྱི་སྐྱེ་ཤང་མ་གྲུབ་པས་སོ། གཅིག་པ་ཡང་མ་ཡིན་ཏེ། དེ་གཉིས་ལྡན་ཅིག་དམིགས་པ་ངེས་པ་མེད་པས་སོ། །  
དེ་བཞིན་དུ་འདུས་བྱས་དང་དོན་དམ་པ་སྣོང་པའང་གཅིག་དང་གཞན་མ་ཡིན་ཏེ། རོ་བོ་གཅིག་དང་ཐ་དད་པ་  
གཉིས་ཀ་དངོས་པོའི་ཚོས་ཡིན་པས། དོན་དམ་པ་སྣོང་པ་ཞི་བ་དང་ཀུན་རྗེ་བརྒྱུན་པ་གཉིས་ཀ་ལ་མི་འབྲུག་པའི་  
ཕྱིར། མཚན་ཉིད་ཀྱི་དབྱེ་བ་ཙམ་ལས་བཞག་པར་བཟོད།

Cf. *rGya dbu bsdus*, 5a5-8: དེས་ན་ཁོ་བོ་ཅག་ལ་ཚོས་ཀྱི་དབྱེ་བ་ཡང་མ་ཡིན་གྱི། གཅིག་པ་བཀག་པ་  
ཙམ་གྱིས་གཉིས་ཞེས་ཐ་སྐད་དུ་འདོད་དེ། དེ་ཁོ་ན་ཉིད་དུ་དེ་གཉིས་ཀྱི་དོན་མེད་དོ། དཔེར་ན་སྐྱེ་ཤང་དང་དེས་  
དབེན་པ་དག་དེ་ཉིད་མ་ཡིན་ཏེ། ལྡན་ཅིག་དམིགས་པ་མེད་པའི་ཕྱིར་རོ། ཡང་ན་བདག་གཅིག་པ་ལ་དངོས་  
པོའི་ཚོས་ཡིན་བས་ཁྱབ་ཏེ་བྱས་པ་དང་མི་རྟོག་པ་བཞིན་ནོ། འདྲིར་དངོས་པོའི་ཚོས་གཉིས་ལྟེད་པའི་ཕྱིར་རོ། །  
ཐ་དད་པ་ཡང་མ་ཡིན་ཏེ་དབེན་པར་མ་འདུས་པའི་སྐྱེ་ཤང་རང་དབང་དུ་ལྟར་པ་མེད་པའི་ཕྱིར་རོ།

དེ་ལྟར་སྐྱེ་ཤང་དུ་སྣང་བ་ཉིད་ན་སྣོང་ལ། སྣོང་ཙམ་ཉིད་ན་སྣང་ཞིང་། དེ་ཉིད་དང་གཞན་དུ་བཟོད་དུ་མེད་པ་  
བཞིན་དུ། དེ་ཁོ་ན་ཉིད་དུ་དབེན་པར་མ་འདུས་པའི་སྣང་བ་རང་དབང་དུ་མ་གྲུབ་པས་གཞན་དུ་མེད་པ་(read:  
ལ་?)། སྣོང་བྲལ་ནི་ཐ་སྐད་པའི་དངོས་པོ་ཡང་མ་ཡིན་པས་དངོས་པོའི་ཚོས་གཉིས་ལ་ངེས་པའི་བདག་གཅོད་པ་  
ཡང་མ་ཡིན་ཏེ། དེ་ཉིད་དང་གཞན་དུ་ཉིད་(read: བཟོད་)དུ་མེད་པའི་ཚོས་ཅན་དང་ཚོས་ཉིད་གཅིག་བཀག་པ་  
ཙམ་གྱིས་དབྱེ་བའི་དོན་ནོ།

དེ་ལྟར་དབྱེ་བའི་དོན་དབྱེད་པས་དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་ལས་ཕྱོགས་འཛིན་པའི་དབུ་མའི་རྩལ་ **སྐྱེ་བ་དཔོན་**  
**ཤན་ཏ་**(read: **ཏི་དེ་བ་**(Sāntideva)དང་**ཡེ་ཤེས་སྣིང་པོ་**(Jñānagarbha)ལ་སོགས་པ་དང་མཐུན་བར་  
བཟུང་བ་ཡིན་ནོ། དབྱེ་བའི་དོན་བཤད་ཟིན་ཏོ།

*BCA rGya tik*, 59b1-5: འོ་ན་བདེན་པ་རྣམ་པ་གཉིས་ཞེས་བྱ་བའི་དོན་གང་ཞེ་ན། དེ་ཉིད་དང་གཞན་དུ་  
བཟོད་དུ་བ་མེད་པ་སྟེ། ཅིག་དུ་མ་གྲུབ་པ་ཙམ་གྱིས་(read: གྱིས་)གཉིས་སོ། དཔེར་ན་སྐྱེ་ཤང་ནི་བདེན་པའི་  
སྐྱེ་ཤང་གྱིས་དབེན་པ་ལས་ཐ་དད་པ་མ་ཡིན་ཏེ། དབེན་པར་མ་འདུས་པའི་སྐྱེ་ཤང་མེད་པའི་ཕྱིར་རོ། ཅིག་པ་  
ཡང་མ་ཡིན་ཏེ། དབེན་པ་དང་སྐྱེ་ཤང་ལྡན་ཅིག་དུ་མ་དམིགས་པའི་ཕྱིར་རོ། དེས་ན་འབྲུག་པ་ལ་སྣང་ཙམ་ཉིད་

ན་སྤོང་ལ། སྤོང་ཚམ་ཉིད་ན་སྤོང་པས། སྤོང་སྤོང་དབྱེར་མེད་ཅེས་ཀྱང་བྱ་ལ། གཅིག་པ་ཡང་མ་ཡིན་པ་དང་པ་  
ཡང་མ་ཡིན་པས་དེ་ཉིད་དང་གཞན་དུ་བརྗོད་དུ་མེད་པ་བཞིན་དུ། འདུས་བྱས་འཁྲུལ་པའི་དམིགས་པ་འདི་  
མཐའ་དག་ནི་ཀྱན་རྫོང་ཡིན་ལ། བདེན་པའི་རང་བཞིན་གྱིས་སྤོང་པས་ན་དོན་དམ་པ་ཡིན་པས་སྤོང་ཚམ་ན་སྤོང་  
ལ་སྤོང་ཚམ་ན་སྤོང་པས་སྤོང་སྤོང་དབྱེར་མེད་པ། དེ་ཉིད་དང་གཞན་དུ་བརྗོད་དུ་མེད་པའི་ཚོས་ཅན་དང་ཚོས་  
ཉིད་བདེན་པ་རྣམ་པ་གཉིས་ཞེ་བཤོ།།

དབྱེ་བའི་དོན་འདི་ནི་རབ་དུ་མི་གནས་པའི་ལྷགས་ལ་ལྷོས་སྟེ་རྣམ་པར་བཞག་པའོ།། ལྷུ་མ་ལྷ་སུའ་ནི་བྱས་པ་  
དང་མི་རྟག་པ་བཞིན་དུ་བདེན་པ་གཉིས་དངོས་པོ་ཅིག་ལ་ཚོས་ཀྱི་དབྱེའ་བ་གཉིས་སུ་འདོད་མེད་ཀྱི་སློབ་དཔོན་  
འདི་(i.e., Śāntideva) འི་ལྷགས་མ་ཡིན་པས་ཇུ་མ་ལྷར་ཡིན་ནོ།།

Cf. *SDV Phya tik*, 6b4-8; *Phya dbu bsdus*, p. 10.6-12.

<sup>U</sup> TR p. 609.9-22; A 356b1-6; K 302a3-7; U 73b1-6: དང་པོ་ལ་ཀྱན་རྫོང་ཅེས་བྱ་བ་ནི་འཁྲུལ་པའི་  
སློ་སྟེ་དེ་ཁོ་ན་བསྐྱབ་པར་བྱེད་པས་སོ།། འདི་ལྷར་ལྷོང་བ་དང་ཞེན་པའི་སློ་མཐའ་དག་ནི་དེ་ཁོ་ན་ཇི་ལྟ་བུ་ལས་  
གཞན་དུ་ལོག་པར་སྤོང་བས་ཀྱང་དུ་སྐྱབ་ཅིང་རྟོག་པར་བྱེད་པས་ན་ཡང་དག་བསྐྱབ་བས་ཀྱང་རྫོང་སྟེ།  
གང་ཞིག་གིས་སམ་གང་ཞིག་ན། ཡང་དག་སྐྱབ་བྱེད་ཀྱན་རྫོང་འདོད།། (SDV 15ab)

ཅེས་གསུངས་ལ།  
མ་རིག་སྐྱེས་པ་ཉིད་ཀྱིས་ན། ཡང་དག་མིན་པའི་དོན་སྤོང་ཞིང་།།  
ཡང་དག་སྐྱབ་པར་བྱེད་པ་(read: ལ་)འཇུག། མིག་མེར་གྱིས་ནི་ཚོན་(read: གཞོད་)པ་བཞིན་  
(AM 18 cited in BCAP 188b6 ad. IX 2)

ཞེས་ཀྱང་སྟེ། མ་རིག་པ་དང་ཕྱིན་ཅི་ལོག་དང་མོངས་པས་སྐྱར་བའི་སྤོང་བའོ།། བདེན་པ་ནི་འཁྲུལ་པ་དེའི་  
བསམ་པའི་དབང་གིས་ཏེ་རྣམ་པར་གནས་པར་མོས་པས་ན་འཁྲུལ་པའི་ཡུལ་ཚམ་དུ་བདེན་གྱི་དེ་ཁོ་ནར་མི་  
བདེན་པའི་ཕྱིར་རོ།།

ཤྱང་ན་འདས་པ་བདེན་གཅིག་སུ། ལྷུ་བ་རྣམས་ཀྱིས་གང་གསུངས་པ།།  
དེ་ཚོ་ལྷག་མ་ལོག་མིན་ཞེས། མཁས་པ་སུ་ཞིག་རྟོག་པར་བྱེད།། (Y§ 35)

ཅེས་གསུངས་པ་སྟེ། ལོག་པ་ནི་འཁྲུལ་པའི་སྤོང་བའོ།། དེས་ན་འདུས་བྱས་ཀྱི་དོན་ཐམས་ཅད་ནི་བརྟུན་པ་སྟེ།  
བའི་ཚོས་ཅན་ཡིན་པས་ན་འཁྲུལ་པའི་བསམ་པ་ཁོ་རྣམས་བདེན་པར་ཟད་དོ།།

དེའི་ཕྱིར་སློ་དེའི་ཡུལ་རང་དང་གཞན་མཐའ་དག་ནི་འཁྲུལ་པོར་བདེན་པར་ཟད་པས་ན་  
སློ་ནི་ཀྱན་རྫོང་ཡིན་པར་བརྗོད་ (BCA IX. 2d)

ཅེས་གསུངས་པ་སྟེ། ཀྱན་རྫོང་གི་བསམ་པས་ཡོད་པས་ཀྱན་རྫོང་པ་ཡིན་ལ། བསམ་པོ་དེ་ཚམ་དུ་བདེན་པའང་  
ཡིན་པས་ཀྱན་རྫོང་གི་བདེན་པ་ཞེས་བྱ་བའི་དོན་འདི་འང་མི་འགལ་ལོ།།

Cf. *rGya dbu bsdus*, 5a8-b2: སྐྱབ་པར་བྱེད་པའི་དོན་གྱིས་ན་འཁྲུལ་པའི་ཤེས་པ་ནི་ཀྱན་རྫོང་སྟེ། སམ་

བྱི་ཉི་ཞེས་བྱ་བ་ནི་སློབ་བྱེད་ལ་གྲགས་སོ།། དེའི་བསམ་ངོར་བདེན་བསམ་ན་བདེན་བ་སྟེ། ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་ཡུལ་དུ་  
བདེན་བཤོ།། དེ་ཉིད་འཁྲུལ་པ་ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་དམིགས་པ་ཡིན་བསམ་ན། ཀུན་རྫོབ་བ་ཞེས་ཀྱང་བྱ་སྟེ། དེ་ལོ་ན་ཉིད་  
དུ་མ་གྲུབ་པས་སོ།། དེས་ན་

མྱང་ན་འདས་པའི་བདེན་ཅིག་སུ།། རྒྱལ་བ་རྣམས་ཀྱིས་གང་གསུངས་པ།།

དེ་ཚེ་ལྷག་མ་ལོག་པ་ཞེས།། མཁས་པ་སུ་ཞིག་རྟོག་མྱི་བྱེད།། (Ys 35)

ཅེས་གསུངས་པ་ཡིན་ནོ།།

BCA rGya tik, 59b6-7: མོ་སེའི་མིང་གི་དོན་ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་བདེན་པ་དང་དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་ཞེས་བྱུང་  
བའི་སྐབས་བཤད་པའི་རྒྱུ་མཚན་ནོ།། དེ་ལ་ཀུན་རྫོབ་ཞེས་བྱ་བ་ནི་འཁྲུལ་པའི་ཤེས་པ་སྟེ། དེ་ལོ་ན་ཉིད་ལ་སློབ་  
པར་བྱེད་པའི་ཕྱིར་རོ།། འཁྲུལ་ཤེས་དེའི་ངོ་བོ་ན་བདེན་པས་[ཀུན་རྫོབ་བདེན་པ་]ཞེས་བྱུང་སྟེ། གཟུགས་ལ་  
སོགས་པའོ།། དེས་གཟུགས་ལས་ <བ>སོགས་པ་འཁྲུལ་པའི་བསམ་པའི་ངོ་ན་བདེན་པ་ལྟར་བྱུང་བའི་རྣམས་ནི་  
ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་བདེན་པ་ཞེས་བྱེད།།

Cf. SDV Phya tik, 7a3-5; Phya dbu bsdus, pp. 14.16-15.12.

v TR pp. 609.22-610.3; A 356b6-357a1; K 302a7-b1; U 73b6-8: དོན་དམ་པ་ནི་དེ་ལོ་ན་འི་  
འཇལ་བྱེད་རིགས་པའི་ཤེས་པ་སྟེ། ཐར་པ་འཚོལ་བ་རྣམས་ཀྱིས་ཆེད་དུ་གཏད་ནས་དོན་དུ་གཉེར་བར་བྱ་ཞིང་  
བཅའ་བར་བྱ་བ་ཡིན་པས་དོན་ཡང་ཡིན་ལ། མི་སྐྱེ་བས་ན་དམ་པ་ཡང་ཡིན་ཏེ། དམ་པའི་སྐྱེ་བྱ་ཚོས་པ་ལ་  
འཇུག་ལ། དེ་ལོ་ན་རྟོགས་པའི་སློ་གཞན་གྱིས་མི་གཞོད་པའི་རང་བཞིན་མི་སྐྱེ་བའི་ཤེས་པ་དེའང་བྱ་ཚོས་པ་ཡིན་  
པས་སོ།། དེའི་ཡུལ་སྟོང་པ་ཉིད་ཀྱང་དོན་དམ་པ་སྟེ་དོན་དམ་པའི་གཞལ་བྱ་ཡིན་པས་མངོན་སུམ་བཞིན་ནོ།།  
ཤེས་པ་དེའི་ངོར་བདེན་པས་ན་དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་སྟེ་རིགས་པས་གྲུབ་པའི་བདེན་པའོ།།

Cf. rGya dbu bsdus, 5b2: དོན་དུ་གཉེར་བར་བྱ་བས་ན་དོན་ཏེ། ཡང་དག་པའི་ལྷ་བ་རིགས་པའི་ཤེས་  
པའོ།། དེ་ཉིད་བྱ་ཚོས་བ་མཚོག་དུ་གྱུར་བས་དམ་པ་ཡང་ཡིན་ཏེ། དེ་ལོ་ན་ཉིད་ཀྱི་དོན་ལ་མི་སྐྱེ་བའི་བདག་ཉིད་  
དེ་ལོ་ན་ཉིད་རྟོགས་པའི་ཤེས་པས་མི་གཞོད་པའི་ཕྱིར་རོ།། དེའི་ངོར་བདེན་བསམ་ན་བདེན་བ་སྟེ། དོན་དམ་པའི་  
ཡུལ་དུ་བདེན་པའོ།།

BCA rGya tik, 59b7-8: དོན་དམ་པ་ཞེས་བྱུང་བ་ནི་རིགས་པའི་ཤེས་པ་སྟེ། སློབ་པ་སྦྲོང་པར་འདོད་པ་  
རྣམས་ཀྱིས་དོན་དུ་གཉེར་བར་བྱ་བ་ཉིད་ཡིན་པས་དོན་ཅེས་བྱུང་། དེ་ཉིད་དམ་པ་ཡང་ཡིན་ཏེ། མི་བསྐྱེ་བའི་  
མཚན་ཉིད་ཅན་བྱ་ཚོས་པ་མཚོག་དུ་གྱུར་བ་སྟེ། དེ་ལོ་ན་རྟོགས་པའི་ཤེས་པ་མི་གཞོད་པའི་རང་  
བཞིན་མི་བསྐྱེལ་བ་ནི་བྱ་ཚོས་པར་ཡིན་པའི་ཕྱིར་རོ།། དེ་ལྟར་རིགས་པའི་ཤེས་པ་ནི་དོན་ཡང་ཡིན་ལ་དམ་པ་  
ཡང་ཡིན་པས་དོན་དམ་པའོ།། དེའི་བསམ་པའི་ངོར་བདེན་པས་ན་སྟོང་པ་ཉིད་ནི་དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་ཞེས་བྱ་  
བཤོ།།

Cf. SDV Phya tik, 7a5; Phya dbu bsdus, p. 15.13-16.

<sup>w</sup> TR p. 610.3-4; A 357a1; K 302b1-2; U 73b8-9: དེ་ལྟར་ན་སྤྲོ་མ་ནི་འཁྲུལ་ངོར་བདེན་པར་ཟད་  
པས་བཙུགས་བྱའི་བདེན་པ་དོ།། འདི་ནི་གཞན་སེལ་བ་ལས་ཡང་དག་པར་བདེན་པས་ན་རང་བཞིན་གྱི་བདེན་  
པ་དོ།།

<sup>x</sup> TR pp. 611.21-612.8; A 358a2-7; K 303b1-5; U 74b7-75a3: གངས་ངེས་ནི་འདི་གཉིས་ཕྱིན་ཅི་  
ལོག་དང་ཕྱིན་ཅི་མ་ལོག་པའི་ཤེས་པའི་ཡུལ་ཡིན་མོད་ཀྱི། འོན་ཀྱང་ཤེས་པ་གཉིས་སུ་གྲུབ་པས་དེའི་ཡུལ་དེ་དང་  
མཐུན་པ་གཉིས་སུ་གྲུབ་པ་ནི་མ་ཡིན་ཏེ། ཤེས་པ་གཉིས་ཉིད་ཀྱང་དོན་གཉིས་སུ་གྲུབ་པ་ལ་བཏོས་པར་ཐལ་བས་  
ཏེ། སློ་འཁྲུལ་བ་དང་མ་འཁྲུལ་བ་ནི་དོན་བདེན་པ་དང་བཟུན་པ་དང་ལྡན་པ་ཙམ་ཡིན་པས་ཕན་ཚུན་རྟོགས་པ་  
གཅིག་གི་ཡུལ་ཡིན་པའི་ཕྱིར་རོ།། དེས་ན་ཤེས་པའི་དབྱེ་བས་ཡུལ་གྱི་དབྱེ་བ་སྐྱབ་པའམ་ཡུལ་གྱི་དབྱེ་བས་ཤེས་  
པའི་དབྱེ་བ་སྐྱབ་པ་ནི་མ་ཡིན་ཏེ། ཤེས་པའི་དབྱེ་བ་གྲུབ་པ་ཉིད་ཡུལ་གྱི་དབྱེ་བ་གྲུབ་པ་ཡིན་ལ། ཡུལ་གྱི་དབྱེ་བ་  
གྲུབ་པ་འང་ཤེས་པའི་དབྱེ་བ་གྲུབ་པ་དོ།།

དེ་ལ་མ་འཁྲུལ་བའི་ཡུལ་ནི་དངོས་པོ་ལ་གྲུབ་པ་སློས་མ་བཙུགས་པ་དོ།། དེ་ནི་རྟག་པའི་རང་བཞིན་ཏེ་སློ་  
གཞན་སྐྱེས་པས་རྣམ་པ་གཞན་དུ་མི་འགྱུར་བའི་ཕྱིར་རོ།། འཁྲུལ་པའི་ཡུལ་ནི་དངོས་པོ་[ལ་]མེད་ཀྱང་སློས་  
བཞག་པ་ཙམ་མོ།། དེ་ནི་མི་རྟག་པ་སྟེ་སློ་གཞན་གྱིས་དབྱུང་ན་སློ་མའི་ཡུལ་ལས་ཉམས་པས་རྣམ་པ་གཞན་དུ་  
འགྱུར་བའི་ཕྱིར་རོ།།

རྟག་པ་དང་མི་རྟག་པ་འང་ཕན་ཚུན་རྣམ་པར་གཅོད་པས་ཕུང་པོ་གསུམ་པ་སེལ་ཏེ། དེ་ལྟར་ན་ཐོན་དུ་སློ་  
འཁྲུལ་བ་དང་མ་འཁྲུལ་བ་ལ་མ་འཏོས་པར་འགལ་བ་དེ་ཉིད་ཀྱིས་ཤེས་བྱ་བདེན་པ་དང་མི་བདེན་པའམ་སློ་འཁྲུལ་  
བ་དང་མ་འཁྲུལ་བར་ངེས་པས་གངས་ངེས་པ་གྲུབ་པོ།།

Cf. rGya dbu bsdus, 7a6-7: ཤེས་བྱ་གཉིས་སུ་ངེས་པ་ནི་འཁྲུལ་བ་དང་མ་འཁྲུལ་བའི་ཤེས་པ་གཉིས་ཁོ་  
རྣམ་ངེས་པས་སྟེ། ཡུལ་ལ་འོར་པར་འཇུག་པ་དང་། མ་འོར་བར་འཇུག་པ་ནི་ཕན་ཚུན་རྣམ་པར་གཅོད་པས་  
གཞན་མི་སྲིད་པར་ཚད་མ་ཅིག་གི་འཇུག་པས་ངེས་ལ། ཤེས་པ་གཉིས་སུ་ངེས་པ་ཉིད་ཡུལ་གཉིས་སུ་ངེས་པ་ཡིན་  
བས་རྟོགས་པ་ཅིག་པའི་ཕྱིར་ཕན་ཚུན་རྟོག་པར་ཡང་མི་འགྱུར་རོ།།

དེ་ལ་མ་འཁྲུལ་བའི་ཡུལ་ནི་སློ་གཞན་སྐྱེས་པས་ཉམས་པར་མི་འགྱུར་བའི་ཕྱིར་རྟག་ཅེས་བྱ་ལ། འཁྲུལ་པའི་  
ཡུལ་ནི་ཉམས་པར་འགྱུར་བས་མི་རྟག་ཅེས་བྱ་བའི་དོན་དུ་བསྟན་དོ།། རྟག་པ་དང་མི་རྟག་པ་ཡང་ཕན་ཚུན་རྣམ་  
པར་གཅོད་ལས་ཕུང་པོ་གཞན་སེལ་བས་གངས་ངེས་པ་གྲུབ་པོ།།

BCA rGya tik, 60a1-2: གངས་ངེས་པ་ནི་ཤེས་བྱ་ལ་འཇུག་པའི་སློ་མཐུན་དག་ནི་འོར་བར་འཇུག་པ་  
འཁྲུལ་ཤེས་དང་། མ་འོར་བར་འཇུག་པ་རིགས་པའི་ཤེས་པ་གཉིས་ཁོ་རྣམ་གངས་ངེས་པས་ན། དེ་དག་གི་ཡུལ་  
འཁྲུལ་བའི་བསམ་པ་དོར་བདེན་པ་ཀྱང་རྫོབ་ཀྱི་བདེན་པ་དང་། རིགས་པའི་ངོར་བདེན་པ་དོན་དམ་པའི་བདེན་  
པའི་གཉིས་ཁོ་ན་ལས་གངས་གཞན་མི་སྲིད་པའི་ཕྱིར་གཉིས་ཁོ་ན་དོ།།

<sup>Y</sup> TR pp. 612.8-613.20. Cf. rGya dbu bsdus, 7a7-b2.

<sup>Z</sup> TR p. 612.8-12; A 358a7-b1; K 303b5-6; U 75a3-4: གལ་ཏེ་ཤེས་བྱ་དང་སྒྲོ་གསུམ་པ་མི་སྲིད་  
པས་དེ་དག་གཉིས་ཁོ་ནར་ངེས་ན་འོ་ན་ཤེས་བྱ་བ་དེ་ན་པ་དང་སྒྲོ་མ་འཕྲུལ་བ་ཉིད་མི་སྲིད་པས་དོན་དམ་པ་མེད་  
དོ།། དེ་དག་སྲིད་ན་ནི་དོན་དམ་པ་རང་བཞིན་དུ་གྲུབ་པར་ཐལ་ལོ།། ཇི་སྟེ་དེ་ལྟ་བུ་མི་སྲིད་པ་ཉིད་དེ་ལྟ་བུ་བཞག་  
པའི་ཐབས་ཀྱིས་ཤེས་པར་བྱེད་ན། འོ་ན་བདེན་པ་གསུམ་པ་མི་སྲིད་པ་ཉིད་དེ་བཞག་པའི་ཐབས་ཀྱིས་ཤེས་པར་  
བྱེད་པས་གངས་ངེས་པ་ཉམས་སོ་ཞིན། ...

<sup>AA</sup> TR p. 612.13-19; A 358b1-4; K 303b6-304a1; U 75a4-7: འདིར་དངོས་པོ་གསུམ་པ་མི་སྲིད་  
པས་བདེན་པ་གསུམ་པ་མི་འདོད་ཅིང་དངོས་པོ་གཉིས་སྲིད་པས་བདེན་པ་གཉིས་སུ་འཇོག་པར་འདོད་ན་དེ་ལྟར་  
འཇུར་བ་ཞིག་ན་དེ་ཞི་མི་འདོད་དེ་དངོས་པོ་གཉིས་མ་གྲུབ་ཀྱང་མཐའ་གཉིས་གྲུབ་པ་དང་མཐའ་གསུམ་པ་འང་  
མེད་པས་དེའི་དབང་གིས་བདེན་པ་གཉིས་ཁོ་ནར་ཁས་ལེན་དོ།།

མཐའ་ཞེས་བྱ་བ་ནི་དེ་ལོ་ནར་གྲུབ་བམ་མ་གྲུབ་ཀྱང་སྒྲ་སྟེ་ཤེས་བྱ་སྲིད་པ་ཉི་བར་བཟུང་ནས་རྣམ་པར་བརྟག་  
པས་ཁས་སྲུང་བར་བྱ་སྟེ། ཡོད་པ་ཡིན་ཕྱིན་ཆད་རྟག་པ་དང་མི་རྟག་པ་འཕྲུལ་བ་དང་མ་འཕྲུལ་བའི་ཡུལ། སྒྲོས་  
མ་བཞག་པར་གྲུབ་པ་དང་རང་མ་གྲུབ་བཞིན་དུ་སྒྲོས་བཞག་པ་ཙམ་དག་མན་རྩལ་རྣམ་པར་གཅོད་པའི་འགལ་  
བ་ལས་གཉིས་ཁོ་ནར་གྲུབ་ཅིང་གཞན་མི་སྲིད་པའི་ཕྱིར་རོ།།

<sup>AB</sup> TR p. 612.20-23; A 358b4-5; K 304a1-2; U 75a7-9: དངོས་པོ་མ་གྲུབ་པར་དེ་གཉིས་ཁོ་ནར་  
གྲུབ་པ་འདང་ག་ལས་ཞེ་ན། དེ་ནི་མཐའ་རྟོག་པའི་སྒྲོའི་(read: སྒྲོས་?)མཚན་ཉིད་གཉིས་ཁོ་ནར་ངེས་པས་ཏེ།  
དངོས་པོ་[ལ་?]གནས་པ་སྒྲོས་མ་བཞག་པ་དང་མི་གནས་པ་སྒྲོས་བཞག་ཙམ་དུ་རྟོག་པ་ལས་མ་གཏོགས་པ་  
འགའ་ཞིག་ཡོད་པར་རྟོག་པ་མི་སྲིད་པས། འདི་གཉིས་མན་རྩལ་སྤངས་པའི་ཡུལ་ཅན་ཡིན་པས་སོ།།

<sup>AC</sup> TR pp. 612.23-613.8; A 358b5-359a2; K 304a2-6; U 75a9-b4: འོ་ན་དེ་གཉིས་མ་ཡིན་པ་  
དང་གཉི་ག་ཡིན་པར་རྟོག་པ་འདང་ཉམས་སུ་མྱོང་བས་གྲུབ་པ་ཅི་ལྟར་དགག་སྟེ། དེ་གཉིས་སུ་རྟོག་པ་ཉིད་ཀྱང་  
དངོས་པོའི་ཡུལ་ཅན་ནི་མ་ཡིན་ལ། བརྟགས་པའི་ཡུལ་གྱིས་དབུལ་བ་ནི་གང་ཡང་མེད་དོ་སྟམ་ན།

གཉིས་དང་གཉིས་མ་ཡིན་པར་རྟོག་པར་སྒྲོ་མ་མམ་དེ་ལྟར་བཟོད་དུ་བྱེད་ཀྱང་། སྒྲོ་གཞན་གྱིས་དབུད་ན་དེ་  
གཉིས་ཀྱི་མཚན་ཉིད་ཀྱིས་མ་ཁུབ་པའི་རྟོག་པ་ནི་མི་སྲིད་དེ། འདི་གཉིས་གཅིག་གི་མཚན་ཉིད་གྲུབ་པ་ཉིད་གཅིག་  
གི་མཚན་ཉིད་བཀག་པའི་རྟོག་པ་དང་། གཅིག་གི་མཚན་ཉིད་བཀག་པའི་རྟོག་པ་ཉིད་གཅིག་གི་མཚན་ཉིད་གྲུབ་  
པ་ཡིན་པས་སོ།། འདི་ལྟར་གཉིས་ཀ་མ་ཡིན་པར་ངེས་པར་བྱ་བ་དེ་ཡང་དེ་ལོ་ནར་གཉིས་ལས་མ་འདས་བཞིན་  
དུ་སྒྲོས་གཉིས་ཀ་མ་ཡིན་པར་བཞག་པར་རྟོག་པ་དང་། དེ་ལོ་ནར་གཉིས་ལས་འདས་པར་གྲུབ་པ་ཉིད་དུ་རྟོག་  
པའི་མཚན་ཉིད་གཉིས་ལས་མི་འདའ་བས་ཕུང་པོ་གསུམ་པ་མི་སྲིད་པའི་ཕྱིར་རོ།། གཉིས་རྟོག་པ་ཡང་དེ་  
བཞིན་ནོ།། དེས་ན།

དངོས་པོ་གསུམ་པ་མི་སྲིད་ལྟར། གཉིས་པའང་སྲིད་པ་མ་ཡིན་མོད།  
རྣམ་པར་རྟོག་པ་གཉིས་འབྲང་ལྟར། གཞན་མི་འབྲང་ཕྱིར་གསུམ་པ་མེད་  
ཅེས་གྲུབ་པོ།

AD This verse is cited in TR p. 613.7-8; A 359a1-2.

AE TR p. 613.9-17; A 359a2-5; K 304a6-b1; U 75b4-7: འོ་ན་རྟོག་པ་གཉིས་ཁོ་ན་ལས་མཐའ་  
གཉིས་སུ་གྲུབ་པས་བདེན་པ་གཉིས་ཁོ་ནར་འཛོག་པའི་ཕྱིར། ཤེས་པའི་དབང་གིས་གྲངས་ངེས་པ་འགོག་པ་  
འགའ་ལོ་ཞེན། མ་ཡིན་ཏེ་སློ་འཁྲུལ་བ་དང་མ་འཁྲུལ་བ་གཉིས་སུ་ངེས་པས་བདེན་པ་གཉིས་འཛོག་པ་འགོག་གི།  
ཁས་ལེན་གྱི་རྣམ་རྟོག་གཉིས་ལས་བརྒྱད་ནས་བདེན་པའི་གྲངས་ངེས་འཛོག་པ་ནི་འདོད་པའོ། མཐའ་གཉིས་སུ་  
རྟོག་པའི་ཤེས་པ་དེའང་དེ་ཁོ་ན་སེམས་པས་དབྱུང་ན་གཉི་ག་འཁྲུལ་པ་ཉིད་དོ། དེ་ལྟར་ན་ཁས་ལེན་གྱི་ཤེས་པ་  
གཉིས་ཁོ་ནར་ས་རྒྱད་པའི་ཚད་མས་ངེས་པ་ལས་ཡུལ་མཐའ་གཉིས་སུ་ངེས་ལ། དེའང་ཕན་ཚུན་སྤངས་པ་ལ་  
བཏོམ་ནས་བདེན་པ་གཉིས་ཁོ་ནར་འགྲུབ་པོ། འདི་ལྟར་མཐའ་དེ་གཉིས་སུ་བརྟགས་ནས་དང་པོ་ནི་ཤེས་བྱའི་དེ་  
ཁོ་ནར་མི་སྲིད་དོ་ཞེས་མཐའ་གཅིག་བཀག་པས་ནི་དོན་དམ་པའི་ཐ་སྣང་གྱི་ཡུལ་གྲུབ་ལ། གཉིས་པ་བཟུང་ཞིང་  
ཁས་སྤངས་པས་ནི་ཀུན་རྫོབ་གྲུབ་པའོ།

AF TR p. 613.17-20; A 359a5-6; K 304b1-2; U 75b7-9: དེས་ན་དོན་དམ་པའི་མཐའ་ནི་བརྟགས་  
ནས་བཞག་པར་བྲང་ལ། དེ་བཞག་པས་ཀྱང་དོན་དམ་པའི་མཐའ་རྟོག་པ་འགོག་གོ། ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་མཐའ་ནི་སྲིད་  
པས་མི་སྲིད་ལ། དེའང་འཁྲུལ་པའི་ཡུལ་ཚམ་ཡིན་པས་མངོན་ཞེན་གྱི་གནས་མ་ཡིན་པར་གོ་བར་བྱ་བའི་དོན་དུ་  
བདེན་པ་གཉིས་བཞག་པ་ཚམ་སྟེ། དེ་ཁོ་ནར་ནི་བདེན་པ་དང་བརྟུན་པ་ཐམས་ཅད་རབ་དུ་མ་གྲུབ་པོ།

AG Cf. *rGya dbu bsdus*, 7b2-8s6.

AH Cf. *rGya dbu bsdus*, 7b3: འདི་ལྟར་རང་ལྷགས་ཀྱི་བདེན་པ་གཉིས་ཀྱི་སྐྱེ་དོན་ལ་སོགས་པ་རྣམ་པར་  
བཤད་པའི་སྐབས་སུ། བདག་ཅག་གི་ཀུན་རྫོབ་དང་གཞན་གྱི་དོན་དམ་གྲངས་ངེས་པ་སྟོན་པ་ནི་སྐབས་སུ་མ་  
བབ་པའི་ཕྱིར་རོ། དགོས་པ་ཡང་མེད་པའི་ཕྱིར་རོ།

AI Cf. *rGya dbu bsdus*, 7a6-7 (above-cited); *BCA rGya tik*, 60a1-2 (above-cited); *SDV Phya tik*, 6b8-7a3; *Phya dbu bsdus*, pp. 13.17-14.15.

AJ Cf. *rGya dbu bsdus*, 8a6: ... དེས་ན་བཟུང་པ་སྤང་བ་སྤྲུལ་སྟེ་གསུངས་པ་ནི་ལྷགས་པར་མི་སེམས་སོ།

AK This is the interpretaion of Gro lung pa. Cf. TR pp. 615.25-616.1; A 360b3-6; K 305b4-6; U 77a1-4: ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་མཚན་ཉིད་ནི་ཕྱིན་ཅི་ལོག་གི་དམིགས་པ་ཡིན་པས་སློ་མ་ལུས་པ་ལ་སྤང་  
བ་ཇི་ལྟར་སྟེ། ཕྱིན་ཅི་ལོག་ནི་འཁྲུལ་པའི་སློ་མཐའ་དག་གོ། དེས་དམིགས་པར་བྱ་བ་ནི་འཁྲུལ་པའི་ཡུལ་ཡིན་  
པས་ན་ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་བདེན་པ་སྟེ། ཚད་མས་གཞོད་བཞིན་དུ་སྤང་བ་ནི་བརྟུན་པ་ཡིན་པས། ཚད་མའི་ཡུལ་དེ་ཁོ་  
ནར་དེ་ལྟར་གནས་པ་བཀག་པས་ན་ཚད་མས་གཞོད་པའི་ཐ་སྣང་དུ་འབྲང་པས་སོ། སྤང་བཞིན་པ་འཁྲུལ་པའི་



ཡུལ་ཚམ་ལ་ནི་ཚད་མ་མི་འཇུག་པས་སྤང་བ་འགོག་པར་ཡང་མི་ཐལ་ལོ།། སློའི་ཡུལ་མ་ལུས་པ་ཀུན་རྫོབ་ཡིན་པས་ན།

དོན་དམ་སློའི་སློང་ཡུལ་མིན།། སློའི་ཀུན་རྫོབ་ཡིན་པར་འདོད།། (BCA IX. 2cd)

[Skt. buddher agocaras tattvam, buddhiḥ samvṛtir ucyate// (BCAP p. 352.4)]

ཅེས་གསུངས་སོ།།

rGya dmar ba follows the interpretation of Gro lung pa in *BCA rGya tik*. Cf. *BCA rGya tik*, 60a4-7: ཅིའི་ཕྱིར་ཞེ་ན། སློའི་ཀུན་རྫོབ་ཡིན་པར་བརྗོད་ (BCA IX. 2d) ཅེས་སློས་སྟེ། སློ་ཐམས་ཅད་འབྲུལ་པ་ཀུན་རྫོབ་པ་ཡིན་པའི་ཕྱིར་སློའི་ཡུལ་མཐའ་དག་ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་བདེན་པ་ཡིན་པས། ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་བདེན་པ་ལས་བསྐྱོག་པ་དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་སློའི་ཡུལ་མ་ཡིན་པར་གྲུབ་པོ།། འདིས་ནི་དོན་དམ་སློའི་ཡུལ་མ་ཡིན་པའི་འཐད་པར་བརྗོད་པས་སློའི་ཡུལ་མཐའ་དག་ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་བདེན་པའི་མཚན་ཉིད་ཡིན་པར་འཇུག་པ་ཅིག་གིས་གྲུབ་པོ།།

དེ་ལྟར་ན་རྗེ་ལྟར་སྤང་བ་འདི་ལོ་ན།། ཀུན་རྫོབ་གཞན་ནི་ཅིག་ཤོས་ཡིན་ (SDV 3cd) ཞེས་བདེན་པ་གཉིས་ཀྱི་མཚན་ཉིད་དབུལ་མ་བདེན་པ་གཉིས་སུ་བཤད་པ་དེ་ཉིད་ཡིན་ཏེ། སློའི་ཡུལ་དུ་རྗེ་ལྟར་སྤང་བ་འདི་ལོ་ན་ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་བདེན་པ་དེ་ལས་གཞན་སློའི་ཡུལ་ལས་འདས་པ་ཅིག་ཤོས་དོན་དམ་པའི་བདེན་པའི་མཚན་ཉིད་དོ།།

དོན་དམ་པ་སློའི་ཡུལ་མ་ཡིན་པ་དེ་ལྟར་ནི། འཕགས་པ་ཚེས་ཡང་དག་པར་སྤྱད་པ་ལས་

འགའ་ཡང་མཐོང་མ་(read: བ་)མེད་པ་ནི་དེ་ལོ་ན་མཐོང་པ་ཡིན་ནོ་

[Cf. DS 68b6: བཅོམ་ལྡན་འདས་ཚེས་ཐམས་ཅད་མ་མཐོང་བ་ནི་ཡང་དག་པར་མཐོང་བ་ལོ།།

Skt. ŚS p. 264.1f.; adarśanaṃ bhagavan sarvadharmāṇāṃ samyag-darśanam iti. Cf. Ichigo 1985, p. 286, n. 2.]

ཞེས་བྱུང་བ་དང་། སློའི་སློའི་མི་བཟང་པར་བསྟན་པ་ལས་ཀྱང་།

དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་ལ་ནི་སེམས་རྒྱལ་བ་ཡང་མེད་ན་ཡི་གེ་རྣམས་ལྟ་ཅི་སློས་

[Cf. AN 123b2: དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་ནི། གང་ལ་སེམས་ཀྱི་རྒྱ་བ་མེད་པ་སྟེ། ཡི་གེ་ལྟ་ཅི་སློས།]

ཞེས་བྱུང་བ་ལ་སོགས་པ་མང་དུ་གསུངས་པ་བཞིན་ནོ།།

<sup>AL</sup> Cf. *rGya dbu bsdus*, 8a6-b1: བརྟག་བཟོད་མ་ཡིན་པའི་ཤེས་བྱ་ནི་ཀུན་རྫོབ་སྟེ།

རྗེ་ལྟར་སྤང་བ་འདི་ལོ་ན་ཀུན་རྫོབ་ (SDV 3cd)

ཅེས་བྱ་བས། མ་དབུད་པར་སྤང་ཚད་དུ་འཇུག་པའི་དམིགས་པ་བརྗོད་པས་དོན་འདི་ཉིད་བཟུང་བ་ཡིན་ཏེ།

ཀུན་རྫོབ་དུ་བདེན་པ་རྣམ་པར་གནས་ཀྱི་ཡང་དག་པར་མ་ཡིན་ཏེ། (SDV 4a3 ad 3cd)

ཞེས་འབྱུང་བའི་ཕྱིར་རོ།། སློའི་ཡུལ་ཏེ་ཤེས་བྱ་ཚམ་ཡང་ཀུན་རྫོབ་ལས་ཚེས་ཐ་དང་པའི་ཕྱིར་དང་། དོན་དམ་པ་ལ་འབྲུབ་ཆེས་པས་མཚན་ཉིད་དུ་མི་འདོད་དོ།།

དོན་དམ་ཤེས་བཤེས་ཅད་ལས་འདས་པ་མ་ཡིན་ནམ་ཞེ་ན། ཇི་ལྟར་ཤེས་བྱར་གནས་པ་དང་། མི་གནས་པ་དགག་པ་བཤད་བྱེན་ཏེ། ...

Cf. *SDV Phyta tik*, 7a5-6; *Phya dbu bsdus*, p. 16.4-19.

<sup>AM</sup> SDVP 17b3-4: ཇི་ལྟར་སྤང་བ་འདྲིའོན་ (SDV 3c) ཞེས་བྱ་བ་བསྟན་པ་ནི་རིགས་པ་ཇི་ལྟར་བཞེན་དུ་མ་ཡིན་ནོའོཞེས་བསྟན་པའི་ཕྱིར་རོ།

<sup>AN</sup> SDVV 4a3: ཀུན་རྫོབ་ཏུ་བདེན་པ་རྣམས་པར་གནས་ཀྱི་ཡང་དག་པར་ནི་མ་ཡིན་ཏེ།

<sup>AO</sup> Cf. TR p. 615.20/ 360b3: ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་མཚན་ཉིད་ནི་ཕྱིན་ཅི་ཡོག་གི་དམིགས་པ་ཡིན་པས་ ...

<sup>AP</sup> This is the interpretation of Gro lung pa. Cf. TR pp. 614.13-615.4; A 359b6-360a5;

K 305a1-7; U 76a7-b3: དོན་དམ་པའི་མཚན་ཉིད་ནི་སྤང་བ་ཐམས་ཅད་ལས་འདས་པ་སྟེ། མཚན་ཉིད་ཐམས་ཅད་དང་བྲལ་བས་ཤེས་བྱའི་མཚན་མ་དང་བྲལ་བའོ། དེས་ན་རྣམས་པར་རྟོག་པ་དང་རྟོག་པ་མེད་པའི་སྟོབས་ཐམས་ཅད་ཀྱི་སྟོང་ཡུལ་མ་ཡིན་པར་བཤེད་དེ། སྟོབས་ཅད་ནི་ཡོད་པ་དང་མེད་པ་ལ་སོགས་པ་ཅི་ཞིག་ཡུལ་དུ་བྱས་ནས་འབྲུག་ལ། དོན་དམ་པ་ནི་དེ་ལྟར་བྱའི་མཚན་ཉིད་ཐམས་ཅད་དང་བྲལ་བས་སོ། མཚན་ཉིད་འགའ་ཞིག་ཡོད་ན་ནི་ཐར་ཐམས་ཅད་མཆོད་པའི་སྟོབས་ཡུལ་ཡིན་པས་ཁྲབ་པས་ན།

ཡོད་མེད་དངོས་ཀྱི་མཆོད་པ་ལོ། ཀུན་མཆོད་པས་ཀྱང་གང་མ་གཟིགས།

དེ་ཡི་དངོས་པོ་ཅི་འདྲ་ཞིག། ཤིན་ཏུ་ཞིབ་པའི་ལྟ་བུ་དཔྱད། (SDV 7)

ཅེས་གསུངས་ལ།

ཡོད་མིན་མེད་མིན་ཡོད་མེད་མིན། གཉིས་མིན་བདག་ཉིད་ཏུ་ཡང་མེད།

མཐའ་བཞི་ལས་ནི་ངེས་གྲོལ་བ། དེ་ཉིད་དབུ་མར་མཁམས་རྣམས་བཞེད།

ཅེས་འབྲུང་ངོ།

དེ་ལྟར་ན་དོན་དམ་པའི་མཚན་ཉིད་ནི་རང་བཞིན་ཐམས་ཅད་དང་བྲལ་བ་སྟེ། མཚན་ཉིད་མེད་པ་ཉིད་མཚན་ཉིད་དུ་བཤེད་པའོ། དཔེར་ན་ཚོས་ཐམས་ཅད་དང་བྲལ་བ་ཉིད་འདྲིའི་ཚོས་མ་ཡིན་ནམ་ཞེས་བཤད་པ་ལྟ་བུའོ། དེ་ནི་སྟོས་པ་མེད་པ་ཡང་ཡིན་ཏེ་སྤང་དང་རྟོག་པ་ཐམས་ཅད་ཀྱི་ཞེན་ཡུལ་མ་ཡིན་པའི་ཕྱིར་རོ། གཉིས་མེད་པའང་ཡིན་ཏེ་ཡོད་པ་དང་མེད་པ་དང་གཟུང་བ་དང་འཛིན་པ་ལ་སོགས་པ་མ་ཡིན་པའི་ཕྱིར་རོ། མཚན་ཉིད་མེད་པའང་ཡིན་ཏེ་ཚོས་གང་གིས་ཀྱང་མཚོན་པར་བྱ་བ་མ་ཡིན་པའི་ཕྱིར་རོ། དངོས་པོ་མེད་པ་ཡང་ཡིན་ཏེ་འདུས་བྱས་ཀྱི་དོན་ཞོག་པ་ཙམ་ཡིན་པའི་ཕྱིར་རོ། སྟོང་པའང་ཡིན་ཏེ་མི་སྟོང་པ་མ་གྲུབ་པའི་ཕྱིར་རོ།

དེ་ནི་མདོར་ན་ཅི་འང་མ་གྲུབ་པ་སྟེ། རྣམས་མཁའ་མེ་ཏོག་གི་དེ་ལོ་ན་ལས་ཁྱད་པར་མེད་པའི་དོན་གྱིས་སོ། དེས་ན་སྟོས་པ་འགོག་པའི་ཚོག་གིས་ཐ་སྟར་དུ་བྱེད་པར་ཟད་ཀྱི་རང་བཞིན་དུ་གྲུབ་པའི་དོན་ནི་ཅི་འང་མེད་ངོ།

rGya dmar ba follows the interpretation of Gro lung pa in *BCA rGya tik*. Cf. *BCA rGya tik*, 60a2-4: དེ་ལྟར་དཔྱད་བ་བསྟན་ནས། མཚན་ཉིད་སྟོན་པ་ནི། དོན་དམ་སྟོབས་སྟོང་ཡུལ་མིན་

(BCA IX. 2c) ཞེས་བྱུང་བ་སྟེ། རྟོག་པ་དང་མི་རྟོག་པའི་སློབ་ཡུལ་ཐམས་ཅད་ལས་འདས་པའོ།། སློས་པ་  
མེད་པ་ཡང་ཡིན་ཏེ། སྐྱ་དང་རྣམ་པར་རྟོག་པའི་ཞེན་པའི་ཡུལ་མ་ཡིན་པའི་ཕྱིར་རོ།། གཉིས་སུ་མེད་པ་འང་ཡིན་  
ཏེ། ཡོད་པ་དང་མེད་པ་གཉིས་མཁུ་ རྟོག་པ་དང་མི་རྟོག་པ་གཉིས་ལས་གསལ་པ་མ་གྲུབ་པས་སོ།། མདོར་ན་  
མཚན་ཉིད་ཐམས་ཅད་ལས་འདས་པ་ལ་དོན་དམ་པའི་མཚན་ཉིད་དུ་གསྐྱེད་བྱས་པ་སྟེ། ཁོས་གང་གིས་ཀྱང་མཚན་  
པས་བྱར་སྟེད་པ་མཚན་ཉིད་མེད་པ་ཉིད་དོན་དམ་པ་ཡིན་པས། **སློབ་སྟོན་ཡུལ་མིན་**ཞེས་བྱ་བའོ།།

On the other hand, rGya dmar ba presents this interpretation of Gro lung pa as *pūrvapakṣa* in his *dBu bsdus* as follows: rGya dbu bsdus, 8b7-8: སློབ་དཔོན་དགོ་བཤེས་  
(i.e., གྲོ་ལྷང་པ་)དག་{ལྷུང་ལོ་ཙ་}འདི་ལྟར་བཞེད་དེ། དོན་དམ་པའི་བདེན་པའི་མཚན་ཉིད་ནི། ཤེས་བྱ་ཙམ་  
ལས་ཀྱང་འདས་པས་སྐྱོང་བ་དང་མི་སྐྱོང་བ་ལ་སོགས་པ་ཅི་ལྟར་ཡང་སློབ་ཡུལ་མ་ཡིན་བས་ན།

དོན་དམ་སློབ་སྟོན་ཡུལ་མིན་ (BAC IX. 2c)

ཞེས་གསུངས་པ་ཡིན་ནོ།།

Cf. *SDV Phya tik*, 7b1-3; *Phya dbu bsdus*, p. 18.7-13.

As for the interpretations on the emptiness (*śūnyatā*) of the early Tibetan scholars of gSang phu ne’u thog and especially rGya mar ba and Phya pa’s criticism against the interpretation of Gro lung pa, see Nishizawa 2018a.

<sup>AQ</sup> TR p. 615.4-9; A 360a5-7; 305a7-8; U 76b3-6: འོ་ན་སྤར་དབྱེ་བའི་གཞིར་ཤེས་པ་དང་ཤེས་བྱ་  
སློབ་ཡུལ་ཉིད་བཞག་པ་དང་འགལ་ལོ་སྟམ་ན། མ་ཡིན་ཏེ་ཡོད་མེད་ལ་སོགས་པ་འཛིན་པའི་སློས་ཤེས་བྱར་  
བཏགས་པ་ཉིད་དེ་ཁོ་ནའི་རིགས་པས་དཔྱད་ན་ཤེས་བྱའི་མཚན་ཉིད་དང་བྲལ་བས་སློབ་ཡུལ་ལས་འདས་པ་ཉིད་  
ཡིན་པའི་ཕྱིར་རྟེ། རྣམ་རྟོག་རྗེས་དཔག་ཡུལ་རང་གི་མཚན་ཉིད་དུ་རྫོམ་ཡང་སློ་གཞན་གྱིས་དཔྱད་ན་སྤྱི་ལས་མ་  
འདས་པས་དེའི་ཡུལ་སྤྱིར་བཏོད་པ་བཞིན་ནོ།། དེས་ན་སློབ་ཡུལ་ཐམས་ཅད་ཀུན་རྗེས་དུ་བཏོད་དེ་འཇུག་པའི་  
སློས་དོན་དམ་པ་ཡུལ་དུ་མི་བྱེད་པའི་ཕྱིར་རོ།།

rGya dbu bsdus, 8b8-9a2: འོ་ན་ཤེས་བྱ་ཙམ་དབྱེ་གཞིར་བཞག་པ་འགལ་ཞིང་། རིགས་པ་དོན་དམ་  
དང་དེའི་ཡུལ་བདེན་བའམ་ལོ་ཞེ་ན། དཔེར་ན་རྗེས་སུ་དཔག་པ་ནི་ཐོག་མ་མེད་པ་རྣམ་མེ་ལ་སོགས་པར་རྟོག་  
པའི་བག་ཆགས་སྤྱིན་པའི་དབང་གིས་སློ་བཏགས་ལ་མེ་ཉིད་དུ་ཞེན་པ་ཙམ་དུ་བྱེད་ཀྱི། རང་གི་མཚན་ཉིད་ཡུལ་  
དུ་བྱས་པ་ནི་མེད་དོ་ཞེས་རང་བཞིན་སེམས་དཔས་(read: པས་?)དཔྱད་ནས་འདོད་ལ། སློ་དེ་ཉིད་ཀྱིས་རང་གི་  
མཚན་ཉིད་རྟོགས་པར་རྫོམས་པས་དེའི་བསམ་འོ་ལས་རང་གི་མཚན་ཉིད་ཀྱི་ཡུལ་ཅན་དུ་འང་འདོད་པ་བཞིན་  
ནོ།།

གལ་ཏེ་རིགས་ཤེས་སུ་འདོད་པའི་བསམ་འོས་[ལ་]ཡུལ་དུ་བཞག་པ་ན། རང་བཞིན་སེམས་དཔས་(read:  
པ་?)དཔྱད་ན་རིགས་པས་ཡོད་པ་ལ་གཞོད་ཀྱི། དོན་དམ་ཞེས་བྱ་བ་ཡུལ་དུ་བྱར་པ་(read: པ་?)གཞག་བྱ་ནི་

མེད་དོ་ཞེས་བྱ་བའི་ཚུལ་གྱིས་བསམ་ངོ་ལ་ཤེས་བྱའི་དབྱེ་བར་གཞག་པ་དང་། རང་བཞིན་སེམས་དཔའ་(read: པ་?)བཅའ་ན་ཤེས་བཤེད་ཐམས་ཅད་ལས་འདས་པ་ལ་དོན་དམ་དུ་ཐ་སྐྱད་བྱས་ནས། རང་བཞིན་སེམས་པ་དེས་ཤེས་བཤེད་ཐམས་ཅད་ལས་འདས་པར་ཡུལ་དུ་བྱས་པ་དེའི་ཤེས་བྱར་འགྱུར་ཞེན། དོན་རང་གི་མཚན་ཉིད་སྤྱི་བཤེད་བྱ་མ་ཡིན་ཞོ་ཞེས་པའི་སྤྱི་དེས་བཤེད་བྱ་མ་ཡིན་བཤེད་བཤེད་དམ།

དེས་ན་ཤེས་བྱར་གནས་པ་དེ་བཀག་པར་ཟད་ཀྱི། ཡུལ་དུ་གཞག་པ་ནི་[བཀག་པ་]མེད་དེ། ལྷན་པ་བཀག་ཞེས་བྱའི་ཚུལ་དུ་ཟད་པས་ན་**རྒྱལ་བའི་སྤྲམ་པོ་**(i.e., Śāntideva)མི་གསུང་བར་བཞུགས་པ་ཡིན་ཞོ་ཞེས་གསུངས་སོ།།

AR Cf. SDV Phya tik, 7b4-8; Phya dbu bsdus, p. 18.14-22.17.

AS Cf. rGya dbu bsdus, 9a2-5: འདི་སྤྲམ་དུ་དབྱུང་དེ་དཔེ་མ་གྲུབ་པ་དང་། དོན་མི་འཐད་པས་བཅུད་པ་སྤང་བར་མི་རུས་པ་དང་། བཅུད་པ་སྤང་བའི་རིགས་པ་ཉིད་ལ་ཉེས་པ་ཡོད་པ་དང་། གསུངས་པའི་དོན་དང་བཞེད་པ་གཞན་འགལ་བ་དང་། ལུས་བཤད་ཀྱི་རིགས་པས་གཞོད་པའོ།།

མེ་ལ་སོགས་པ་རང་གི་མཚན་ཉིད་མེད་པས་བཟུང་ཡུལ་དུ་མ་གྱུར་ཅིང་། སྤོ་བཏགས་ལ་ཕྱི་རོལ་དུ་ཞེན་པས་གཟུང་བ་ལ་འཕྲུལ་ཅེས་བྱའི། རང་གི་མཚན་ཉིད་ཞེན་པའི་གཞལ་བྱ་ཉིད་ཡིན་བཤེད་བཀག་པར་མི་བྱ་སྟེ། ཚད་མ་གཉིས་ཞེན་ཡུལ་ལ་ཚད་མའི་མཚན་ཉིད་དུ་མཚུངས་པའི་ཕྱིར་རོ།། ཅི་རང་བཞིན་སེམས་པའི་སྤོ་དེ་ཚད་མ་ཡིན་ནས་མ་ཡིན། ཡིན་ན་དེས་ཡུལ་བཀག་པའི་{ཕྱིར་}རྗེས་དཔག་ཚད་མར་གང་གིས་འཇོག། གཟུང་བ་ལ་ལྷོས་ནས་མམ། ཞེན་པའི་བསམ་ངོ་ལས་སོ་ཞེན། ཞེན་ཡུལ་རང་བཞིན་སེམས་པས་བཀག་བཞིན་དུ་བསམ་ངོ་ལས་འཇོག་ན་སྤོ་ཐམས་ཅད་ཚད་མར་འགྱུར་རོ།། དེ་ཚད་མ་མ་ཡིན་ན་རྗེས་དཔག་རང་གི་མཚན་ཉིད་ཀྱི་ཡུལ་ཅན་ཡིན་པ་ལོ་ནར་གྲུབ་པས་དཔེའ་མ་གྲུབ་པོ།།

AT Cf. rGya dbu bsdus, 9a5: དེ་བཞིན་དུ་རིགས་ཤེས་སུ་འདོད་པའི་བསམ་བས་རྣམ་གཅད་རྟོགས་པར་རྫོང་པ་རང་བཞིན་སེམས་པས་བཀག་ན་རིགས་པ་ཚད་མར་མི་རུང་སྟེ། བསམ་པའི་དོན་ལས་གཞན་ལ་རྗེས་དཔག་ཚད་མའི་སྐབས་མེད་དོ།། ཡོད་པ་རྣམ་པར་བཅད་པ་ཅམ་ལ་འོ་ཞེན། དེ་ཉིད་གཞལ་བྱ་ཡིན་མོད་མང་དུ་བཤད་ཟེན་དོ།། དེས་ན་བཅུད་པ་སྤང་བར་མི་རུས་སོ།།

AU Cf. rGya dbu bsdus, 9a5-b2: གཞན་ཡང་རིགས་ཤེས་ཀྱི་ཡུལ་དུ་ཞེན་པ་ན། རང་བཞིན་སེམས་པས་དེའི་ཡུལ་ལས་ཀྱང་འདས་སོ་ཞེས་སྤོས་པ་མཐའ་དག་གཅོད་པ་རང་བཞིན་སེམས་དཔའ་(read: པ་?)འདི་ལོ་ན་རྣམ་གངས་མ་ཡིན་བའི་དོན་དམ་གཏན་ལ་འབེབས་པའི་རིགས་པ་ཡིན་ནོ།། ... དེས་ན་ཤེས་བྱ་མི་ཤེས་པའི་ཤེས་པ་འམ་དོན་རྟོགས་པ་མེད་པའི་ཚད་མ་ནི་ལོ་བོས་འཇོག་མ་ཤེས་སོ།།

AV Cf. rGya dbu bsdus, 8b1-2: དབྱུང་ན་དེ་ལྟར་མི་གནས་པའི་ཤེས་བྱ་ལས་བསྐྱོག་པ། དེ་ལོ་ན་ཉིད་དུ་སེམས་པས་དབྱུང་ན་གནས་པ་སྟེ།

དོན་དམ་པར་བདེན་པ་ནི་དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་སྟེ། དེ་ནི་རིགས་པའི་རྗེས་སུ་འགོ་བ་ཅན་གྱི་  
བདེན་པ་ཉིད་ཅེས་བྱ་བའི་གཞིགས། (SDVV 8b1f. ad 3d)

ཞེས་གསུངས་པ་ཡིན་ནོ།།

Cf. *SDV Phya tik*, 7a6-7; *Phya dbu bsdus*, p. 16.20-22.

<sup>AW</sup> SDVV 4a4 ad 3cd: རིགས་པ་ཇི་ལྟ་བུ་བཞིན་ཉིད་ནི་དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་འོ།།

<sup>AX</sup> Cf. *rGya dbu bsdus*, 8b2-3: དེ་ཡང་གྲུབ་མཐའ་སྤྲོ་བ་ཐམས་ཅད་ཀྱི་དོན་དམ་པའི་མཚན་ཉིད་ཡིན་ལ།  
གཞན་དག་དངོས་པོའི་ཚོས་སུ་འདོད་ལ། དབུ་མ་བ་སྤྲོས་བྲལ་ལ་གནས་པར་འདོད་པས་མི་མཐུན་པར་ཟད་དོ།།  
དེས་ན་རྟག་པ་དང་ཚད་པ་དང་ཡོད་པ་དང་མེད་པའི་རྒྱས་དྲངས་པའི་མེད་པ་ལ་སོགས་པའི་མཐའ་ཐམས་ཅད་  
དང་བྲལ་བར་རིགས་པས་གནས་པ་ཞེས་བྱའོ།། མཐ[འ]་ཐམས་ཅད་བྲལ་བ་ནི་ཇི་ལྟར་རིགས་པའི་ཡུལ་ཡིན་ཞེ་  
ན། མཐའ་ཐམས་ཅད་རིགས་པས་རྣམ་པར་བཅད་པའི་ཕྱིར་ཏེ་བཤད་ཟེན་ཏོ།།

Cf. *Phya dbu bsdus*, p. 17.1-20.

<sup>AY</sup> Cf. SDV 3c: ཇི་ལྟར་སྤང་བ་འདི་ལོ་ན།།

<sup>AZ</sup> Cf. SDV 4a4 ad 3cd: རིགས་པ་ཇི་ལྟ་བུ་བཞིན་ཉིད་ནི་ ...

<sup>BA</sup> TR p. 616.9-11; A 361a2-3; K 306a1-2; U 77a7-8: དོན་དམ་པ་རྟོགས་པར་བྱེད་པ་ནི་ཕ་རོལ་  
གཟིགས་པ་རྣམས་ཀྱི་སྤང་བ་མེད་པའི་ཡེ་ཤེས་རྣལ་འབྱོར་གྱི་མངོན་སུམ་དང་། རྩ་རོལ་མཐོང་བ་རྣམས་ཀྱི་སྤོ་  
འདོགས་འགོག་པར་བྱེད་པ་གཅིག་དང་དུ་མ་དང་བྲལ་བ་ལ་སོགས་པའི་རྟོགས་ལས་འཇུག་པའི་རྗེས་དཔག་གི་  
ཚད་མ་དག་གོ།།

Cf. *SDV Phya tik*, 7a8-7b1; *Phya dbu bsdus*, p. 58.2-125.22, esp. 125.16-22.

<sup>BB</sup> Cf. TR p. 616.12-18; A 361a3-5; K 306a2-4; U 77a8-b2: ཀྱུང་རྩོམ་རྟོགས་པར་བྱེད་པ་ནི་དེ་  
ལོ་ནར་ཡོད་པ་ལ་གཞོན་པར་བྱེད་པ་དག་གིས་བདེན་པར་ཡོད་པའི་སྤོ་འདོགས་བཀག་པའི་འགྲུགས་ཀྱིས་སྤང་  
བཞིན་པར་མངོན་སུམ་ཉིད་ཀྱིས་གྲུབ་པ་འདི་བརྟུན་པར་ཡོད་པ་ཅས་དུ་ངེས་པས་ན་རྗེས་དཔག་གིས་འདུ་བྱེད་  
བརྟན་པར་བྱས་པའི་མངོན་སུམ་ཉིད་དེ།

དེ་ལ་སྤོ་འདོགས་གཅོད་བྱེད་པ།། ཤེས་པར་བྱེད་པའི་གཏན་ཚིགས་ཀྱིས།།

རྗེས་སུ་དཔོག་རྣམས་ཤེས་པར་བྱེད།། རྣལ་འབྱོར་དབང་རྣམས་མངོན་སུམ་གསལ།། (MA 75)

ཞེས་བྱ་བ་དང་།

དེ་ཕྱིར་དངོས་པོ་འདི་དག་ནི།། ཀྱུང་རྩོམ་པ་ཉིད་མཚན་ཉིད་འཛིན།།

གལ་ཏེ་འདི་དག་དོན་འདོད་ན།། དེ་ལ་བདག་གིས་ཅི་བྱར་ཡོད་ (MA 63)

ཅེས་གང་གསུངས་པ་འོ།།

Cf. *SDV Phya tik*, 7b1; *Phya dbu bsdus*, pp. 57.18-58.2.

**Acknowledgment:**

I would like to express my deepest gratitude to Dr. Akanane Ritsu for kindly providing me with his inputting text of *bDen gnyis kyi rnam bshad* of rGya dmar ba, which was very helpful in my editing work of this text. I really feel great regret that he passed away too early. I also have to express my deepest gratitude to Dr. Pascale Hugon as well for kindly providing me with her inputting text of the 9th chapter of *BCA rGya tik*, which was also very helpful to me in this paper.